

埋蔵文化財調査報告書83

志段味古墳群Ⅳ

2019

名古屋市教育委員会



1 志段味大塚古墳 第8次調査 古墳全景（西から）



2 志段味大塚古墳 第8次調査 後円部（西から）

巻頭図版 2



1 志段味大塚古墳 後円部葺石（西から）



2 志段味大塚古墳 後円部埴輪列（西から）



1 志段味大塚古墳 後円部（東から）



2 志段味大塚古墳 後円部（南東から）



3 志段味大塚古墳 後円部埴輪列（東から）

巻頭図版 4



1 勝手塚古墳 3トレンチ (西南から)



2 勝手塚古墳 2トレンチ (東から)



1 勝手塚古墳 6トレンチ (東から)



2 勝手塚古墳 8トレンチ (西から)

巻頭図版 6



1 勝手塚古墳 4トレンチ (北から)



2 勝手塚古墳 1トレンチ (東から)



3 勝手塚古墳 埴輪

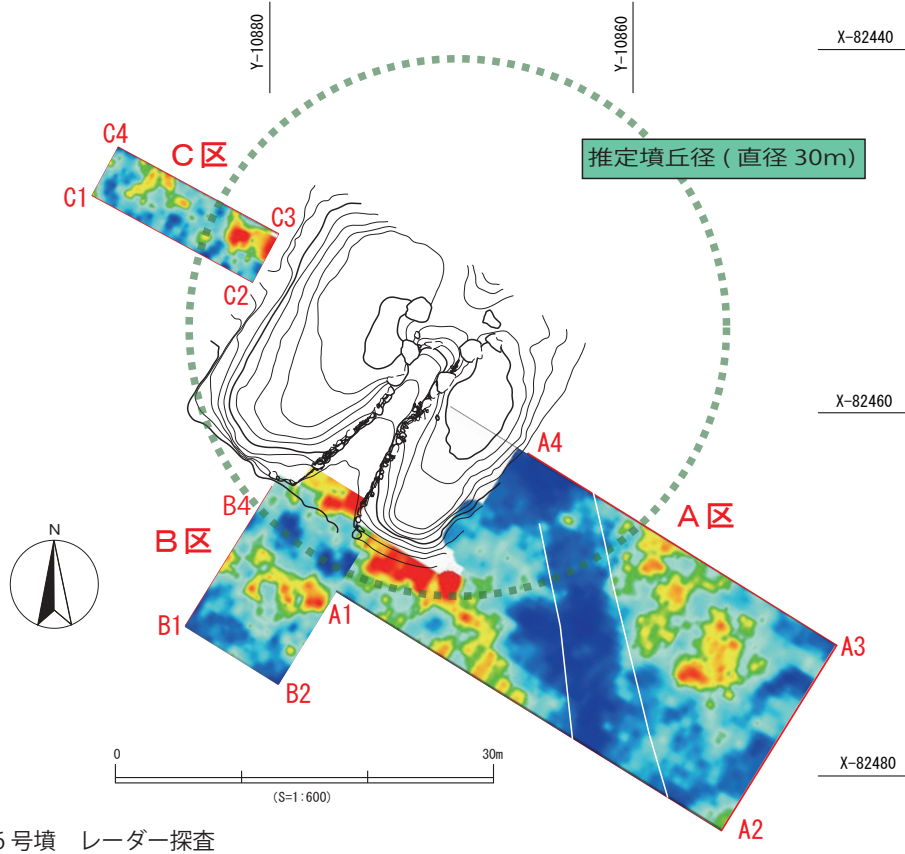
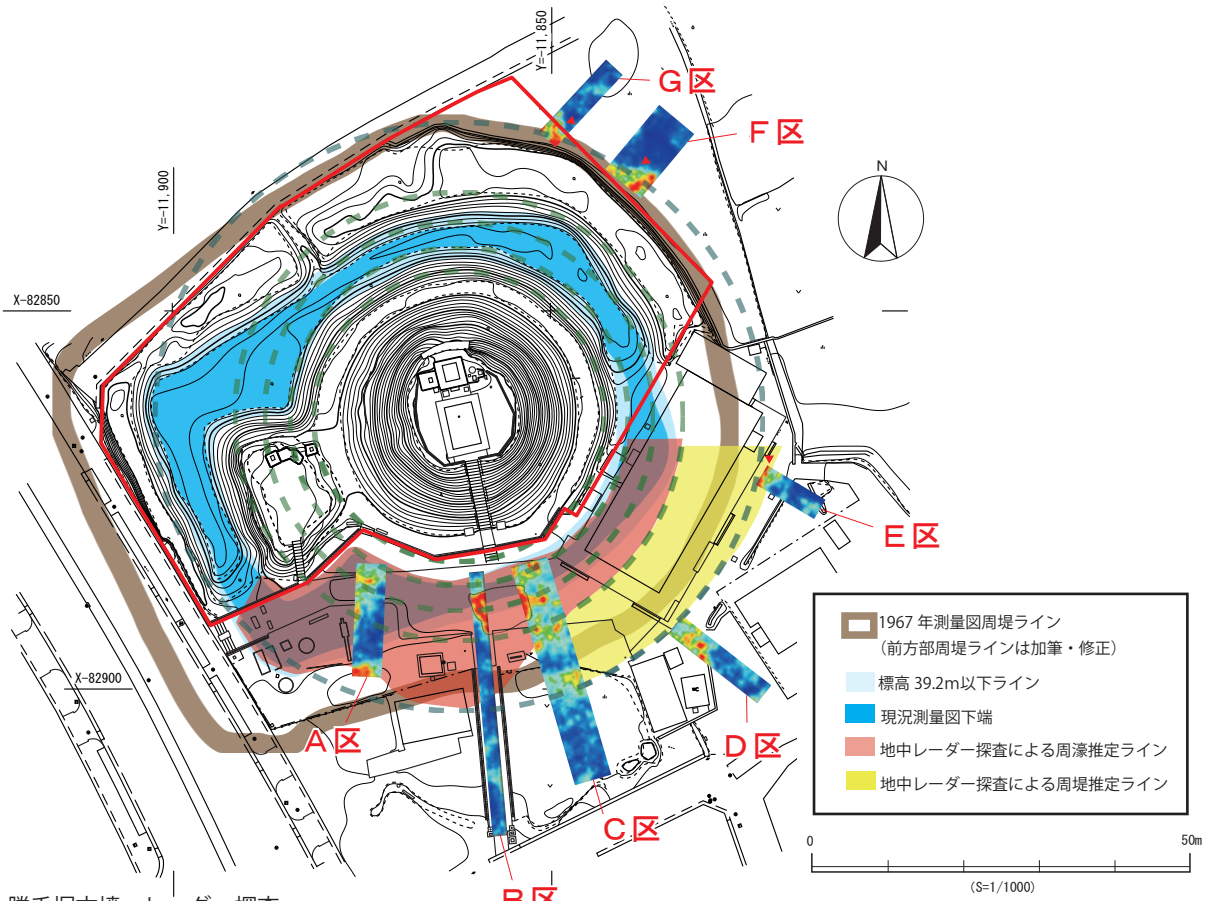


1 白鳥5号墳 石室（北西から）



2 白鳥6号墳 石室（南西から）

巻頭図版 8



埋蔵文化財調査報告書83

志段味古墳群Ⅳ

2019

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は愛知県名古屋市守山区大字上志段味に所在する志段味古墳群の発掘調査報告書である。
 2. 本書では、2014（平成26）～2018（平成30）年に名古屋市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査について報告する。
 3. 各調査の位置・面積・期間は、第1章表1-1にまとめた。調査に関する調整事務・現地調査は名古屋市教育委員会文化財保護室がおこなった。
 4. 本書の編集は、酒井将史が、執筆は伊藤厚史、酒井が行い、分担は目次に示した。なお、第3章6は西本昌司氏（名古屋市科学館）に玉稿を賜った。
 5. 「歴史の里」整備に伴う勝手塚古墳等レーダー探査は、株式会社中野技術に委託して実施した。その成果の一部を本書第4章9、第8章3に収載した。
 5. 現地撮影の写真の一部は杉浦秀昭氏（名古屋市博物館）に依頼し、巻頭図版、写真図版に掲載した。
 6. 本書で示す方位・座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）に、水準値は東京湾平均水面（T.P.）に基づくが、一部の図に磁北を表記している。
 7. 調査の記録・出土遺物等は名古屋市教育委員会文化財保護室で保管している。
 8. 調査および整理作業の一部については、国庫補助事業として実施した。現地調査においては、文化庁から調査指導をいただいた。
 9. 『「歴史の里」整備検討委員会』委員の下記先生方に調査及び活用についてご指導いただいた。
- 広瀬和雄 高橋克壽 赤羽一郎
10. 現地調査にあたり、土地所有者、勝手神社、志段味東学区、名古屋市上志段特定土地区画整理組合、上志段味地区の皆様にご多大なご協力を賜りました。
- また、現地調査・報告書作成に際し、上記委員のほか、下記の諸氏、諸機関にご教示・ご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

赤塚次郎 浅田博造 梶原義実 七原恵史 愛知県 尾張旭市教育委員会 南山大学人類学博物館

志段味大塚古墳8次 市橋久美子 瀧はる香 秦優莉香 渡辺峻

勝手塚古墳1次 鈴木香織 真野智弘 山内良祐

勝手塚古墳2次 若園拓海

勝手塚古墳3次 林順

大塚3号墳・白鳥5号墳・白鳥6号墳 鈴木香織 田中なつみ 林順 森村知幸

整理作業 市澤敦子 小川敦子 小浦美生 長谷川美櫻 樋上佐知子 林順 日比野祥子

村木望子 山本雅代

目次

巻頭図版

例言

第1章 調査の経緯	(伊藤)	1
第2章 位置と環境		
1 地理的環境	(酒井)	3
2 歴史的環境	(酒井)	3
第3章 志段味大塚古墳の調査		
1 既往の調査	(伊藤)	11
2 形態と規模	(伊藤)	11
3 調査の経過	(伊藤)	12
4 各トレンチの調査成果	(伊藤)	13
5 出土遺物	(伊藤)	30
6 自然科学分析	(西本・伊藤)	39
7 小結	(伊藤)	45
第4章 勝手塚古墳の調査		
1 既往の調査研究	(伊藤)	47
2 現況	(伊藤)	47
3 調査の経過	(伊藤・酒井)	48
4 第1次調査の成果	(伊藤)	52
5 第2次調査の成果	(伊藤)	65
6 第3次調査の成果	(酒井)	75
7 試掘調査	(伊藤)	79
8 出土遺物	(酒井)	82
9 レーダー探査の成果	(株式会社中野技術 清水理史・越村 篤)	98
10 小結	(伊藤)	98
第5章 大塚3号墳の調査		
1 既往の調査・研究	(酒井)	103
2 各トレンチの調査成果	(酒井)	103
3 出土遺物	(酒井)	104
4 まとめ	(酒井)	108
第6章 白鳥5号墳・白鳥6号墳の調査		
1 白鳥古墳群の調査・研究	(酒井)	111
2 調査の経緯と経過	(酒井)	111
3 現況	(酒井)	112

4	白鳥5号墳の調査	（酒井）	113
5	白鳥6号墳の調査	（酒井）	122
6	まとめ	（酒井）	131
第7章 東谷山12号墳の調査			
1	既往の調査研究	（伊藤）	134
2	現況	（伊藤）	134
3	各トレンチの調査成果	（伊藤）	136
4	出土遺物	（伊藤）	136
5	まとめ	（伊藤）	136
第8章 東谷山16号墳の調査			
1	位置と既往の調査	（伊藤）	139
2	測量調査の成果	（伊藤）	139
3	レーダー探査の成果	（株式会社中野技術 清水理史・越村 篤）	139
第9章 ガイダンス施設建設予定地の試掘調査			
1	位置と現況	（伊藤）	142
2	調査の概要	（伊藤）	142
3	まとめ	（伊藤）	144
第10章 各論			
1	帆立貝式古墳築造の意義	（伊藤）	145
2	志段味古墳群の埴輪の生産地	（酒井）	153
第11章 総括			
		（酒井）	163
写真図版			
報告書抄録			

第1章 調査の経緯

「歴史の里」整備事業は、古代ロマンを五感で体感、－「学び」と「にぎわい」のある地域づくり－を基本理念に掲げ、名古屋市守山区に所在する東谷山山頂から山麓及び段丘に立地する志段味古墳群と周辺の豊かな自然環境を一体的に保存・活用し、五感で感じる体験学習を通して、学びとにぎわいを創出できる場を提供することをめざすものである。

「歴史の里」の整備に伴う調査は、平成17年度から開始され、多くの成果をもたらした。平成20年度に策定された『「歴史の里」基本構想』は、それまでの段丘に位置する大塚・大久手古墳群の整備保存計画から、国史跡白鳥塚古墳、市史跡白鳥1号墳を含めた東谷山周辺の古墳群と共に整備保存する方向性が示され、志段味大塚古墳は、築造当時の状態に完全復元することが計画された。

平成17年度から平成22年度までの調査成果は、『埋蔵文化財調査報告書62 志段味古墳群』（2011）、平成23年度から平成24年度の調査成果は、『埋蔵文化財調査報告書70 志段味古墳群Ⅱ』（2014）に掲載刊行した。白鳥塚古墳については、『埋蔵文化財調査報告書57 国史跡 白鳥塚古墳（第1次～第5次範囲確認調査）』（2007）として刊行した。このほか志段味大塚古墳出土資料について、『名古屋市文化財調査報告94 埋蔵文化財調査報告書77 志段味古墳群Ⅲ－志段味大塚古墳の副葬品』（2017年）として刊行した。

したがって本書は、『埋蔵文化財調査報告書83 志段味古墳群Ⅳ』とし、平成26年度から平成30年

表1-1 国指定史跡 志段味古墳群

古墳の名称	所在地	指定面積	規模・形態	築造年代
白鳥塚古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字東谷	10,785.04㎡	墳長 115 m 前方後円墳	4世紀前半
尾張戸神社古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字東谷 愛知県瀬戸市十軒町	929.79㎡	直径 27.5 m 円墳	4世紀前半
中社古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字東谷	5,069.34㎡	墳長 63.5 m 前方後円墳	4世紀中葉
南社古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字東谷	1,700.36㎡	直径 30 m 円墳	4世紀中葉
志段味大塚古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字大塚	3,300.93㎡	墳長 51 m 帆立貝式古墳	5世紀後半
勝手塚古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字中屋敷	1,121.47㎡	墳長 55 m 帆立貝式古墳	6世紀前葉
東谷山白鳥古墳	愛知県名古屋市守山区大字上志段味字白鳥	1,121.47㎡	直径 17 m 円墳	6世紀末～ 7世紀初め

度までの調査成果を収載した。なお、平成 25 年度には『「歴史の里」基本計画』が策定され、平成 26 年度 2014 年 10 月 6 日には、「国史跡 白鳥塚古墳」が「国史跡 志段味古墳群 白鳥塚古墳 尾張戸神社古墳 中社古墳 南社古墳 志段味大塚古墳 勝手塚古墳 東谷山白鳥古墳」と名称変更・追加指定された。平成 26 年度末には、『史跡志段味古墳群保存管理計画』を策定した。

表 1-2 発掘調査一覧

調査年度	調査期間	調査面積	調査担当者	遺跡名
平成 26 年度	2014.6.2 ~ 2014.9.5	約 140㎡	伊藤厚史	志段味大塚古墳
平成 27 年度	2015.7.6 ~ 2015.9.18	約 94㎡	服部哲也	勝手塚古墳
	2016.2.25	約 4㎡	服部哲也	白鳥 6 号墳 (新規)
平成 28 年度	2016.8.1 ~ 2016.11.22	約 142㎡	酒井将史	大塚 3 号墳
				白鳥 5 号墳
				白鳥 6 号墳
平成 29 年度	2017.9.22 ~ 2018.1.31	約 161㎡	伊藤厚史	勝手塚古墳
				白鳥 6 号墳
				東谷 12 号墳
				ガイダンス施設試掘
平成 30 年度	2018.11.20 ~ 2018.12.7	約 36㎡	酒井将史・片桐妃奈子	勝手塚古墳

表 1-3 墳丘地形測量・GPR 探査一覧

実施年度	調査日	遺跡名	内容	実施事業者
平成 26 年度	2015.2.6	東谷山 16 号墳	墳丘地形測量	株式会社フジヤマ
平成 27 年度	2016.2.9 ~ 10	東谷山 16 号墳	地中レーダー探査	
	2016.2.10 ~ 11	勝手塚古墳	地中レーダー探査	
	2016.2.9 ~ 3.30	東谷山 12 号墳	墳丘地形測量	株式会社フジヤマ
平成 28 年度	2018.7.14 ~ 8.24	白鳥 5 号墳	墳丘地形測量	株式会社フジヤマ
		白鳥 6 号墳		

第2章 位置と環境

1 地理的環境

志段味古墳群は、4世紀から7世紀にかけて築かれた古墳群で、現在66基が確認されている。このうち、65基は名古屋市守山区大字上志段味に所在し、尾張戸神社古墳の1基については、守山区上志段味と瀬戸市十軒町の市境をまたいで位置している。

愛知県西部に位置する名古屋市は、16の行政区に分かれており、守山区はその北東に位置する。上志段味は守山区の中でもさらに北東端に位置し、北は春日井市と、東は瀬戸市と、南は尾張旭市と接している。

地形・地質 上志段味は、岐阜県東濃地方を水源とする庄内川（岐阜県では「土岐川」と呼称される）が東濃の盆地を経て、急峻な玉野溪谷を抜けて濃尾平野に流れ出た場所の左岸に位置する。

上志段味の東は、標高198.3mで名古屋市最高峰の東谷山がそびえる。主に古・中生代の美濃堆積岩類よりなるが、中生代白亜紀の花崗岩が下から貫入しており、それにより熱変成を受けた泥質・砂質のホルンフェルスも多く見られる。山麓部にはチャートや花崗岩、濃飛流紋岩などからなる段丘堆積物が分布する。東谷山上の古墳の葺石には、ホルンフェルスや花崗岩など角礫も使用されている。

志段味の南部には、尾張丘陵の一部をなす竜泉寺丘陵が広がっている。標高120m～150mで、新生代第三紀鮮新世に堆積した瀬戸層群矢田川累層と第四紀更新世に堆積した唐山層および八事層により構成される。矢田川累層中には、亜炭層や木節粘土層が含まれており、1950年代までは亜炭の採掘が行われ、木節粘土は現在も陶磁器等の原料として使用されている。

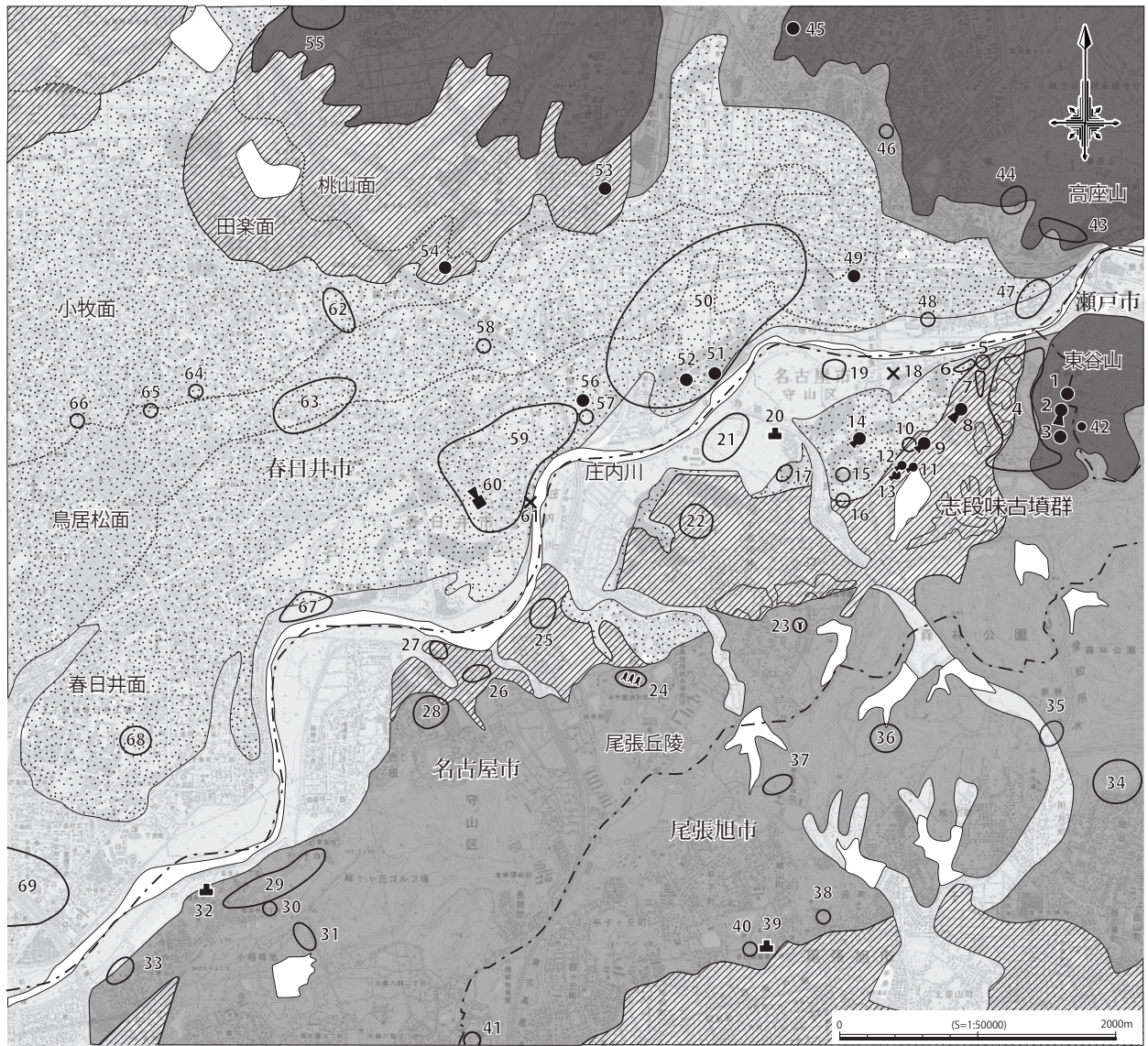
竜泉寺丘陵の北側には、河岸段丘が形成されている。旧庄内川など河川の侵食と土地の隆起等が繰り返すされることで、複数の段丘面と段丘崖が形成された。現在も各所で段丘地形を確認できる。庄内川対岸の春日井市域においても対応する段丘面（桃山面・田楽面・小牧面・鳥居松面・春日井面）が認められる。段丘は、砂岩・頁岩・チャートなどの段丘堆積物によって構成されており、これらの円礫・亜円礫は、古墳の葺石としても利用された。

段丘と庄内川の間には、川の氾濫によって形成された自然堤防とその後背湿地からなる沖積低地が広がっている。

志段味古墳群は、山の尾根筋や河岸段丘の縁辺など、遠方からも望むことができる場所を選び、山地や段丘堆積物などの石材を葺石等に利用しながら築造されている。

2 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代 志段味地区ではじめて人類の活動が確認できるのは、旧石器時代末である。庄内川の南側では、大塚遺跡（図2-1-10、以下遺跡名の後の数字は図2-1の遺跡番号に対応）でナイフ形石器が、樹木遺跡（15）からは、木葉形尖頭器等が採集されている。また、縄文時代には白鳥遺跡（5）で中期の土器が、二ノ輪遺跡（16）や、大久手4号墳の盛土からは晩期の条痕文深鉢が確認されており、散漫ではあるものの段丘上に生活の痕跡が認められる。庄内川の対岸では、小牧段丘面の縁辺の浅山町遺跡（64）、梅ヶ坪遺跡（65）、上八田遺跡（66）において旧石器時代から縄文時代草創期のナイフ形石器



山地
 丘陵
 高位・中位段丘 (桃山面・田楽面)
 低位段丘 (小牧面・鳥居松面・春日井面)
 沖積地

(地図は、国土地理院 電子地形図 25000 を使用)



- | | | |
|---------------------|--------------------|-------------------------|
| 1: 尾張戸神社古墳 (古墳) | 24: 長廻間古窯群 (中世) | 47: 高蔵寺古墳群 (古墳) |
| 2: 中社古墳 (古墳) | 25: 東禅寺古墳群 (古墳) | 48: 高蔵寺瓦窯跡 |
| 3: 南社古墳 (古墳) | 26: 深沢古墳群 (古墳) | 49: 大垣戸狐塚古墳 (古墳) |
| 4: 東谷山古墳群 (古墳) | 27: 上島古墳群 (古墳) | 50: 大留・南気噴遺跡群 (縄文～中世) |
| 5: 白鳥遺跡 (縄文) | 28: 笹ヶ根古墳群 (古墳) | 51: 天王山古墳 (古墳) |
| 6: 白鳥古墳群 (古墳) | 29: 松ヶ洞古墳群 (古墳) | 52: 親王塚古墳 (古墳) |
| 7: 狸塚古墳群 (古墳) | 30: 松ヶ洞古窯 (中世) | 53: 出川大塚古墳 (古墳) |
| 8: 白鳥塚古墳 (古墳) | 31: 小幡緑地古窯群 (中世) | 54: オセンゲ古墳 (古墳) |
| 9: 志段味大塚古墳 (古墳) | 32: 竜泉寺城跡 (中世) | 55: 下原古窯跡 (古墳・古代) |
| 10: 大塚遺跡 (旧石器・縄文) | 33: 川東山遺跡 (縄文・古墳) | 56: 大留荒子古墳 (古墳) |
| 11: 大久手5号墳 (古墳) | 34: 森林公園窯跡群 (中世) | 57: 大留荒子遺跡 (古墳～中世) |
| 12: 東大久手古墳 (古墳) | 35: 海老蔓窯跡群 (中世) | 58: 下市場中世遺跡 (中世) |
| 13: 西大久手古墳 (古墳) | 36: 岩本池窯跡群 (中世) | 59: 堀ノ内・神領遺跡群 (縄文～中世) |
| 14: 勝手塚古墳 (古墳) | 37: 滝ノ水池窯跡群 | 60: 高御堂古墳 (古墳) |
| 15: 樹木遺跡 (旧石器・縄文) | 38: 新居館跡 (中世～近世) | 61: 神領銅鐸出土地 (弥生) |
| 16: 二之輪遺跡 (縄文) | 39: 新居城跡 (中世) | 62: 篠木遺跡 (縄文) |
| 17: 寺林古墳群 (古墳) | 40: 城山窯跡群 (古墳) | 63: 篠木古墳群 (古墳) |
| 18: 志段味銅剣出土地 | 41: 卓ヶ洞窯跡群 (古墳～古代) | 64: 浅山町遺跡 (旧石器・縄文) |
| 19: 海東遺跡 (古墳) | 42: 東谷山南古墳 (古墳) | 65: 梅ヶ坪遺跡 (旧石器・縄文) |
| 20: 志段味城跡 (中世) | 43: 高座山古墳群 (古墳) | 66: 上八田遺跡 (旧石器・縄文) |
| 21: 天白元屋敷遺跡 (弥生～近世) | 44: 高座山遺跡 (縄文) | 67: 桜佐下五反田遺跡 (縄文・古墳～中世) |
| 22: 湿ヶ遺跡 (古墳～中世) | 45: 白山中世遺跡 (中世) | 68: 王子遺跡 (弥生) |
| 23: 南原古窯 (中世) | 46: 白山瓦窯 | 69: 松河戸遺跡 (弥生・中世・近世) |

※太字の遺跡は「志段味古墳群」

図2-1 志段味古墳群周辺の地形と遺跡

や細石器が採集されている。堀ノ内・神領遺跡群（59）、大留・南気噴遺跡群（50）、桜佐下五反田遺跡（67）では、縄文時代中期の竪穴住居が確認されているほか、篠木遺跡（62）、松河戸遺跡（69）、では縄文時代の遺構が確認されている。

弥生時代 庄内川以南の志段味地区では、弥生時代の遺跡は希薄となる。中志段味の元屋敷や宮前のほか、東谷山頂付近でわずかに弥生土器片が採取されている程度にすぎず、明確な遺構は確認されていない。また、上志段味上島では、古墳時代の横穴式石室の石材と思われる石組みとともに二次加工が施された中細形銅剣が出土したとされる（18）が、当地域への流入の経緯については不明な点も多い。

一方で庄内川対岸の春日井市域では、沖積地の自然堤防上や低位の段丘面にかけて集落が形成される。松河戸遺跡（69）では、弥生時代前期の環濠集落が形成される。また、低位段丘上に立地する大留・南気噴遺跡群（50）や堀ノ内・神領遺跡（59）では、弥生時代後期を中心とした集落群が展開しており、突線紐3式に比定される三遠式銅鐸の出土も伝えられる（61）。

古墳時代 上志段味では前期から終末期にかけて志段味古墳群が展開する。古墳築造が途絶する期間を挟みながら、①前期中葉～前期後葉、②中期中葉～後期前葉、③後期後半～終末期、の3つの時期に分けることができる。

①の時期は、東谷山の尾根筋や、河岸段丘上に古墳が築かれる。前期中葉には、中位段丘上に全長115mの前方後円墳である白鳥塚古墳（8）や、東谷山山頂には尾張戸神社古墳（1）が造営される。続く前期後葉には、当地域ではじめて埴輪を樹立した中社古墳（2）、南社古墳（3）が築造される。②の時期には、前期古墳よりも西側の段丘上に帆立貝式古墳や円墳、方墳が築かれる。墳丘長が50mを超す帆立貝式古墳として、志段味大塚古墳（9）、勝手塚古墳（14）が、30m台後半の帆立貝式古墳としては、西大久手古墳（13）、大久手5号墳（11）、東大久手古墳（12）が築かれる。これら帆立貝式古墳に近接して20m以下の方墳や円墳がある。このように、狭い範囲のなかで階層差が顕著にみられるのが特徴である。③の時期は、古墳築造のエリアを東に移し、東谷山の西麓から河岸段丘上に横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が展開する。総数50基ほどを数える終わりでも屈指の群集墳である。

志段味古墳群の西側では、寺林古墳群（17）東禅寺古墳群（25）、深沢古墳群（26）、上島古墳群（27）笹ヶ根古墳群（28）、松ヶ洞古墳群（30）など小規模な古墳群が造営される。寺林古墳群（17）は、前期後半の築造の可能性がある上寺林古墳と中期後葉～後期初頭の築造の下寺林古墳からなる。東禅寺古墳群（25）は、5基の古墳群から構成され、中期後半～後期前半に4号墳が築造された後、後期後半から横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築かれる。笹ヶ根古墳群（28）は、前期後半～中期前半に1号墳が、中期後半3号墳が築かれ、後期後半から横穴式石室をもつ2号墳、4号墳、5号墳が築造された。上島古墳群（27）は8基以上、深沢古墳群（26）は3基の古墳で構成され、前者は、終末期の7世紀前半に、後者は7世紀中葉～後半に築造された。

このように庄内川の南では、志段味古墳群を中心に古墳の造営が盛行する一方、集落の実態はよく分かっていない。沖積地の自然堤防上に立地する海東遺跡（19）天白元屋敷遺跡（21）では、溝やピットなどにもなって土師器や須恵器が出土しているが、古墳時代の居住域などは確認されていない。また、低位段丘上の寺林古墳（17）や勝手塚古墳（14）の下層からは、古墳時代の土器が出土しており、沖積地から低位段丘上の庄内川に近い場所に活動の痕跡が認められる。そのほか、中位段丘上の湿ヶ遺跡（22）、



■：山地 ■：丘陵 ■：高位段丘 ■：中段段丘 ■：低位段丘 ※黒塗りは現存する古墳、白抜きは滅失した古墳。

- 1：尾張戸神社古墳 2：中社古墳 3：南社古墳 4：東谷山1号墳 5：東谷山2号墳 6：東谷山3号墳
 7：東谷山4号墳 8：東谷山5号墳 9：東谷山6号墳 10：東谷山7号墳 11：東谷山8号墳 12：東谷山9号墳
 13：東谷山10号墳 14：東谷山11号墳 15：東谷山12号墳 16：東谷山13号墳 17：東谷山14号墳
 18：東谷山15号墳 19：東谷山16号墳 20：東谷山17号墳 21：東谷山18号墳 22：東谷山19号墳
 23：東谷山20号墳 24：東谷山21号墳 25：東谷山22号墳 26：東谷山23号墳 27：東谷山24号墳
 28：東谷山25号墳 29：東谷山26号墳 30：東谷山27号墳 31：東谷山28-A号墳 32：東谷山28-B号墳
 33：東谷山29号墳 34：東谷山30号墳 35：東谷山31号墳 36：東谷山32号遺構 37：東谷山33号墳
 38：東谷山34号墳 39：狸塚1号墳 40：狸塚2号墳 41：狸塚3号墳 42：狸塚4号墳 43：狸塚5号墳
 44：東谷山白鳥古墳 45：白鳥2号墳 46：白鳥3号墳 47：白鳥4号墳 48：白鳥5号墳 49：白鳥6号墳
 50：白鳥7号墳 51：白鳥8号墳 52：白鳥塚古墳 53：山の田古墳 54：塚本古墳 55：寺山1号墳 56：寺山2号墳
 57：志段味大塚古墳 58：大塚2号墳 59：大塚3号墳 60：東大久手古墳 61：西大久手古墳 62：大久手3号墳
 63：大久手4号墳 64：大久手5号墳 65：勝手塚古墳 66：羽根古墳

図2-2 志段味古墳群

尾張丘陵上の川東山遺跡（33）等で土器が採集されている。

志段味から南の尾張丘陵の南側斜面には、中期後半に城山2・3号窯（40）が、後期前半には卓ヶ洞1号窯（41）が築かれ、須恵器や埴輪が生産された。

庄内川の対岸では、前期中葉に前方後方墳である高御堂古墳（60）が、つづいて円墳の天王山古墳（51）が築造された。これらの古墳は弥生時代より継続する集落遺跡の近傍に築造されており集落と古墳の関係が示唆される。4世紀末から5世紀中頃には、庄内川から離れた段丘上に出川大塚古墳（53）、オセンゲ古墳（54）、篠木2号墳（63）など直径40級の大型円墳が相次いで築造される。6世紀から7世紀にかけては、尾張型埴輪を樹立した大垣戸狐塚古墳（49）のほか親王塚古墳（44）、高蔵寺古墳群（36）など横穴式石室を採用した小型円墳が盛行する。舌状に張り出した北側の丘陵部には後期前葉に下原古窯（55）が築窯され、埴輪や須恵器の生産が行われ、味美古墳群などに供給された。

古 代 『延喜式』や『倭名抄』等によると、尾張国は愛智、知多、春日部、山田、丹羽、葉栗、中島、海部の八郡に分かれていたことが知れる。このうち、古代の志段味は、山田郡に属し、志誤（天保15年〔1844年〕編纂の『尾張志』によると、誤は「談」の誤りとされ、「志談」が正しいとされる）と呼称されていた。天白元屋敷遺跡（21）では、7世紀前葉～8世紀を中心とする掘立柱建物や水田跡などの遺構、鳥形硯・蹄脚円面硯、刻書の須恵器など特徴的な遺物が確認されている。また、海東遺跡（19）でも同時期の遺物が出土している。庄内川北側の春日井郡では、7世紀後半から8世紀にかけて、白山瓦窯（46）や高蔵寺瓦窯（48）が築窯され、後者は勝川廃寺に瓦を供給したことが分かっている。また、大留・南気噴遺跡群（50）、堀ノ内・神領遺跡群（59）においても竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落群が展開する。

中 世 尾張国山田郡は、戦国時代までには春日部郡と愛智郡とに分割され、志段味（志談）は春日部郡に属した。志段味地区では、康安元年〔1361〕に水野良春が志段味城（20）を築城し、以降水野氏が居城したとされるが、所在地については明確ではない。志段味城は、福島正則の家臣であった水野右衛門作が正則の転封の際に浪人となり廃城になったと伝えられている。天白元屋敷遺跡（21）では、区画溝に囲まれた屋敷跡が3ヶ所見つかっており、14世紀中葉～16世紀にかけて存続した。水野氏が把握していた川湊の関連施設と推定されている。

上志段味の東谷山では、南社古墳（3）で12世紀後半の古瀬戸の陶製経筒が出土しているほか、尾張戸神社古墳（1）からは、15世紀前半の山茶碗が多量に出土している。下志段味から吉根にかけては、松ヶ洞古窯群（29）、小幡緑地古窯群（31）、長廻間古窯群（24）など、11世紀後半から12世紀前半にかけての灰釉陶器窯から初期山茶碗窯が展開している。庄内川の北側では、白山中世遺跡（45）、大留・南気噴遺跡群（50）、下市場中世遺跡（58）、堀ノ内・神領遺跡群（59）、松河戸遺跡（69）などで、集落や墓地が認められる。

近世以降 江戸時代には、守山区は主に尾張藩の治世下であり、志段味地区は水野代官によって統治されていた。近世以降の遺跡については把握できていないが、寛文11年〔1671〕の『寛文村々覚書』や文政5年〔1822〕の『尾張徇行記』等から様子をうかがうことができる。『尾張徇行記』は、寛文11年〔1671〕から寛政5年〔1793〕の約120年間に、農業用溜め池が4ヶ所から7ヶ所に増加しており、こうした農業生産の拡大により、戸数・人口も増加したことを伝えている。

明治に入り、1880年（明治13）には、春日井郡（旧春日部郡）が西春日井郡と東春日井郡に分割され、1889年（明治22年）の町村制施行にともない、東春日井郡の上志段味、中志段味、下志段味、吉根の村々は、志談村となった。その後志談村から上志段味村が分立するが、1906年に再び合併し、志段味村と呼称されるようになる。1954年、志段味村は守山町に合併され、1963年守山市は名古屋市に編入・合併され、現在の名古屋市守山区となっている。

表2-1 志段味古墳群一覽(1)

番号	古墳名	墳形・規模(m)	埋葬施設	出土遺物	時期	備考
1	尾張戸神社古墳	円 27.5			1期	現存 国史跡
2	中社古墳	前方後円 63.5		【墳丘】円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・楕円筒埴輪	1期	現存 国史跡
3	南社古墳	円 30		【墳丘】円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪	1期	現存 国史跡
4	東谷山1号墳	円 15	横穴式石室	【石室内】玉類・大刀・鉄鏃・刀子・須恵器・土師器	3期	滅失
5	東谷山2号墳	円	横穴式石室	【石室内】須恵器	3期	滅失
6	東谷山3号墳	円 23	横穴式石室	【石室内】耳環・玉類・鉄鏃・須恵器 【墓壇内】U字形刃先 【墳丘】円筒埴輪・朝顔形埴輪	3期	滅失
7	東谷山4号墳	円 12	横穴式石室	【石室内】玉類・須恵器	3期	滅失
8	東谷山5号墳	円 25	横穴式石室	【石室内】須恵器・土師器	3期	現存
9	東谷山6号墳	円 15	横穴式石室	須恵器	3期	現存
10	東谷山7号墳	円	横穴式石室	【石室内か】須恵器	3期	滅失
11	東谷山8号墳	円	横穴式石室か	耳環・須恵器	3期	滅失
12	東谷山9号墳	円	横穴式石室か	【石室内】須恵器	2期か	滅失
13	東谷山10号墳	円	横穴式石室	【石室内】耳環	3期	滅失
14	東谷山11号墳	円	横穴式石室	【石室内】須恵器	3期	滅失
15	東谷山12号墳	円 16	横穴式石室	【石室内】耳環・玉類・鉄鏃・須恵器・土師器	3期	現存
16	東谷山13号墳	円 14	横穴式石室	【石室内か】須恵器	3期	滅失
17	東谷山14号墳	円 15	横穴式石室	【石室内】耳環・刀装具・鉄鏃・刀子・須恵器・土師器	3期	滅失
18	東谷山15号墳	円 13	横穴式石室	【石室内】耳環	3期	滅失
19	東谷山16号墳	円 30	横穴式石室	【石室内】耳環・須恵器	3期	現存
20	東谷山17号墳	円 15	横穴式石室		3期	滅失
21	東谷山18号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
22	東谷山19号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
23	東谷山20号墳	円	横穴式石室		3期	現存
24	東谷山21号墳	円	横穴式石室		3期	現存
25	東谷山22号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
26	東谷山23号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
27	東谷山24号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
28	東谷山25号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
29	東谷山26号墳	円 10	横穴式石室	【石室内】耳環・須恵器	3期	滅失
30	東谷山27号墳	円	横穴式石室		3期	現存
31	東谷山28-A号墳	円 15	横穴式石室		3期	現存
32	東谷山28-B号墳	円 15	横穴式石室		3期	現存
33	東谷山29号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
34	東谷山30号墳	円	横穴式石室		3期	滅失
35	東谷山31号墳	円	横穴式石室	須恵器	3期	現存
36	東谷山32号遺構			【埋葬施設か】鉄剣か		滅失

表2-2 志段味古墳群一覧(2)

番号	古墳名	墳形・規模(m)	埋葬施設	出土遺物	時期	備考
37	東谷山33号墳		横穴式石室		3期	滅失
38	東谷山34号墳		横穴式石室か	【石室内】須恵器	3期	現存
39	狸塚1号墳	円 13	横穴式石室		3期	現存
40	狸塚2号墳	円 13	横穴式石室		3期	現存
41	狸塚3号墳		横穴式石室		3期	滅失
42	狸塚4号墳	円	横穴式石室	須恵器	3期	現存
43	狸塚5号墳	円 10	横穴式石室		3期	現存
44	東谷山白鳥古墳 (白鳥1号墳)	円 17	横穴式石室	【石室内】(勾玉)・大刀・鉄鏃・素環鏡板付轡・鞍・刀子・須恵器・土師器 【周溝】須恵器	3期	現存 国史跡
45	白鳥2号墳	円 12	横穴式石室	【石室内】須恵器	3期	滅失
46	白鳥3号墳	円			3期	滅失
47	白鳥4号墳	円 17	横穴式石室	【石室内】鉄鏃・刀子・須恵器・土師器 【墳丘・溝】須恵器・土師器	3期	滅失
48	白鳥5号墳	円 10	横穴式石室	須恵器	3期	現存
49	白鳥6号墳	円	横穴式石室	須恵器	3期	現存
50	白鳥7号墳	円 9.5	横穴式石室	【石室内か】須恵器	3期	滅失
51	白鳥8号墳	円	横穴式石室	【周溝】須恵器	3期	現存
52	白鳥塚古墳	前方後円 115		【墳丘】土師器 【築造後の遺物】須恵器	1期	現存 国史跡
53	山の田古墳	円	横穴式石室	【石室内】鉄鏃・鞍・鍔金具・吊手金具・刀子・須恵器	3期	滅失
54	塚本古墳		横穴式石室	【石室内】耳環・玉類・須恵器	3期	滅失
55	寺山1号墳	円 15		大刀・須恵器		現存
56	寺山2号墳	円 22				滅失
57	志段味大塚古墳 (大塚1号墳)	帆立貝式 51	粘土槨(第1埋葬施設) 木棺直葬(第2埋葬施設)	【第1埋葬施設】五鈴鏡・帯金具・大刀・鉄鏃・衝角付冑・小札甲と付属具・鈴付楯円形鏡板轡・鞍・木心鉄板張輪鍔・五鈴杏葉・三環鈴・雲珠・辻金具・鉸具・鉈 【第2埋葬施設】漆塗革盾・繫結金具 【墳丘・周濠】円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・鶏形埴輪・水鳥形埴輪・須恵器・須恵器形土製品	2期	現存 国史跡
58	大塚2号墳		木棺直葬	【墳丘】埴輪・須恵器	2期	現存
59	大塚3号墳	円 19		【墳丘】埴輪・土師器	2期	現存
60	東大久手古墳 (大久手1号墳)	帆立貝式 39		【墳丘・周濠】円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器	2期	現存
61	西大久手古墳 (大久手2号墳)	帆立貝式 37		【墳丘・周濠】円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪・鶏形埴輪・馬形埴輪・須恵器	2期	現存
62	大久手3号墳	方 14		【墳丘・周濠】須恵器・土師器	2期	現存
63	大久手4号墳			須恵器		現存
64	大久手5号墳	帆立貝式 38		【墳丘・周濠】円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器	2期	現存
65	勝手塚古墳	帆立貝式 53		【墳丘・周濠・周堤】円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・人物埴輪・須恵器	2期	現存 国史跡
66	羽根古墳	円 20		【埋葬施設か】七鈴鏡・須恵器 【周溝】埴輪	2期	滅失

※規模については、前方後円墳・帆立貝式古墳は墳長、円墳は墳丘の径、方墳は墳丘の一辺の長さを表記。

※1期は古墳時代前期中葉～後葉(4世紀前半～中葉)、2期は古墳時代中期後半～後期前葉(5世紀中葉～6世紀前葉)、3期は古墳時代後期後半～終末期(6世紀後半～7世紀)。

第3章 志段味大塚古墳の調査

1 既往の調査

志段味大塚古墳は、守山区上志段味地区における多くの古墳の中でも早い時期に調査が実施され、豊富な副葬品が出土した古墳である。その調査は、1923（大正12）年、京都帝国大学の梅原末治によって行われ、墳丘の略測図や埋葬施設の位置図、副葬品出土状況図などが作成された。しかし詳細な墳丘測量図が作成されたのは1967（昭和42）年になってからで、1982（昭和57）年度には愛知県教育委員会が重要遺跡指定促進調査のひとつとして測量図を作成した。名古屋市教育委員会では、1987（昭和62）年、2005（平成17）年、2008（平成20）年、2013（平成25）年に墳丘測量図を作成した。

1923（大正12）年に出土した副葬品は、京都大学に保管されているが、1984（昭和59）年に開催された名古屋市博物館「守山の遺跡と遺物」展や1988（昭和63）年の名古屋市博物館「考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ」展などに里帰りして披露されてきた。1997（平成9）年に開催された京都大学総合博物館企画展「王者の武装 - 5世紀の金工技術 -」では、展示図録に写真が掲載され、2005（平成17）年刊行の『愛知県史 資料編3』に主要な副葬品の実測図が掲載された。

名古屋市教育委員会では、「歴史の里」整備事業にともない、2005（平成17）年～2009（平成21）年に範囲確認調査・試掘調査を実施した。これらの調査で、古墳の平面形態の特徴として北側くびれ部に造出があることが判明したり、墳丘頂部においては、梅原の調査した埋葬施設に隣接して、新たな埋葬施設を検出したりした。こうした調査結果は、2006（平成18）年『志段味大塚古墳・大久手古墳群—平成17年度大久手池周辺埋蔵文化財発掘調査報告書』、2007（平成19）年『大久手池周辺古墳群—平成18年度「歴史の里」（仮称）計画地内埋蔵文化財範囲確認調査—』などその都度公表してきた。2011（平成23）年3月にこれらの成果をまとめて『名古屋市文化財調査報告79 埋蔵文化財調査報告書62 志段味古墳群』に記載し刊行した。また普及啓蒙活動として、文化財公開事業「歴史の里」シンポジウムを開催し、遺跡を紹介するガイドブック・小冊子を刊行してきた。

2 形態と規模

志段味大塚古墳は、中位段丘縁とほぼ平行する北東—南西方向に主軸を向けて築造された帆立貝式古墳で、全長51m、前方部は長さが13m、幅20mと短く、高さは約1.2m、後円部は東西長37m、南北長推定38mの楕円形をなし、高さ約6.4mを測る。後円部の南側は土取りにより大きくえぐられていた。前方部長14m、前方部幅20mである。前方部北側のくびれ部には、造出がある。墳丘斜面には葺石がみられるが貼石状に積まれている。周濠は全周すると推定され、幅4m、深さ0.65～1.2mある。墳頂部には埋葬施設が2基構築されていた。梅原の調査した第1埋葬施設は、南側の土取り穴の崖面の崩落によりほとんど判明しなくなっている。約0.7m西側で検出した第2埋葬施設は、長さ5.3m、幅3.0mと推定される墓壇である。墓壇内に長さ約3.5m、幅0.95～1.0mの木棺棺身の痕跡があった。

今回の調査時は、後円部にはまだ樹木が生え、前方部は草地の状態であったが、翌2015（平成27）年度に墳丘、葺石の復元整備工事を実施し、2016（平成28）年度に埴輪、木棺の設置工事を実施した。

3 調査の経過

第8次調査は、「歴史の里」整備も大詰めになり、志段味大塚古墳の整備工事に着手する直前の調査となった。復元整備工事にあたり、後円部の築成段数、前方部と後円部の築成関係、墳頂部の埴輪樹立の有無などが未確定であった。そのためデータの収集をはかることを調査の目的とした。

また、「歴史の里」整備に関して、広報活動も一層の力を入れてきており、小学生団体の見学も計画された。そこで、当初は東側を調査し埴輪列の検出を優先し便宜を図った。西側の調査では、後円部から前方部端までトレンチを設定し、以前調査した前方部端の葺石まで掘削した。復元整備後の調査はできなくなるため、前方部から後円部にかけての写真撮影を企図したのである。

調査は、平成26年6月2日～9月5日までであった。調査期間が長いのは、夏季の宿泊体験、夏休みの見学に便宜を図ったためである。現地説明会は、台風接近のため、中止となったのは遺憾であったが、多くの見学者が調査中現場を訪れたほか、東谷山フルーツパークにおいて報告会を実施した。

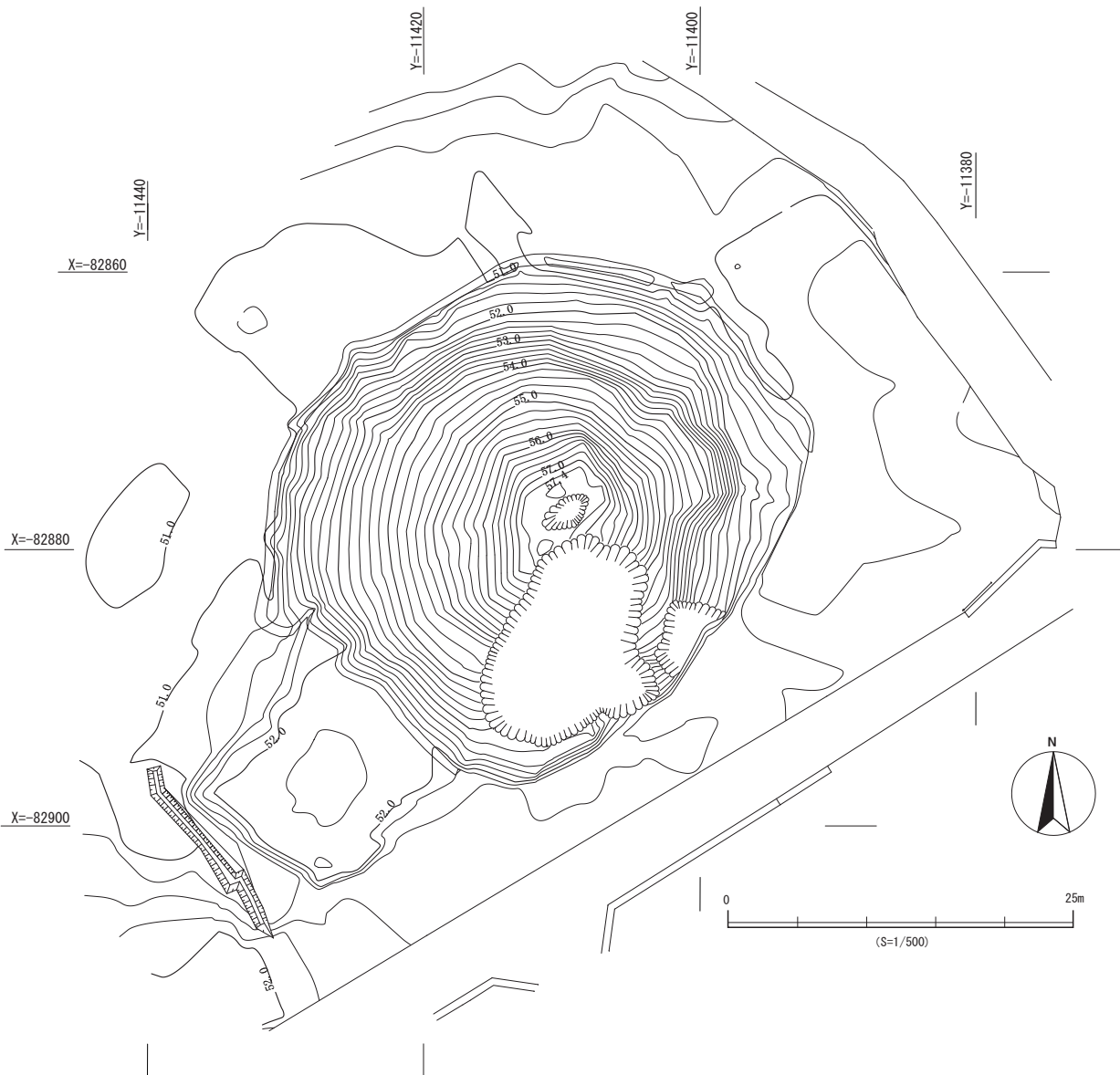


図3-1 志段味大塚古墳墳丘測量図

表3-1 調査トレンチ一覧

	調査年度	調査区名	調査地点	出土遺構・遺物
平成17年度確認調査 (第1次)	2005(平成17)年	1トレンチ	後円部・周濠	周濠
		2トレンチ	後円部・周濠	周濠
		3トレンチ	くびれ部	鶏形・水鳥形埴輪
		4トレンチ	前方部・周濠	葺石
		5トレンチ	前方部・周濠	葺石
		6トレンチ	くびれ部	葺石
平成18年度確認調査 (第2次)	2006(平成18)年	2拡張トレンチ	後円部	墳丘テラス
		5拡張トレンチ	前方部・周濠	周濠
		7トレンチ	墳頂部	梅原調査区の埋戻土除去
		8トレンチ	周濠	周濠斜面の肩
		9トレンチ	周濠	周濠
		10トレンチ	前方部・周濠	葺石
		11トレンチ	後円部・周濠	周濠、葺石
平成19年度試掘調査 (第3次)	2007(平成19)年	12トレンチ	後円部	後円部1段目斜面
		13トレンチ	周濠	周濠
		14トレンチ	周濠	周濠斜面
平成20年度確認調査 (第4次)	2008(平成20)年	7トレンチ	墳頂部	埋葬施設
		15トレンチ	後円部・前方部	葺石、蓋形埴輪
平成20年度確認調査 (第5次)	2008(平成20)年	16トレンチ	前方部・周濠	造出、埴輪、須恵器
平成20年度確認調査 (第6次)	2008(平成20)年	17トレンチ	前方部・周濠	蓋形埴輪
平成21年度確認調査 (第7次)	2009(平成21)年	崖面調査区	後円部	小札
平成26年度確認調査 (第8次)	2014(平成26)年	18トレンチ	後円部	葺石、埴輪
		19トレンチ	後円部・前方部	葺石、埴輪
		20トレンチ	後円部	葺石、埴輪
		21トレンチ	前方部	
		22トレンチ	墳頂部	
		23トレンチ	墳頂部	

4 各トレンチの調査成果

(1) トレンチの位置

2005(平成17)年度～2009(平成21)年度にかけて20か所のトレンチ・調査区を設けて発掘調査を実施した。これらのトレンチのうち、2トレンチと2拡張トレンチ、3トレンチと16トレンチ、4トレンチと16トレンチ、5トレンチと5拡張トレンチ、6トレンチと17トレンチは調査区域が重複している。今回の調査トレンチも18トレンチと1トレンチ、19トレンチと5トレンチ、15トレンチ、20トレンチと3トレンチが一部重複している。

今回の調査の目的は、下記の項目を明らかにすることである。

- 1 後円部の墳丘は二段築成なのか三段築成なのか
- 2 後円部葺石と一段目テラスの円筒埴輪列の関係
- 3 墳頂部に埴輪が樹立していたか
- 4 前方部と後円部の構築前後関係を把握する

(2) 18トレンチ

後円部墳丘の東側に設定した（調査時は東トレンチと呼称）。東西長 15.0 m、幅 1.9 ~ 2.1 m で墳頂東端から周濠部分までを対象にした。東端の周濠斜面部分は 1 トレンチと重複する。後円部 2 段目斜面、1 段目テラス、1 段目斜面、周濠斜面を検出した。前回までの第 2 段テラスは、明確にできなかったため、第 2 段テラス及び第 3 段築成の記述は、第 2 段築成に含めて記述する。

墳頂部は、標高 55.8 m である。2 段目斜面は標高 55.6 m ~ 50.91 m まで、標高 51.9 m 付近から急傾



図 3-2 トレンチ位置図

斜面で第1段テラスに続く。傾斜角度は35度である（標高54.5m）。そのなかで標高53.8m～53.0mは緩斜面をはさみ、従来第2段テラスと考えてきたが、明確なテラスと判断できなかった（標高53.0m傾斜角度は20度）。第1段テラスと第2段急斜面（傾斜角度45度）の境に葺石の基底石（標高50.82m）を検出した。この急斜面の下位、約1.1m分、葺石基底石から高さ1.6～1.3mの葺石が残存していた。葺石は、河原石の面を外側に向けて一つずつ貼り付けるように盛土内に半分埋め込んでいる。第1段テラスは、幅3.4mを測り、基底石から2.2mの位置に円筒埴輪列が検出された。埴輪列から0.8m外側がテラス縁で急傾斜面（傾斜角度25度）を経て濠に至る。テラス縁から濠までは1.4mある。埴輪列は、盛土内に溝状に掘り、その中に据えている。埴輪は、幅1.8m内に5.5個分が据えられている。南側にサブトレンチを設定し、埴輪列を検出したが、幅2.0m内に7個分（2個分は移動または亡失）を検出した。

出土遺物は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器（甕）、窯道具（ハマ、さや鉢）が出土した。

（3）19トレンチ

後円部墳丘の西側から前方部にかけて設定した（調査時は西トレンチと呼称）。東西長29.5m、南北幅1.9～2.0mで、後円部墳頂西端から前方部墳端斜面周濠までを対象にした。前方部の墳端は5トレンチと重複する。後円部2段目斜面、1段目テラス、前方部墳頂、墳端斜面を検出した。墳丘西側斜面は、盛土が流出していることから墳頂部緩やかな斜面であるが、前方部に近いところは、急斜面（傾斜角35～40度）である。この急斜面に葺石が残存している。葺石の基底石は、標高50.76mである。葺石の前面すなわち前方部墳頂面は、前方部に向かってわずかに傾斜している（傾斜角度7度）。この付近では、表土下に明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土、黄褐色（2.5Y5/4）シルト質土が堆積し、下位層に黄色土（にぶい黄 2.5Y6/4）が0.4m堆積し、河原石を多く含んでいた。葺石の残る墳丘斜面の傾斜角度は東側斜面とほぼ同じであるのに対し、上位斜面がだいぶ緩やかであるのは、墳丘の盛土が多く流出し、下位に堆積したためである。

後円部と前方部の接続部分は、後世に掘削された溝が走り攪乱されていた。畑地の境に穿たれた溝で、土層断面を観察すると、杭あるいは板を後円部側に打ち込み、土留めにしていただと思われる。したがって開削露出していた溝ではなく、土留め板を設置するために事前に溝を掘ったものと思われる。

接続部分の状況ははっきりしなかったが、溝をはさんで後円部側の盛土は、上位黄褐色（2.5Y5/3）土、その下位にぶい黄褐色（10YR4/3）土であるに対し、前方部側の盛土は、上位にぶい黄橙色（10YR6/4）土、その下位にぶい黄褐色（10YR4/3）土であった。この同じにぶい黄褐色土の上面レベルは、後円部側が高く、前方部側が低いことから、後円部1段目としてにぶい黄褐色土を小山状に積んだ後に、前方部側にぶい黄橙色土を積んだものと推定される。

前方部墳頂部は、ほぼ平坦面である。調査時には、0.45mの表土及び攪乱土の下にある褐色（10YR4/4）土、明黄褐色（2.5Y6/6）土、黄褐色（10YR5/6）土が盛土と考えていたが、上位攪乱土とした土層の堆積が、前方部墳端側から後円部側に傾斜して積まれていることは留意していたことであるが、埴輪片が含まれていることから、攪乱されていると認識した。しかし、前方部端部に高く積んで（現存高0.25m）、その後、後円部方向に積むという、墳丘盛土の構築方法と捉えることも可能であることから、表土層25～30cmの下から盛土が残っていると考えたい。

葺石は、平面形で幅 0.9 ～ 1.3 m 分、高さで 0.7 m 残存している。基底石は墳丘第 2 段とテラス面の境に円弧を描いて置かれているが、トレンチ南端から 2.35 ～ 2.95 m (20 トレンチ内) にある 2 石は、西に突出している。この 2 石の北側は、再び墳丘側に下がる。また 0.5 m 北の 3 石幅 0.75 m 分、1.9 m 北の 2 石幅 0.65 m 分、さらにわずかではあるが 3.05 m 北の 2 石幅 0.65 m 分が円弧から突出している。これらの突出した石は、石を葺く際の基準としているようにみられる。

出土遺物は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器 (瓶類) が出土した。

(4) 20 トレンチ

西トレンチの北側に設けた東西 6.5 m、南北 10.5 m の調査区である (調査時は西トレンチ拡張区と呼称、遺物注記で北拡としたものあり)。後円部の調査では、これまでで最も広範囲に葺石や埴輪列の状況を調査した。テラス面は幅 3.0 m あり、標高 50.5 ～ 50.6 m である。西北側は溝状に攪乱されている。

埴輪列は、基底石から 2.3 m 西側テラス面で 9 個体分が検出された。南半の埴輪列は根により攪乱を受けている。テラス面では、埴輪の小破片が多数出土した。埴輪は 1 条目の突帯までが盛土に埋まっている。掘り方は 1 個体ずつ盛土を掘り、据えている。

葺石はこれまでと同様に平たい面を表にして、各石は重ならないように貼り付けているような葺き方である。葺石の岩石学的観察鑑定は、名古屋市科学館学芸員西本昌司氏に依頼し、3 章 6 に掲載した。葺石の内数個は採集したが、そのほかの転石は復元に際して再利用している。

出土遺物は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、形象埴輪、須恵器 (坏) がある。

(5) 21 トレンチ

平成 20 年度に調査した 16 トレンチで検出された前方部造山北辺に平行して並ぶ埴輪列と、20 トレンチで検出された後円部埴輪列との高さ確かめるために、再掘削した。養生砂の下から円筒埴輪が出土したところで掘削を止めている。この円筒埴輪は、16 トレンチで検出された埴輪列の東から 2 番目の円筒埴輪で、検出上面の標高 50.24 m である。20 トレンチ後円部の円筒埴輪列の検出面の標高は、50.54 ～ 50.66 m で 30 ～ 40cm ほど高低差がある。

(6) 22 トレンチ・23 トレンチ

後円部第 2 段目の墳丘頂上に小規模なトレンチを設定した。21 トレンチは、18 トレンチの西側に東西 1.4 m、南北 2.2 m の大きさである。このトレンチは、墳丘頂部に埴輪が据えられていたかを確認するために設定した。東寄りで埴輪片 2 点を検出した。2 点は接合する埴輪で、底部片である。外側に傾いていたものの原位置のものである。掘り方は平面では検出できなかったが、断面ではわずかに掘り方埋土が粘質土であった。たまたま樹木の根もとにあり、削平を免れたようである。その北側にも東西 1.8 m、南北 1.1 m の大きさで 22 トレンチを設定した。表土 0.2 m の下に盛土を検出したが、盛土が 10cm ほど削平を受けており埴輪は検出されなかった。

出土遺物は円筒埴輪がある。

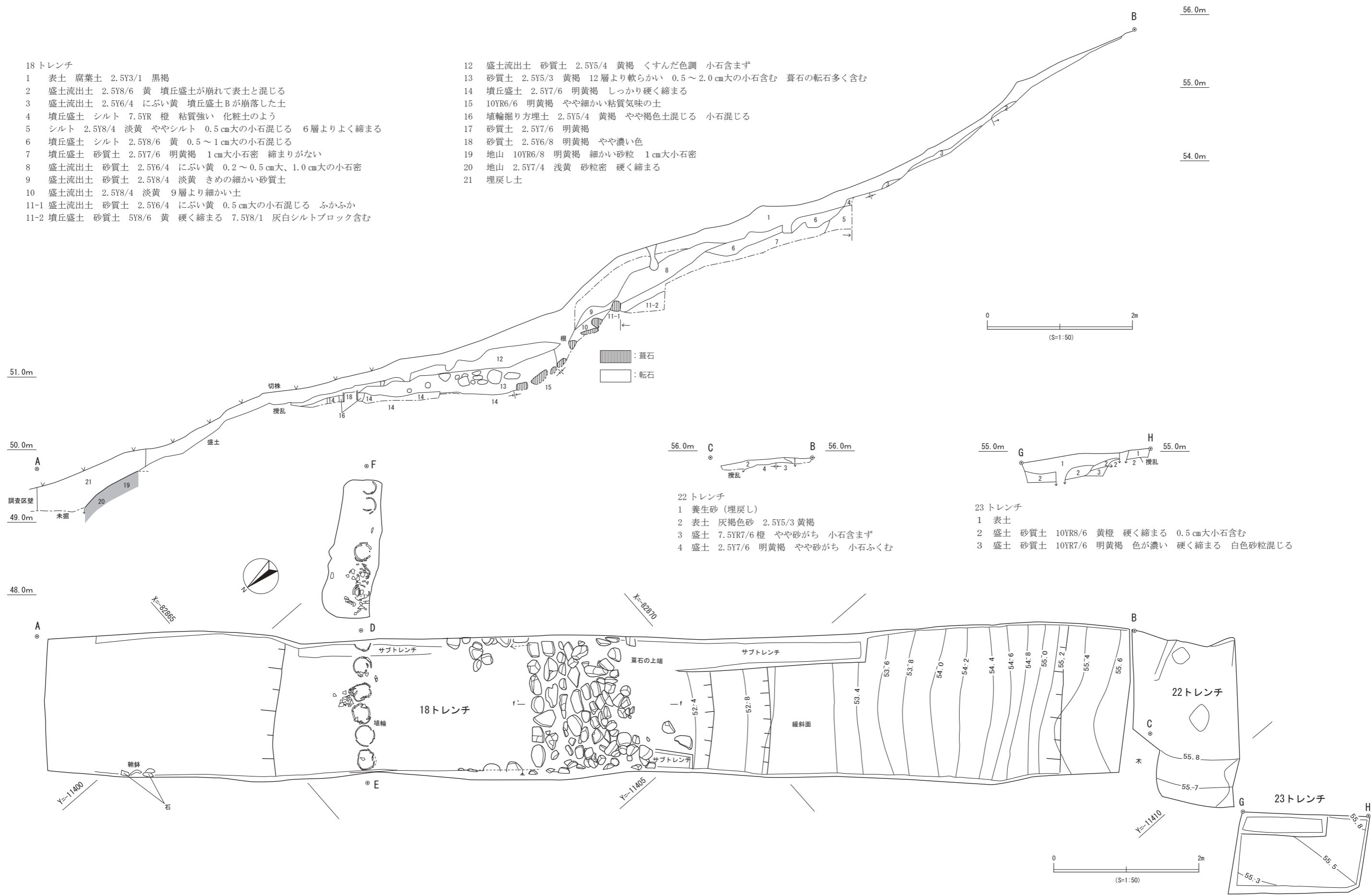


図3-3 18トレンチ平面図・断面図、22トレンチ平面図・断面図、23トレンチ平面図・断面図

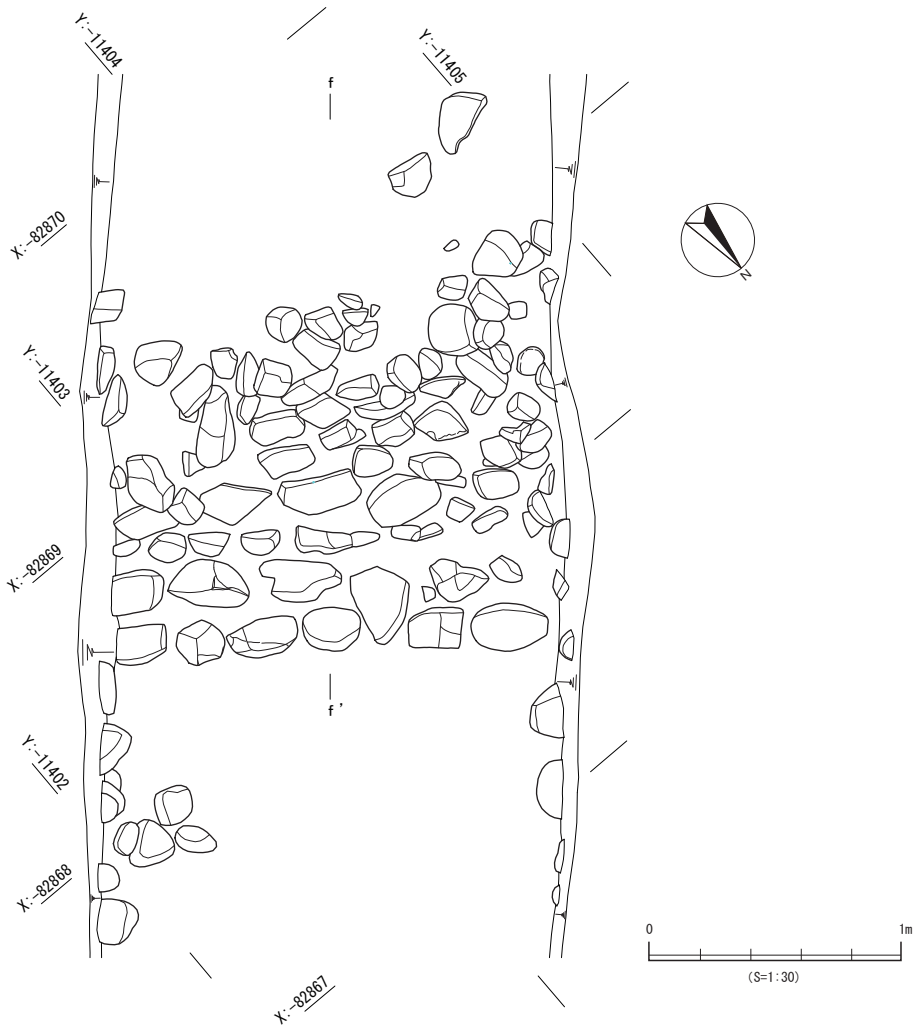
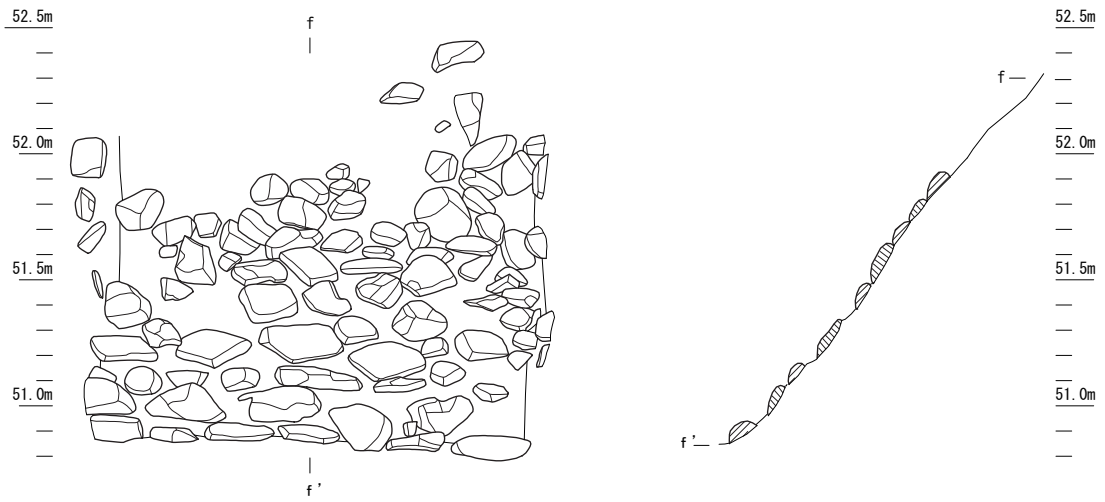


図3-4 18トレンチ葺石立面図

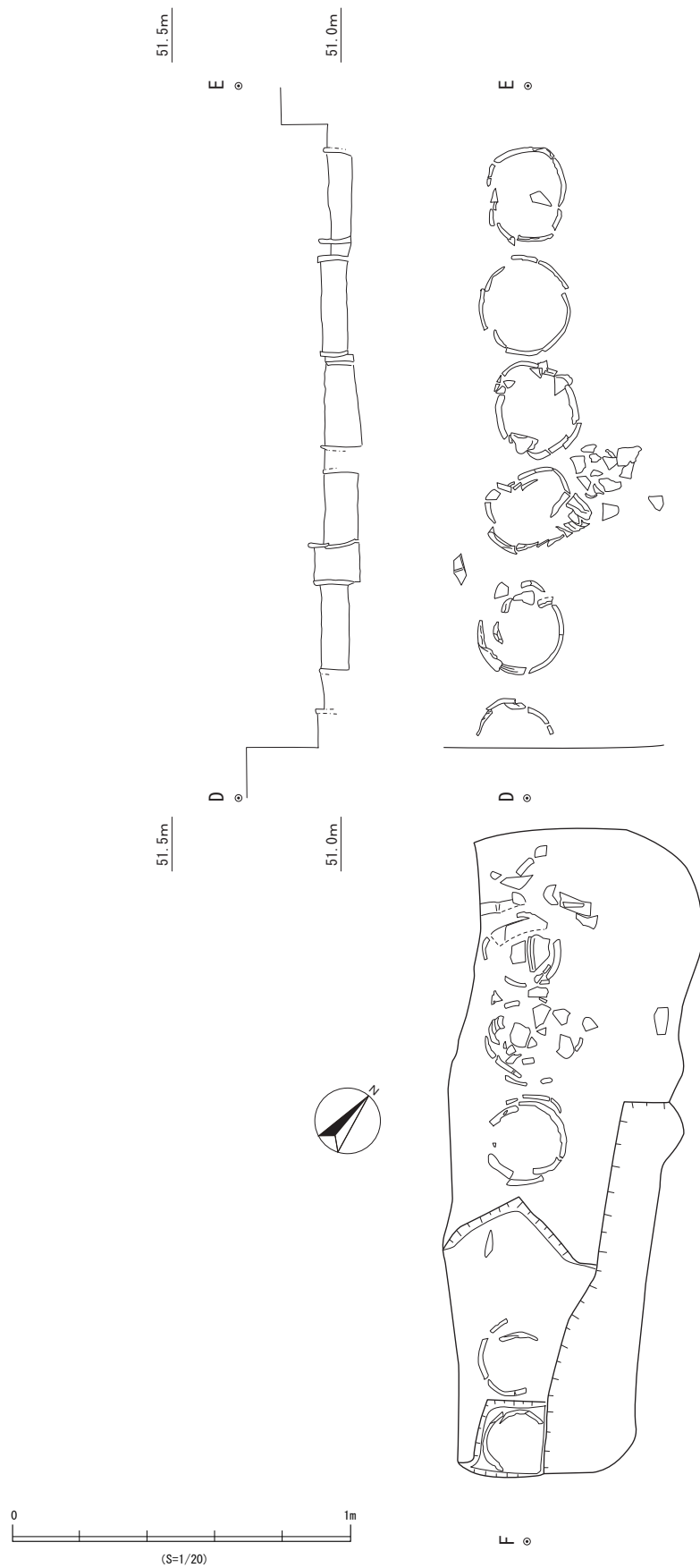


図3-5 18 トレンチ埴輪列平面図・断面図

- 19トレンチ北壁
- 1 表土 腐葉土 7.5Y3/1 オリーブ黒
 - 2 砂質土 2.5Y7/6 明黄褐
 - 3 2.5Y5/4 黄褐 やや暗色 ややしと質
 - 4 2.5Y6/4 にぶい黄 やや締まる 転石多く含む
 - 5 盛土流出土 2.5Y5/3 黄褐 1cm大の小石含む 灰白シルト1.0cm大、炭化層厚さ1.0cm含む
 - 6 墳丘盛土 10YR5/6 黄褐 ややしと質 1.0cm大の灰白シルト含む 5、6層は良く似ている
 - 7-1 墳丘盛土 10YR4/3 にぶい黄褐 均質 ややしと質
 - 7-2 盛土 砂シルト 2.5Y6/6 明黄褐
 - 7-3 盛土 10YR5/6 黄褐 2.0cm大の小石少し含む
 - 7-4 盛土 10YR5/4 にぶい黄褐 軟らかい土
 - 8 溝埋土 腐葉土 10YR4/1 褐灰
 - 9 溝埋土 10YR5/3 にぶい黄褐 に10YR7/6 明黄褐 シルトが混じる
 - 10 溝埋土 10YR5/6 黄褐
 - 11 溝埋土 墳丘流出土 10YR5/6 明黄褐 やや砂質
 - 12 盛土 10YR6/6 明黄褐 11層に比べ硬く締まる
 - 13 盛土 10YR6/4 きめが細かい 7層はややしと質
 - 14 砂質土 2.5Y6/4 にぶい黄 硬く締まる 埴輪片含む
 - 15 砂質土 10YR4/4 褐 均質 7層とほぼ同じ

- 16 2.5Y7/4 浅黄 ブロック土 1.0~1.5cm大小石含む 0.5~1.0cm大2.5Y 灰白土ブロック含む
- 17 2.5Y7/8 黄 2.5Y8/6 黄砂シルトブロック含む 旧耕作土
- 18 2.5Y6/6 明黄褐 0.5cm大の小石多く含む 旧耕作土
- 19 2.5Y8/8 黄 橙 5YR6/8 5.0cm大ブロック含む 2.5Y4/2 暗灰黄 2.0cm大ブロック含む
- 20 2.5Y7/8 黄 0.5~1.0cm大の小石多く含む
- 21 墳丘流出土 2.5Y8/4 淡黄・2.5Y7/4 浅黄 31層の崩れ 色調同じ
- 22 墳丘流出土 10YR6/6 明黄褐 1.0cm大の小石まばらに含む
- 23 墳丘流出土 2.5Y5/6 黄褐 きわめて均質でやや粘質土 盛土に比べてやや砂質
- 24 墳丘流出土 10YR8/4 浅黄橙・10YR8/2 灰白・10YR5/6 黄褐 ブロック状に混じる
- 25 砂質土 2.5Y6/4 にぶい黄 硬く締まる
- 26 盛土 2.5Y8/6 黄・2.5Y8/6 明黄褐 ブロック土 砂質
- 27 盛土 砂質シルト 2.5Y7/3 浅黄 鉄分の沈着あり
- 28 墳丘流出土 砂質 明黄褐 10YR7/6 10YR8/2 灰白シルトブロック多く含む 硬く締まる
- 29 砂質 10YR6/6 明黄褐 やや軟らかい
- 30 盛土 2.5Y8/6 黄 砂質 硬く締まる
- 31 盛土 2.5Y8/4 淡黄・2.5Y7/4 浅黄 砂シルト混じりの土
- 32 盛土 砂質土 10YR6/6 明黄褐
- 32 砂質土 10YR7/3 にぶい黄褐 硬く締まる

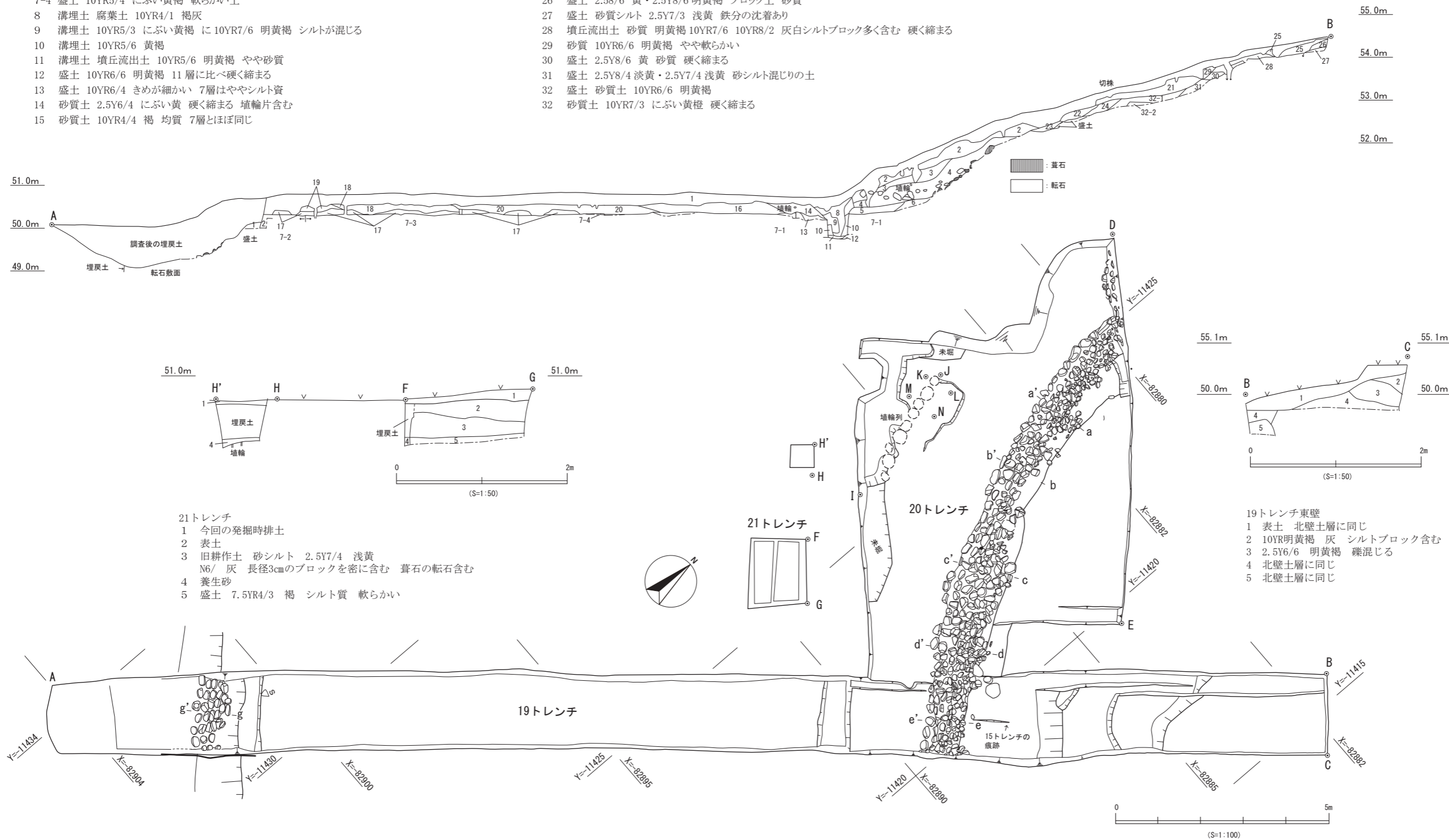
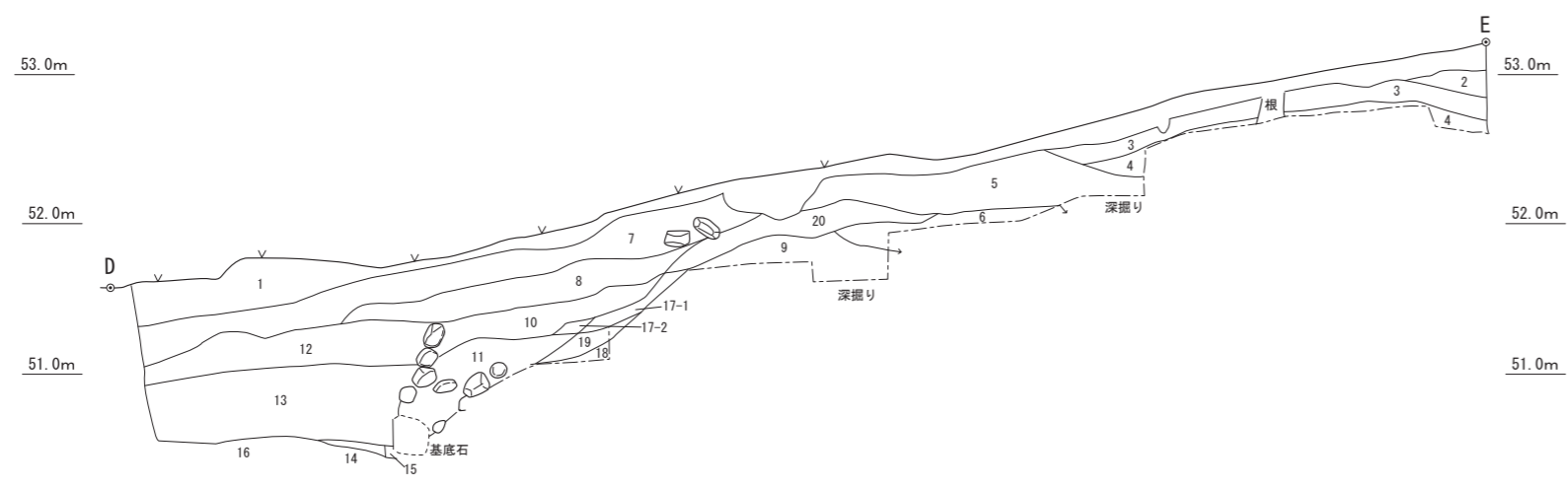


図3-6 19トレンチ立面図・断面図、21トレンチ平面図・断面図



- 1 表土 根多い 5Y3/1 オリーブ黒
- 2 墳丘流出土 砂質土 5Y7/4 浅黄 軟質
- 3 盛土 7.5YR5/6 明褐 やや粘質 均質
- 4 盛土 7.5YR6/6 橙 3層より薄い色調 粘質 0.5cm大礫少し含む
- 5 盛土 2.5Y7/1灰白 シルトブロック・10YR5/6黄褐粘質土ブロックの混じり
- 6 盛土 7.5YR5/6 明褐 粘質 砂礫含まず
- 7 墳丘流出土 2.5Y7/6 明黄褐 1.0~3.0cm大の小礫 砂質強い
- 8 墳丘流出土 2.5Y7/6 明黄褐 やや粘質 砂礫少し含む
- 9 盛土 10YR5/4 にぶい黄褐 2.5Y6/3 にぶい黄含む 粘質土 砂礫含まず
- 10 墳丘流出土 10YR6/6 明黄褐 やや粘質 小礫含まず 12層と同じ層
- 11 墳丘流出土 2.5Y8/6 黄 粘質 転石含む
- 12 墳丘流出土 2.5Y6/6 明黄褐 1.0~3.0cm大の小石多く含む 転石は少ない
- 13 2.5Y6/8 明黄褐 やや粘質 小石は含まず 転石多く含む
- 14 2.5Y7/4 浅黄
- 15 2.5Y6/8 明黄褐 シルト塊
- 16 2.5Y7/4 浅黄 5G7/1明緑灰 シルトブロック含む 硬質
- 17-1 2.5Y8/6 黄 硬く締まる
- 17-2 2.5Y8/8 黄 硬く締まる
- 18 盛土 7.5YR5/6 明褐 2.5Y7/5浅黄 混じる 締まった土
- 19 盛土 7.5YR7/6・6/6 明黄褐 粘質 葺石裏込め 小石含まず
7.5YR8/6黄橙色土と混じる 18層の方が橙色強い
- 20 2.5Y6/6 明黄褐 ややシルト 根が多くやや灰色気味



図3-7 20 トレンチ平面図・断面図

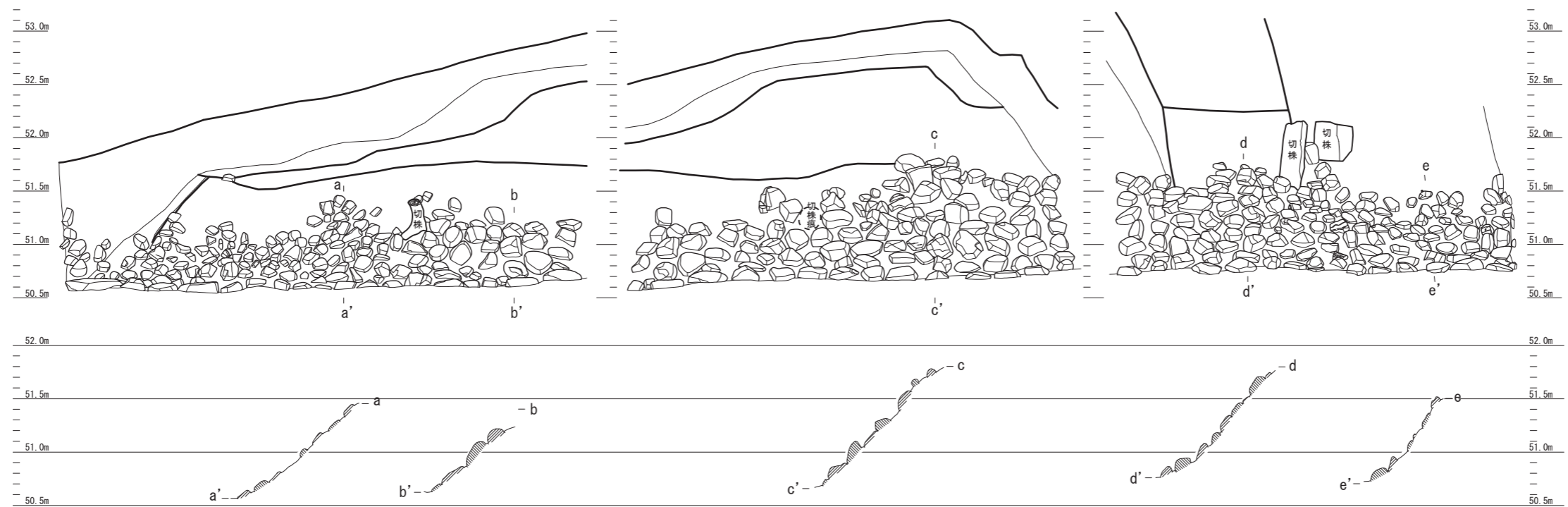
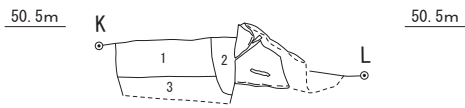
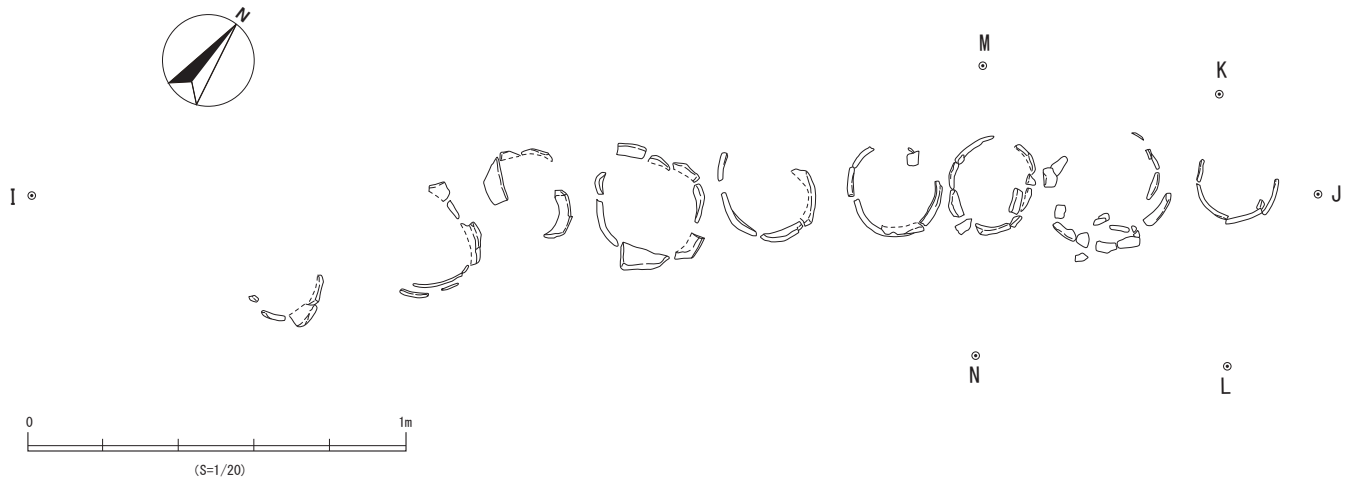
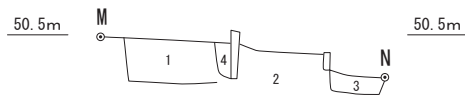


図3-8 20トレンチ葺石立面図



- 1 2.5Y7/3 浅黄 砂質 1cm大小石含む
- 2 2.5Y 6/3 にぶい黄 砂質 1cm大砂質ブロック(2.5Y7/1)含む
- 3 2.5Y6/6 明黄褐色 砂質 小石含まず やや濃い色 掘方
- 4 10YR 6/6 明黄褐色 やや粘質の土



- 1 2.5Y6/4にぶい黄砂質やや粘質あり(盛土)
- 2 10Y12 7/6明黄褐色 粘質あり
- 3 2.5Y7/4明黄褐色 ふかふかの土 掘方検出できず
- 4 16YR 7/4 にぶい黄橙 ほとんど1層とかわらず 変えて引いた(掘り方埋戻し土)

図3-9 20 トレンチ埋輪平面図・断面図

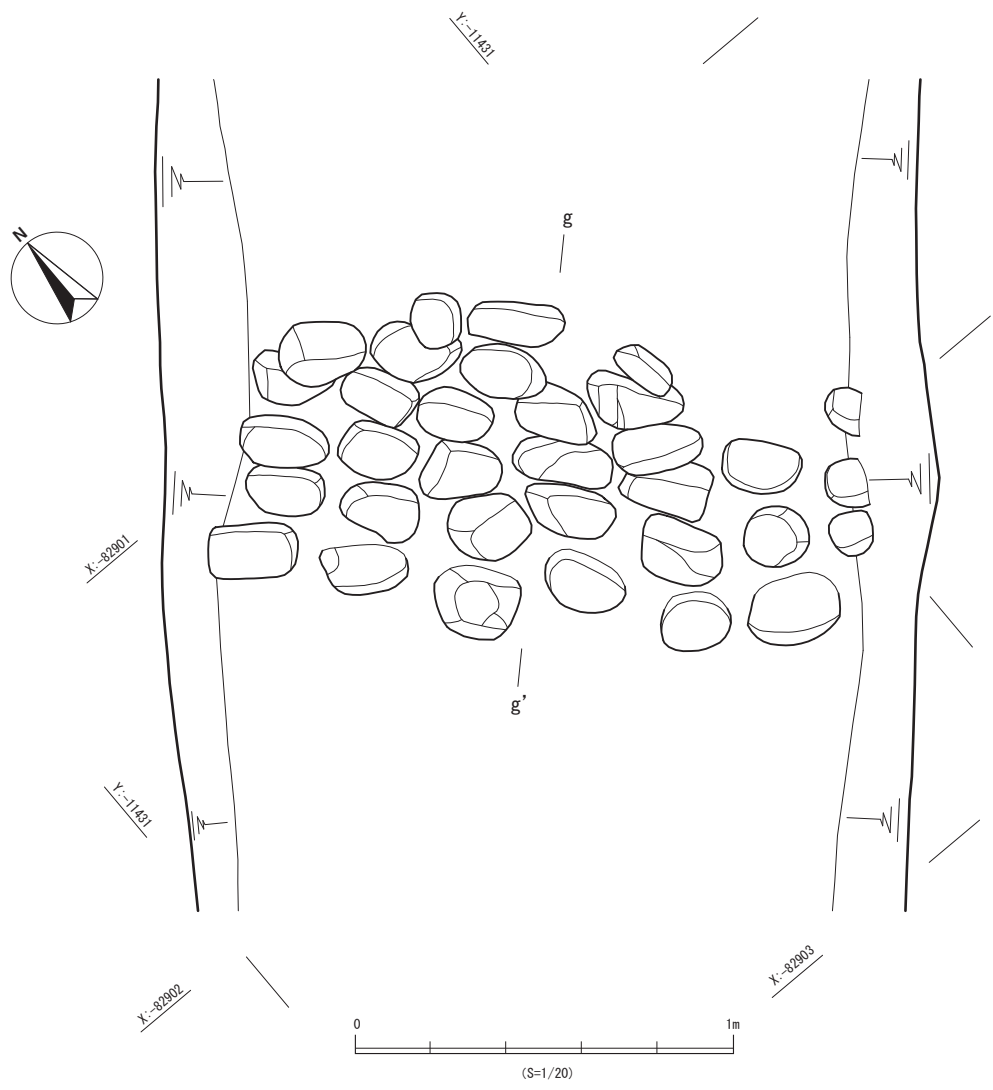
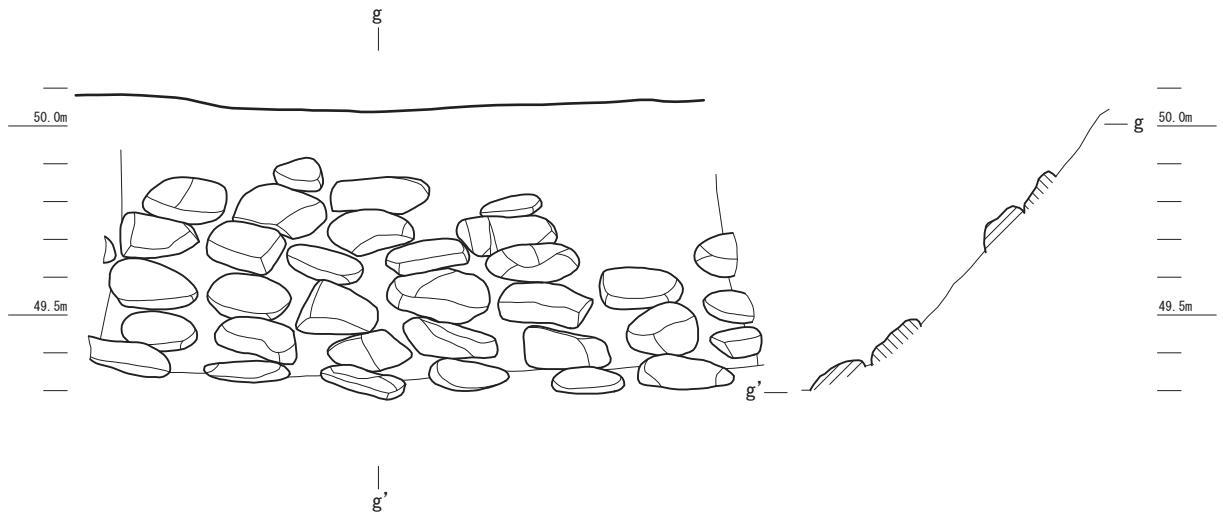


図3-10 19トレンチ葺石立面図

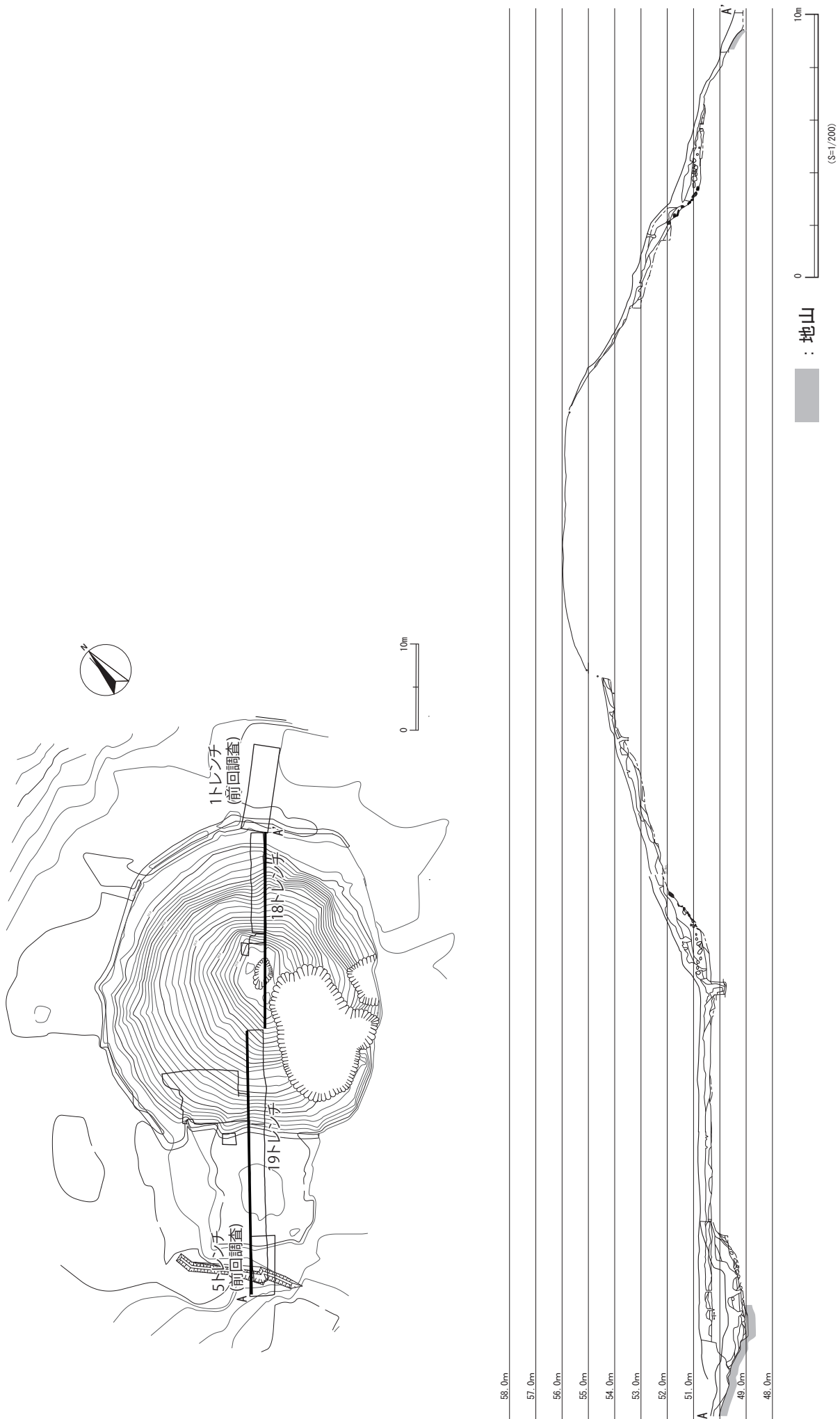


図3-11 志段味大塚古墳墳丘縦断面図

5 出土遺物

(1) 埴輪

円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪がある。遺物量はコンテナケース6箱（整理時13箱）で、円筒埴輪は、据えられたままの位置を保つものは、そのまま埋戻し、攪乱により位置が動いたものについて取り上げたため、小片が多い。

円筒埴輪は、口縁口唇部は、水平にナデ調整が施されているが、上方へつまんでいるもの（9）や内側につまみや内湾するもの（2）、沈線状の窪みがあるもの（6）がある。外面調査は、口縁部（4段目）は、タテハケ調整（3、4）、ヨコハケ調整（9）、タテハケ後ヨコハケ調整（1、2、6、8、7）がある。1は、ヘラによる線刻がある。内面はヨコハケ調整を施す（8、13、14）が、指頭圧痕のあるもの（52）、ユビナデ痕があるもの（4、10）がある。底部は、外面タテハケ調整、内面はユビナデ痕があるもの（47）、輪積みの痕がよくわかるものがある。45、48は、表面の磨滅が著しい。淡橙色を呈する。46は外面タテハケ調整、内面は輪積み痕がのこる。復元底径17.0cm。突帯は、3条4段の埴輪でハケメ調整の痕跡から2条目、3条目の破片が多い。15、16、25は突帯の中央に沈線状の窪みを巡らし、断面M字状を呈す。底部は外面タテハケ調整である。色調は橙色が多いが、やや淡黄色のもの（31、23）、須恵質で堅緻なもの（2、30、1、35、33、37、42、34）があるが橙色が発色している。11、26、27は断面も青灰色で須恵器と同じ焼成である。20は、表面の磨滅が著しい。内面に凹凸が認められユビオサエの痕跡と思われる。

朝顔形埴輪は、18トレンチで1点（57）、19トレンチで1点（52）、20トレンチで6点（53、56、65、54、55、59）を図示した。52は口縁部で上方へ強くつまみあげている。外面はタテハケ調整である。54は口縁部から胴部にかけての部分で、外面タテハケ調整、内面不明である。外面のハケ目は口縁部のほうが細かくヘラミガキのように浅いのにに対して、胴部ははっきりとしたハケ目である。55は肩部から胴部にかけての破片で、外面タテハケ調整、内面は輪積み痕が残る。59はタテハケ調整である。

蓋形埴輪は、20トレンチから出土した、笠部（66、63、62）、鱗部（61）があるが、小破片である。いずれも橙色で0.5mm大の砂粒を含む。64は、軸部の可能性もあるが、内孔径が13mmと小さく、別の形象埴輪の可能性もある。

(2) 埴輪以外の遺物

須恵器、窯道具がある。窯道具は、勝手塚古墳でも出土しているが、志段味焼が明治以降に行われていることから、窯元から運び込まれたものと推定される。

(3) 表採資料

大塚2号墳付近の道路上に落ちていた埴輪を採取した。橙灰色を呈し、須恵質、堅緻に焼成されている。外面タテハケ後ヨコハケ調整、内面ヨコハケ調整である。



12:18トレンチ 1~3:19トレンチ 4~10,13:20トレンチ

図3-12 出土遺物(1)

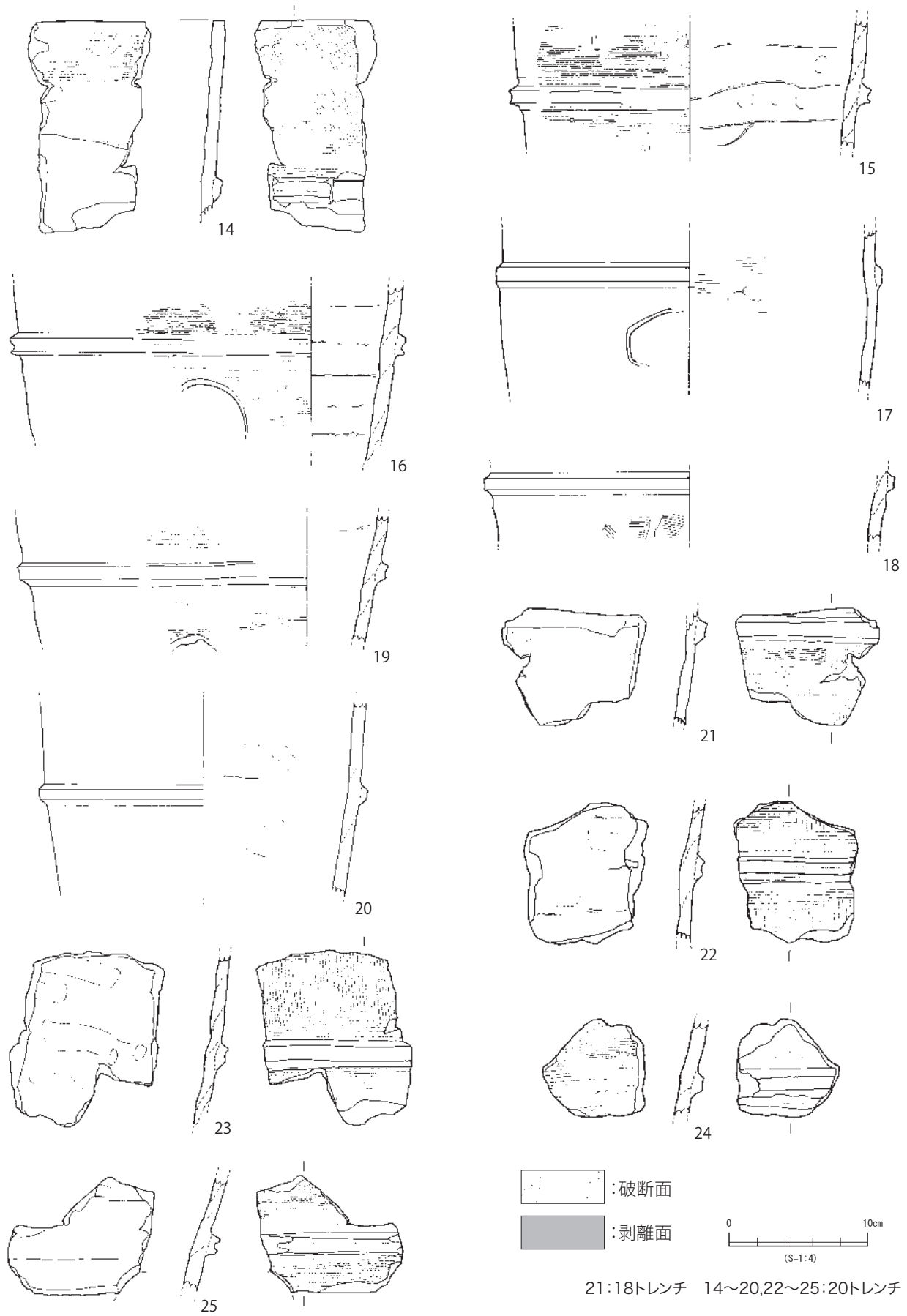


図3-13 出土遺物(2)



26~29:18トレンチ 30~32:19トレンチ 33:19,20トレンチ間
34~41,43~44:20トレンチ 42:排土

図3-14 出土遺物(3)

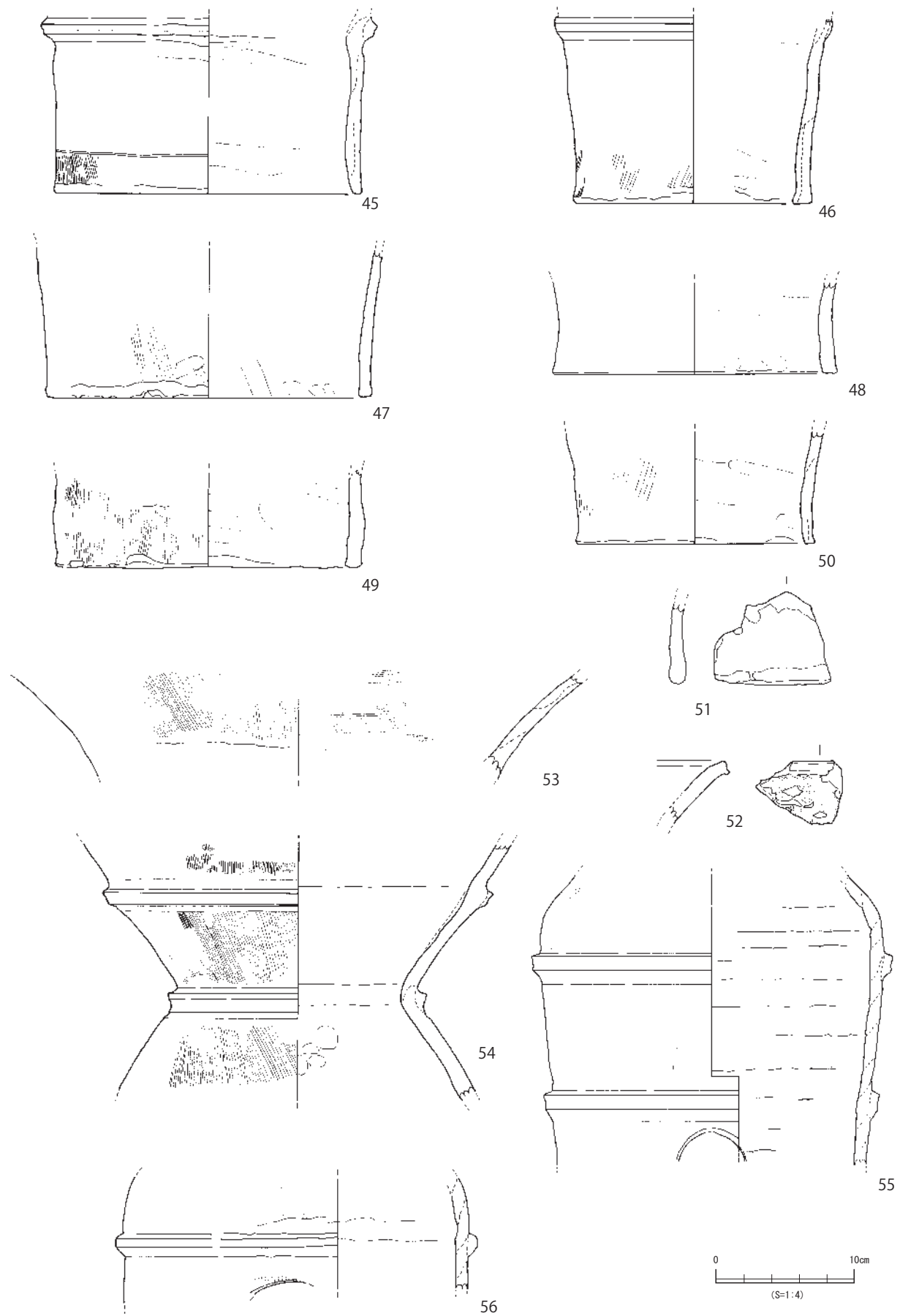
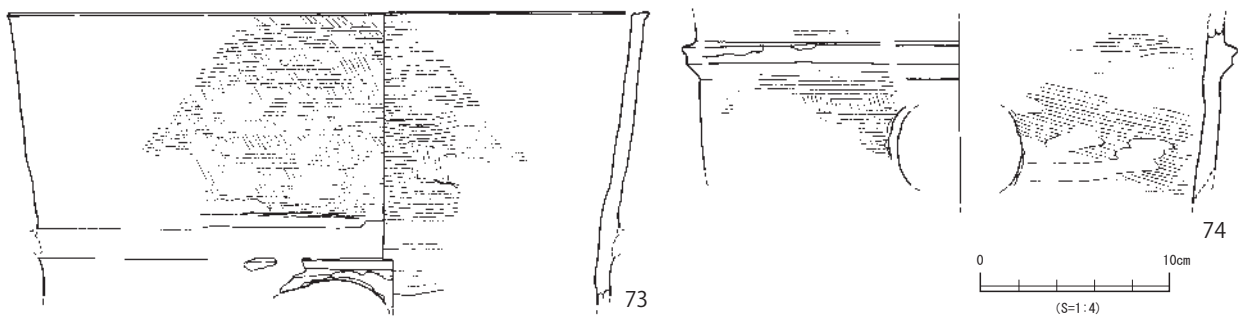
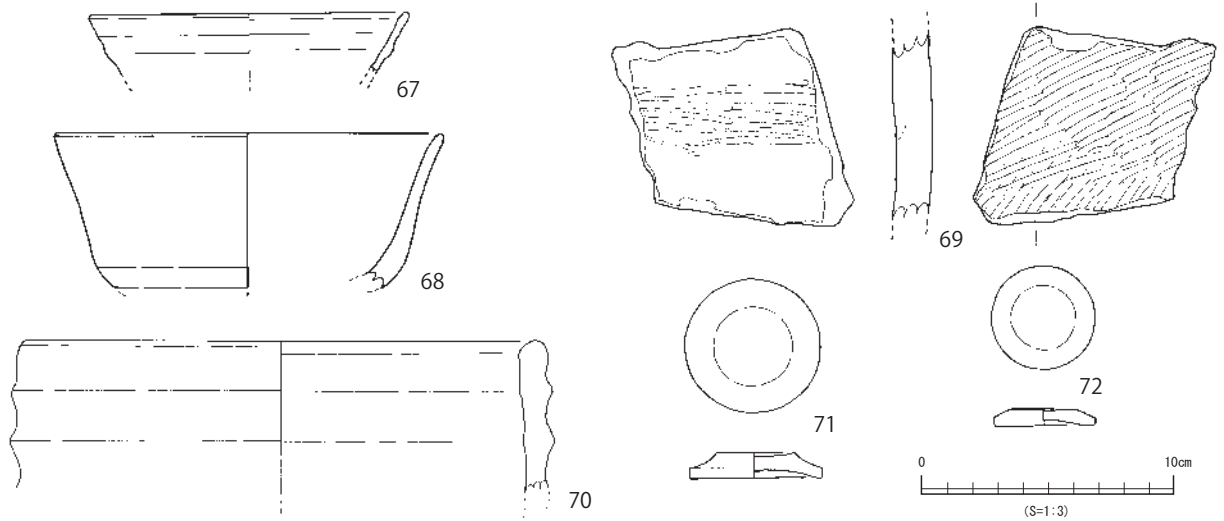
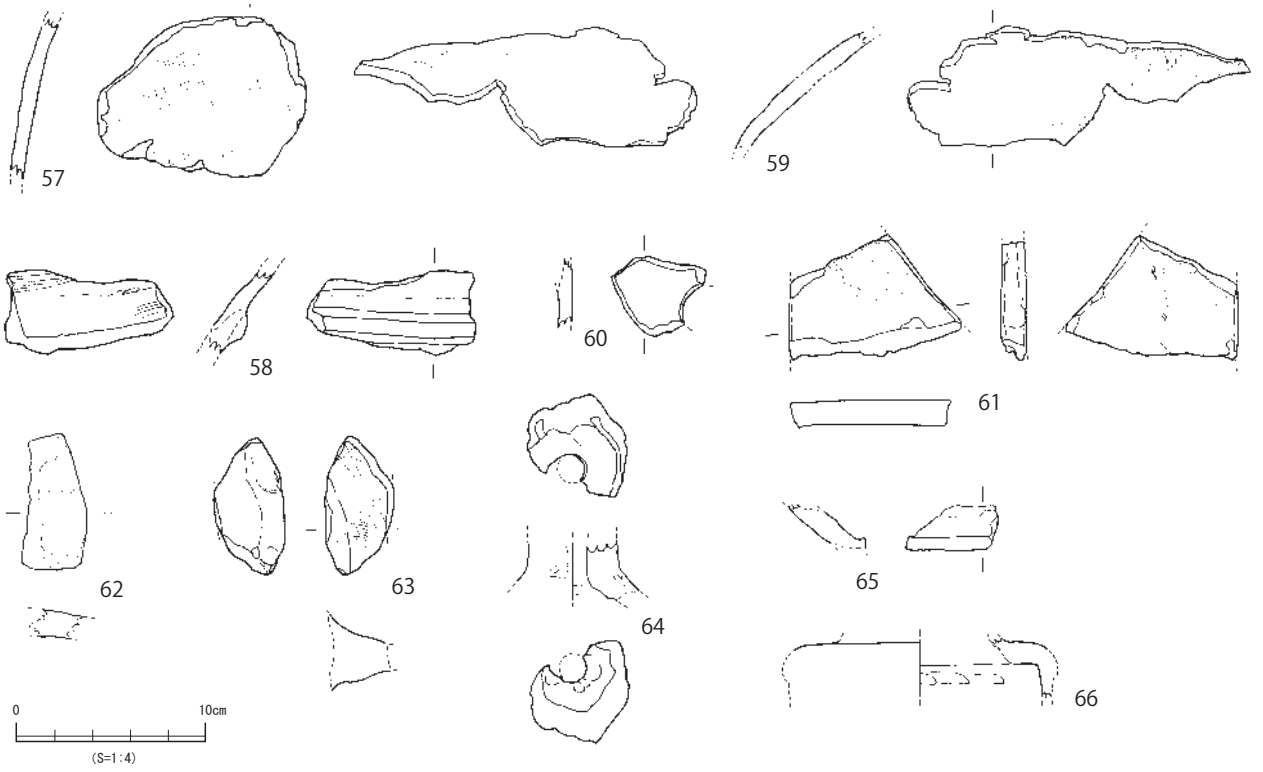


図3-15 出土遺物(4)

51,52:19トレンチ 45~50,53~56:20トレンチ



57,58,69~72:18トレンチ 67:19トレンチ
59~66,68:20トレンチ 73,74:表採

図3-16 出土遺物(5)

表3-2 出土遺物観察表(1)

No	種類	部位	出土地点	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
1	円筒埴輪	口縁部	19 トレンチ 斜面 堆積土	口径:(30.0) 残存高:12.6	1/8	口唇部:ヨコナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8~6/8 橙 断面:2.5Y7/1~7/2 灰白~ 灰黄	2.30 と同一個体か 透孔、ヘラ記号
2	円筒埴輪	口縁部	19 トレンチ・20 トレンチ アゼ 転石検出	口径:(28.1) 残存高:4.7	1/8	口唇部:ヨコハケ 胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙 断面:2.5Y7/1~7/2 灰白~ 灰黄	1.30 と同一個体か
3	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(33.4) 胴部突帯径:(32.2) 残存高:11.0	1/5	口唇部:不明 胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ (貼付前:タテハケ)	ナデ、ユビ オサエ	内外:7/5YR7/8 黄橙	
4	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(31.8) 残存高:10.0	1/4	口唇部/突帯:ヨコナデ 胴部:タテハケ	ナデ	5YR6/6 橙	
5	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(33.2) 胴部突帯径:(31.0) 残存高:12.4	1/9	口唇部/突帯:ヨコナデ 胴部:タテハケ	ナデ	内外:7.5YR6/6 橙	透孔 内面に粘土接合痕
6	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(28.0) 胴部突帯径:(27.8) 残存高:12.0	1/8	口唇部/突帯:ヨコナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	内面に粘土接合痕
7	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(32.8) 残存高:8.2	1/10	口唇部:ナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ →ユビナデ	ナデ	内外:7.5YR7/8 黄橙	内面に粘土接合痕
8	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(30.6) 口縁突帯径:(31.2) 残存高:16.9	1/8	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、 ナデ	内外:5YR7/8~6/8 橙	内面に粘土接合痕
9	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(30.4) 残存高:5.6	1/6	口唇部:ナデ 胴部:ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	
10	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	口径:(33.4) 残存高:6.0	1/10	口唇部:ナデ 胴部:タテハケ	ナデ、ユビ オサエ	内外:7.5YR7/8 黄橙	
11	円筒埴輪	口縁部	18 トレンチ テラス東端	残存高:6.3 残存幅:8.0	—	口唇部:ヨコナデ 胴部:タテハケ	ヨコハケ	内外:2.5Y4/1 黄灰	
12	円筒埴輪	口縁部	18 トレンチ 南拡張部	残存高:3.2 残存幅:3.9	—	不明	不明	内外:7.5YR7/6 橙	
13	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	残存高:14.6 残存幅:15.8	—	口唇部:ナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ、 ナデ	内外:7.5YR7/6 橙	14 と同一個体か 突帯設定技法(沈 線)あり、赤彩か
14	円筒埴輪	口縁部	20 トレンチ	残存高:16.3 残存幅:8.8	—	口唇部/突帯:ヨコナデ 胴部:タテハケ	ヨコハケ、 ナデ	内外:7.5YR7/6 橙	13 と同一個体か 突帯設定技法(沈 線)あり
15	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ	胴部突帯径:(26.2) 残存高:9.7	1/4	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:7.5YR7/6 橙 断面:10YR7/6 明黄褐	内面に粘土接合痕
16	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ	胴部突帯径:(28.8) 残存高:12.6	1/3	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ		内外:7.5YR6/6 橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	透孔 内面に粘土接合痕
17	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ	胴部突帯径:(28.0) 残存高:11.5	1/8	不明	ヨコハケ、 ユビオサエ	内外:7/5YR7/8 黄橙	透孔
18	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ 北東隅	胴部突帯径:(29.6) 残存高:5.0	1/6	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	不明	外面:10YR7/4 にぶい黄橙 内断面:7.5YR7/6 橙	
19	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ 北壁下層	胴部突帯径:(26.8) 残存高:8.9	1/4	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/8 橙	透孔
20	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ	胴部突帯径:(23.8) 残存高:14.0	1/7	不明	ユビオサエ	内外:5YR7/8 橙 断面:10YR8/4	内面に粘土接合痕
21	円筒埴輪	胴部	18 トレンチ テラス葺石の間	残存高:8.4 残存幅:10.4	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/4 にぶい橙	
22	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ	残存高:10.0 残存幅:8.9	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/8 橙	内面に粘土接合痕
23	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ 北壁 下層	残存高:12.0 残存幅:11.2	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:7.5YR7/6 橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	内面に粘土接合痕
24	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ 埴輪 No.28	残存高:7.0 残存幅:7.4	—	突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR6/8 橙	
25	円筒埴輪	胴部	20 トレンチ 北壁 下位層	残存高:8.4 残存幅:10.5	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	外面:7.5YR7/6 橙 内面:5YR7/6 橙 断面:7.5Y8/6 浅黄橙	透孔 内面に粘土接合痕
26	円筒埴輪	胴部	18 トレンチ 東端墳丘下表土	残存高:8.0 残存幅:6.3	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	内外:10YR5/1 褐灰	
27	円筒埴輪	胴部	18 トレンチ テラス東	残存高:5.4 残存幅:7.2	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ ユビオサエ	内外:5Y6/1 灰	
28	円筒埴輪	胴部	18 トレンチ	残存高:5.0 残存幅:7.3	—	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR6/6 橙	透孔
29	円筒埴輪	胴部	18 トレンチ テラス葺石の間	残存高:4.4 残存幅:7.7	—	ヨコハケ	不明	内外:7.5YR7/4 にぶい橙	
30	円筒埴輪	胴部	19 トレンチ 前方部 表土	残存高:4.9 残存幅:4.2	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8~6/8 橙 断面:2.5Y7/1~7/2 灰白~ 灰黄	1.2 と同一個体か ヘラ記号

表3-3 出土遺物観察表(2)

No	種類	部位	出土地点	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
31	円筒埴輪	胴部	19トレンチ 西端/3層	残存高:4.7 残存幅:10.0	—	ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	内面に粘土接合痕
32	円筒埴輪	胴部	19トレンチ 下位斜面 葦石転落石の上位	残存高:6.1 残存幅:9.3	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	不明	内外:10YR8/4 浅黄橙	
33	円筒埴輪	胴部	19トレンチ・20 トレンチの間 転石検出中	残存高:5.2 残存幅:4.3	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	内外:5Y4/1 灰 断面:2.5YR5/2 灰赤	透孔
34	円筒埴輪	胴部	20トレンチ 排土	残存高:11.3 残存幅:8.0	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	外面:7.5YR6/6 橙 内面:5YR5/4 にぶい赤褐 断面:5Y6/1 灰	透孔
35	円筒埴輪	胴部	20トレンチ 表土	残存高:9.1 残存幅:9.3	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ ユビオサエ	外面:5YR6/6 橙 内面:5YR5/2 灰褐 断面:10YR6/1 褐灰	透孔
36	円筒埴輪	胴部	20トレンチ	残存高:7.1 残存幅:10.2	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/6 橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
37	円筒埴輪	胴部	20トレンチ 排土	残存高:7.6 残存幅:7.1	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	外面:5YR6/8 橙 内面:2.5Y5/1 黄灰 断面:2.5Y6/1 黄灰	透孔
38	円筒埴輪	胴部	20トレンチ 中央南	残存高:6.0 残存幅:8.4	—	胴部:ヨコハケ、ナデ 突帯:ヨコナデ	不明	内外:5YR7/8 橙	
39	円筒埴輪	胴部	20トレンチ 北東隅	残存高:4.8 残存幅:8.2	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR7/8 橙 断面:10YR7/4 にぶい橙	透孔
40	円筒埴輪	胴部	20トレンチ	残存高:7.0 残存幅:10.0	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヘラナデ	内外:7.5YR7/6 橙	
41	円筒埴輪	胴部	20トレンチ	残存高:7.2 残存幅:7.7	—	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/8 橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	透孔
42	円筒埴輪	胴部	19・20トレンチ 排土	残存高:5.5 残存幅:9.6	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ	ナデ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/1 灰白	透孔
43	円筒埴輪	基底部	20トレンチ 表土/青灰色土	底径:(22.3) 残存高:10.8	1/5	底部:圧痕 胴部:ヨコハケ/タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	外面:10YR7/6 明黄褐 内面:7.5YR6/6 橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	内面に粘土接合痕
44	円筒埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(24.5) 残存高:8.8	1/4	底部:圧痕 胴部:タテハケ、ナデ	ナデ、ユビ オサエ	内外:5YR6/8 橙	内面に粘土接合痕
45	円筒埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(22.4) 胴部突帯径:(24.3) 残存高:12.7	1/2	底部:圧痕 胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコナデ	内外:7.5YR7/6 橙	
46	形象埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(17.2) 胴部突帯径:(20.1) 残存高:13.6	1/2	胴部:タテハケ	ナデ、ユビ オサエ	内外:5YR6/8 橙	
47	円筒埴輪	基底部	22トレンチ	底径:(23.5) 残存高:11.0	1/3	底部:圧痕 胴部:タテハケ	ユビオサエ	内外:7.5YR7/6 橙	
48	円筒埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(20.6) 残存高:6.8	1/4	不明	ナデ	内外:7.5YR7/6 橙 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
49	円筒埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(22.0) 残存高:6.9	1/3	底部:圧痕 胴部:タテハケ	ヨコナデ	内外:5YR6/8 橙 断面:5YR5/4 にぶい赤褐	
50	円筒埴輪	基底部	20トレンチ	底径:(17.2) 残存高:8.1	1/3	胴部:タテハケ	ヨコナデ	内外:5YR6/8 橙 断面:5YR4/3 にぶい赤褐	
51	円筒埴輪	基底部	19トレンチ 西側前方部	残存高:5.0 残存幅:6.2	1/10	不明	ユビオサエ	内外:7.5YR8/6 浅黄橙	
52	朝顔形埴輪	口縁部	19トレンチ 前方部 表土直下	残存高:4.5 残存幅:6.3	—	口唇部:ヨコナデ 胴部:ナナメハケ	ヨコナデ	内外:7.5YR7/6 橙	
53	朝顔形埴輪	口縁部	20トレンチ	残存高:7.7	1/8	口縁部:タテハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	
54	朝顔形埴輪	口縁部~ 頸部	20トレンチ 北東隅	口縁突帯径:(28.2) 頸部突帯径:(18.6) 残存高:18.2	1/4	口縁:タテハケ 胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ユビオサエ	内外:5YR7/8 橙	突帯設定技法(沈 線)あり
55	朝顔形埴輪	肩部~胴 部	20トレンチ	肩部突帯径:(26.8) 残存高:21.0	1/6	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ		内外:5YR6/8 橙	透孔 内面に粘土接合痕
56	朝顔形埴輪	肩部	20トレンチ 攪乱内集中	肩部突帯径:(26.2) 残存高:8.1	1/8	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:5YR6/8 橙	透孔
57	円筒埴輪	胴部	18トレンチ 壁内	残存高:4.0 残存幅:8.9	—	不明	ヨコハケ	内外:5YR6/8 橙	内面に粘土接合痕
58	朝顔形埴輪	口縁部	18トレンチ	残存高:8.4 残存幅:11.0	—	タテハケ	不明	内外:5YR6/6 橙	
59	朝顔形埴輪	口縁部	20トレンチ	残存高:6.4 残存幅:18.1	—	口縁部:タテハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/6 橙 断面:7.5YR8/3 浅黄橙	
60	形象埴輪		20トレンチ	残存高:4.2 残存幅:5.0	—	不明	不明	内外:5YR6/8 橙 断面:7.5YR7/6 橙	透孔
61	蓋形埴輪	立ち飾り	20トレンチ 北東南	残存高:6.3 残存幅:9.2	—	ナナメハケ	ナナメハケ	内外:5YR7/6 橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
62	蓋形埴輪	笠部	20トレンチ	残存高:7.3 残存幅:3.4	—	ハケメ	ハケメ	内外:5YR6/6 橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
63	蓋形埴輪	笠部	20トレンチ	残存高:7.3 残存幅:3.2	—	ハケメ	ハケメ	内外:5YR6/8 橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	

表3-4 出土遺物観察表(3)

No	種類	部位	出土地点	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
64	蓋形埴輪	軸部	20トレンチ	残存高:3.2	1/2	不明	不明	外面:2.5YR6/8 橙 内外:7.5YR7/4 にぶい橙	
65	蓋形埴輪	笠部	20トレンチ 北東隅	残存高:3.1 残存幅:4.8	—	不明	不明	内外:5YR7/6 橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
66	蓋形埴輪	笠部	20トレンチ	残存高:3.1	—	不明	ユビオサエ	外面:5YR6/8 橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
73	円筒埴輪	口縁部	表採	口径:(33.6) 残存高:15.8	1/5	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:10YR7/1 灰白	透孔
74	円筒埴輪	胴部	表採	胴部突帯径:(29.6) 残存高:9.5	1/6	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、 ユビオサエ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:10YR7/1 灰白	透孔

表3-5 出土遺物観察表(4)

No	種類	器形	部位	出土地点	法量 (cm)	残存率	色調	備考
67	須恵器	瓶類	口縁部	19トレンチ 下の斜面 葺石の上	口径(12.4) 残存高2.8	1/9	外面:2.5Y4/1 黄灰 内断面:2.5Y4/2 灰白	
68	須恵器	坏	口縁~体部	20トレンチ 北東隅 排土	口径(15.4) 残存高6.1	1/5	外面:5Y6/1 灰白 内面:5Y7/2 灰	
69	須恵器	甕	体部	18トレンチ テラス東端	残存高7.3 残存幅8.5	—	外面:N5/ 灰 内面:2.5Y6/1 黄灰	
70	窯道具	匣鉢	口縁部	18トレンチ テラス東端	口径(20.0) 残存高6.0	1/5	内外:7.5YR6/3 にぶい褐	内面から口唇部に煤付着
71	窯道具	トチン (ハマ)		18トレンチ 表土	直径5.3 器高1.0	1/1	内外:5Y8/1 灰白	
72	窯道具	トチン (ハマ)		18トレンチ テラス東	直径4.0 器高0.7	1/1	内外:5Y8/1 灰白	

6 自然科学分析

名古屋市志段味大塚古墳の葺石および周辺地域の礫層中の礫種について

はじめに 名古屋市守山区上志段味地域には、4～7世紀に築造された古墳が集中し、「志段味古墳群」と呼ばれている。その中で最大の白鳥塚古墳をはじめ、東谷山山頂部に見られる尾張戸神社古墳（円墳、直径約27.5m）、中社古墳（前方後円墳、全長約63.5m）、南社古墳（円墳、直径約30m）には、いずれにも大きな岩石を積み上げた葺石が確認されており¹⁾、筆者らは古墳築造方法や葺石産地同定の手がかりとなるよう、それぞれの古墳において葺石の岩石種を調べてきた^{2) 3)}。守山区上志段味字大塚にある志段味大塚古墳は、5世紀後半に築造されたとされる帆立貝式古墳（墳丘長約51m）で、後円部の南側は土取りによって墳丘の一部が破壊されているものの、それ以外の部分は保存が良い（図1）。1923年の発掘で墳頂部より発見された埋葬施設内部からは副葬品が多数出土している⁴⁾。2014年度に実施された発掘調査でも葺石が現れた。そこで、岩石学的な見地から葺石の産地を推定するため、葺石の岩石種とともに区画整理工事で露出した地層を調査したので報告する。

地質概要 名古屋市守山区と瀬戸市北部にかけての東谷山の山体は、主に美濃帯堆積岩が熱変成を受けた泥質や砂礫質のホルンフェルスにより構成されている（図2）。東谷山の名古屋市側にあたる西麓には花崗岩が露出しているが、風化が進行してマサ化している。守山区上志段味地区には、チャートや濃飛流紋岩類などの円～亜円礫を含む東海層群（瀬戸層群）矢田川累層（鮮新統）が分布しており、亜炭層や木節粘土層が挟まれている。庄内川沿いには河岸段丘が発達しており、志段味大塚古墳は中位段丘面上に立地している。河岸段丘を構成する段丘堆積物は主に礫層であり、美濃帯の砂岩・頁岩・チャートや濃飛流紋岩類などの円～亜円礫を含んでいる。

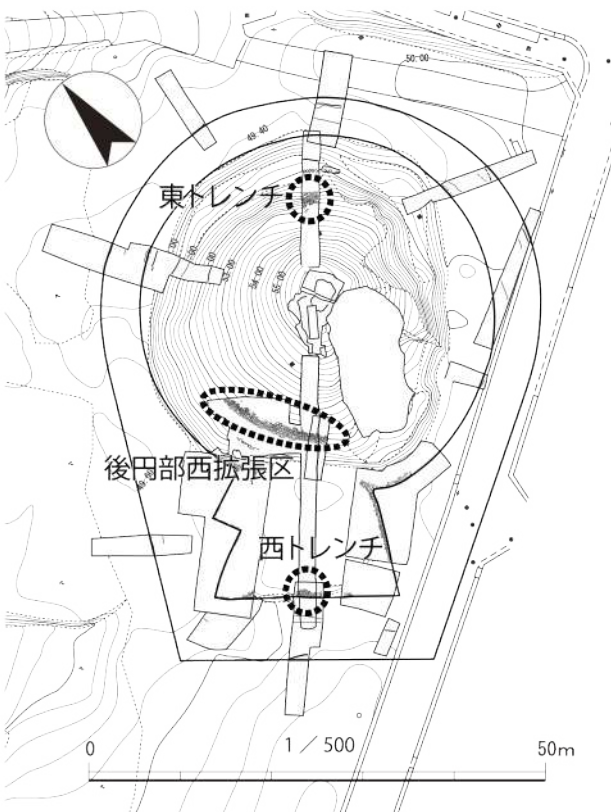


図3-17 志段味大塚古墳の全体図と発掘調査位置

調査方法 志段味大塚古墳発掘調査地における東トレンチ、西トレンチおよび後円部西拡張区で現れたすべての葺石について、肉眼鑑定により岩石種を決めた。また、近隣の区画整理工事区域の地質調査を行うとともに、4ヶ所において、2.5×2.5m範囲内にある直径64mm以上の礫種を調べた。礫岩・砂岩・頁岩はいずれも熱変成作用によりホルンフェルス化し、1つの礫中で混在することが多いため「美濃帯堆積岩類」としてまとめた。なお、本発掘地は植生が乏しく明るい場所であったため肉眼鑑定は比較的容易であった。

結果 これら葺石の岩石種構成を、上志段味地域の礫中に含まれる礫の岩石種割合とともに表1にまとめた。後円部西トレンチと東トレンチで岩石種構成は同じで、今回の調査で同定した葺石全体での岩石種割合は美濃帯堆積岩類が39.8%、チャートが

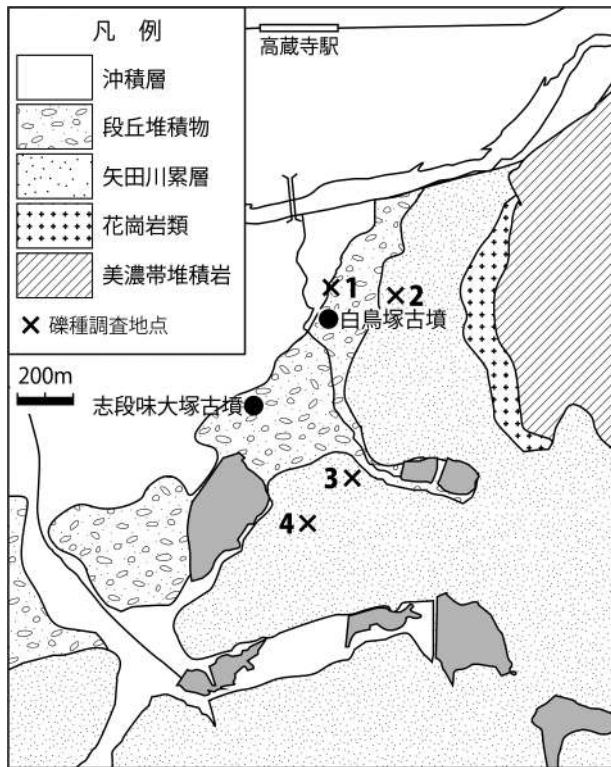


図3-18 守山区上志段味地域の地質図および調査地点

30.0%，濃飛流紋岩類が23.3%であった。前方部下段においてチャートが有意に多かった。葦石は大礫（径64～256mm：cobble）と言えるサイズで、新鮮な亜円礫であった。葦石間は詰まっておらず、間隙が認められた（図4）。特徴的な礫として、新鮮な赤色チャート、衝突痕のあるチャート（図5）、斑状花崗岩などが認められた。

一方、地層中の礫種構成も同様であったが、その割合は段丘堆積物と矢田川累層で明らかな差が認められた。段丘堆積物の礫は新鮮なものが多く、礫種は矢田川累層のそれと比べてチャートが少なく濃飛流紋岩類が多かった。つまり、段丘堆積物の礫種構成が葦石の岩石種構成に近かった。矢田川累層中の濃飛流紋岩類の礫は風化しているものが多かった。

考察 志段味大塚古墳の葦石の岩石はすべて周辺の礫層に含まれる礫あるいは東谷山周辺で見られる

岩石ばかりで、遠方から運ばれたと思われる岩石は認められない。また、志段味大塚古墳が立地してる段丘堆積物の礫種構成のほうが、矢田川累層のそれよりも、葦石の岩石種構成に近い。これらのことから、志段味大塚古墳の葦石は、段丘堆積物から岩石種を選別されることなく持ち込まれたと考えられる。中社古墳の葦石4）と比べて濃飛流紋岩類の割合が多いことも、新鮮な濃飛流紋岩類を得やすい段丘堆積物上



図3-19 葦石の出土状態（後部西拡張区）

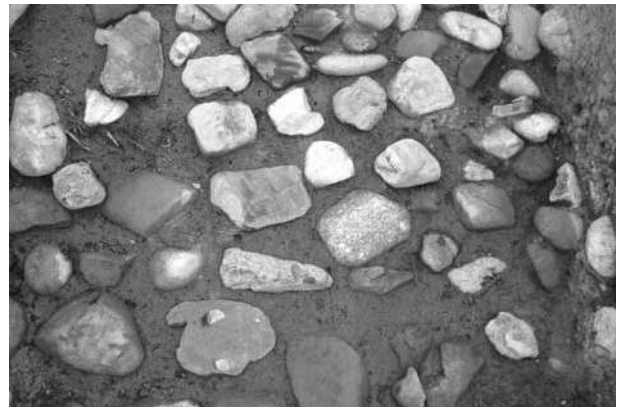


図3-20 葦石の出土状態（東トレンチ、両端約1m。葦石の間隙が多い）

表3-7 志段味大塚古墳の葦石の岩石種および上志段味地域の礫層の礫種割合

	東トレンチ上部		後部西拡張部		西トレンチ下部		古墳葦石合計		1 (段丘堆積物)		2 (矢田川層群)		3 (矢田川層群)		4 (矢田川層群)		合計
	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	(個)	(%)	
濃飛流紋岩類	22	35.5%	84	22.0%	16	20.0%	122	23.3%	17	25.4%	10	18.9%	9	15.0%	12	24.5%	170
チャート	13	21.0%	116	30.4%	28	35.0%	157	30.0%	21	31.3%	36	67.9%	40	66.7%	24	49.0%	278
美濃帯堆積岩類	19	30.6%	157	41.2%	32	40.0%	208	39.8%	25	37.3%	4	7.5%	10	16.7%	11	22.4%	258
花崗岩類	5	8.1%	13	3.4%	1	1.3%	19	3.6%	2	3.0%	2	3.8%	0	0.0%	2	4.1%	25
その他	3	4.8%	11	2.9%	3	3.8%	17	3.3%	2	3.0%	1	1.9%	1	1.7%	0	0.0%	21
合計	62	100.0%	381	100.0%	80	100.0%	523	100.0%	67	100.0%	53	100.0%	60	100.0%	49	100.0%	752
	$p=0.007$	$\chi^2=14.2$	$p=0.045$	$\chi^2=9.74$	$p=0.667$	$\chi^2=2.38$	$p=0.017$	$\chi^2=12.04$	$p=0.908$	$\chi^2=1.01$	$p=0.000$	$\chi^2=25.32$	$p=0.000$	$\chi^2=23.56$	$p=0.244$	$\chi^2=5.45$	



図3-21 衝突痕のあるチャートの葺石

に立地しているためだと説明できる。つまり、古墳の葺石は築造場所の近隣で調達されたと考えるのが妥当であろう。ただ、段丘堆積物の礫種やサイズのデータが十分とは言えず、今後の調査で検証する必要がある。段丘堆積物についても、庄内川の旧扇状地堆積物である鳥居松礫層5)に対比されるものと思われるが、地質学的根拠は薄い。葺石産地同定のためには、比較すべき礫層のキャラクリゼーションが必要であるが、市街化によって地質調査は困難な状況であり、ボーリング調査や土木工事等が実施される機会に地質調査を実施する必要があるだろう。

ところで、古墳下部（前方部下段）でチャート礫が多くなることは中社古墳3)と共通した傾向である。チャート礫は、径数センチ程度の小さいものが多く、大きな葺石同士の間隙にはめ込まれていたものの一部が剥がれて落下したためかもしれないし、古墳下部に選択的に使われていたのかもしれない。この点について検討するためには、葺石と礫のサイズの詳細なデータを取る必要があるだろう。

まとめ 志段味大塚古墳の葺石に使われている岩石は、段丘堆積物の礫種構成に近いことが分かった。古墳の葺石は築造場所近隣で調達された可能性が高い。葺石産地を推定するためには、周辺地域の礫層に関する地質情報を得るため周辺地域の地質調査が不可欠である。

謝辞

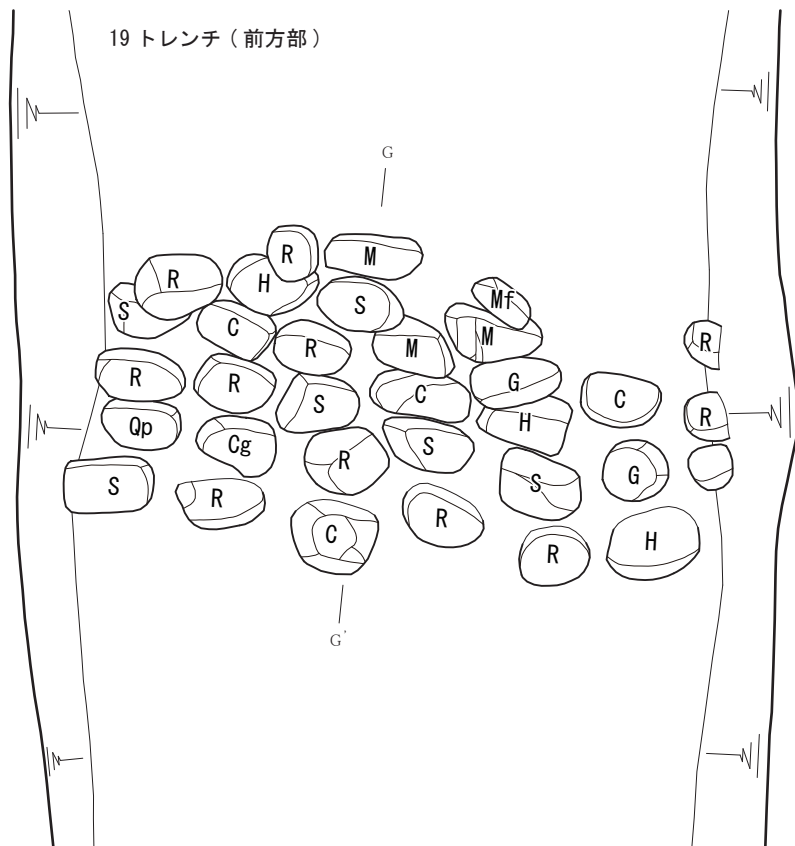
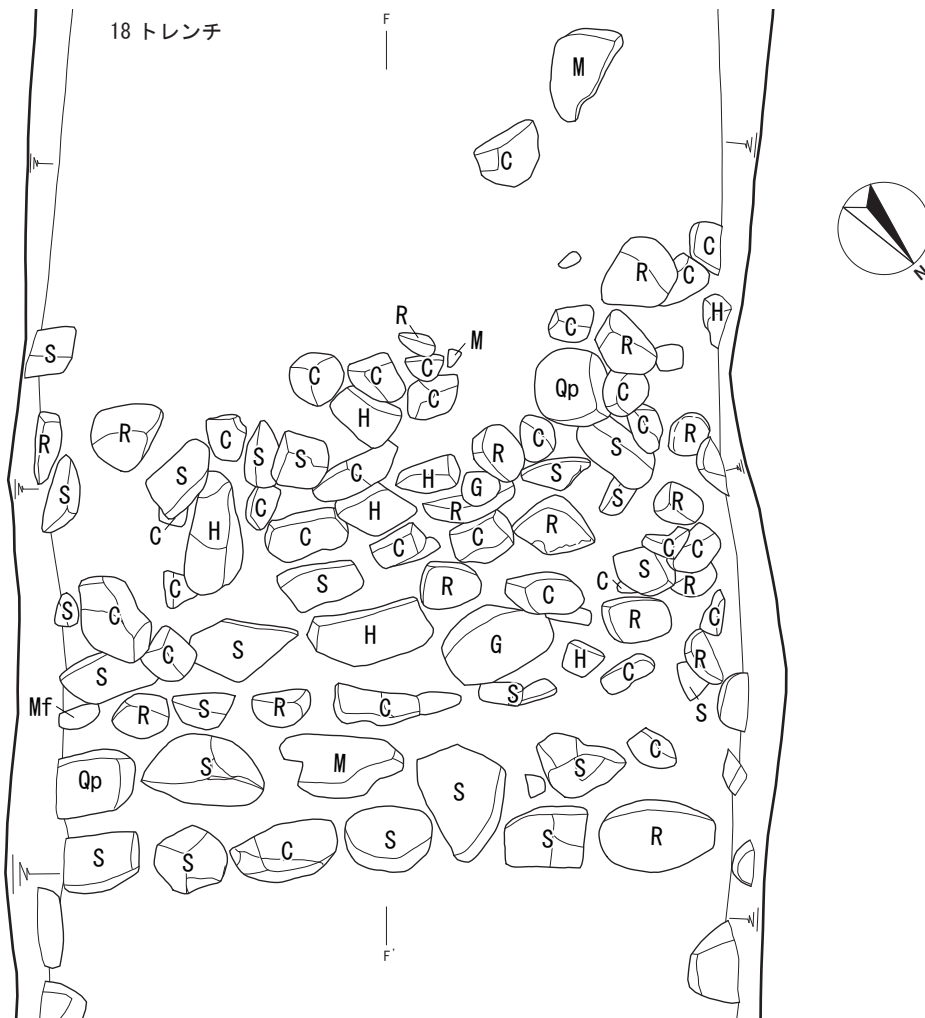
古墳葺石調査にあたっては、市橋久美子さんにサポートいただいた。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 名古屋市教育委員会 (2010) 志段味古墳群を巡る～ナゴヤのルーツを訪ねて 名古屋市教育委員会
- (2) 西本昌司 (2011) 東谷山山頂域古墳葺石の岩石種について. 埋蔵文化財調査報告書 62, p311-314. 名古屋市教育委員会
- (3) 西本昌司 (2014) 中社古墳の葺石に使われている岩石について 埋蔵文化財調査報告書 70 志段味古墳群2 名古屋市教育委員会
- (4) 名古屋市教育委員会 (2006) 志段味大塚古墳・大久手古墳群：名古屋市守山区上志段味における帆立貝式前方後円墳の調査：平成 17 年度大久手池周辺埋蔵文化財発掘調査報告書 名古屋市見晴台考古資料館編
- (5) 坂本 亨・桑原 徹・糸魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上 亨 (1984) 名古屋北部地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅) p64 地質調査所

本稿は、西本昌司氏（名古屋市科学館学芸員）が執筆し、下記にて掲載したものを伊藤厚史が、図を追加し再構成したものである。

西本昌司・伊藤厚史 2015「名古屋市志段味大塚古墳の葺石および周辺地域の礫層中の礫種について」『名古屋市科学館紀要』第 41 号 32 - 34



凡例

R	=	流紋岩類
C	=	チャート
S	=	砂岩
M	=	泥岩
H	=	変晶入ホルンフェルス
Qp	=	石英斑石
G	=	花崗岩
Mf	=	マフィック岩



(S=1/20)

図3-22 葺石の岩石種 (18トレンチ・19トレンチ)



図3-23 葺石の岩石種 (19トレンチ・20トレンチ)



図3-24 葺石の岩石種 (20 トレンチ)

6 小結

調査の経過でも述べたように、復元工事をするにあたり、後円部の築成段数、前方部と後円部の築成関係、墳頂部の埴輪樹立の有無などが未確定であった。そのため、今回の調査は、下記の項目を明らかにすることを目的として掲げ行った。ここでは、その結果をまとめておく。

(1) 後円部の墳丘築成

後円部東側に設定した第 18 トレンチで、築成段数を検討したところ、明確なテラスは一段目のみであった。一段目のテラス面は、幅 3.4 m である。墳丘の傾斜は、墳頂近くが 35 度、葺石の残存するテラス際が 45 度であった。

(2) 後円部葺石と一段目テラスの円筒埴輪列の関係

葺石の基底石のレベルは、東側 18 トレンチでは、標高 50.82 m、西側 19 トレンチでは標高 50.76 m でほぼ水平に築成している。20 トレンチでも南寄りが 50.70 ～ 50.73 m、中央で 50.62 m、北寄りで 50.54 ～ 50.56 m であった。

円筒埴輪列は、東側 18 トレンチでは基底石から 2.16 m、濠肩までは 1.0 m の位置に据えられていた。盛土を掘り窪めて、埴輪 1 段目 10 ～ 12cm を埋めて据えている。西側 20 トレンチでも基底石から 2.2 m 離れて据えている。埴輪底部のレベルは、東側で標高 50.66 m ～ 50.98 m、西側で 50.52 m である。21 トレンチ（再掘削した 16 トレンチの東から 2 番目の埴輪）の埴輪上端レベルは 50.2 m で、後円部を巡る埴輪より約 30cm 低く据えている。

(3) 墳頂部の埴輪樹立

22 トレンチで 1 点、円筒埴輪を検出した。したがって、墳頂部にも埴輪列が巡っていたことが明らかになった。

(4) 前方部と後円部の構築関係

平成 20 年度の 15 トレンチの調査と同様、後円部と前方部の接する位置には、後世に掘削された溝が南北に通り、墳丘構築を明らかにすることが困難な状況であった。

しかし、土層を検討したところ、溝をはさんで後円部側の盛土は、上位黄褐色 (2.5Y5/3) 土、その下位にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土であるに対し、前方部側の盛土は、上位にぶい黄橙色 (10YR6/4) 土、その下位にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土であった。この同じにぶい黄褐色土の上面レベルは、後円部側が高く、前方部側が低いことから、後円部 1 段目としてにぶい黄褐色土を小山状に積んだ後に、前方部側にぶい黄橙色土を積んだものと推定しておきたい。

第4章 勝手塚古墳の調査

1 既往の調査研究

勝手塚古墳は、名古屋市守山区大字上志段味字中屋敷 1462・1463 に所在する。この地は、東谷山麓から広がる段丘のうち、下位段丘に立地し、北の庄内川岸に至るまで緩やかに下っている。この段丘には、勝手塚古墳のほか、羽根古墳、山の田古墳、越水古墳が知られているが、他は円墳である。

勝手塚古墳は、1967（昭和 42）年に測量が実施された。1968（昭和 43）年に『名古屋市東部の前方後円墳』として東海古文化研究所から刊行されている。

その成果は、後円部頂部を 0 m として 1 m 毎に等高線を記録している。- 7 m の等高線が周濠の湛水位ととらえて、全長 55 m、前方部長さ 15 m、最大幅 25 ～ 27 m、高さ 3 m、後円部の直径 40 m、高さ 7 m の規模である。2 段築成で等高線 4 m と 5 m の間に段（テラス）がついている。かつては二重の周濠があったといわれるが、現在は内側の周濠が残る。内濠のうち南側は明治時代に埋められたといわれている。周濠の幅は 7 m、深さ 1 m である。外側の周濠は、前方部の濠と道路を隔てた西側、字中屋敷 1495、1496、1497、1498 にあり、幅 4 m、深さ 1.5 m ほどであったといわれている。

周堤は幅 7 m、高さ 1 ～ 2 m でかつては南側の神社への入口を除いて一周していた。1968（昭和 43）年 2 月には古墳南側の周堤が公民館の敷地にするために破壊されて、須恵器や円筒埴輪が採集された。

愛知県教育委員会では、1969（昭和 44）年～ 1983（昭和 58）年度にかけて県内の重要遺跡の史跡指定促進のため、遺跡の測量調査・試掘調査を実施し、古墳時代の遺跡では、名古屋市守山区の白鳥塚古墳や犬山市の青塚古墳など前方後円墳、神明宮 1 号墳や池田 1 号墳など横穴式石室、旗頭山古墳群などの測量を実施している。勝手塚古墳は、そのうちの一つとして、1972（昭和 47）年に愛知大学歴史学研究室が依頼を受け測量を実施している（註 1）。名古屋市教育委員会は 1987（昭和 62）年に測量を実施した。

註

- 1 『重要遺跡指定促進調査報告―地形測量調査の概要―』1974 年 愛知県教育委員会

2 現況

勝手塚古墳は、古墳が勝手社の境内地であるため、1968（昭和 43）年に公民館が建設されて以来、近年の名古屋市上志段味特定土地区画整理事業の進展により、2015（平成 27）年には北側の道路が宅地に変更されたり、東側の水田が埋め立てられたりして周辺的环境は激変したが、墳丘自体の景観は大きく損ねることなく今日に至っている。ただし、1984（昭和 59）年秋には、神社境内の工事によって、墳丘の一部が掘削され埴輪片が採集された（註 1）。

2005（平成 17）年、『愛知県史資料編 3 古墳 考古 3』が刊行され、「本墳は全長 53 m、後円部径 29 m・高さ 6 m、前方部幅 22 m・高さ 2.5 m を測る帆立貝形前方後円墳で、墳頂には八剣神社が存在する。古墳の主軸は N-71° -E をとる。葺石はない。後円部は 2 段築成で、地表より約 1.5 m の高さに幅約 2 m の犬走り状の平坦部で段をなしている。（中略）本墳は、出土した埴輪から 5 世紀後半から末頃に築造されたと考えられる。（以下、略）」と記載された。

2008（平成20）年、『名古屋市史 資料編 考古1』が刊行され、「本墳は、墳丘長53m、周濠を含めた全長約79mの帆立貝形前方後円墳である。墳丘の主軸方位はN71°Eで、各部位の計測地は後円部の直径39m・高さ6.5m、前方部の幅21m・高さ2.3mである。後円部は二段築成で、幅約2mのテラスに円筒埴輪列が存在する。（中略）」と記載された。

勝手塚古墳は、志段味大塚古墳（墳長約51m）、西大久手古墳（墳長約37m）、東大久手古墳（墳長約39m）、大久手5号墳（墳長推定約38m）と共に帆立貝式古墳の形態をとり、勝手塚古墳は、志段味大塚古墳と同規模、そのほか3古墳は一回り小さい。勝手塚古墳のみ低位段丘に築造され、そのほかは中位段丘に築造されているが、いずれも主軸を段丘縁に並行させ、前方部を西に向けている。

これらの5基は、5世紀中頃・西大久手古墳に始まり、5世紀後半・大久手5号墳、志段味大塚古墳、5世紀末・東大久手古墳、6世紀初め・勝手塚古墳の築造順が想定されている。志段味大塚古墳の副葬品から武器・武具など鉄製品が顕著であることから、「武をもって王権に奉仕し、最新の文化・儀礼を代々取り入れた首長層が成立し、階層化が進展した」（註2）と推定されている。

勝手塚古墳は、2014（平成26）年10月6日、国指定史跡に指定された。

註

- 1 犬塚康博「最近出土の勝手塚古墳の埴輪」『私たちの博物館 志段味の自然と歴史を訪ねて 創刊前第1号』1985年／犬塚康博「勝手塚古墳、その後」『私たちの博物館 志段味の自然と歴史を訪ねて 創刊前第2号』1985年
- 2 瀬川貴文「東海・甲信」『古墳時代の考古学 2 古墳出現と展開の地域相』2012年 同成社

3 調査の経過

第1次調査は、2014（平成26）年10月6日の国史跡指定後に実施するもので、墳丘、周濠の残存状況、埴輪列の確認を目的として、テラス面から周濠にかけて9か所にトレンチを設定した。

2015（平成27）年7月14日に4か所（2、3、6、7）のトレンチを設定した。6トレンチで埴輪列を検出した。15日、2トレンチで埴輪列を検出した。22日、サブトレンチをいれて据え付け状況を確認した。24日、3トレンチ墳丘側で後円部二段目基底石と思われる石を検出した。埴輪列（4個体）とは2.5mの間隔があいている。1トレンチでは、28日、転石を取り除き、テラス面確認。一段目突帯付近がテラスレベルと考えられた。埴輪列（3個体）確認した。2トレンチでは、埴輪列（9個体）確認した。測量後8月10日に南半分埋め戻した。3トレンチでは埴輪列（5個体）確認した。4トレンチでは、埴輪片は出土したものの明確な埴輪列は確認できなかった。5トレンチでは、墳丘の裾について盛り土か地山か明確にできず、2か所の案を提示した。6トレンチでは、埴輪列（6個体）を確認した。7トレンチでは、テラス面を検出したが、埴輪列は確認できなかった。8トレンチでは、埴輪列（1個体）を確認した。9トレンチでは、埴輪列（3個体）を確認した。普及活動として、8月4日に歴史の里マイスター発掘体験、19日に歴史の里宿泊体験発掘体験、29日に現地説明会をそれぞれ実施した。9月17日にすべての作業を終了した。

第2次調査は、周堤の残存状況、埴輪列の確認を目的として、4か所にトレンチを設定した。内2か所は外濠の有無を確認するため、周堤の外側にもトレンチを設定した。勝手塚古墳の調査に先行して、ガイダンス施設建設予定地の試掘調査を実施し、続いて白鳥6号墳の試掘調査を実施していたが、歴史の里秋

まつりで体験発掘を勝手塚古墳で行う予定にしていたため、白鳥6号墳の調査を中断して、勝手塚古墳の調査に着手した。2017（平成29）年10月27日、31日に除草を行い、トレンチの位置を設定した。13トレンチ、12トレンチの表土除去を行った。11月7日、12トレンチで中央付近に堅く締まった小石混じりの淡黄灰色土を検出した。それより南は黄灰色土、北は橙褐色土で締まりのないやわらかい土であった。埴輪片も出土した。淡黄灰色土が盛土なのか後世の堆積土なのか確認するため、サブトレンチを設定する。

24日、13トレンチ3区攪乱坑西端を掘削したところ、上位に黄灰色土下位に暗褐色土が堆積していることがわかったので、壁に沿って掘削し北へ広げたところ、埴輪片がまとまって出土した。暗褐色土が帯状に広がっているため、原位置は保っていないかもしれないが、据えたところのようにみえた。12月2日、11トレンチ表土掘削、10トレンチ濠内掘削。6日、13トレンチで、表土の下の灰黄色土（灰褐色土）を掘り下げる。埴輪列のところは出ることを予想して掘り進めたところ、1～2個体分の埴輪片が出土した。

13日、10、11、12、13トレンチ清掃。広瀬和雄氏、高橋克壽氏、赤羽一郎氏の調査指導を受ける。指導を受けて、21日、10トレンチ木の伐採、根も取り除く。石は地山直上ではなく、表土層にあることを確認した。12トレンチ土層断面追加のため幅1mでトレンチ深掘りし、土器器出土。1月14日、現地説明会を開催する。15日から24日まで東谷山12号墳の調査を実施し、合間に勝手塚古墳の調査を行う。29日、13トレンチ埴輪掘り方検出、図作成、写真撮影。12トレンチ埋戻し作業。13トレンチ埋戻し作業。事務所後片付け。公用車で器材、土器等運搬。30日、31日引き続き埋戻し作業を行い調査終了する。

2015（平成27）年には、古墳の北側及び東側で区画整理事業に伴う工事立会が実施された。この工事立会についても、周堤に近い位置に該当するため、参考として本書に掲載する。

第3次調査は、2019（平成30）年11月20日から同年12月17日にかけて前方部の構造の確認を目的に実施した。11月20日・21日は、安全用フェンスの設置やトレンチの設定を行い、22日より掘削を開始した。11月29日には、広瀬和雄氏、高橋克壽氏より、現地にてご指導いただいた。

12月7日には、完掘の全景写真および部分写真を撮影した。

12月14日までは、埋め戻しを完了し、17日に器材・道具を撤収し、すべての作業を終了した。



図4-1 勝手塚古墳（南から）
2015年9月30日撮影



図4-2 勝手塚古墳西側
2015年9月30日撮影



図4-3 勝手塚古墳 周堤残存部
2017年12月28日撮影

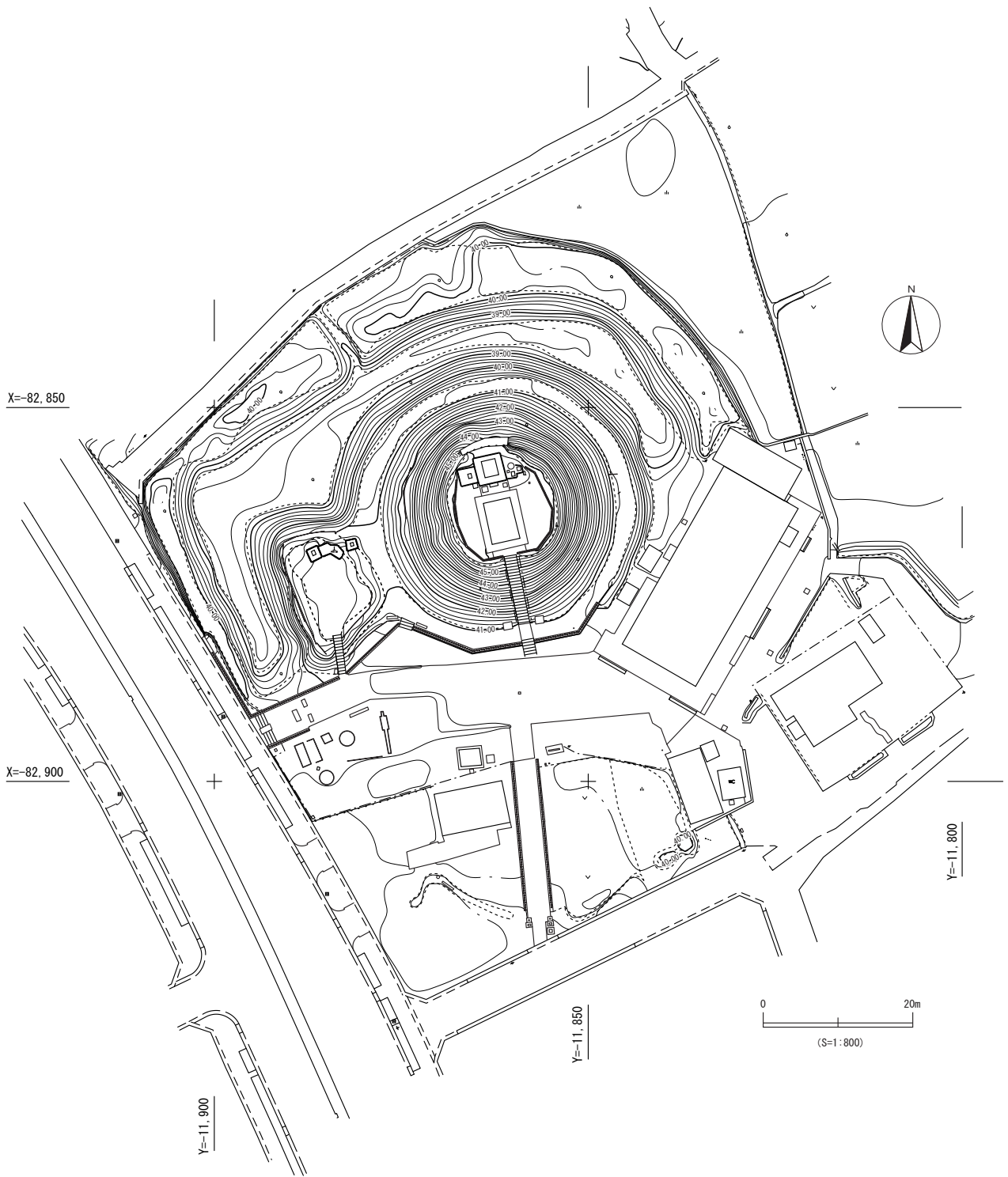


图4-4 勝手塚古墳填丘測量図

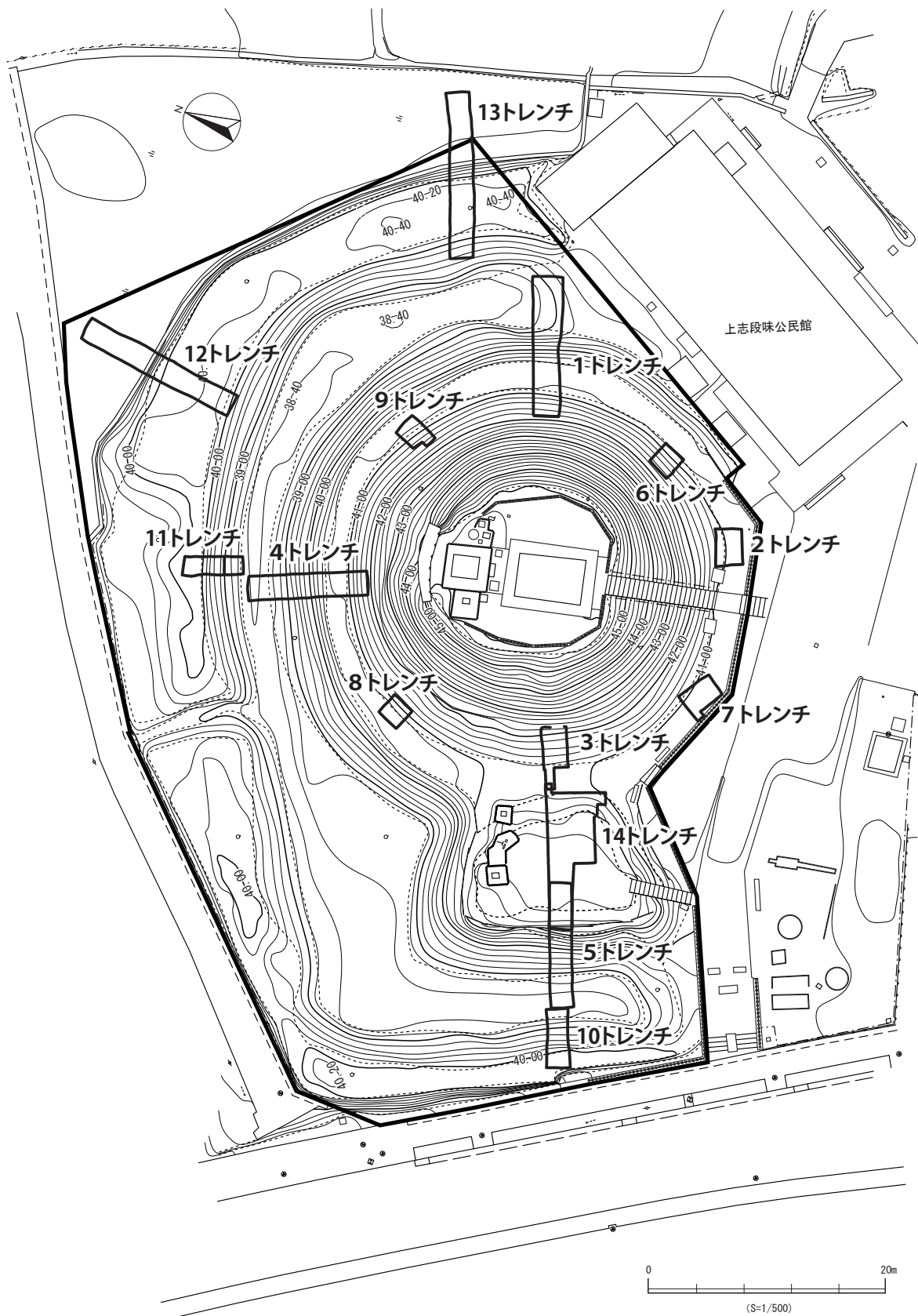


図4-5 トレンチ位置図

4 第1次調査の成果

(1) トレンチの位置

第1次調査では以下の事柄を確認することを目的とした。

- 1 濠と墳丘との関係。濠の規模、墳丘の全長。
- 2 墳丘一段目の盛土の状況と墳丘2段目の規模。
- 3 外表施設（葺石、埴輪）。

そのため調査は9か所にトレンチを設定した。この内、墳丘の中軸にあわせて、1、3、5トレンチを東西方向に、2、4トレンチを南北方向に設定した。それ以外は、後円部墳丘一段目のテラス面に設定して葺石、埴輪の残存状況を調査した。

(2) 1トレンチ

後円部東側墳丘第二段目裾から第一段目墳丘裾及び周濠内にかけて設定した。東西長11.7 m、南北幅2.1～2.5 mのトレンチである。西壁際で葺石を検出した。葺石は3段分が検出されたが、下位の石は基底石と推定される。基底石は、標高41.0 m付近から41.3 mのレベルに配置されている。石を覆う土層は、表土及び墳丘の崩落した流出土で0.7 mの堆積がある。東に行くほど減じてテラス付近では10cm程である。円筒埴輪列は、調査区西端から2.7 m付近、流出土厚5 cmほどの場所に埋まっていた。南北に3個体を原位置で検出した。良好な埴輪で一段目のタガが残存する程度で、底部のみがかろうじて残っていた。基底石から5 m付近、標高39.98 m付近までは墳丘盛土（6層上面）は平坦でテラスを形成する。それ以後は急傾斜（傾斜角度40度）で墳丘第一段斜面を形成する。墳丘盛土と地山面の境は、標高38.7 mであった。濠は、さらに地山を0.65cm掘り込んでいた。濠の下底面は、灰色砂質土であった。地山の土質が砂質に変わったところを濠底としている。濠底は、墳丘側で標高37.96 m、調査区東端で37.84 mと中央に向かって若干深くなっている。

出土遺物は、円筒埴輪がある。

(3) 2トレンチ

後円部南側墳丘第一段目テラスに設定した。東西長3.2 m、南北幅2.2 mのトレンチである。この位置は、勝手社社殿に向かう階段の東脇近くにあたる。調査区北壁側では、表土層25cm下で、墳丘盛土を検出し、南側に向かって傾斜している。北壁西寄り河原石を検出した。墳丘盛土上位に位置することから葺石と推定される。北壁から約0.5 m付近で墳丘流出土の下で円筒埴輪列を検出した。埴輪は9個体を検出した。東からNo.1～No.9と番号を付けた。7～12cm間隔で据えられているが、No.5のように列からやや南寄りに据えられたものもある。墳丘盛土面は、標高40.75 m、検出した埴輪は一段目のたがまでが残っており、そのレベルは標高40.68 mであった。

出土遺物は、円筒埴輪、蓋形埴輪がある。

(4) 3トレンチ

後円部西側墳丘第二段目裾から一段目テラスに設定した。東西長3.4 m、南北幅2.1 mのトレンチである。前方部と接続する位置にあたる。北壁に沿って西側前方部にむかい長さ1.8 m幅0.7 mサブトレンチを設けた。東壁から1 mまでの間で河原石の葺石を検出した。北壁付近では、0.3～0.4 mの表土下に0.3～0.4 mの厚さで墳丘流出土が堆積している。葺石はその下の盛土層（5層）に積まれている。葺石以西はほぼ

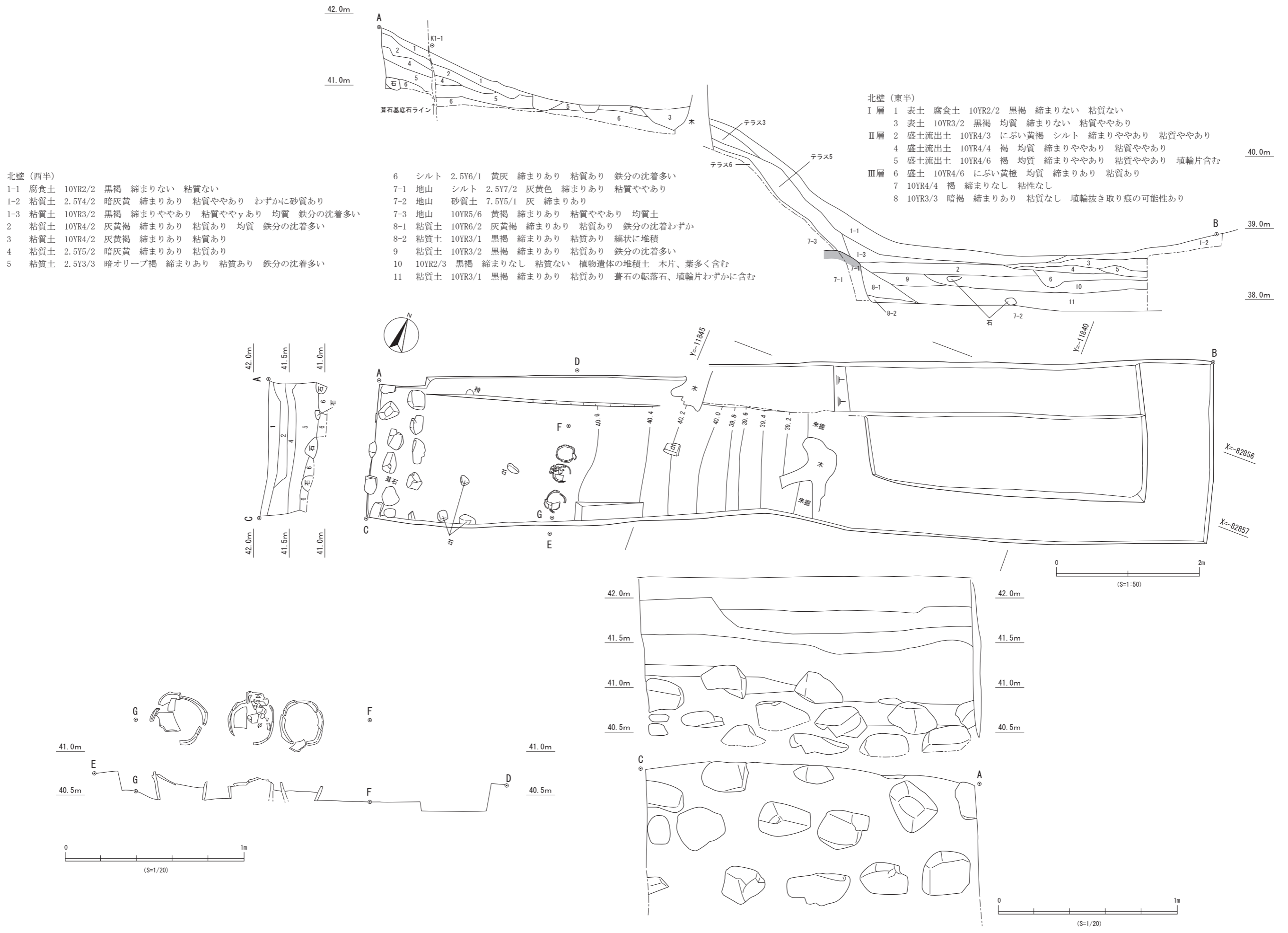
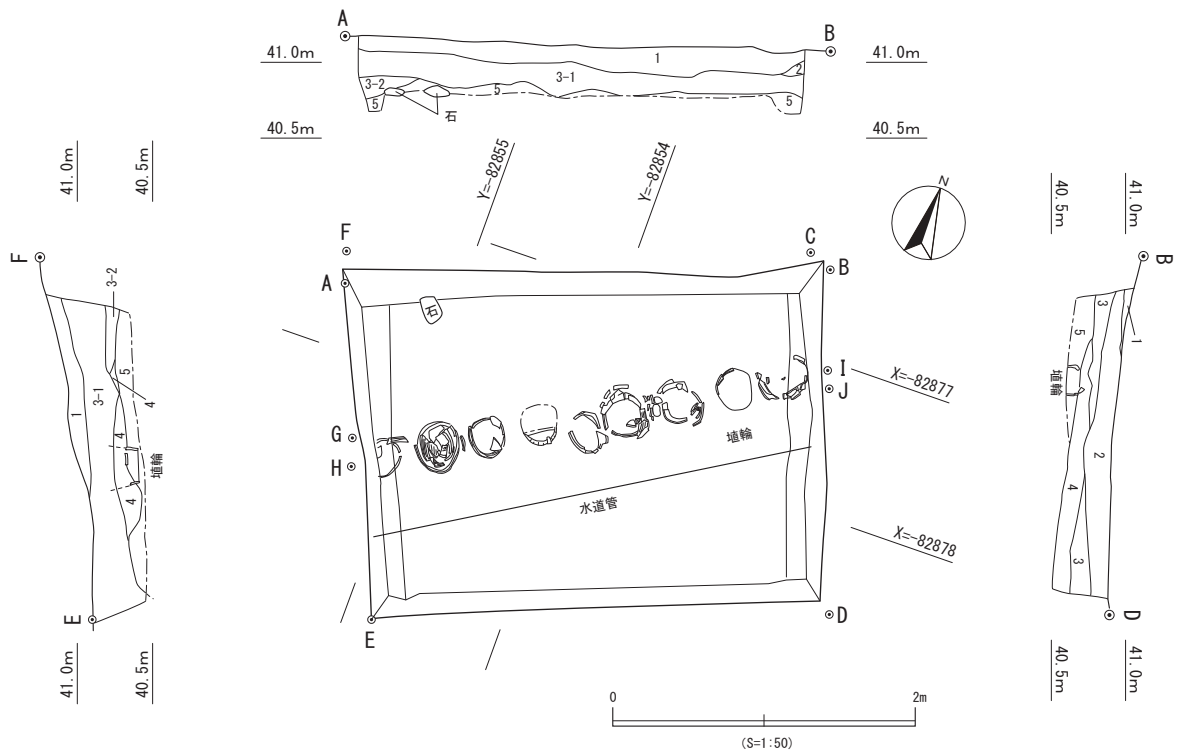


図4-6 1 トレンチ 平面図・断面図・葦石平面図・葦石立面図



- 1 表土 10YR3/3 暗褐 長径0.5cm大砂粒多く含む
- 2 表土 2.5Y5/4 黄褐 均質
- 3-1 表土 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 近世以降の瓦、陶磁器含む
- 3-2 表土 10YR3/4 暗褐 均質土
- 4 盛土流出土 10YR5/4 にぶい黄褐 葺石の転落石わずかに含む 埴輪片含む
- 5 盛土 10YR4/4 褐 均質土 5層の上位層がテラス面

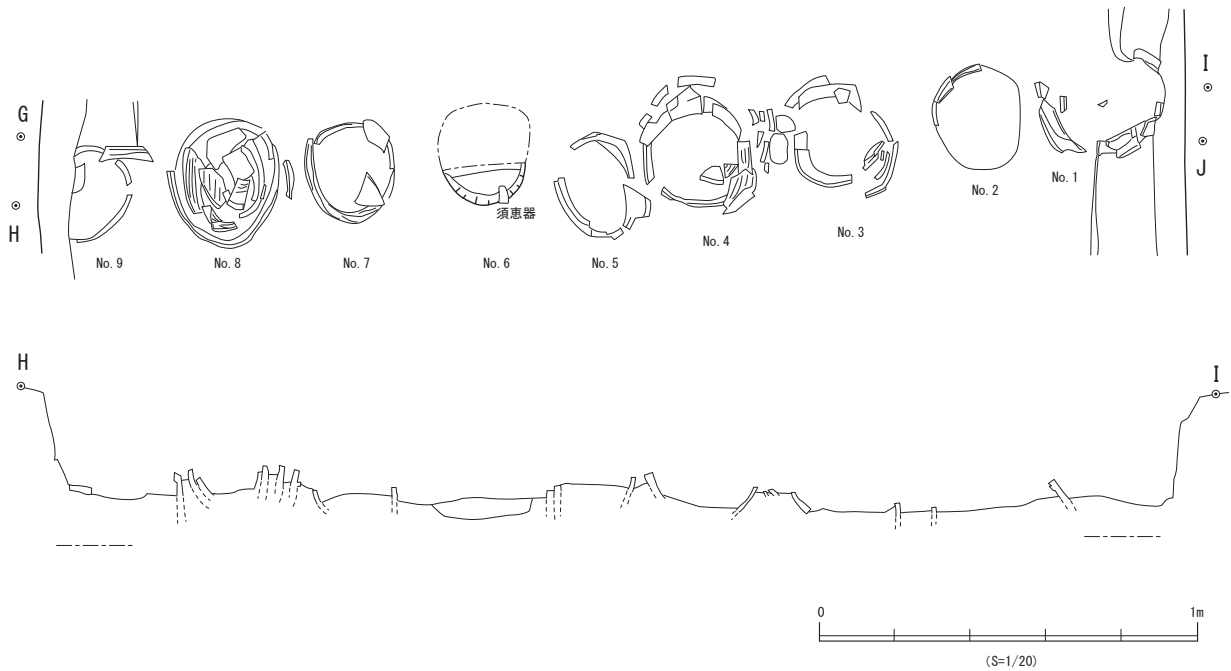


図4-7 2トレンチ 平面図・断面図、埴輪平面図・断面図

北壁

- 1 表土 客土 10YR5/8 黄褐 締まりあり 粘質わずか 長径1cmの礫含む
- 2 表土 腐葉土 10YR3/2 黒褐 締まりなし 粘質なし
- 3 表土 7.5YR3/4 暗褐 締まりなし 粘質なし 2層の黒褐色土が混在
- 4 填丘流出土 7.5YR3/4 暗褐 締まりなし 粘質なし 均質 転落葦石含む 埴輪片含む
- 5 填丘盛土 10YR4/6 褐 シルト 締まりややあり 粘質あり 均質土
- 6 填丘盛土 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 締まりあり 粘質ややあり 長径5cmまでの黄褐色、暗褐色土ブロック含む
- 7 填丘盛土 2.5Y5/4 黄褐 シルト 締まりあり 粘質ややあり 部分的に砂っぽいところ・粘土っぽいところあり 茶褐色土、灰白色がまだらに混在

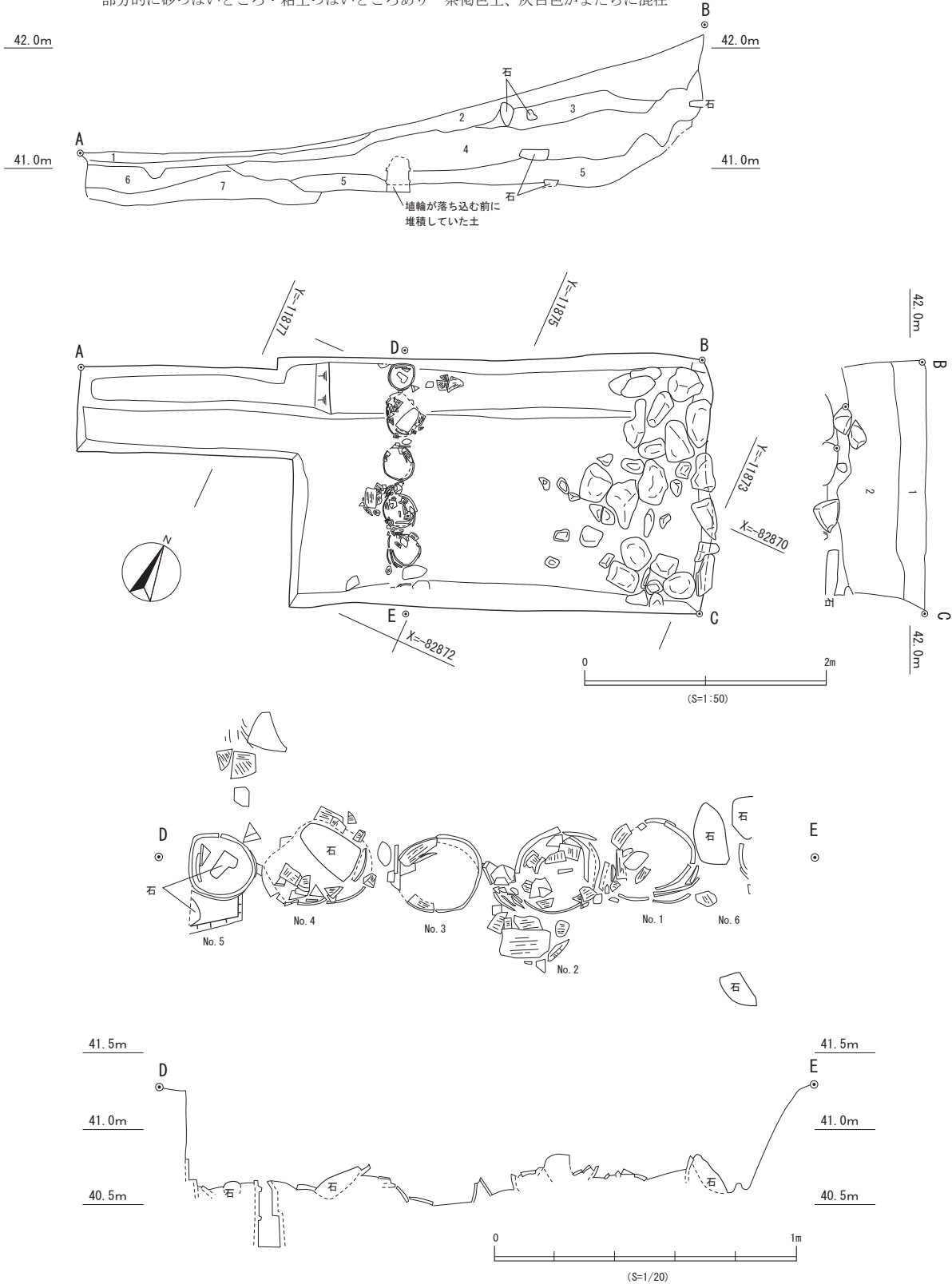


図4-8 3トレンチ 平面図・断面図、埴輪平面図・断面図

平坦面が形成されている。標高 41.1 m～40.94 mである。北壁から 2.42 m西で円筒埴輪列を検出した。検出した埴輪は 6 個体で、南端の No. 6 はほとんど調査区外にある。No. 5 は最も良好に遺存し、突帯 2 段分高さ 20cm分が埋まっていた。前方部盛土との関係は、前方部盛土層(7 層)の上に後円部盛土層(5 層)が堆積していた。前方部の盛土は、ブロック土混じりで、後円部盛土のほうが均質な土という印象である。

出土遺物は、円筒埴輪、朝顔形埴輪がある。

(5) 4 トレンチ

後円部北側墳丘第二段目裾から周濠内にかけて設定した。南北長 10.0 m、東西幅 2.0 m のトレンチである。調査区南端で河原石を検出したが、まばらな状況であった。平坦面は、現地表上では調査区南端から約 2.0 m から始まり 3.5 m までであったが、掘削後の盛土(3-1 層)上面でも幅は同様に、レベルは濠に向かって緩やかに下がる状況であった。標高は墳丘二段目側 40.70 m、濠側 40.40 m である。平坦面での堆積土は、表土が 10cm、墳丘流出土が 10～15cm で盛土上面に至る。南壁から 1.8 m 付近で埴輪片が出土した。埴輪列は検出されなかったが、直径 25×32cm、25×20cm の攪乱穴 2 基を検出した。埴輪の抜き取り痕と推定される。土層断面では明瞭ではないが、2-1 層の乱れが認められる。出土した河原石がまばらなこと、据えられた状況で埴輪が検出されなかったため、墳丘盛土層を確認するため東壁に沿ってサブトレンチを設定し掘り下げた。墳丘盛土と地山との境は、標高 39.14 m であるが、この境の地山(4-1 層)は褐色粘質土で下位は砂質が強まる。さらにその下位層は黒みの強い砂層(4-2 層)であった。地山をさらに 0.85 m 掘削し、褐色砂礫層(4-4 層)で濠底としている。調査時には、4-1 層が盛土にみえること、4-2 層が黒色土で腐葉土のようにもみえることから、地山であるのか判断に悩むところであった。

出土遺物は、円筒埴輪がある。

(6) 5 トレンチ

前方部墳丘から周濠にかけて設定した。東西長 7.2 m、南北幅 1.9 m のトレンチである。前方部墳端には土留めのコンクリート板が設置されていた。東壁から 0.8～1.7 m の間で河原石を検出した。南壁土層にかかる河原石は、盛土流出土(3 層)中であるが、下面は盛土(4 層)に接しているようである。墳丘斜面においても河原石を検出した。東壁から 2.7 m 付近に盛土の傾斜変換点があり以西は緩やかな斜面である。また、盛土と地山の境は、標高 38.86 (北壁土層)～標高 38.6 m (南壁土層)である。この境付近にも河原石が検出された。この河原石は地山面に接し葺石の可能性があり、墳丘第一段の基底石と推定される。底面は標高 38.42 m である。濠底の地山は、にぶい黄の粘質土、黄褐色砂質土である。濠の西端に位置する調査区西端を深掘りしたところ、明黄褐色砂礫層で 30cm を超える河原石も含まれていた。

前方部墳端より後円部方向に長さ 3.3 m のサブトレンチを設定した。墳頂部から深さ 1.2 m まで掘削したところ、ほぼ地表面から墳丘盛土であった。墳頂部標高 41.86 m。

出土遺物は円筒埴輪、蓋形埴輪がある。

(7) 6 トレンチ

後円部南東側、1 トレンチと 2 トレンチの中間、第二段目裾から第一段目テラスに設定した。長 2.0 m × 幅 2.0 m のトレンチである。調査区北西側壁際で河原石を検出した。表土層が 10cm から厚いところで河原石直上までの 40cm 堆積している。河原石は墳丘盛土(3 層)内にあり、上面は墳丘流出土で覆われ

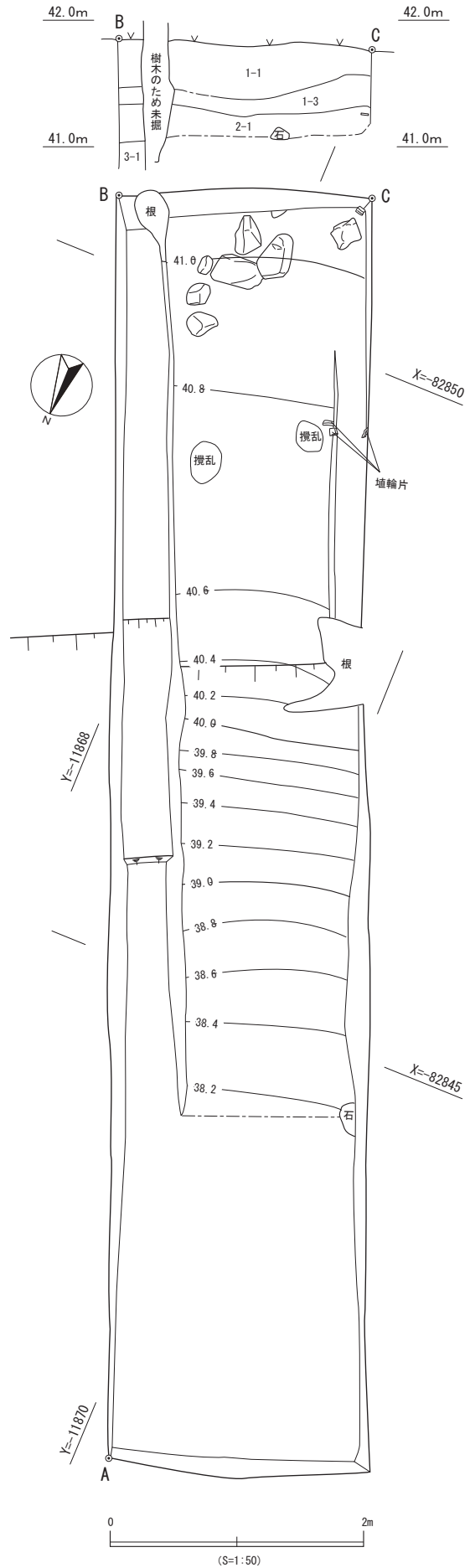
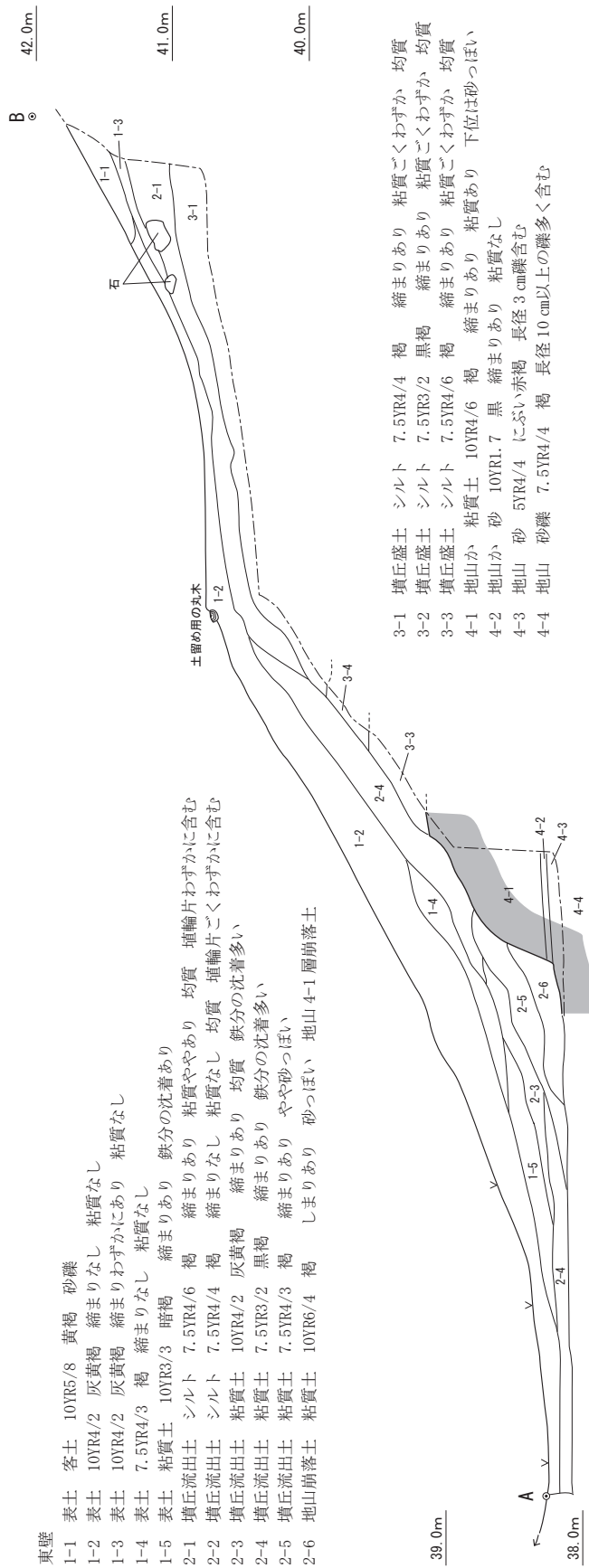
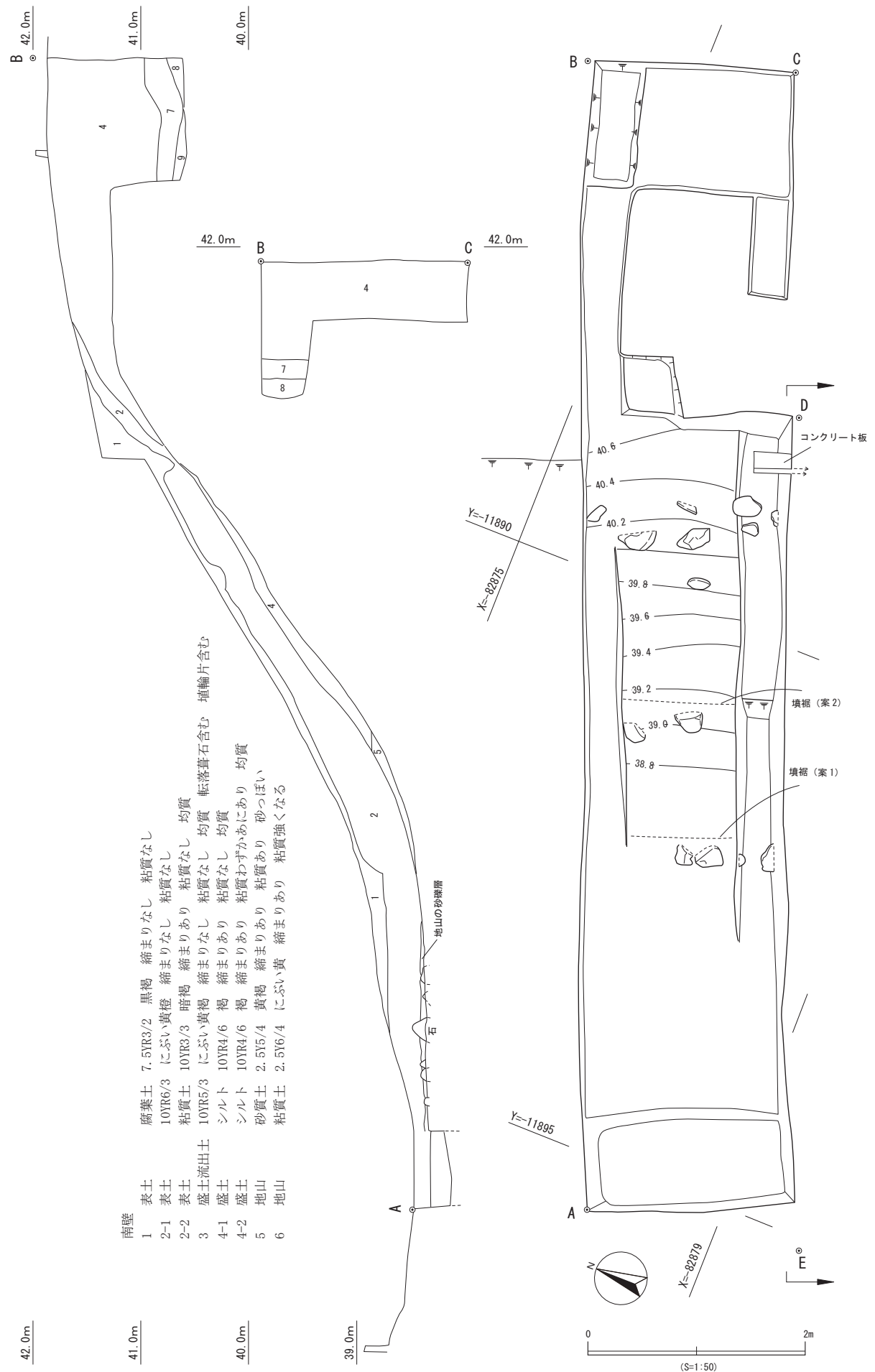


図4-9 4トレンチ 平面図・断面図



南壁	1	2-1	2-2	3	4-1	4-2	5	6
表土	腐葉土	10YR6/3	粘質土	10YR5/3	シルト	シルト	砂質土	粘質土
表土	7.5YR3/2 黒褐	にぶい黄橙	10YR3/3 暗褐	にぶい黄褐	10YR4/6 褐	10YR4/6 褐	2.5Y5/4 黄褐	2.5Y6/4 にぶい黄
表土	締まりなし	締まりあり	締まりなし	締まりあり	締まりあり	締まりあり	締まりあり	締まりあり
盛土	粘質なし	粘質なし	粘質なし	粘質なし	粘質なし	粘質なし	粘質あり	粘質あり
流出土	均質	均質	均質	均質	均質	均質	砂っぽい	粘質強くなる
盛土	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質
地山	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質
地山	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質	均質

図4-10 5トレンチ 平面図・断面図

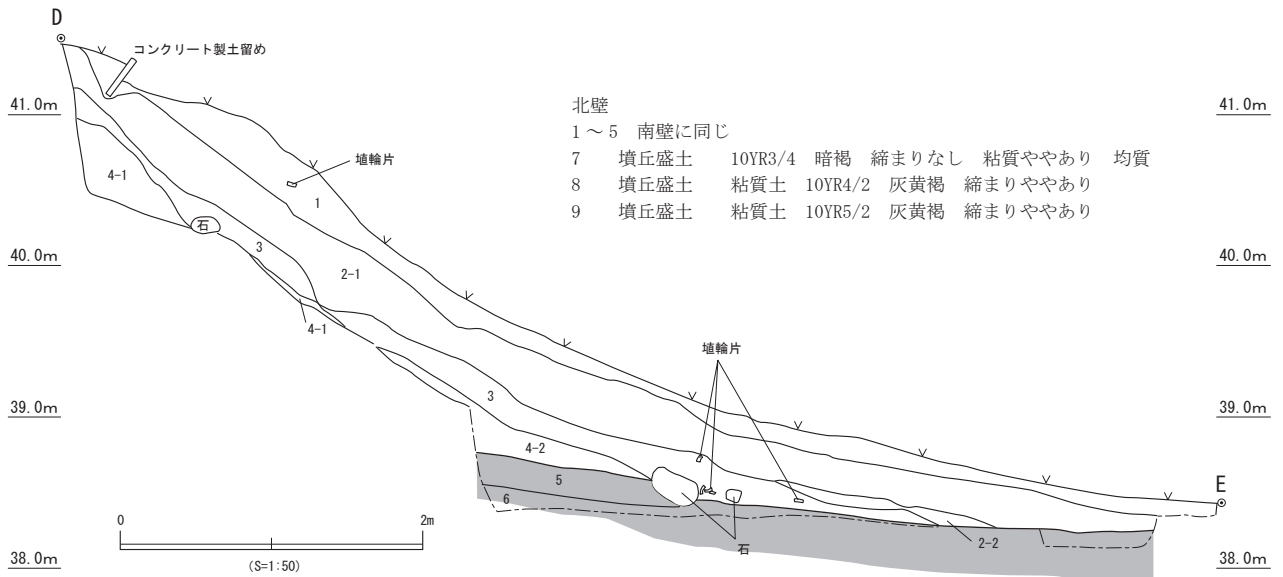


図4-11 5 トレンチ 断面図

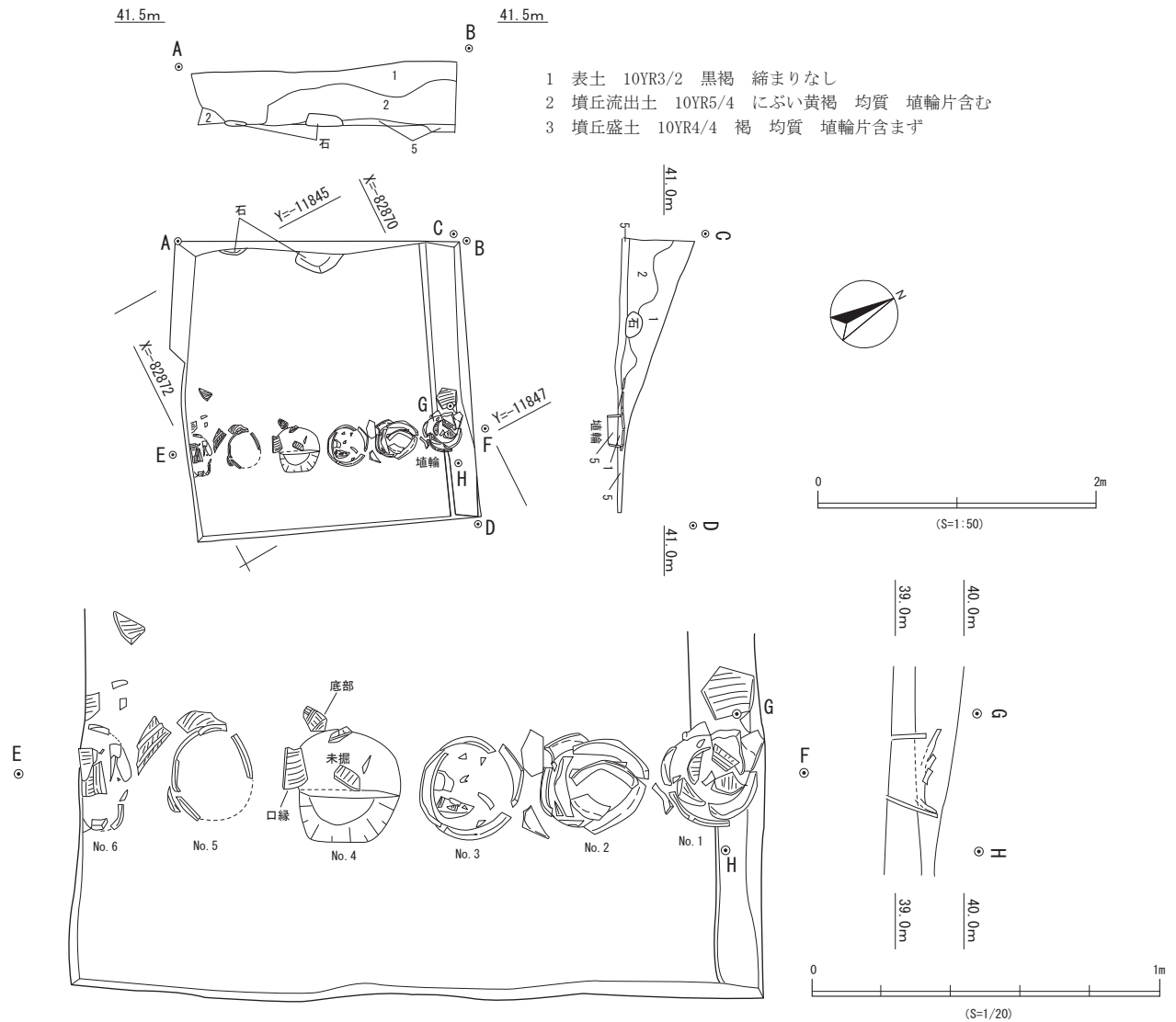


図4-12 6 トレンチ 平面図・断面図、堆輪列平面図

た状態であったため、葺石の一部と推定される。円筒埴輪列は北西側壁から 1.2 m 東の位置に南北方向に 6 個体検出した。円筒埴輪列は 10cm 未満の表土層下で検出された。このうち No. 5 が須恵質埴輪であった。円筒埴輪内には周辺と同じ盛土が入っていた。掘り方は検出されなかったため、盛土の形成と同時に据えられたと推定される。2008（平成 20）年に円筒埴輪列が露出し、試掘調査を実施した隣接地である。

調査後埋め戻してセメントで表層を充填した措置をとってあった。

出土遺物は、円筒埴輪がある。

(8) 7 トレンチ

後円部南西側、2 トレンチと 3 トレンチの中間、墳丘第二段目裾から第一段目テラスに設定した。長 3.1 m × 幅 2.0 m のトレンチである。墳丘流出土中に葺石の転落した河原石が入る。盛土面にも河原石が散見されるが、原位置を保った葺石かはっきりしない。標高 40.5 m 付近が墳丘斜面と平坦面（テラス）の境界と推定される。平坦面はそれ以南と考えられたが、西壁に沿ってサブトレンチを設定し確認した。平坦面は約 0.4 m 分で南側は墳丘流出土であった。南東端に水道管が検出されたため、攪乱を受けていると推定された。

出土遺物は、円筒埴輪がある。

(9) 8 トレンチ

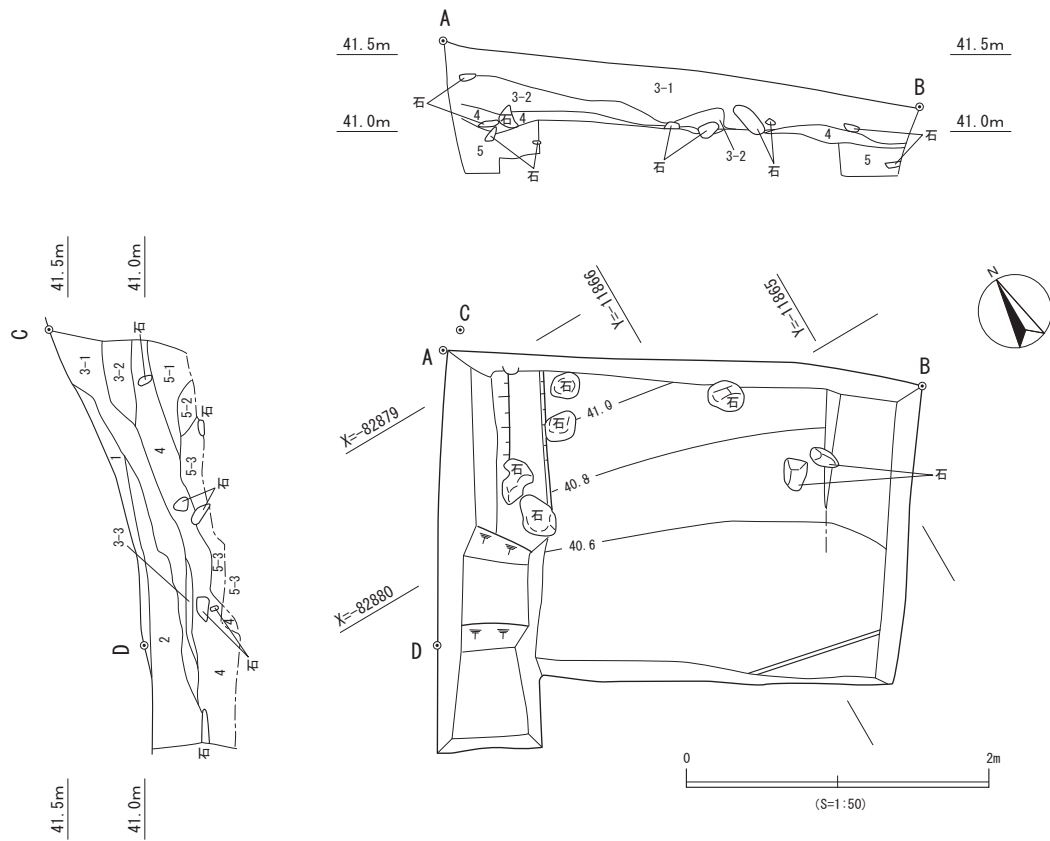
後円部北西側、3 トレンチと 4 トレンチの中間、墳丘第二段目裾から第一段目テラスに設定した。長 2.1 m × 幅 2.0 m のトレンチである。東壁側が墳丘第二段斜面である。表土層 40cm、5～10cm の墳丘流出土が堆積し、墳丘盛土に至る。盛土上面に河原石が検出された。東壁から 1.0 m で埴輪 1 個体が検出された。北側は直径 35cm の攪乱穴で埴輪抜き取り痕と推定される（未掘）。また南側は南北 0.9 m 以上 × 東西 1.2 m 以上、深さ 0.2 m の土坑が検出された。土坑は暗褐色土で埴輪片多量、河原石も含む。一部未掘。盛土検出面は標高 39.9～39.8 m で、西側では地表面に露呈している状況であった。

出土遺物は、円筒埴輪、蓋形埴輪がある。

(10) 9 トレンチ

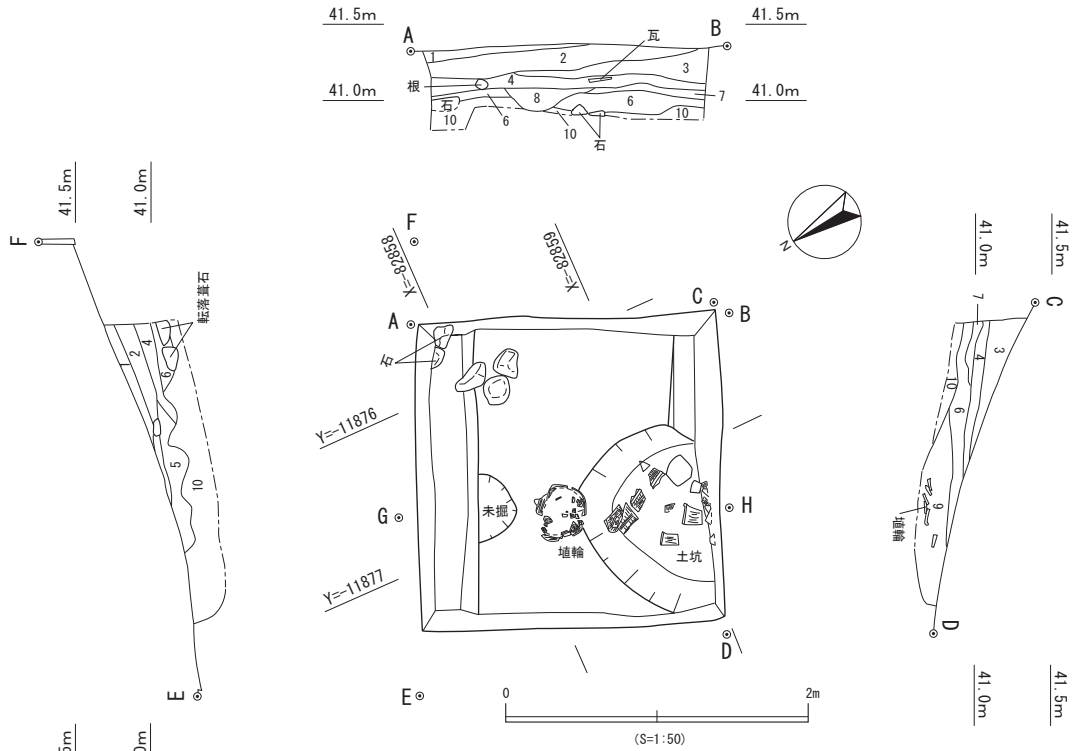
後円部北東側、1 トレンチと 4 トレンチの中間、墳丘第二段目裾から第一段目テラスに設定した。長 2.0 m × 幅西壁 2.0（東壁 2.7）m のトレンチである。調査区南壁から 1.0 m の位置で埴輪列を検出した。埴輪は 3 個体ある。埴輪 No.1 と No.2 の間には 25 × 29cm の小穴が検出された。埴輪 1 個分の抜き取り痕である。No.3 の北側には土坑 SK 1 が検出されたため埴輪列は消失していた。SK 1 の埋土は、黄褐色土で墳丘盛土の流出土で、埴輪片、河原石（葺石）を含んでいた。墳丘盛土の検出面は、標高 40.77 m～40.62 m である。東壁面際の埴輪 No.1 は、直上が表土層で、掘られた痕があったため、近年一部を抜き取った残りが残存していたと考えられる。

出土遺物は、円筒埴輪がある。



- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 表土 腐葉土 10YR3/3 暗褐 | 4 盛土流出土 10YR5/4 にぶい黄褐 均質 |
| 2 表土 10YR4/4 褐 | 転落草石含む 埴輪片少し含む |
| 3-1 表土 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 近現代瓦等含む | 5-1 埴丘盛土 2.5Y4/4 オリーブ褐 均質 |
| 3-2 表土 10YR4/3 にぶい黄褐 | 5-2 埴丘盛土 2.5Y5/4 黄褐 |
| 3-3 表土 2.5Y5/4 黄褐 突き固められている | 5-3 埴丘盛土 2.5Y4/6 オリーブ褐 均質 |

図4-13 7トレンチ 平面図・断面図



- 1 表土 10YR3/3 暗褐 締まりなし 粘質なし
- 2 表土 10YR5/8 黄褐 締まりあり 粘質ややあり
- 3 表土 10YR4/4 褐 締まりあり 粘質ややあり
- 4 表土 10YR2/2 黒褐 締まりややあり 粘質ややあり
- 5 表土 10YR3/4 暗褐 締まりややあり 粘質ややあり
- 6 盛土流出土 10YR3/4 暗褐 締まりややあり 粘質ややあり
- 7 表土 10YR3/2 黒褐 締まりややあり 粘質ややあり 均質
- 8 表土 10YR3/4 暗褐 締まりなし 粘質なし 均質
- 9 土坑埋土 10YR3/4 暗褐 締まりなし 粘質ややあり
転落葺石含む 埴輪片多量に含む
- 10 埴丘盛土 7.5YR4/3 褐 締まりあり 粘質ややあり 均質

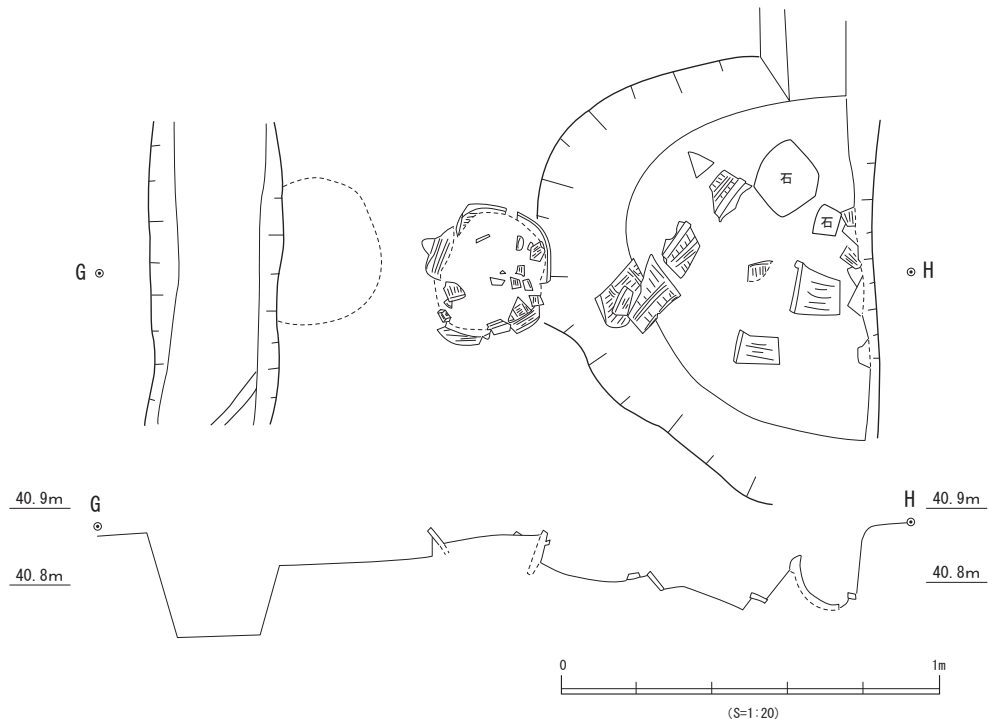
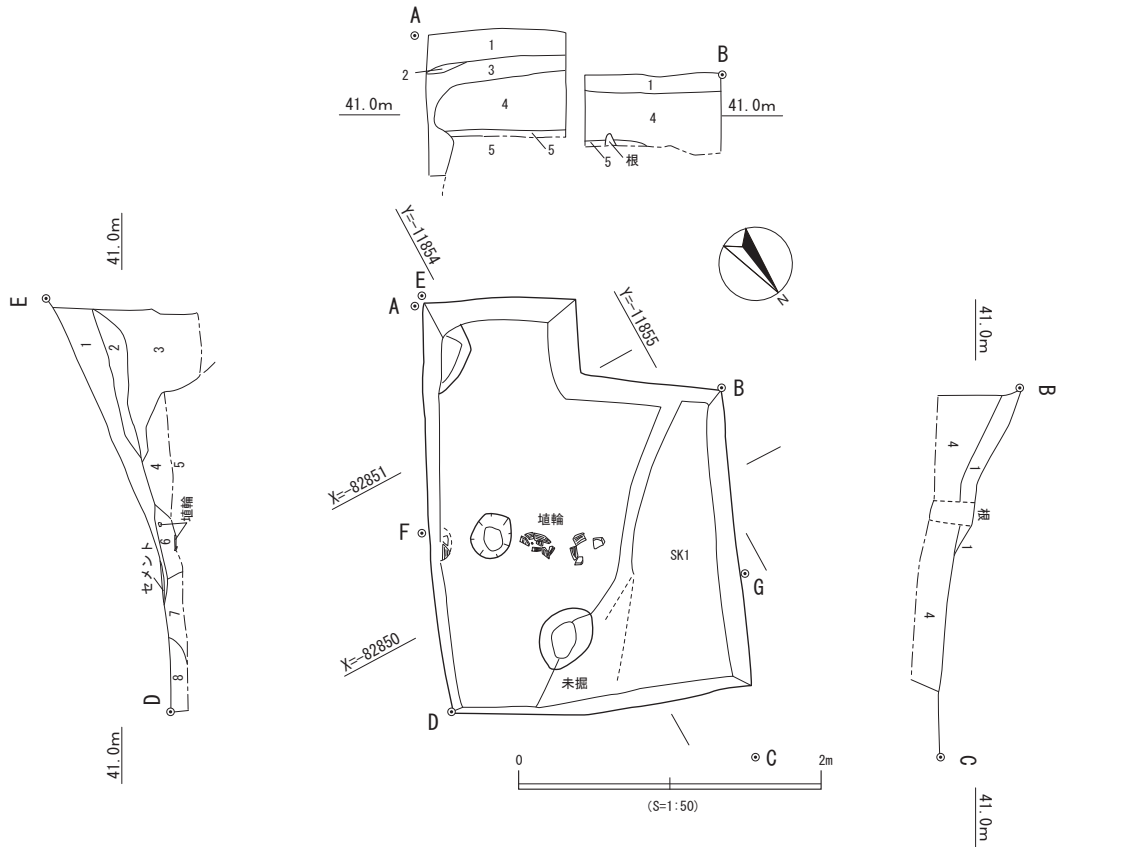


図4-14 8トレンチ 平面図・断面図、埴輪列平面図・断面図



- 1 表土 腐葉土 10YR3/4 暗褐 縮まりなし 粘質なし
- 2 表土 10YR3/3 暗褐 縮まりなし 粘質なし
- 3 表土 10YR2/3 黒褐 縮まりなし 粘質なし 木の根多い 近現代の土坑埋土
- 4 盛土流出土 10YR5/6 黄褐 転落葺石含む 堆輪片含む
- 5 填丘盛土 10YR5/4 にぶい黄褐
- 6 表土 10YR4/4 褐 堆輪抜き取り穴
- 7 盛土流出土 10YR5/6 黄褐 4層と同じ
- 8 表土か 10YR3/4 暗褐 堆輪片わずかに含む

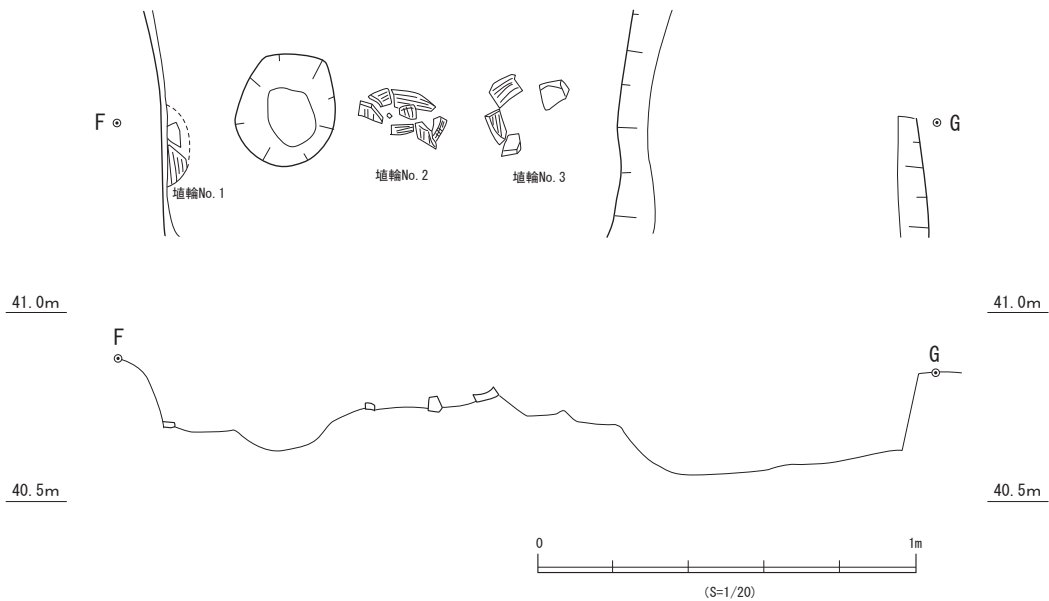


図4-15 9トレンチ 平面図・断面図、堆輪列平面図・断面図

5 第2次調査の成果

(1) 各トレンチの位置

第2次調査では、以下の事柄を確認することを目的とした。

- 1 墳丘の周囲に巡る周堤の残存状況。
- 2 周堤上に埴輪を樹立していたか。
- 3 周堤の外側に周濠を巡らせていたか。

そのため、周堤に4か所のトレンチを設定した。

(2) 10 トレンチ

前方部の西側の周堤上に設定したトレンチである。西側の周堤は、神社の境内と市道の境界となっており、現存する周堤上の端には石柵が立てられている。周堤の一部は市道により既に破壊されて滅失している状況であった。周堤の頂部平坦部から周濠に向かい東西長4.9 m、南北幅2.0 mのトレンチを設定した。掘削の結果、地表下約0.1 mは表土（腐葉土）が堆積し、その下位に黄橙色土が堆積していた。当初は墳丘の盛土を検出したかにもえたが、その下位層で再び腐葉土を検出したため、二次堆積土として判断し、掘削除去した。その下位の腐葉土は、旧表土で0.2～0.4 m堆積しており、盛土層に達する。盛土は、黄橙色土、浅黄橙色土である。周濠内では、表土下で明褐灰色の地山を検出した。周濠との境には、河原石が数個検出された。当初は葺石の可能性もあったが、精査した結果、表土の中にあることがわかり、葺石とは認めがたい状況となった。残存する盛土の最上位面の標高は、39.9 m、地山と盛土の境の標高は、38.5 mである。したがって、盛土の高さは、1.4 m、周堤下底幅5.26 m、上端幅2.2 mである。市道沿いの周堤は、石柵の建設などにより改変を受け、ゴミや盛土の二次堆積により高く積まれていることが明らかになった。

出土遺物は、埴輪片が上端部分から斜面上方にかけて出土したが、量的には少ない。円筒埴輪の据えつけ痕は、攪乱により滅失したものと思われた。そのほか、窯道具（匣鉢）、播鉢がある。

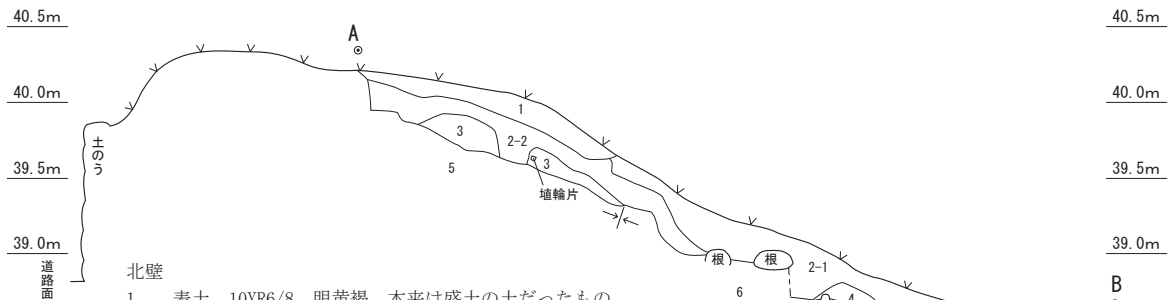
(3) 11 トレンチ

後円部の北側の周堤斜面に設定した。周堤の南端から周濠内に向けて南北長4.56 m、東西幅1.5 mのトレンチである。掘削の結果、周堤頂部近くは、表土（腐葉土）がほとんどなく、傾斜面は地表下約10～20cmの表土が堆積していた。地山は、標高38.58 mで検出し、それ以下の地山面はわずかにくぼみ、周濠の埋土が堆積していた。南端部分は、第1次調査のトレンチと重複しており、埋戻し土であった。このトレンチでは、頂部に腐葉土が堆積しておらず、周堤の盛土がほぼ露出しているのと同じであるため、出土する埴輪はわずかで築造時の頂部は削平されているものと推定された。現在の頂部の標高は、40.16 mで、地山面との比高差は1.58 mである。

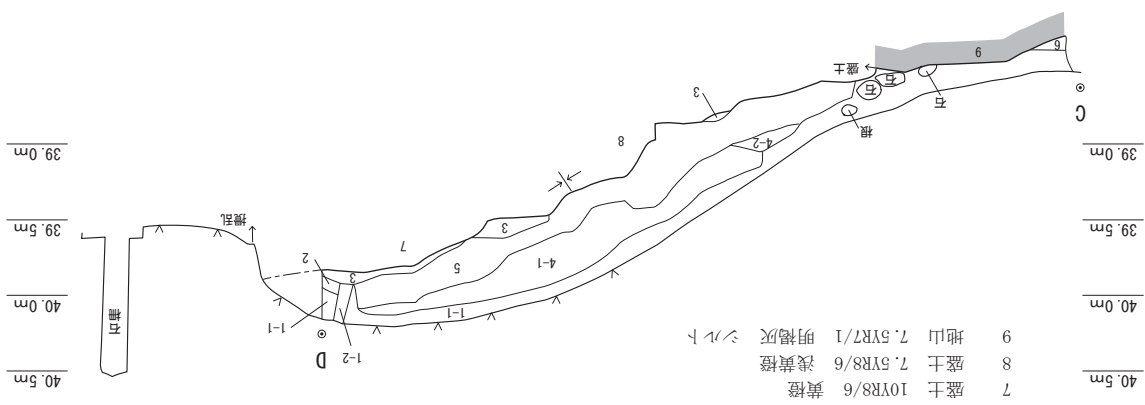
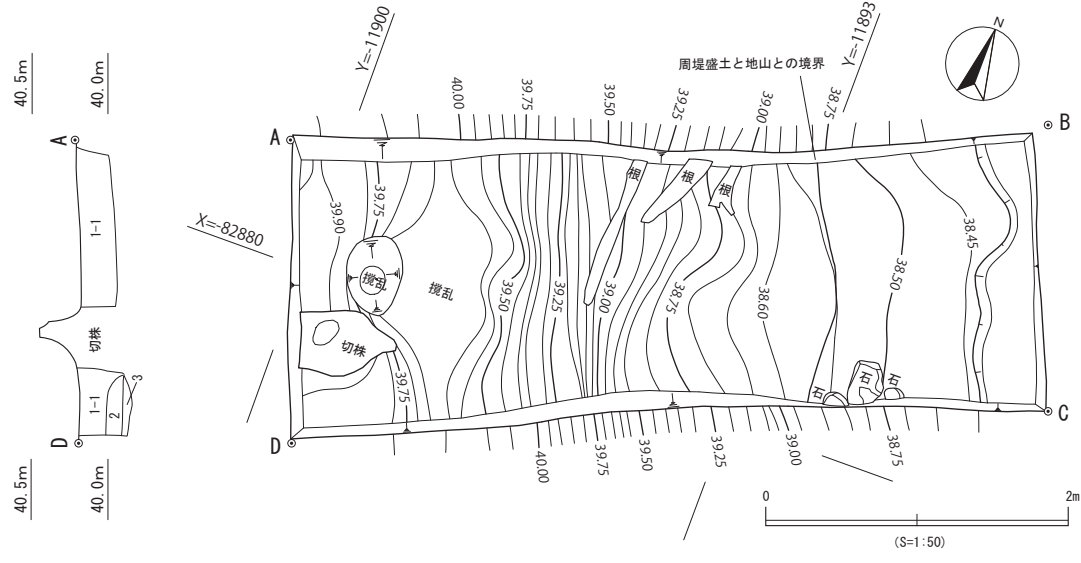
出土遺物は、円筒埴輪がある。

(4) 12 トレンチ

後円部の北側の周堤から外側にかけて設定した。周堤の南端から外側に向けて南北長7.65 m、東西幅1.95 m、排水溝をはさんで、外側平坦地に南北長5.8 m、幅2.0 mのトレンチである。周堤の上端幅5.25 mと推定される。周堤の築造を知るために、トレンチ内西壁際にサブトレンチを設定した。南端は根により攪乱されている部分があったが、おおむね良好な堆積土層を見ることができた。土層は大きく4層に区



- 北壁
- 1 表土 10YR6/8 明黄褐 本来は盛土の土だったもの
 - 2-1 表土 腐葉土 10YR4/1 褐灰
 - 2-2 旧表土 腐葉土 10YR5/1 褐灰 ゴミ多く出土
 - 3 旧盛土の崩落土 10YR7/6 明黄褐 ぼそぼそとした土 10YR6/2 灰黄褐色の土を含む
 - 4 砂質土 2.5Y5/2 暗灰黄
 - 5 盛土 10YR6/8 明黄褐
 - 6 盛土 2.5Y6/6 明黄褐
 - 7 地山 2.5Y6/2 にぶい黄



- 南壁
- 1-1 表土 腐葉土 褐灰10YR4/1 コミを含む
 - 1-2 根が腐った痕
 - 2 擾乱土 7.5YR8/4 浅黄褐 コミを含む
 - 3 砂質土 10YR4/6 褐
 - 4-1 二次堆積土 10YR6/4 にぶい黄褐 本来は盛土だった土
 - 4-2 二次堆積土 7.5YR5/2 灰褐 根による擾乱
 - 5 旧表土 10YR3/1 黒褐
 - 6 シルト質土 7.5YR5/1 褐灰 10cm大の円礫含む 壁く締まる
 - 7 盛土 10YR8/6 黄褐
 - 8 盛土 7.5YR8/6 浅黄褐
 - 9 地山 7.5YR7/1 明褐灰 シルト

図4-16 10トレンチ 断面・平面図

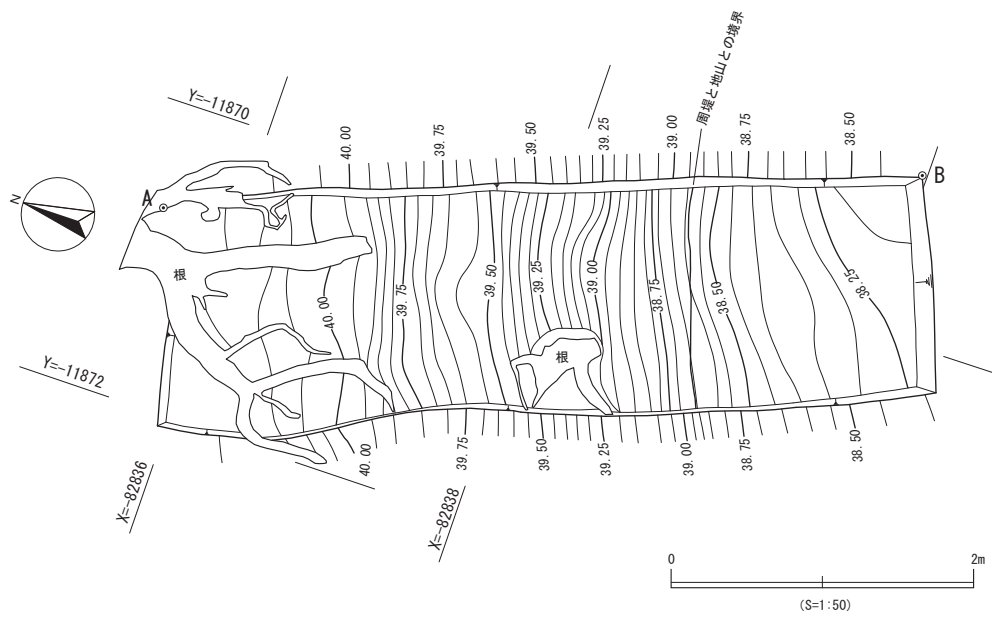
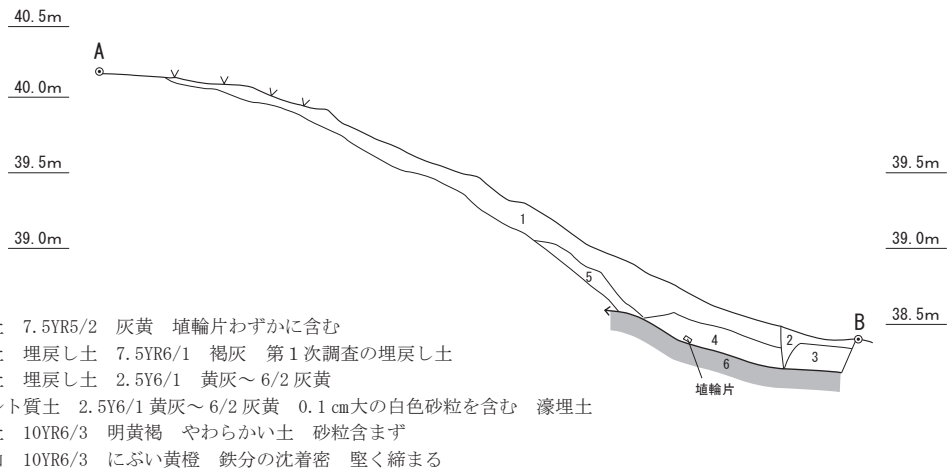


図4-17 11 トレンチ 平面図・断面図

分することができる。

- ① 1、19、20、22、23、42、43層 表土
- ② 8、9、24～31、33、34層 地山ア（淡黄 2.5Y8/4～黄 8/6）由来の黄色土
- ③ 10、12、15、16、18層 小石を含む土
- ④ 37、38層 遺物包含層

である。37、38層は、古墳築造以前に堆積していた遺物包含層で古墳時代前期のS字甕を含んでいた。築造は、まず標高 39.4 mの包含層の上に周濠外縁に沿って地山ア由来の黄色土を積む。規模は下底幅 2.7 m、高さ 0.6 mを測る。次に北側（濠の反対側）にこの小山にもたれかけるように土を積み成形していく。この上位層（10層）は、にぶい橙色（7.5YR6/4）で、0.2～0.5cm大の小石が密に含まれる。硬く締まっていたが、埴輪片を含んでいるため、崩落土かと思ひ除去した。しかし、土層観察の結果、盛土の最上層の土と思われた。標高は 40.1 m。埴輪片は、49層、51層下位の地山面でも出土した。周堤築造時には既に埴輪が準備されていて、破損したものも身近に置かれていたのであろう。埴輪片は表土中に散見されたが、据え付け痕は検出されなかった。周堤の北縁には、陶磁器類が多量にふくまれていた。戦後の周辺部の開墾や土砂の流出時に周堤側に土砂を掻き揚げたり、ゴミを捨てたりしたものと思われる。

北側の平坦地は、深さ 0.4～0.6 mで地山に至る。地山面の標高は 38.65～38.80 mである。区画整理事業時の攪乱土が大半で、側溝の北側には深さ 0.4 m、幅は推定で 1.0 mの境界溝が掘られていた。外濠に該当する遺構は確認されなかった。

出土遺物は、円筒埴輪、土師器（S字状口縁台付甕）、土師器（焙烙）がある。

（5）13 トレンチ

後円部の東側、濠から周堤の端までの東西長 10.15 m、幅 2.0 m、排水溝の東側平坦地に長さ 3.5 m、幅 1.95 mのトレンチを設定した。周堤の上端幅 5.0 m、西端は標高 39.5 m、東端は 39.75 mである。この位置は、周堤の残存する東南端に位置し、南側は公民館建設により破壊されている。埴輪列は、周堤頂部平坦面の周濠側に寄った、39.80 mから 40.00 mの間で検出した。この位置は、隣地の建物建設時の排土が厚く堆積していたことにより、保護された形になっていた。埴輪列は3個体分（北から B、D、E）を確認したが、掘り方が明瞭だったのは1個体で、2個体は周囲が根により攪乱されていた。表土層は、周堤盛土上のにり、周濠内では上位に堆積していた。周濠内の堆積層序をみると、この表土層の下位に埋め立てた土があり、その下に旧表土が堆積していた。近世以前には濠はさらに 0.6～0.7 m低く窪地状をしていた。濠の下位層は、黒色シルトが厚さ 0.3 m堆積していた。古墳時代の堆積土と思われる。周堤の盛土は周濠側（西側）で標高 38.7 m以上、東側で標高 39.3 m以上である。残存する周堤の高さは、西側 0.8 m、東側 0.45 mである。

東側平坦地に設けたトレンチでは、明確な遺構は検出されなかった。

出土遺物は円筒埴輪、土師器（高坏）、須恵器、山茶碗（碗）、窯道具（トチン）がある。

（6）切通し部分

周堤の北側に切通し状の小道がある。北側の村落から境内への近道として使用されていたものと想像される。この切通しの西壁を清掃し、埴輪の据え付けを探したが、樹木の根元で埴輪片が出土したに留まった。

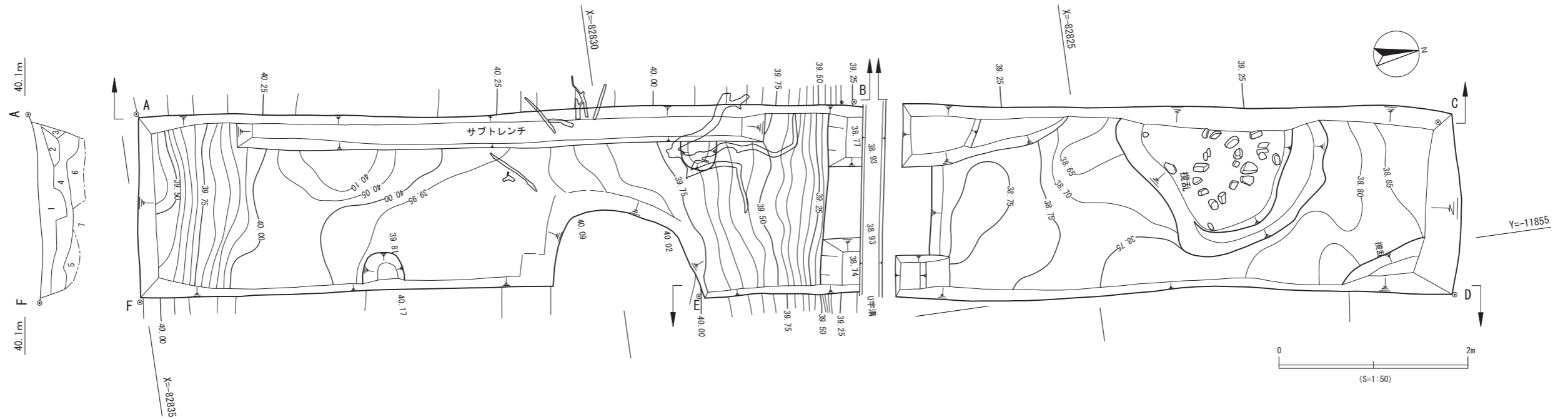
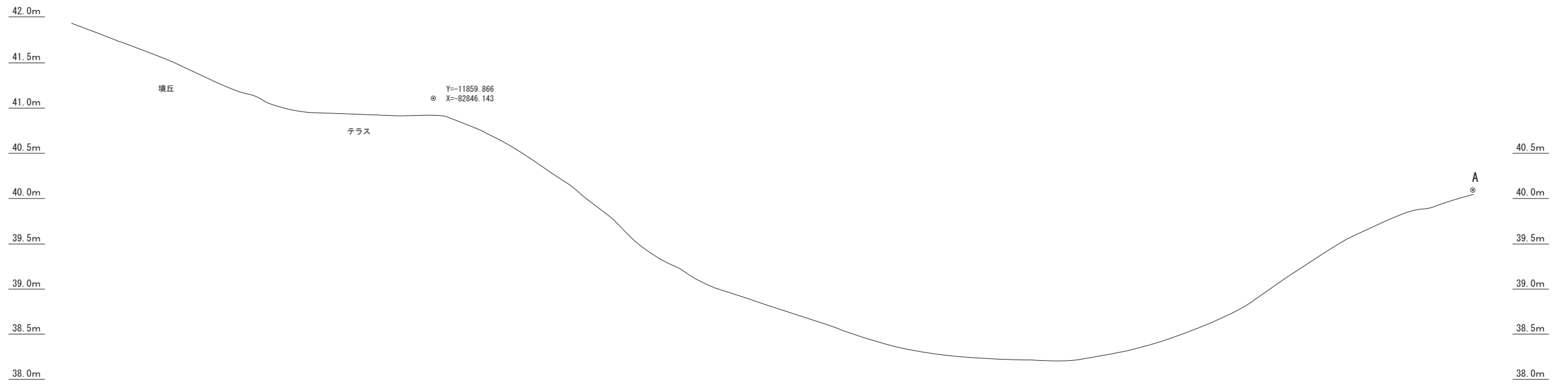
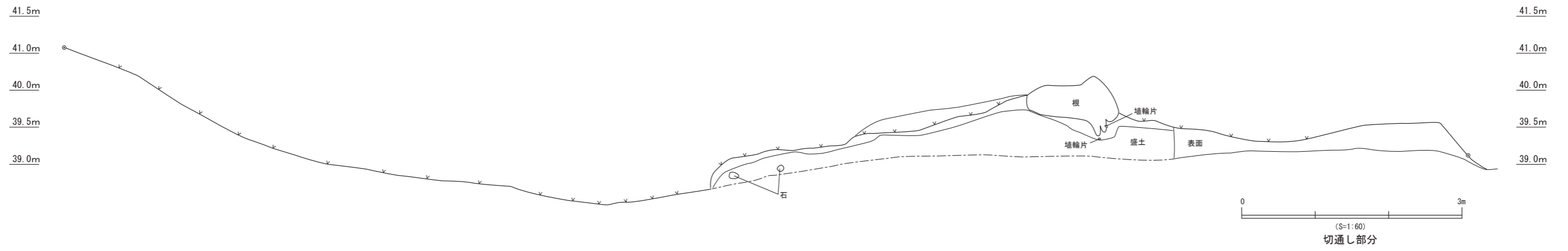
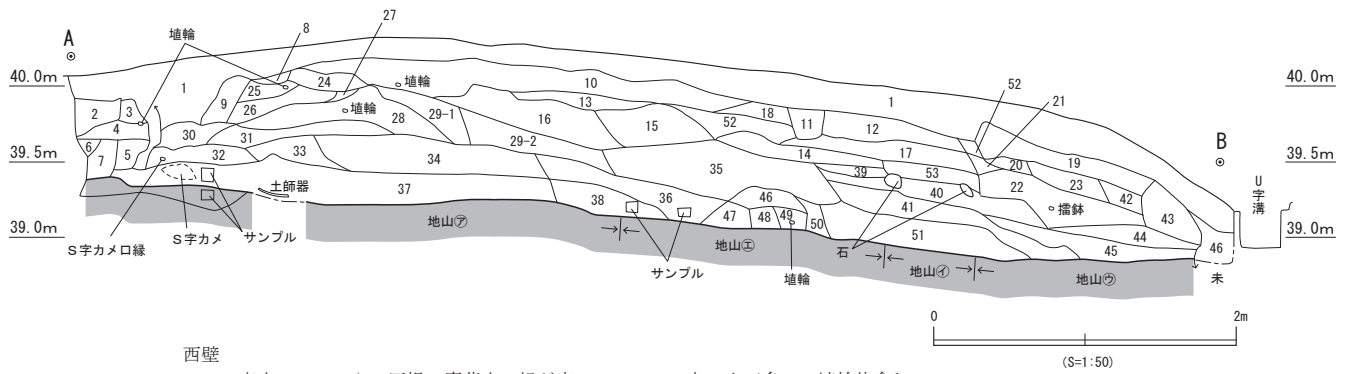


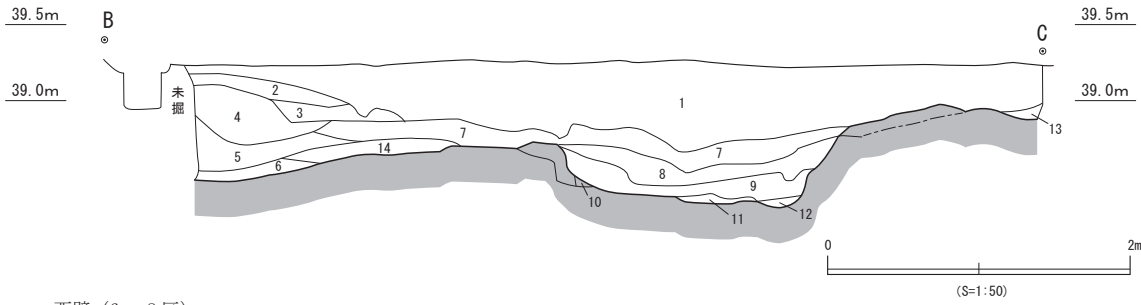
図4-18 切り通し断面図、12 トレンチ南側エレベーション図、12 トレンチ 平面図・断面図



西壁

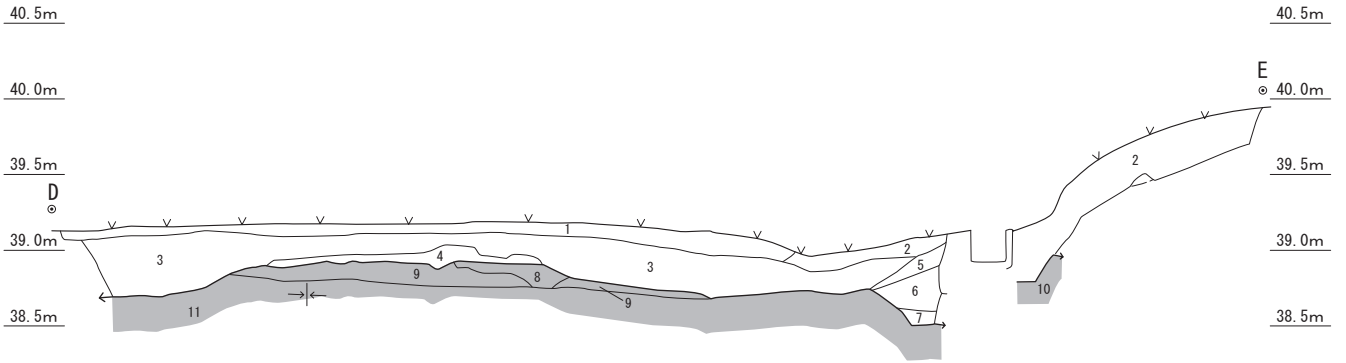
- 1 表土 7.5YR4/2 灰褐 腐葉土、根が密0.5～1.0 cm大の小石多い。埴輪片含む
- 2 盛土の崩れ 2.5Y4/2 暗灰黄 黄色土と褐色土が混じる 小石ほとんど含まず
- 3 盛土塊が崩落した土 2.5Y4/2 暗灰黄 小石含まず
- 4 盛土塊が崩落した土 2.5Y7/6 明黄褐 小石含まず
- 5 盛土塊が崩落した土 2.5Y7/6 明黄褐 小石含まず 3、4層より硬く締まる
- 6 盛土塊が崩落した土 2.5Y7/6 明黄褐 小石含まず 3、4層より硬く締まる
- 7 盛土の崩れ 黄灰(2.5Y5/1)と明黄褐(2.5Y7/6)が混じる。小石含まず
- 8 盛土A(地山アに由来する黄色土) 2.5Y6/6 明黄褐 硬く締まる 砂粒含まず
- 9 盛土A 2.5Y6/6 明黄褐 0.1 cm大砂粒含む 締まっている
- 10 盛土B(小石含む土) 7.5YR6/4 にぶい橙 0.2～0.5 cm大の小石密に含む 埴輪片含む 硬く締まっている
- 11 攪乱土 10YR6/8 明黄褐 やや粘質 0.1 cm大砂粒多く含む 小石は含まず
- 12 盛土B 10YR7/6 黄橙 黄色が強い 0.1 cm大砂粒を11層より多く含む やや硬く締まる
- 13 盛土 10YR5/3 にぶい黄褐 やや褐色強い 15層より褐色強い 1 cm大の小石がわずかに含む 締まっている
- 14 盛土 10YR6/6 明黄褐 締まりなくぼろぼろと崩れる感じ 1 cm大小の小石を少し含む
- 15 盛土B 2.5Y5/4 黄褐 褐色強い 16層に比べ締まりがなくさくさくとした感じ
- 16 盛土B 2.5Y6/4 にぶい黄 0.1 cm大の小石砂粒含む 13層より明るい色
- 17 盛土 10YR5/6 黄褐 やや粘質 砂粒なし
- 18 盛土B 10YR6/4 にぶい黄橙 砂粒含む 締まりあり
- 19 崩落土 10YR8/8 黄橙 砂粒多く硬く締まる
- 20 攪乱土 2.5Y7/8 黄 砂粒少ない
- 21 攪乱土 2.5Y6/4 にぶい黄 17層と20層の間
- 22 攪乱土 10YR3/4 暗褐 やや締まりない 近世播鉢片出土
- 23 攪乱土 10YR5/3 にぶい黄褐 やや粘質
- 24 盛土A 2.5Y7/4 浅黄 ややくすんだ黄色土 0.1～0.5 cm大小小石含む 粘質ややあり
- 25 盛土A 2.5Y8/4 浅黄 あまり締まっていない 0.1～0.5 cm大砂粒少し含む
- 26 盛土A 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質土 小石は含まず
- 27 盛土A 2.5Y8/8 黄 黄色が強い 硬く締まる 砂粒含まず
- 28 盛土A 5Y8/6 黄 硬く締まる 芯になる土
- 29-1 盛土A 2.5Y8/8 黄 きめの細かい土 やや砂質強い
- 29-2 盛土B 2.5Y6/6 明黄褐 しっとりとした感じ
- 30 盛土A 2.5Y4/2 暗灰黄 ぼそぼその砂質土 しまり全くない 根による攪乱土の可能性高い
- 31 盛土A 2.5Y5/3 黄褐 やや黄色強い やわらかい土 締まりがない
- 32 盛土C 2.5Y4/1 黄灰 軟らかい土 砂質気味 土師器含む
- 33 盛土C 2.5Y6/3 にぶい黄 やや黄色気味 締まりない
- 34 盛土A 2.5Y6/6 明黄褐 締まりある 小石全く含まず
- 35 盛土 2.5Y5/3 黄褐 黄色と褐色の混じった土 小石含まず
- 36 盛土 2.5Y4/2 暗灰黄 締まった土 しっとりとした感じ 小石含まず
- 37 遺物包含層 2.5Y4/2 暗灰黄 締まりない 砂粒小石含まず 土師器含む
- 38 盛土C 2.5Y4/2 暗灰黄
- 39 盛土 2.5Y6/3 にぶい黄 締まりがない しっとりとした感じ 小石含まず
- 40 盛土B 2.5Y6/4 にぶい黄 39層よりやや締まるがよく似ている
- 41 盛土C(遺物包含層由来の土) 2.5Y4/6 オリーブ褐 40層より締まりがあるが、硬くはない 小石含まず 地山④に似る
- 42 攪乱土 10YR6/4 にぶい黄褐 締まり全くなし 砂質強い 根が多い
- 43 攪乱土 10YR5/2 灰黄褐 砂質土 地境で削られた後に埋没
- 44 盛土C 10YR7/4 にぶい黄橙 ややシルト質 地山④に似る
- 45 盛土C 10YR5/2 灰黄褐 やや褐色気味 軟らかい 砂シルト 小石含まず 地山④に似る
- 46 攪乱土 10YR5/4 にぶい黄褐 褐色と黄色の交じり ふかふかで締まりなし 小石含まず 排水溝の掘り方埋土
- 47 盛土C 2.5Y6/3 にぶい黄 やや締まるが硬くない 小石含まず
- 48 盛土C 2.5Y6/2 灰黄 やや締まるが硬くない
- 49 盛土C 2.5Y5/3 黄褐 ふかふかした感じ 締まりなし
- 50 盛土C 2.5Y6/4 にぶい黄 やや硬く締まる
- 51 盛土C 2.5Y5/3 黄褐 硬く締まる 地山④に似る
- 52 盛土C 10YR3/1 にぶい黄褐 砂粒多く含む 硬く締まる 19層に近い
- 53 盛土 7.5YR6/6 橙 シルト 砂粒含まず

図4-19 12トレンチ 断面図



西壁 (6～8区)

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1 表土 10YR5/1 褐灰 | 7 攪乱土 N5/ 灰 ビニール等含む |
| 2 表土 10YR7/6 明黄褐 黄色土が多く混じる | 8 攪乱土 7.5Y4/1 灰 20cm大玉石含む 現代の施軸瓦含む |
| 3 灰色砂シルト 10YR6/1 褐灰 炭化物粒混じる | 9 攪乱土 10YR7/6 明黄褐砂シルトと10YR6/1 褐灰の混じり |
| 4 灰黄色砂シルト 10YR5/2 灰黄褐 境界溝の埋土 | 10 地山の崩れた土 2.5Y8/8 黄 灰色砂粒含む |
| 5 土坑埋土 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質強い 小石少し含む 近世陶磁片含む | 11 2.5Y7/6 明黄褐砂質土に灰色砂粒混じる |
| 6 土坑埋土 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質強い 暗褐色シルト含む | 12 2.5Y7/6 明黄褐砂質土に灰色砂粒混じる |
| | 13 攪乱土 2.5Y8/8 黄 |
| | 14 土坑埋土 10YR3/4 暗褐 シルト質強い 小石含まず |



東壁 (6～8区)

- | |
|------------------------------------|
| 1 碎石 |
| 2 表土 10YR6/1 褐灰 |
| 3 攪乱土 10YR6/1 |
| 4 青灰色シルト 2.5Y6/1 黄灰 |
| 5 境界溝埋土 灰褐色砂シルト 7.5Y5/1 灰 砂粒含む |
| 6 境界溝埋土 黄灰色砂礫 10YR5/6 黄褐 砂礫密 |
| 7 境界溝埋土 灰黄色砂シルト 10YR5/3 にぶい黄褐 砂質強い |
| 8 地山 黄灰色砂シルト 10YR7/6 明黄褐 砂粒含む |
| 9 地山 5Y5/4 オリーブ 粗砂 |
| 10 地山 灰色シルト 2.5Y5/2 暗灰黄 やや砂がち |
| 11 地山 2.5Y7/8 黄 砂粒含む |

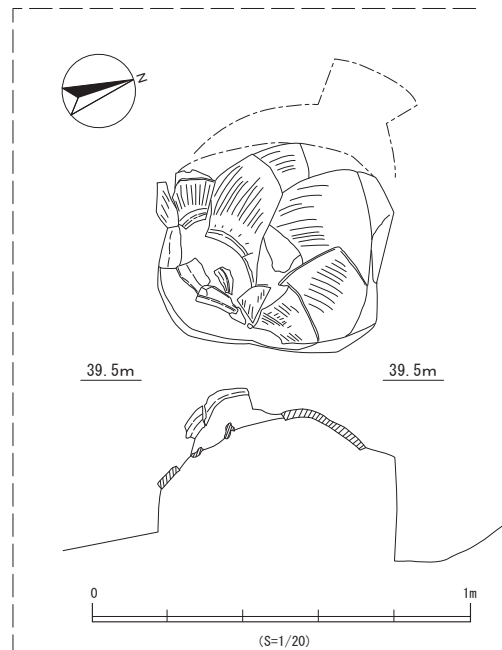


図4-20 12トレンチ 平坦部断面図、土師器出土状況

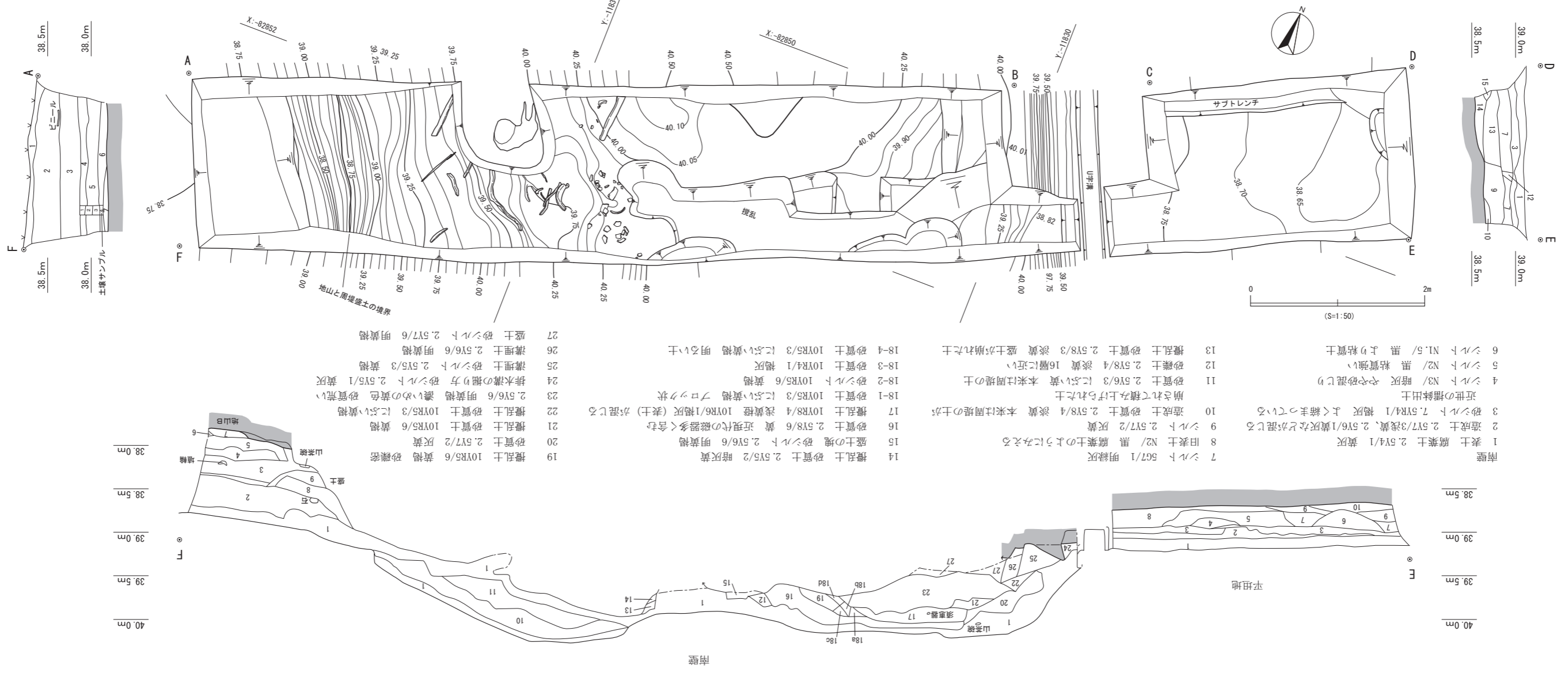
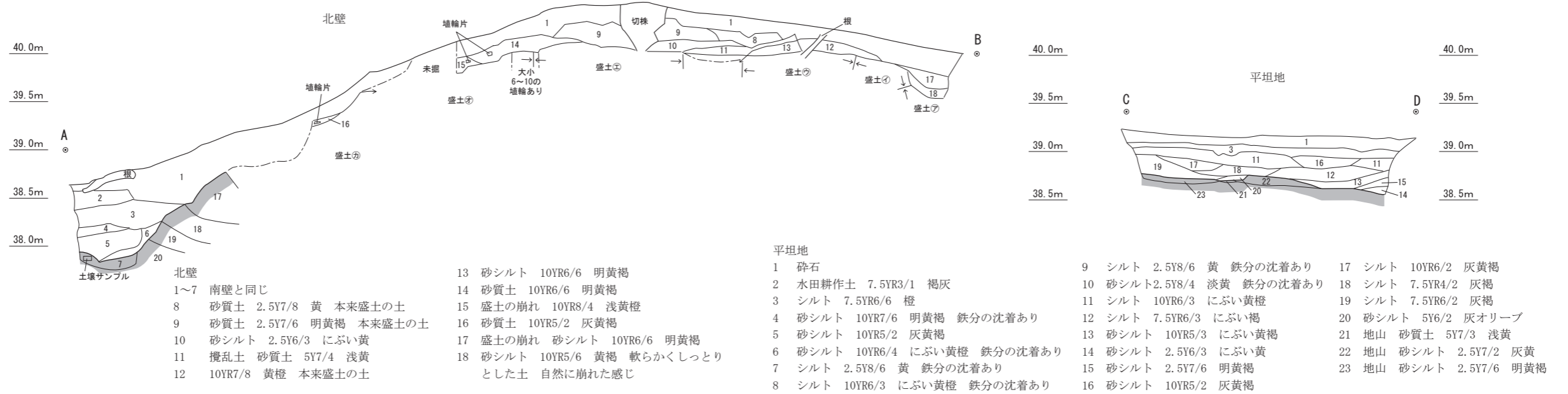


図4-21 13トレンチ 平面図・断面図

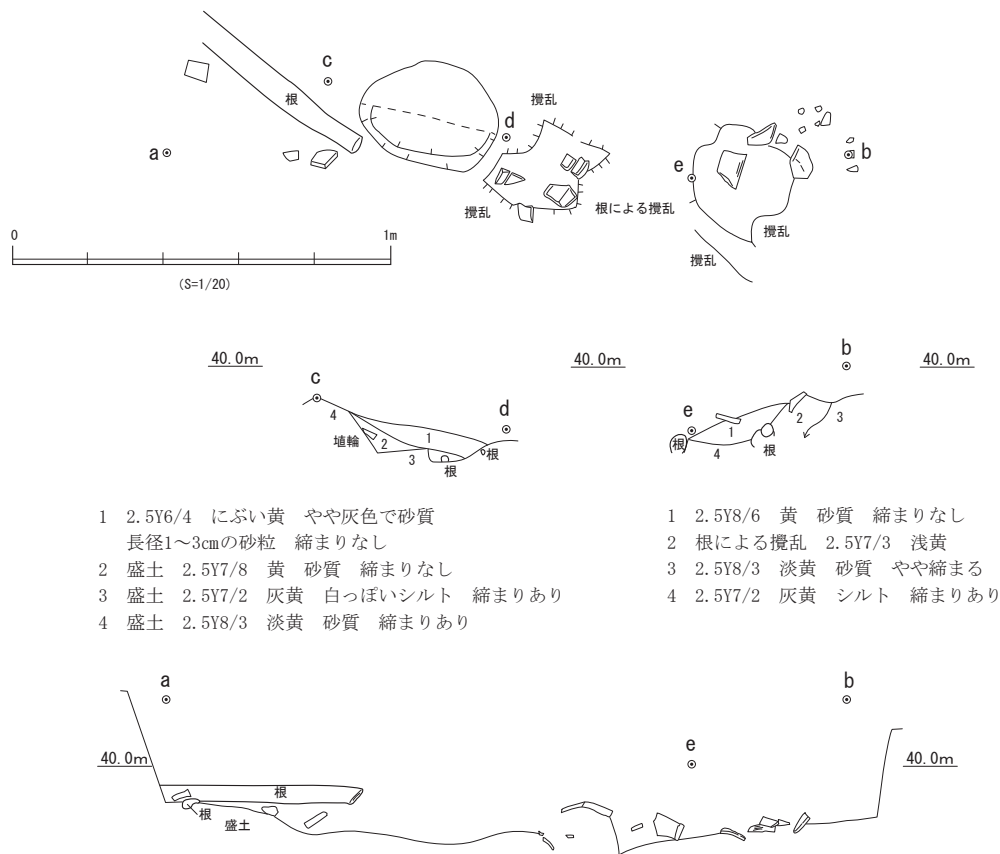


図4-22 13トレンチ 埴輪平面図・断面図

6 第3次調査の成果

(1) トレンチの配置

現在の勝手塚古墳の前方部は後円部のテラスよりも標高が高くなっている。第1次調査において、古墳築造時の後円部平坦面は現在の高さよりも低い位置にあったことが判明していることから、前方部の高まりは、当初より後円部平坦面より高く構築されていたか、後世に盛土したかのいずれかであると考えられた。こうした前方部の構造を確認するために、第1次調査の3トレンチと5トレンチをつなぐ位置にトレンチを設定し、14トレンチと呼称した。

(2) 14トレンチ

前方部の平坦面を中心に、埴輪主軸（北東-南西方向）にトレンチ北辺を合わせた長さ12mのトレンチを設定した。トレンチの幅は、北東側半分は4m、南西側半分は2mとし、調査面積は36㎡である。ただし、調査の状況に合わせて、一部拡張・縮小している。

わずかな表土を除去すると、埴輪盛土と想定される縮まりある土層を検出した。盛土は、後円部テラスと前方部の接続地点付近で、前方部側に高く傾斜させながら積み、前方部では平坦面を形成していると考えられる。ただし、現地表面から盛土までは浅いことから、本来の前方部はさらに高かった可能性も考慮される。なお、この土層上面において精査を行なったが、埋葬施設等の遺構は確認できなかった。

トレンチ東側の後円部テラスから前方部の立ち上がりの部分の斜面において、長さ5cm~20cm程度の円礫を検出した。盛土に張り付いていると観察されたことから、葺石である可能性が考えられる。前方

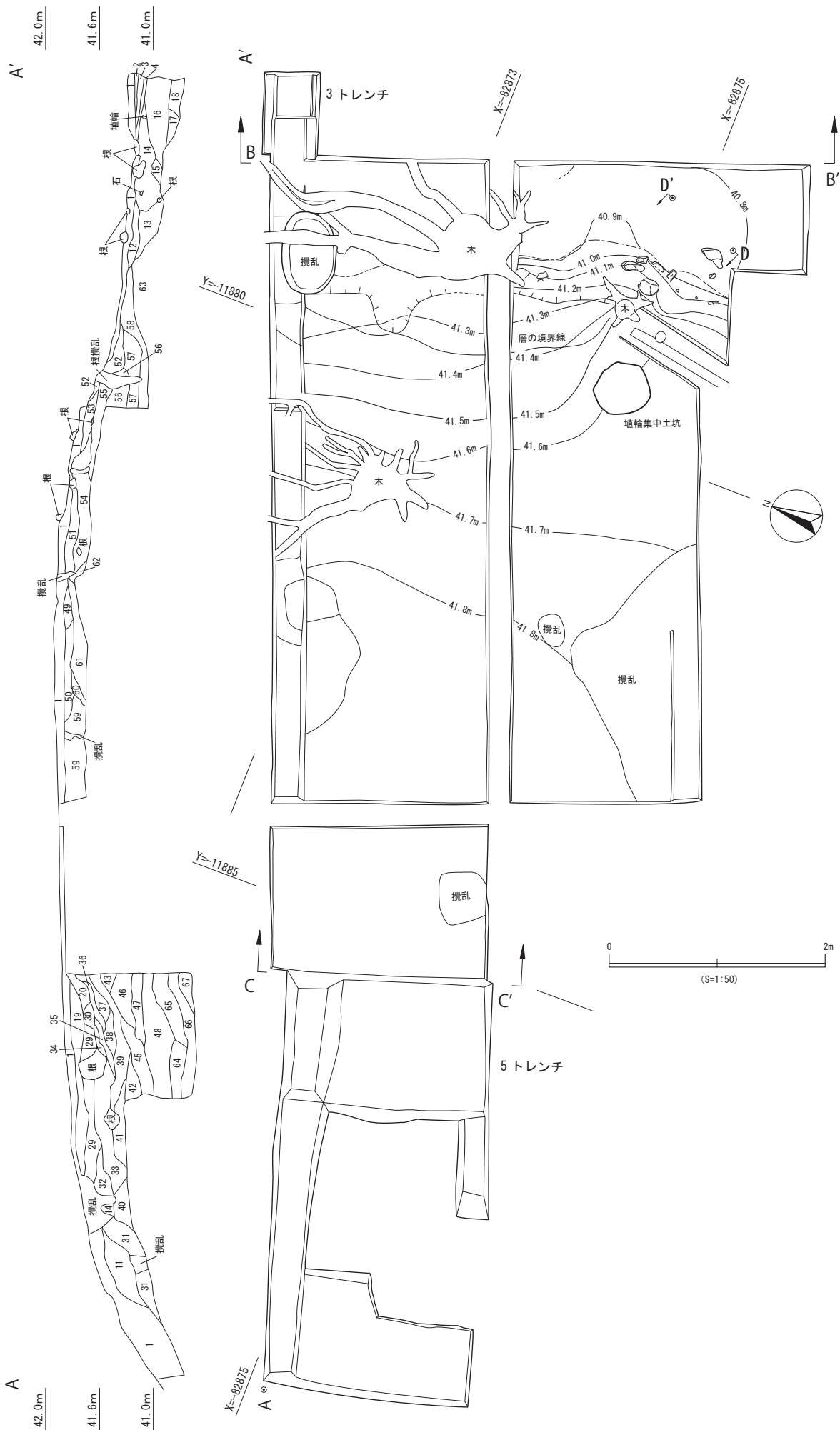
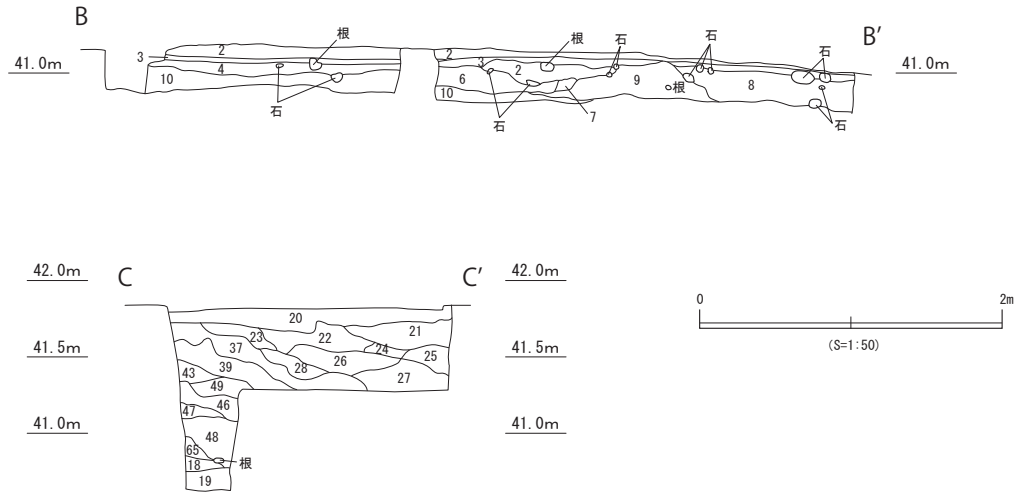


図4-23 14トレンチ 平面図・断面図



- | | | | | | | | | |
|----|---------|--------|-------------------------|--|----|----------|--------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | 中粒砂 | 長径 0.3 cm 以下の白色粒を 2% 含む | 35 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 長径 0.3 cm 以下の砂粒を 5% 含む |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色 | 極細粒砂 (旧表土) | | 36 | 10YR7/6 | 明黄褐色 | 5YR6/8 橙色土が斑状に混ざる |
| 3 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 中粒砂 | 上部には長径 0.7 cm 程度の礫敷き | 37 | 10YR7/8 | 黄橙色 | 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 2% 含む |
| 4 | 10YR4/2 | にぶい黄褐色 | 極細粒砂 (旧表土) | | 38 | 10YR8/8 | 明黄褐色 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む |
| 5 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む
長径 0.3 cm 以下の礫を含む | 39 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 5YR6/6 橙色土ブロックが混ざる |
| 6 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 細粒砂 | 10YR6/2 灰黄褐色ブロック 3% 含む | 40 | 10YR5/8 | 黄橙色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の砂粒を 1% 含む |
| 7 | 10YR4/4 | 褐色 | 中粒砂 | | 41 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 長径 0.3 cm 以下の砂粒を 1% 含む |
| 8 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 | 長径 15 cm 以下の円礫を多く含む | 42 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 長径 0.3 cm 以下の白色粒を 2% 含む |
| 9 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 極細粒砂 | 2.5YR7/3 浅黄色のシルトブロックを 2% 含む | 43 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 3% 含む |
| 10 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 10YR7/1 灰白色シルトブロックが混ざる | | 44 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 3% 含む |
| 11 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | 45 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 中粒砂 長径 0.2 cm 以下の砂粒を 3% 含む |
| 12 | 10YR4/4 | 褐色 | 細粒砂 | 10YR4/2 灰黄褐色土が斑状に混ざる | 46 | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む |
| 13 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 灰色シルトブロックが混ざる | | 47 | 10YR5/6 | 明褐色 | 細粒砂 10YR6/6 明黄褐色土がブロック状に 3% 混ざる |
| 14 | 10YR4/4 | 褐色 | 細粒砂 | 10YR3/2 黒褐色土が斑状に混ざる | 48 | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 細粒砂 28 層がブロック状に 5% 混ざる |
| 15 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 長径 0.1 cm 程度の砂粒を含む | | 49 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む |
| 16 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 10YR7/1 灰白色シルトブロックが混ざる | | 50 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂～極細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む |
| 17 | 10YR4/6 | 褐色 | 砂シルト | 長径 0.2 cm 以下の砂粒を 1% 含む | 51 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 2% 含む |
| 18 | 10YR4/6 | 褐色 | 砂シルト | 10YR7/1 灰白色シルトが斑状に混ざる | 52 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 極細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む |
| 19 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 5% 含む | | 53 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む |
| 20 | 10YR7/6 | 明黄褐色 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | | 54 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 2% 含む |
| 21 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.3 cm 以下の白色粒を 2% 含む | 55 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 極細粒砂 |
| 22 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 5% 含む | 56 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む |
| 23 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 | 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む | 57 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 極細粒砂 |
| 24 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.3 cm 以下の白色ブロックを 1% 含む | 58 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 極細粒砂 10YR6/3 鈍い黄褐色ブロックを 1% 含む (均質) |
| 25 | 10YR4/6 | 褐色 | 細粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | 59 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 2% 含む |
| 26 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 細粒砂 | 長径 2.0 cm 以下の白色ブロックを 3% 含む | 60 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | ブロックを 1% 混ざる |
| 27 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂 | 7.5YR4/6 褐色ブロックが斑状に混ざる | 61 | 10YR4/6 | 褐色 | 中粒砂 長径 0.3 cm 以下の白色粒を 3% 含む |
| 28 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 中粒砂 | 長径 0.5 cm 以下の白色ブロックを 2% 含む | 62 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細粒砂～極細粒砂 長径 0.5 cm 以下の白色ブロックを 1% 含む |
| 29 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | 63 | 10YR5/8 | 褐色 | 中粒砂 長径 0.3 cm 以下の白色粒を 3% 含む |
| 30 | 10YR7/6 | 明褐色 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | | 64 | 2.5YR7/4 | 浅黄色 | 極細粒砂～シルト 鉄の沈着あり |
| 31 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 中粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | 65 | 7.5YR6/2 | 灰褐色 | 極細粒砂～シルト (均質) |
| 32 | 10YR7/8 | 黄褐色 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 2% 含む | | 66 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 極細粒砂～シルト |
| 33 | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 長径 0.3 cm 以下の砂粒を 1% 含む | | 67 | 10YR5/4 | 黄褐色 | 極細粒砂～シルト 46 層がブロック状に 3% 混ざる |
| 34 | 10YR7/8 | 黄褐色 | 細粒砂 | 長径 0.1 cm 程度の白色粒を 1% 含む | | 10YR6/3 | にぶい黄褐色 | 極細粒砂～シルト 鉄の沈着あり |

部斜面の下部トレンチ東端の前方部斜面の下の流土、あるいは後世の埋土内からは、同様の円礫がまとまって出土しており、葺石の転落石の可能性もある。この円礫は、この部分にのみ集中していることから、葺石であるとすると、後円部から前方部に立ち上がる斜面前面ではなく、斜面に施していたものと推定される。この側面の斜面が先に続くと考えれば、現在の測量図からは判然としないが、前方部側面は段築をもって構築された可能性も考慮する必要がある。

トレンチ北側では、幅 20cm の断ち割りを入れ、盛土の状況を確認した。その結果、トレンチ北東端より南西側に 1.75m、3 トレンチにて検出した埴輪列中心からは約 4 m の位置で、他とは異なる灰色のシルト質の盛土を土手状に配置している様子が確認された。3 トレンチにて検出した後円部のテラス面（標高 41m）は、前方部に向かってやや低く傾斜していき、灰色盛土（標高 40.9m ~ 41.2m）を置いた部分から急激に高くなっている。トレンチ南西側、旧 5 トレンチ調査時に掘削した断ち割り部分からも、灰色シルト質の盛土が認められ、標高も 40.7 ~ 41.0m と近似することから、一連の土層の可能性もある。その場合、前方部を構築する際、一定の高さで、この灰色シルト土を広範囲に積んでいると思われる。5 トレンチの断ち

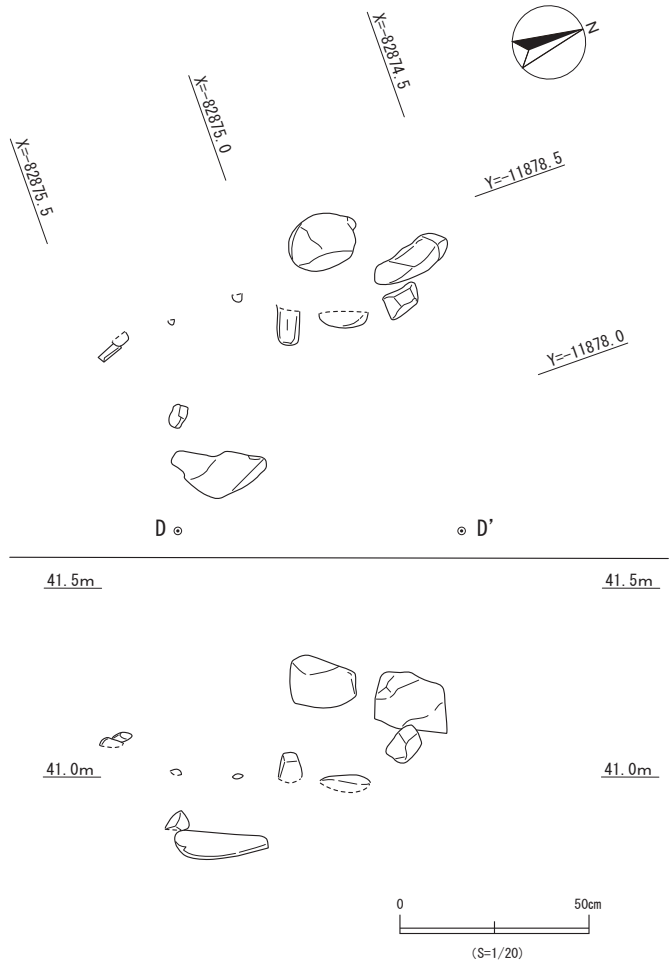


図4-24 14 トレンチ 葺石平面図・断面図

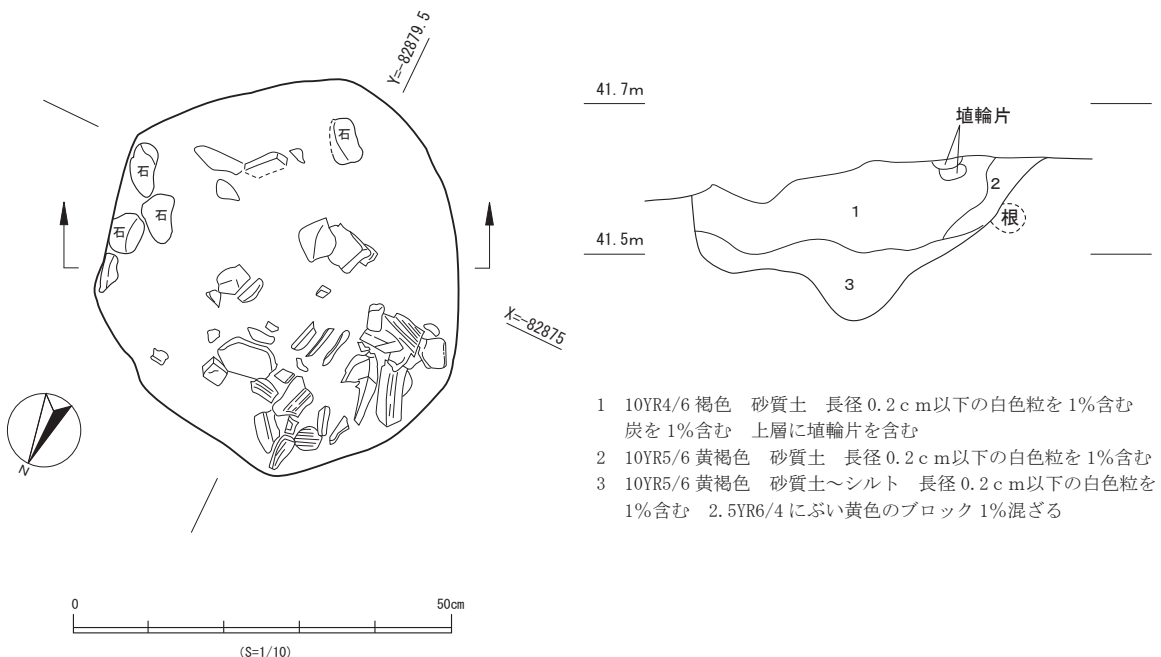


図4-25 14 トレンチ 埴輪集中土坑 平面図・断面図

- 1 10YR4/6 褐色 砂質土 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む 炭を 1% 含む 上層に埴輪片を含む
- 2 10YR5/6 黄褐色 砂質土 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む
- 3 10YR5/6 黄褐色 砂質土～シルト 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む 2.5YR6/4 にぶい黄色のブロック 1% 混ざる

割り部分の土層を精査したところ、盛土は 41.0m より上では、後円部側から前方部側に低く傾斜させて積んでいることを確認した。

トレンチの南東部、前方部平坦面上では、埴輪片が集中する土坑を検出した。埴輪列の掘方の可能性を考えたが、周囲に連続する埴輪列の痕跡は認められなかった。また土坑内の埴輪は、底部の破片が少なく、複数の個体の細片が含まれていることから、埴輪を据え付けるための土坑ではないと判断した。後に掘削された埴輪を廃棄するための土坑などが想定される。14 トレンチでは、この土坑以外には埴輪の出土はなく、前方部に埴輪が樹立していたかどうかは不明である。ただし、前方部前面の 5 トレンチの墳丘斜面や周濠内から埴輪が出土していることから、前方部に埴輪列が巡っていた可能性は高い。14 トレンチは前方部の中心部に設定したため、未調査である前方部平坦面の外縁に埴輪列が存在する可能性や、現在の前方部は削平を受けており、元位置を保った埴輪列の痕跡は失われている可能性なども考慮する必要がある。仮に前方部平坦面の外縁付近に埴輪列が巡っていた場合でも、後円部テラスの埴輪列とは明らかに標高に差があることから、後円部から前方部へは連続せず、前方部平坦面のみで完結していたと推定される。

7 試掘調査

(1) 道路工事地点 2015（平成 27）年 9 月 15 日・10 月 13 日実施

守山区大字上志段味字中屋敷地内において、道路工事が予定されたため、試掘調査を実施した。当地は、勝手塚古墳の北側に隣接する位置にあたる。

1 トレンチ

0.8 m × 2 m、深さ 0.5 m 掘削。表土・攪乱土以下は地山であった。

2 トレンチ

0.8 m × 4 m、深さ 0.6 m 掘削。表土・攪乱土以下は地山であった。

3 トレンチ

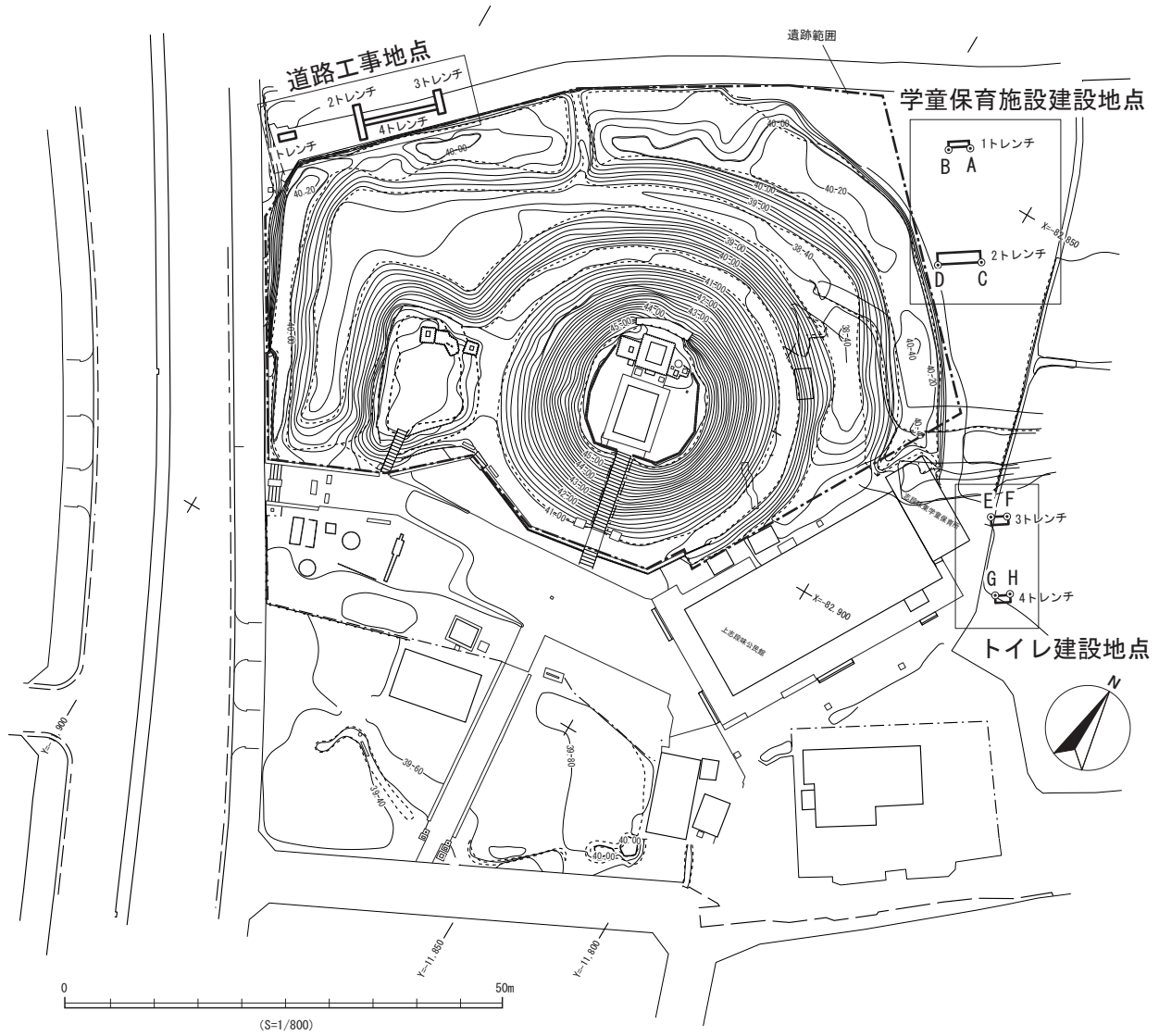
0.8 m × 2 m、深さ 0.65 m 掘削。表土・攪乱土の下に、黄褐色土（5 層）と淡茶褐色土（6 層）が堆積した。特に淡茶褐色土は厚さ 12cm ほどの堆積であり、円筒埴輪が良好に含まれた。

4 トレンチ

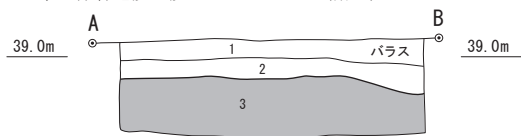
3 トレンチに埴輪片が含まれる包含層を確認したことで、新たに設定した。0.8 m × 8.5 m、深さ 0.6 m 掘削。表土・攪乱土の下に堆積した黄褐色土（5 層）と淡茶褐色土（6 層）は 2 トレンチ東約 1 m の地点まで残っていた。この包含層は、調査時には周堤の外側の浅い窪地に堆積したと推定されたが、残存する周堤の位置から推定すると、削平された周堤部分の下位に位置するところと思われることから、周堤築造時に埋め立てた窪地に埴輪の破片が混入したものと考えたい。

(2) 学童保育施設建設地点・トイレ建設地点 2015（平成 27）年 11 月 20 日実施

守山区大字上志段味字中屋敷地内において、学童保育施設建設とトイレ建設工事が予定されたため、試掘調査を実施した。当地は、勝手塚古墳の東側に隣接する位置にあたり、2 次調査の 12 トレンチ、13 トレンチに関連するため、掲載した。

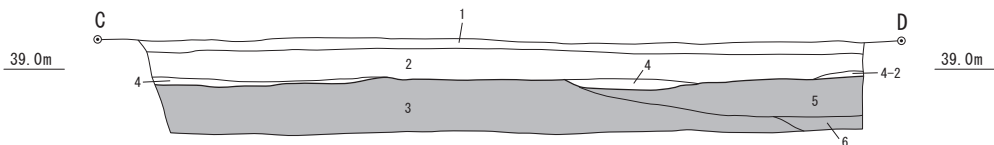


学童保育施設建設地 1トレンチ (南壁)

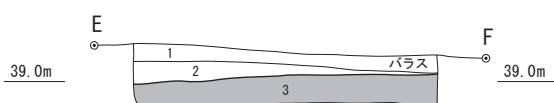


- 1 黄色パラス
- 2 灰色土 (耕作土、近現代の陶器片、ガイシ含)
- 3 淡黄灰色シルト (地山)
- 4 黄灰色土
- 5 淡黄灰色砂質土 (地山)
- 6 黄灰色シルト

学童保育施設建設地 2トレンチ (南壁)



トイレ建設地 3トレンチ (北壁)



学童保育施設 4トレンチ (北壁)

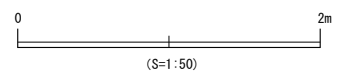
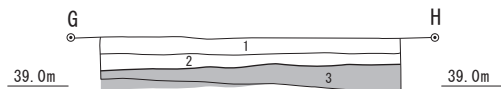
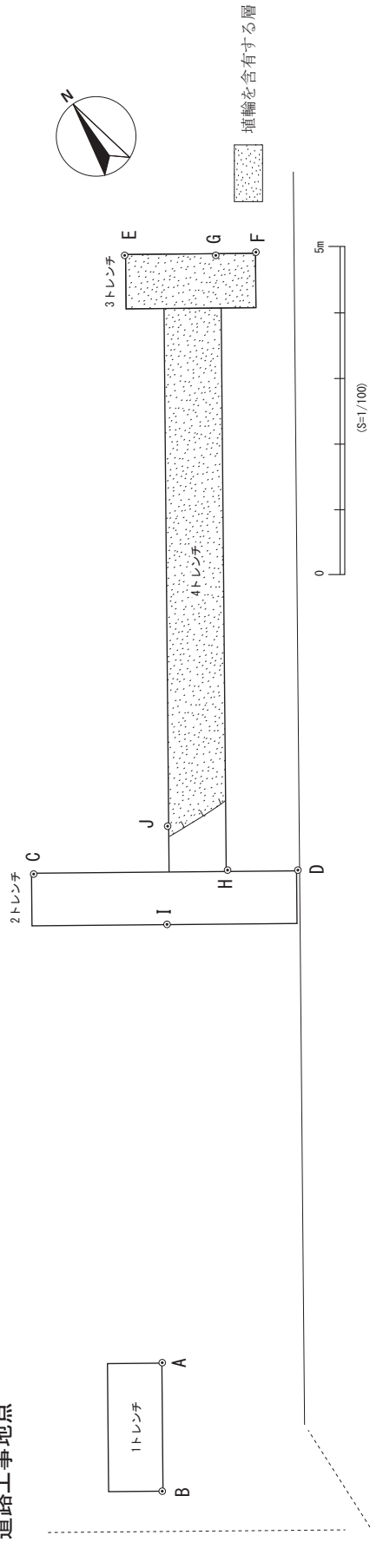
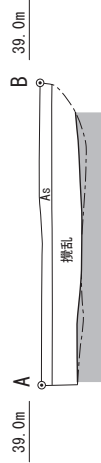


図4-26 試掘調査位置図、道路工事地点断面図

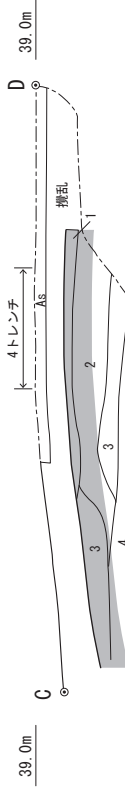
道路工事地点



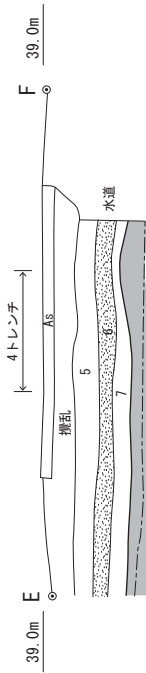
道路工事地 1トレンチ (南壁)



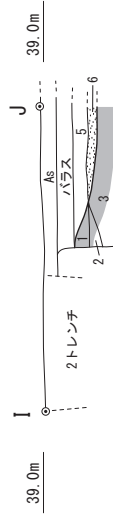
道路工事地 2トレンチ (東壁)



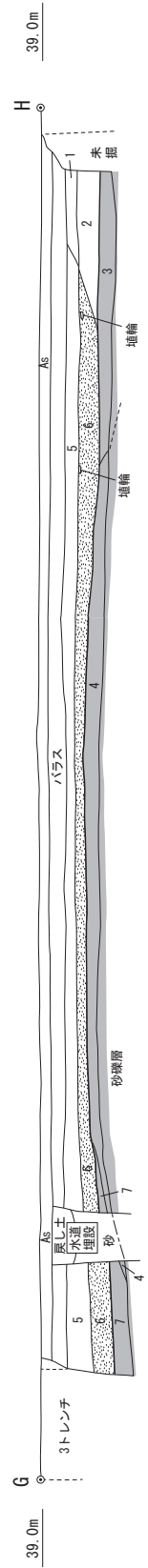
道路工事地 3トレンチ (東壁)



道路工事地 4トレンチ (西壁)



道路工事地 4トレンチ (東壁)



- 1 にぶい黄褐色土 (地山)
- 2 黄褐色土 砂混じり 茶褐色砂が帯状に入る (地山)
- 3 黄褐色砂礫層(地山)
- 4 黄褐色土 しまりよい やや粘性あり
- 5 黄褐色土 明るい 均質
- 6 淡茶褐色土 しまりあり 埴輪混じり
- 7 淡黄褐色土 しまりある砂層 均質 (地山)

図4-27 学童保育施設建設地試掘断面図

学童保育施設建設地点では、1トレンチ（1m×2m）、2トレンチ（1m×5m）とも、深さ約0.6m掘削した。1層は表土（バラス）、2層は灰色土（水田耕作土）、3層は黄色シルト、淡灰白色砂礫土などの地山であった。

トイレ建設地点は、3トレンチ（1m×2m）、4トレンチ（1m×2m）を深さ0.3～0.4mまで掘削した。1層は表土（バラス）、2層は灰色土（水田耕作土）、3層は淡黄灰色シルトの地山であった。両地点共に遺構、遺物は確認されなかった。

8 出土遺物

勝手塚古墳の第1次～3次調査において、埴輪を中心とする遺物が出土している。遺物は、遺物収納用箱（内寸33cm×53cm×15cm）に換算すると、第1次調査で12箱、第2次調査では8箱、第3次調査では1箱分出土している。

（1）埴輪

勝手塚古墳から出土した埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪である。出土遺物の大半を占めるのが円筒埴輪であり、これに朝顔形埴輪と蓋形埴輪を含めて埴輪列を形成していたと推定される。以下では、形式ごとに報告するが、胴部片など形式が不明なものについては、円筒埴輪を含めて記述する。

①円筒埴輪（図4-29～35）

ア) 形状

円筒埴輪のうち、全体の形状が分かるものは、図4-29:8と図4-30:18（以下、個別の遺物を示す場合は、番号のみ記す）の2個体である。8は3条突帯4段、18は2条突帯3段で構成され、段構成が異なる少なくとも2種の形態が確認できる。46は、2段目で上下が接合しないが3条4段に復元できる。

3条4段の8は、底部の直径（以下、底径）が22.7cm、口縁部の直径（以下、口径）が33.2cm、器高は50.2cmを測り、底部から口縁部にかけては、やや外傾して立ち上がる。2条3段の18は、底径が23.0cm、口径が38.0cm、器高は44.9cmで、底部から口縁部にかけて大きく開く形状である。8に比べ18の方が、底部高、突帯間隔、とくに口縁部高が高く、そのため、段構成は異なるものの器高の差は5cmほどに収まっている。

イ) 製作技法

円筒埴輪は、形状の違いはあるものの、いずれも二次調整の回転ヨコハケ等からロクロ上で製作が想定される「尾張型埴輪」である（赤塚1991）。煩雑さを避けるため、個々の特徴については観察表に記載し、製作の工程を提示する中で、個別の特徴については触れない。

基底部の製作 勝手塚古墳の円筒埴輪には、途切れず横方向に連続するハケ調整（回転ヨコハケ）が認められることから、その製作にはロクロの使用が想定される。後述するように、製作の最終段階で、ロクロの回転力を用いながら工具で底部下端を削ったり、底面の切り離しが行われる個体があることから、基底部の成形もロクロ上で行われたと考えられる。

観察できたすべての底部で、最下段より直径2cm程度の粘土紐を積み上げている。底部は器壁に比べ厚く、自重により粘土がはみ出す場合以外にも、底部の強度を高くするために予め基部を厚く成形してい

たと推定される。

底径は、16cm 台～26cm 台まで認められる。試掘調査（深谷・瀬川編 2011）の資料も含めて径を復元できた個体の数量を比較すると、底径という規格を設定しやすい箇所にも関わらずばらつきが多い（図 4-28）。ただし、大局的にみると 18cm 以上 20 未満と、21cm 以上 24cm 未満の 2 箇所にピークを認めることはできるかもしれない。

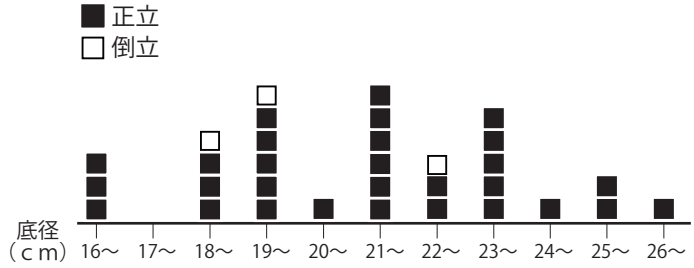


図 4-28 円筒埴輪の底部径の比較

一次調整 粘土紐を指で接着させながら、一定の高さまで積み上げた後、板状工具（以下、ハケメ工具）を下から上へ動かし（タテハケ）、器面の調整を行う（一次調整）。タテハケのストロークの長さから、1 段目の突帯の上、少なくとも 20cm 以上の高さまで積み上げた段階で一時調整を行なっている。この粘土紐の積み上げ後、外面調整、内面調整という工程を繰り返し、円筒部を成形する。

突帯の貼り付け 外面の一次調整の後、突帯を貼り付ける。突帯の形状は、断面が台形状を呈するもの（12・13）、低平なもの（14・21）、上端部のみ突出するもの（30・37）、下端部のみ突出するもの（69）など多様である。総じて、ヨコナデにより上端部は丁寧に貼り付けられるのに対し、下端部のなでつけは甘い。

二次調整 突帯を貼り付けた後に、ロクロを回しながらハケメ工具を埴輪の器壁に当て調整する（回 1 トレンチ

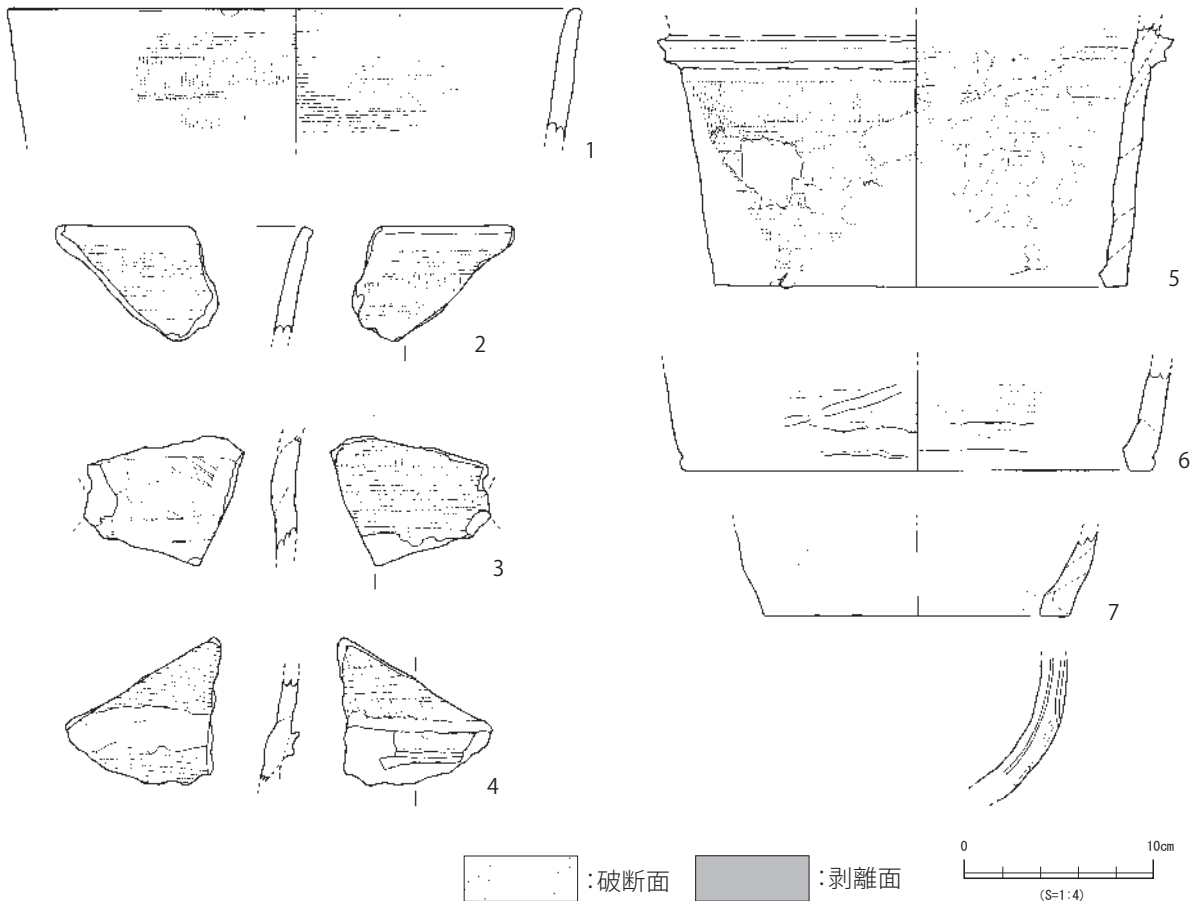


図 4-29 出土遺物 (1)

2トレンチ

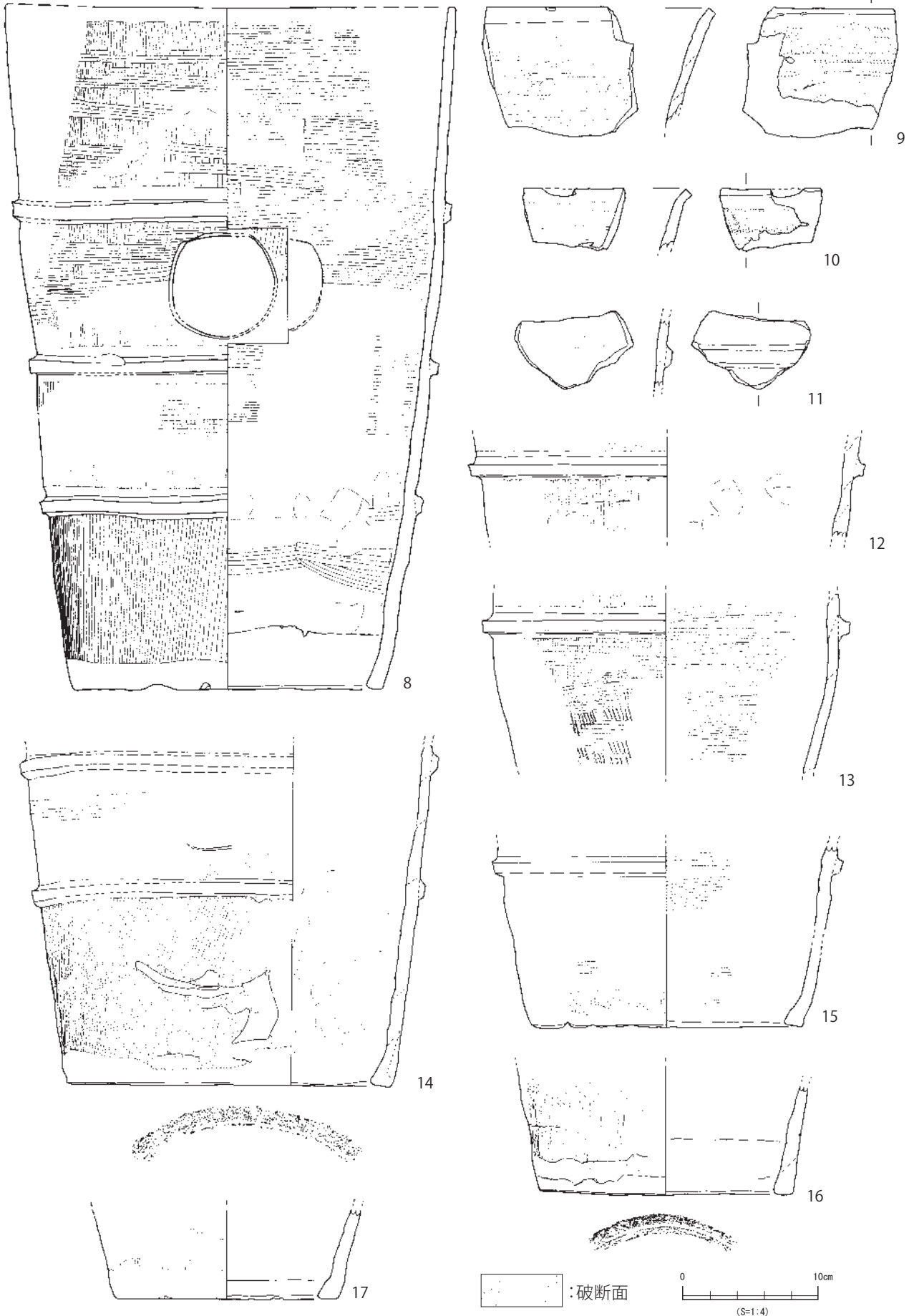
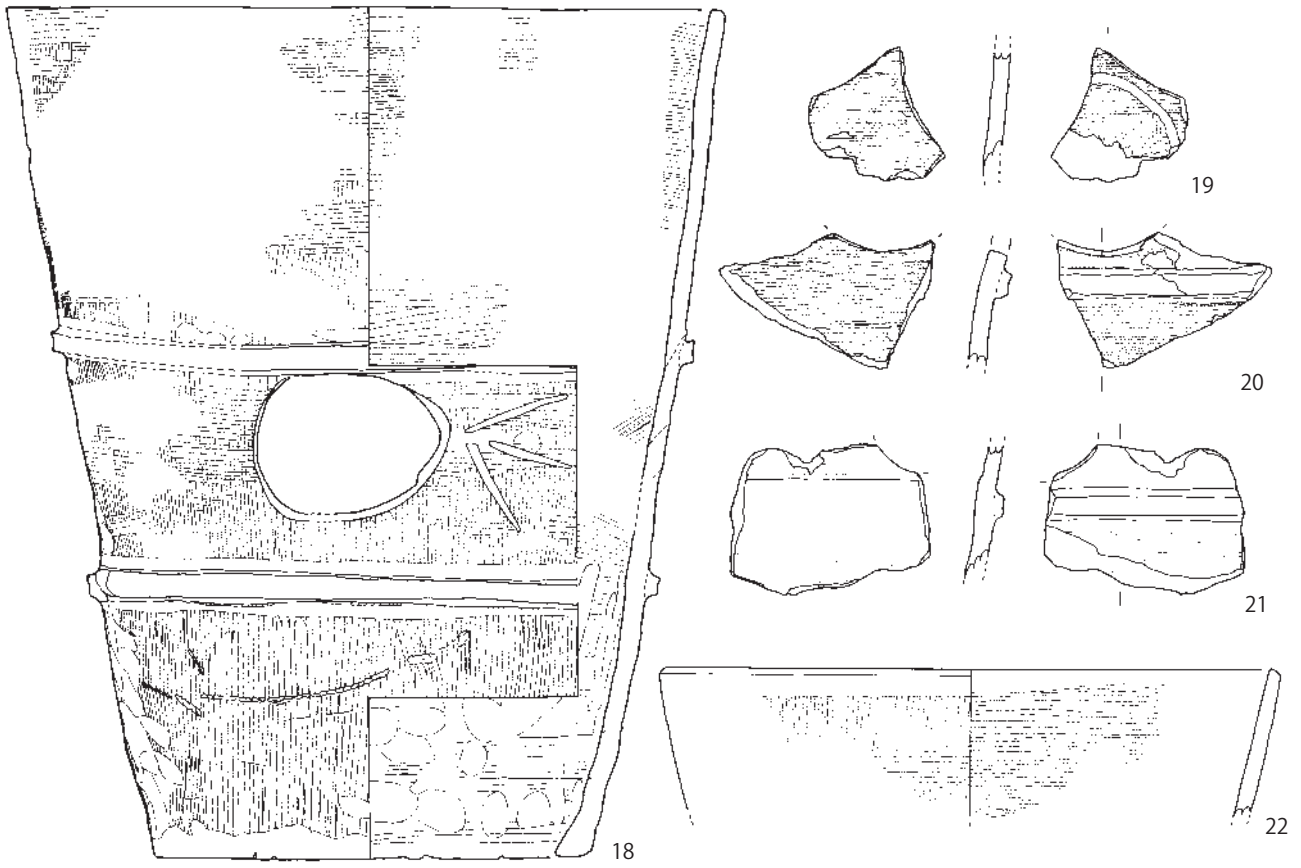


図4-30 出土遺物(2)

3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ

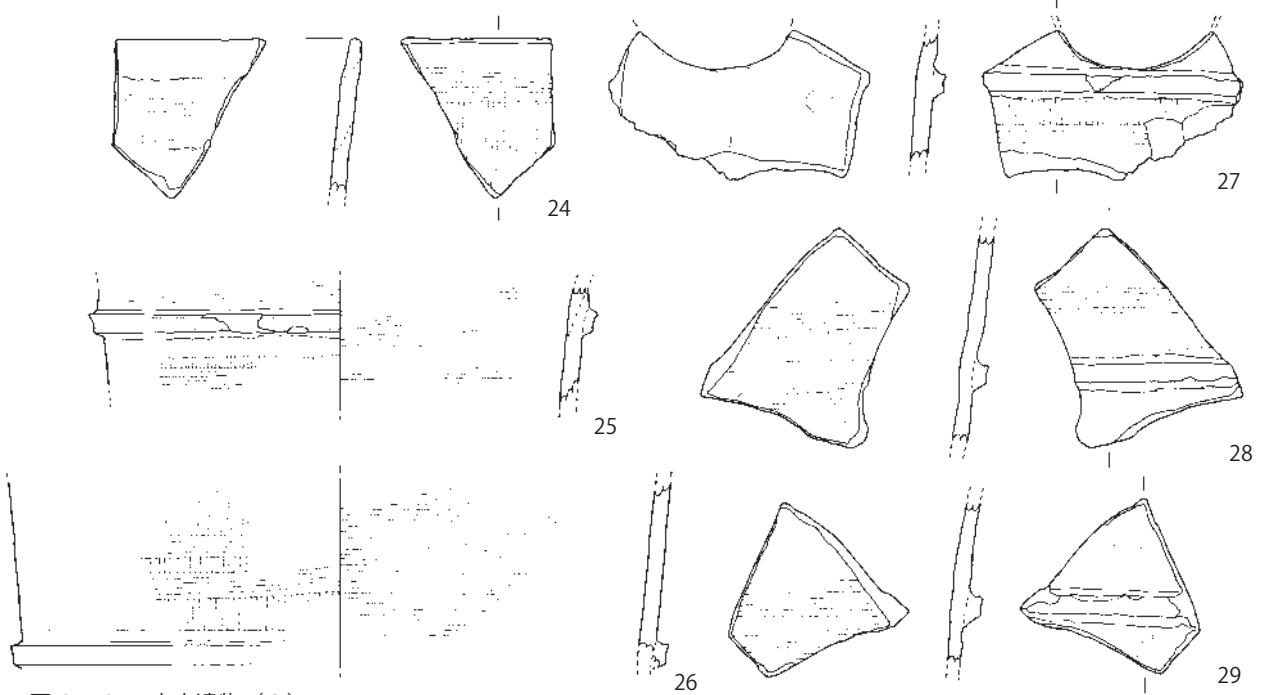
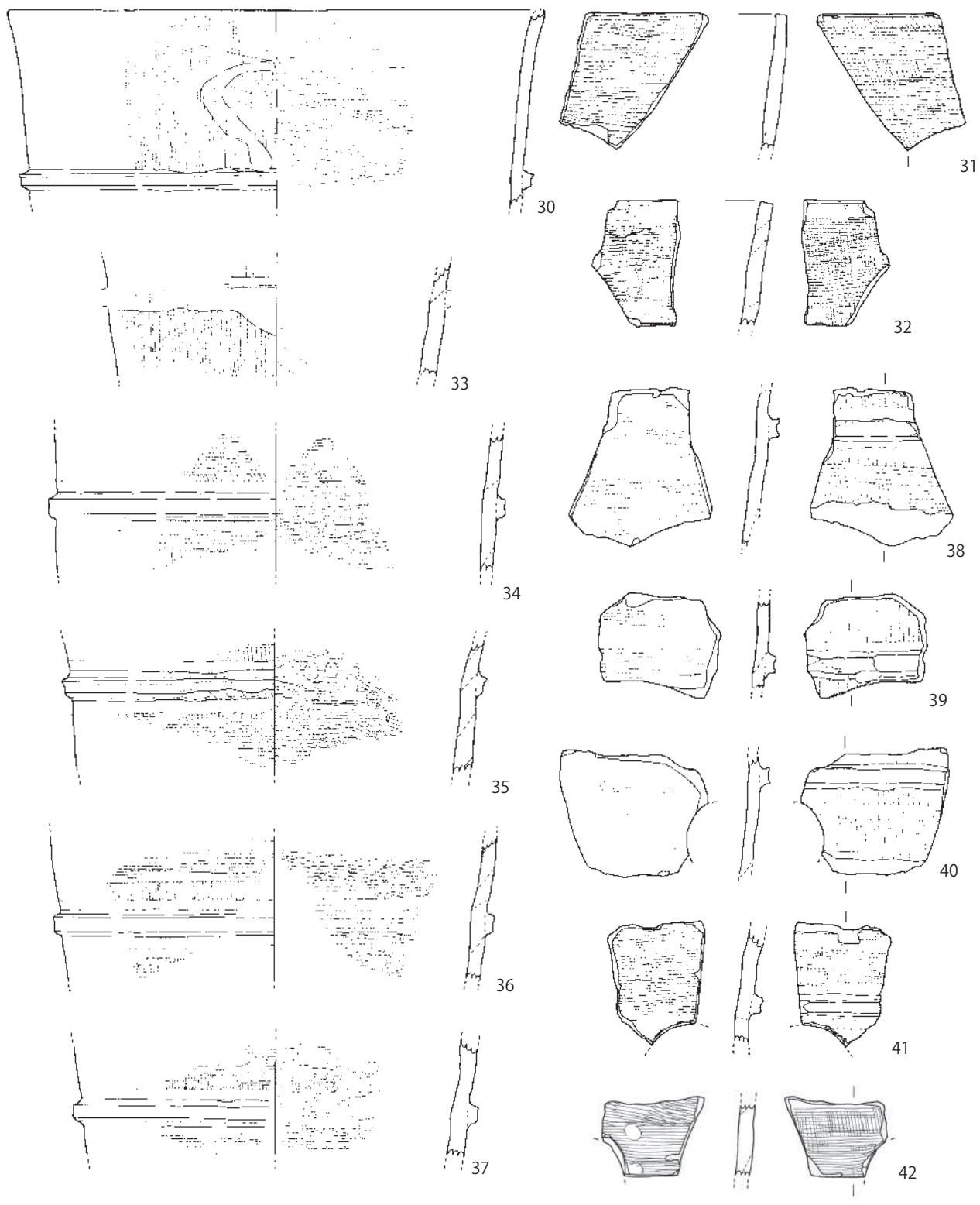


図4-31 出土遺物 (3)

6トレンチ



7トレンチ

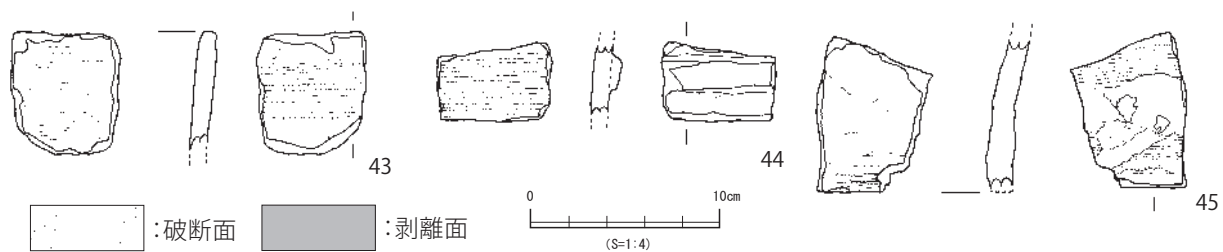
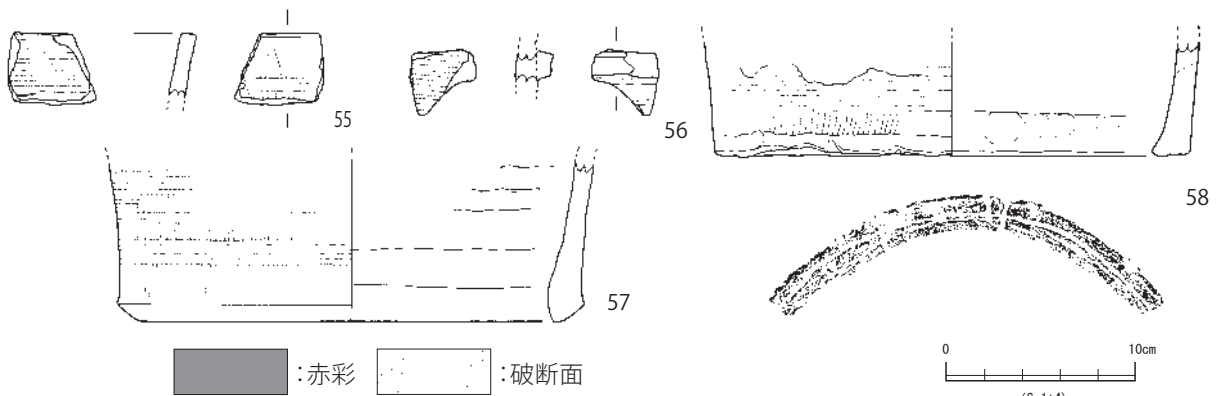


図4-32 出土遺物 (4)

8トレンチ



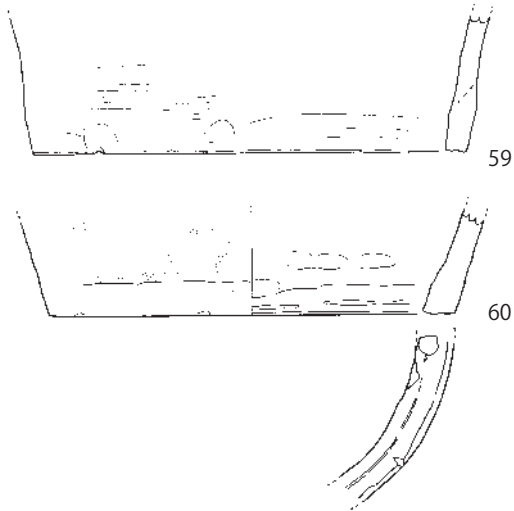
9トレンチ



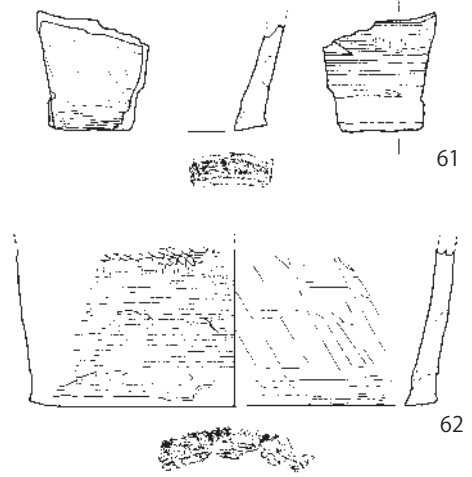
■ : 赤彩 □ : 破断面

図4-33 出土遺物(5)

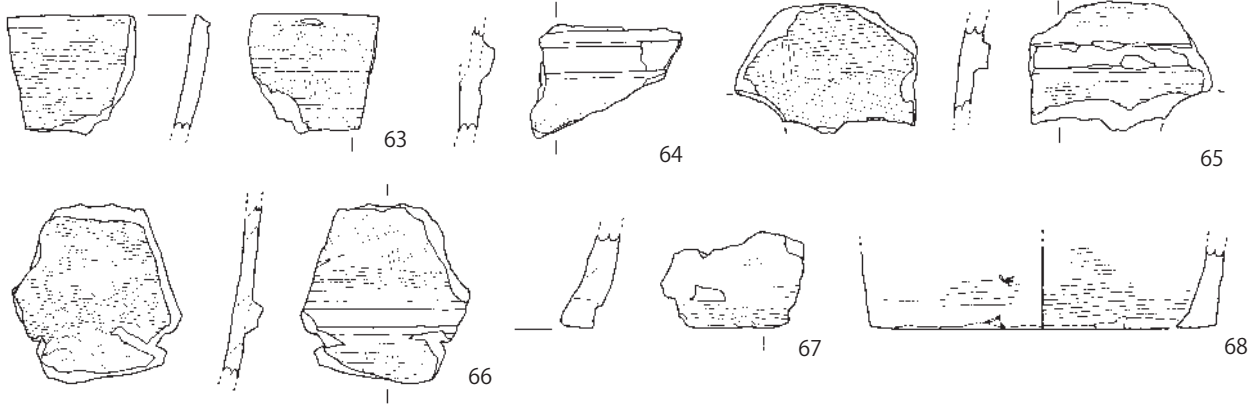
10 トレンチ



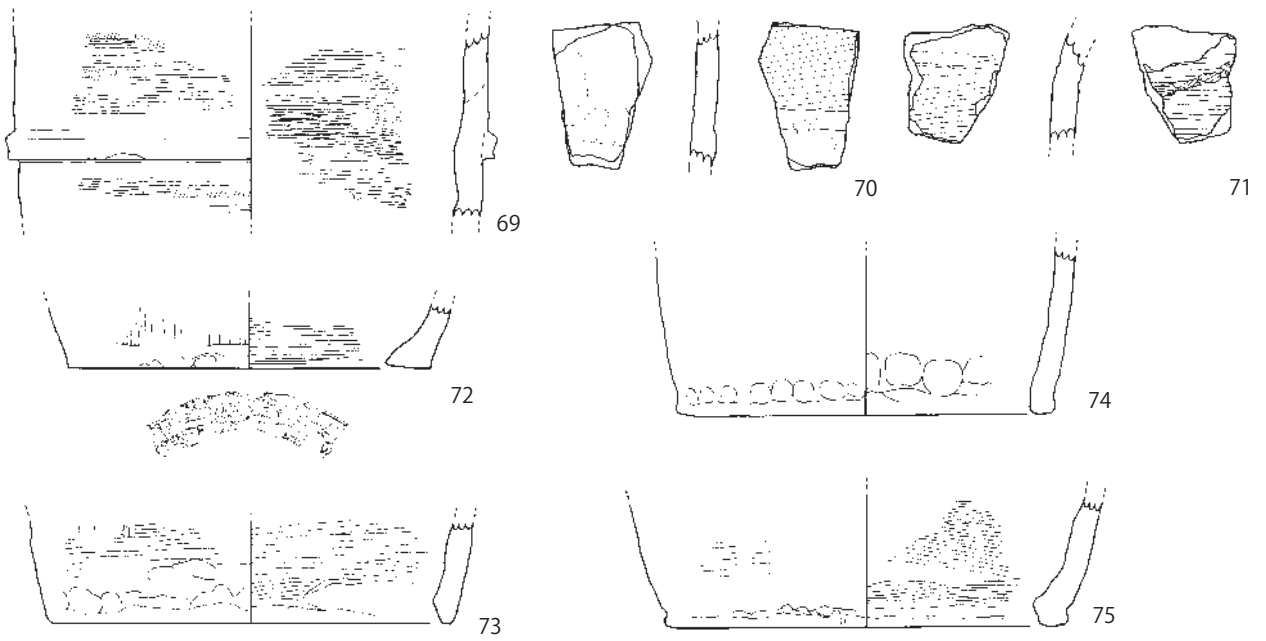
11 トレンチ



12 トレンチ



13 トレンチ



破断面

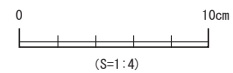


図4-34 出土遺物 (6)

14 トレンチ

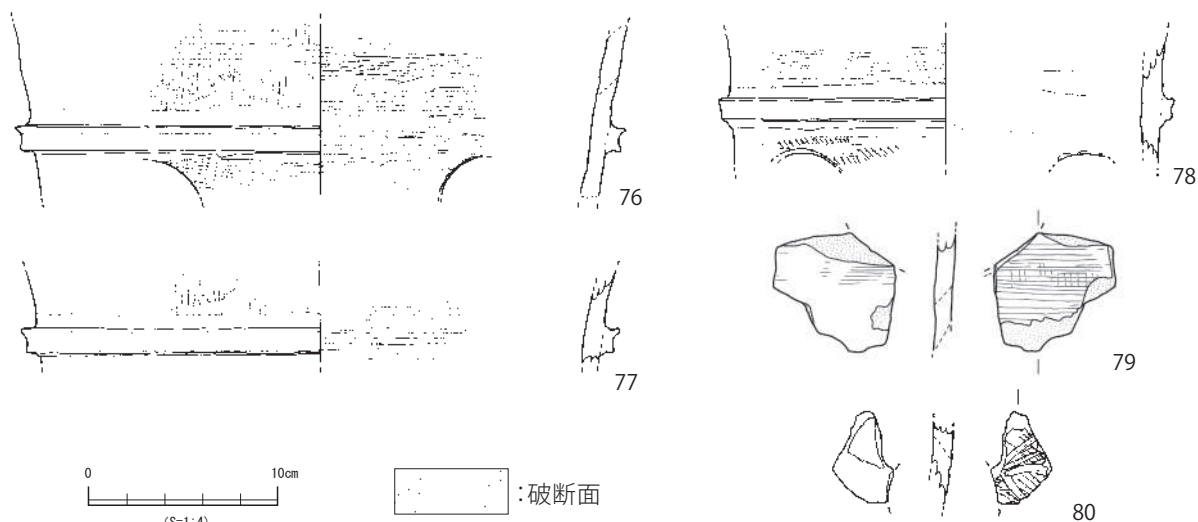


図4-35 出土遺物(7)

転ヨコハケ)。二次調整の回転ヨコハケは、2段目以上には施すが、基底部は省略されるものも多い。

口縁端部の調整 口縁端部の内外面および上面を整える。口縁部の形状は、大半は直線的に立ち上がるが、ナデにより屈曲するものもある(9・10)。口縁部のナデは、切合関係から一次調整のタテハケの後に行われることは確かだが、二次調整の回転ヨコハケとの前後関係は個体により違いがある。1・2・22・47は、二次調整後にナデをおこなっているが、18は端部のナデのあとに二次調整を行っている。

透孔の穿孔 円筒埴輪は、3条4段では3段目に、2条3段目は2段目に、円形の透孔を対向する2箇所にあける。段構成に関わりなく、上から2段目にのみ穿孔する。

ヘラ記号 一部の個体については、透孔の近辺に記号を線刻する。勝手塚古墳の場合、2種類の記号があり、いずれも透孔の、向かって右側に施している。一つは、起点から右上、右、右下と3方向に放射状に直線を線刻するものである(10・81)。もう一つは、透孔の右側に半円形状に線刻する(19・84)。線刻の幅は3mmほどで、やや広く浅い。志段味古墳群の埴輪には、鋭利な鉄製工具(刀子)の使用を思わせる幅狭く深い線刻もあるが、勝手塚古墳の線刻は先端がやや丸いヘラ状工具などが想定される。記号が施されるタイミングは、84の透孔と線刻の切り合いより透孔穿孔後、器面が乾燥する前に行っていると判断される。

底部の調整 円筒埴輪の底部下端の粘土を、ロクロを回転させながら工具を用いて削り取る。これは、ロクロ板と底部底面の接地面積を小さくし、円筒埴輪をロクロから外しやすくするために行われたと推定される。実測図に掲載した底部の破片のうち倒立技法が用いられたものと痕跡不明なものを除くと、内面下端を削っているのは11点、未調整のものは11点である。外面下端は、ケズリ調整による砂粒の移動が見られずナデているものが多い。ナデまたはケズリ調整するものは、12点、未調整のものは2点である。

底部切り離し 埴輪をロクロから分離させるため、底面とロクロの間に外側から工具を差し込み、ロクロの回転力を利用しながら切り離す。埴輪の底面はロクロ板と密着しているため、工具は徐々に深く差し込んでいくようである。途中までしか工具を差し入れないものもあるようで、その場合底面の外側は平滑な面で内側は粗い面が生じる(61・62)。工具の挿入角度が大きくなると、57のように底部下端が抉れたようになり、接地面積が狭くなる。底部に植物の茎などの圧痕が認められ、工具で切り離した痕跡は認

められない個体もある(8・86)。底面の切り離しが行われた個体は、倒立技法のものと痕跡不明なものを除くと10個体で、工具による切り離し痕跡が認められないものは3個体である。摩耗等により底面の痕跡が明瞭でない個体が多いものの、底部の切り離しは、高頻度で行われているようである。底部下端のケズリ調整と底部の切り離しは、必ずしも一連の行為として実施されるわけではないようであり、底部内面のケズリが認められるが切り離し痕跡がみられないもの(6)や、底部下端のケズリ調整を行わず底面の切り離しをおこなうもの(14・46・68)が認められる。

埴輪の移動 ロクロから埴輪を切り離した後、埴輪を乾燥させるため、ロクロから外して移動させる。その際に紐状の道具が使用される。円筒埴輪の周囲に紐を回し、指で紐を手繰りながら埴輪の器面に紐と指(指の背・関節)が密着させた状態で持ち上げる方法が復元されている。その痕跡として紐がずれた跡(ヒモズレ)・指がずれたり圧着したりした跡(ユビズレ)が認められる(犬塚1994・浅田2004)。勝手塚古墳の場合、こうしたヒモズレやユビズレの痕跡がある個体(5)以外にも、撚った縄目の圧痕が認められるものが存在する(18・54・62・83、註1)。この縄目圧痕は、ヒモズレ痕跡と同様に、基底部外面に左右が高く中心が低い円弧状の痕跡として確認できる。その違いは、ヒモズレ痕は対向する両面に器面上を動いた擦痕および圧痕として認められ、ユビズレ痕跡を伴うのに対し、縄目は片面にのみ(特徴①)に浅い圧痕として残り(特徴②)、ユビズレ痕跡を伴わない(特徴③)ことである。こうした痕跡の違いから、縄目圧痕とヒモズレ・ユビズレ痕は、原体の違いだけでなく、痕跡の原因となった動作も異なっていたと推定される。

特徴①より、縄が埴輪と接しているのは片面のみであり、特徴②より、円筒埴輪の乾燥が進行した段階で縄がかけられたか、または埴輪の荷重が大きく縄にかからなかったか、あるいはその両方の原因が考えられる。こうした特徴から、一つには、製作者から見て、ロクロ上にある埴輪の背面基底部に縄を回し、縄を手前側に引き、ロクロ上の埴輪をわずかに浮かせて外すために用いられた可能性が考えられる。または、乾燥が進んだ段階で、製作者側の基底部に縄を当て、縄と製作者の身体で埴輪を固定し移動させるといった行為も想定される。しかし、これらの動作に伴うであろう他の痕跡(縄目圧痕に対向する底部下端の潰れ、製作者の身体で支えた際の痕跡等)が明確でないため、可能性を指摘するに留めたい。

勝手塚古墳では、縄目圧痕がある埴輪とヒモズレをもつ埴輪の両者が出土しているが、前者が多い。試掘調査時の資料も含めてその底径を比較すると、縄目圧痕をもつ埴輪の方が、ヒモズレ・ユビズレ痕がある埴輪に比べて底径が大きい傾向がある(図4-36)。統計をとってはいないものの、6世紀の尾張の円筒埴輪では、底径とサイズ(器高・重量)の大きさには、正の相関があると考えられることを考慮すると、大型の埴輪の移動(分離)に対して縄を用いた可能性がある。埴輪をロクロから移動させる際に、重量の小さい埴輪は、紐と指で垂直方向に持ち上げることができるが、紐で持ち上げることができない重量の大きい埴輪は、縄を用いてロクロからの分離、

②朝顔形埴輪(図4-37)

朝顔形埴輪は、4条突帯の円筒部の上に内彎する肩部と二重の口縁部が取り付け構成に復元される(81~83)。円筒部

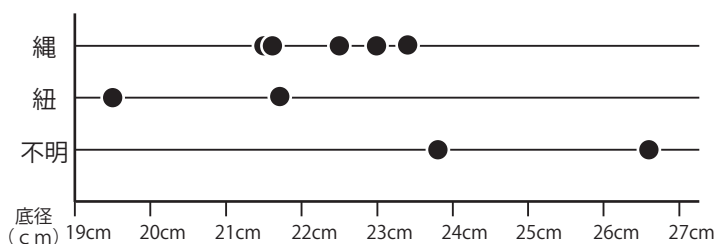


図4-36 紐・縄痕跡がある円筒埴輪の底径

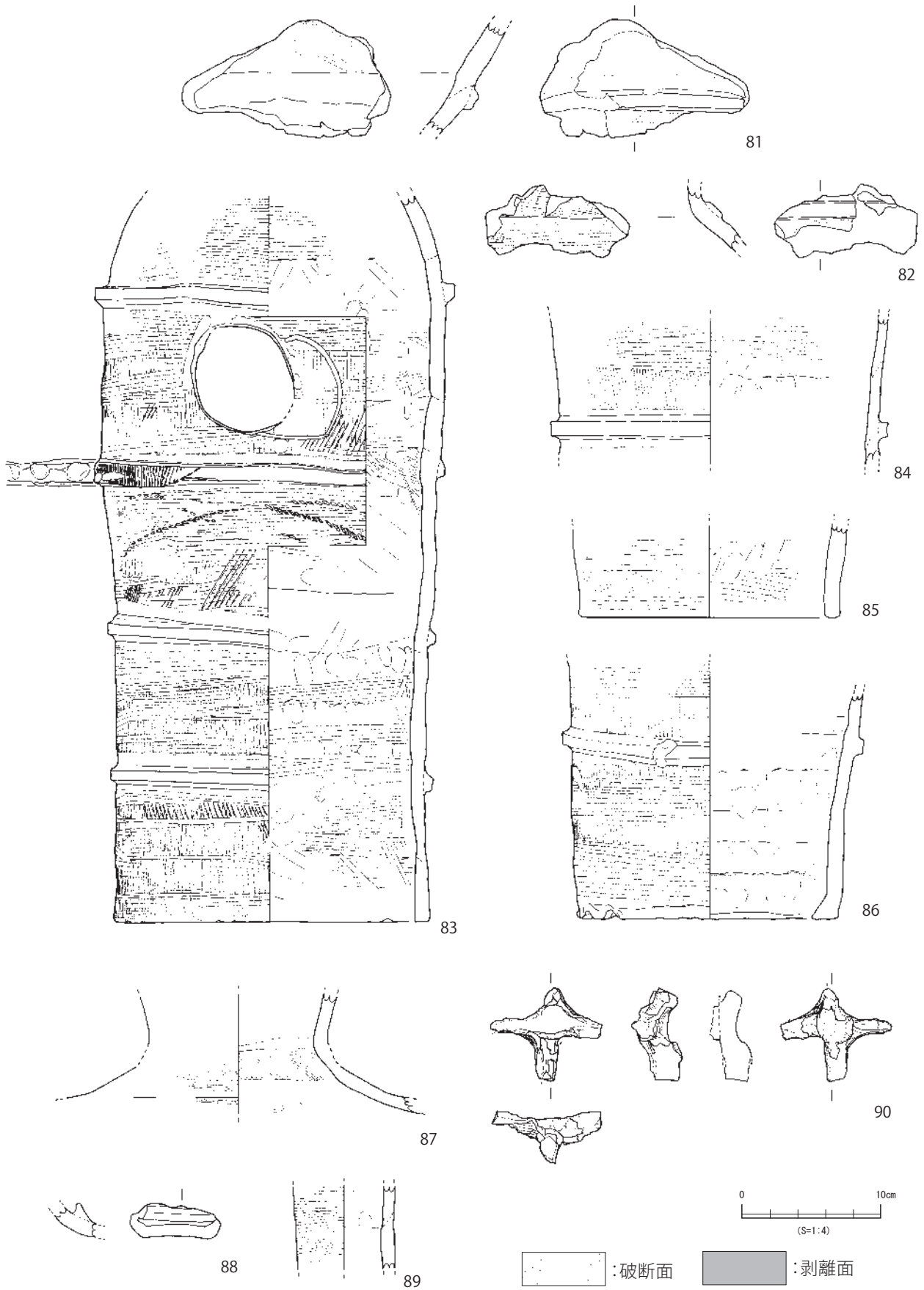


图4-37 出土遺物(8)

は、円筒埴輪と異なり胴部があまり外傾せず垂直気味に立ち上がる。83は、倒立技法により成形しており、底部から約38cmの高さの位置が、倒立前の底部である。3段目には、片面に縄目圧痕が認められ、円筒埴輪とは円弧が天地逆になっていることから、倒立前につけられたものと判断される。三段目の突帯には下方向に力がくわえられた指頭の圧痕が認められることから、この部分に指をかけ、埴輪を倒立したものと推測される。1～4段目および3段目の突帯上には平行タタキの痕跡も認められる。85は、埴輪列として据え付けられた状態で検出したため底部と認識できたが、造作は口縁部と同様であり、倒立技法によって製作されたことを示している。84・86は、直立気味に立ち上がるプロポーションより朝顔形埴輪と判断した。86は、円筒埴輪と同様に底部が厚く、正立にて製作されている。これを朝顔形埴輪と認めるとすれば、朝顔形埴輪は、倒立と正立の両工程で作られたものが存在することになる。

③蓋形埴輪（図4-37）

87は軸受部から笠部にかけての部分であり、88は笠部の突帯と推測される。89・90は立ち飾り部である。89は軸部、90は直行する飾り板の接続部分である。十字に粘土を組み合わせた後、接続部分に粘土を充填している。

（2）土器類（図4-38）

古墳時代の土器では、土師器（91・92・100・101・102・103）と須恵器（93・94）が出土している。100は、S字状口縁台付甕である。口縁部の屈曲はにぶく端部はやや肥厚し、頸部には沈線が施される。体部はやや肩が張るプロポーションを残しているがヨコハケは欠損している。S字甕D類の中段階～新段階（松河戸I式3・4段階～II式1段階）に位置付けられる。91・92・102・103は高坏の脚部でありいずれも古墳時代前・中期の屈折脚である。93には、沈線と波状文が認められる小片である。勝手塚古墳出土と推定される京都大学総合博物館所蔵資料「志段味村出土品」には、高坏形器台があり、これに類するものである可能性がある（深谷編2017）。94は甕類の体部であり外面にタタキ痕を残す。

その他、104は古代の須恵器と推定されるが器種は不明である。95・105・106は山茶碗の底部である。近世の常滑窯の甕であり口縁部縁帯が頸部に接着しており、15世紀の生産と考えられる。110の玉縁状の口縁部をもつ播鉢であり、19世紀後半に位置付けられる。また、窯道具が出土しており、98・107はトチン、99はエブタ、108は丸底匣鉢（エンゴロ）がある。近世末以降のものと推定する。

表4-1 出土遺物観察表(1)

No	種類	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
1	円筒埴輪	口縁部	1 トレンチ (1 次) 周濠 表土	口径:(30.3) 残存高:6.9	1/8	口縁端部:ナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	
2	円筒埴輪	口縁部	1 トレンチ (1 次) 墳丘 2 段目 表土	残存高:6.0 残存幅:8.6	1/10	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	
3	円筒埴輪	胴部	1 トレンチ (1 次) 周濠 表土	残存高:6.9 残存幅:8.4	—	タテハケ→ヨコハケ	ナデ	内外:7.5YR8/4 ~ 7/4 浅黄橙~にぶい橙	
4	円筒埴輪	胴部	1 トレンチ (1 次) 埴輪列周辺	残存高:7.7 残存幅:8.2	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	内外:7.5YR6/6 橙	
5	円筒埴輪	底部	1 トレンチ (1 次) 墳丘 1 段目斜面 表土	底径:(21.8) 残存高:13.6	1/10	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデか	底部:ハケ→ナデ 底部下端:ケズリ	内外:7.5YR7/6 橙	外面にヒモズレ 痕
6	円筒埴輪	底部	1 トレンチ (1 次) 周濠上位 表土	底径:(25.0) 残存高:5.3	1/10	底部:ヨコハケ	底部:ヨコハケ 底部下端:ケズリ	内外:10YR8/2 灰白 断面:5YR6/6 橙	
7	円筒埴輪	底部	1 トレンチ (1 次) 周濠 表土	底径:(16.0) 残存高:4.5	1/5	底部:ヨコハケか	底部:ナデ 底部下端:ケズリ	内外:10YR7/4 にぶ い黄橙	
8	円筒埴輪	口縁部~ 底部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.8	口径:(33.0 ~ 38.8) 器高:50.2 底径:22.7 ~ 25.5	9/10	口縁端部:ヨコナデ 胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ 底部:タテハケ 底部下端:ケズリか	口縁端部:ナデ 胴部:ヨコハケ 底部下端:ナデ	内外:7.5YR7/6 ~ 6/6 橙	底面に植物茎圧 痕
9	円筒埴輪	口縁部	2 トレンチ (1 次) テラス直上	残存高:9.8 残存幅:11.7	—	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 ~ 6/2 橙~灰褐	外面に凹線条の 工具痕
10	円筒埴輪	口縁部	2 トレンチ (1 次) 表土	残存高:4.5 残存幅:7.5	—	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ナデ	内外:7.5YR6/4 ~ 6/1 にぶい橙~褐灰	
11	円筒埴輪	胴部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.6	残存高:5.7 残存幅:8.7	—	不明	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	
12	円筒埴輪	胴部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.1	胴部突帯径:(29.4) 残存高:7.4	1/5	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	内外:7.5YR7/6 ~ 10YR7/4 橙~にぶい 黄橙	
13	円筒埴輪	胴部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.4	胴部突帯径:(27.2) 残存高:13.2	1/5	胴部:タテハケ→ヨコハケ→ タタキ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	朝顔形埴輪の可 能性あり
14	円筒埴輪	底部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.4	底径:23.8 残存高:25.1	9/10	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ 底部:タテハケ 底部下端:ナデ	胴・底部:ユビナデ 底部下端:未調整	内外:10YR7/6 明黄 褐	外面にヒモ(縄) 圧痕 底面に切り離し 痕
15	円筒埴輪	底部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.3	底径:19.9 残存高:13.3	4/5	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:不明	底部:ヨコハケ 底部下端:未調整	内外:10YR8/4 浅黄 橙	
16	円筒埴輪	底部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.7	底径:18.6 残存高:7.9	3/4	底部:タテハケ 底部下端:不明	底部:不明 底部下端:未調整	内外:10YR8/4 浅黄 橙	底面に切り離し 痕
17	円筒埴輪	底部	2 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.9	底径:(16.4) 残存高:6.5	3/10	底部:タテハケ、ヨコハケ 底部下端:不明	底部:不明 底部下端:不明	内外:10YR8/4 浅黄 橙	
18	円筒埴輪	口縁部~ 底部	3 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.4	口径:(38.0) 器高:44.9 底径:23.0	1/1	口縁~胴部:タテハケ→ヨコ ハケ 突帯:ヨコナデ 底部:タテハケ 底部下端:ナデ	口縁部~底部: ヨコハケ、ユビナデ 底部下端:未調整	内外:7.5YR6/8 橙	ヘラ記号あり 外面に縄目圧痕
19	円筒埴輪	胴部	3 トレンチ (1 次) 表土	残存高:7.1 残存幅:7.3	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:7.5YR6/6 橙 断面:5Y6/2 灰オリ ーブ	外面に円弧状の ナデ跡
20	円筒埴輪	胴部	3 トレンチ (1 次) 表土	残存高:7.1 残存幅:11.2	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR6/6 ~ 6/8 橙	
21	円筒埴輪	胴部	3 トレンチ (1 次) 表土	残存高:7.9 残存幅:10.5	—	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	不明	内外:7.5YR7/6 橙	
22	円筒埴輪	口縁部	3 トレンチ (1 次) 埴輪列付近	口径:(32.8) 残存高:7.8	1/8	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ヨコハケ	内外:5YR6/8 橙	
23	円筒埴輪	胴部	4 トレンチ (1 次) 表土	残存高:7.0 残存幅:10.1	—	タテハケ→ヨコハケ	胴部:ヨコハケ、ユビ オサエ	内外:10YR8/3 浅黄 橙 断面:7.5YR6/6 橙	外面に突帯設定 ヨコナデ
24	円筒埴輪	口縁部	5 トレンチ (1 次) 周濠肩付近 流土	残存高:8.3 残存幅:8.1	—	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ヨコハケ	内外:7.5YR8/6 浅黄 橙	
25	円筒埴輪	胴部	5 トレンチ (1 次) 周濠肩付近 流土	胴部突帯径:(27.2) 残存高:6.4	1/6	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR8/6 黄橙	
26	円筒埴輪	胴部	5 トレンチ (1 次) 周濠肩付近 流土	胴部突帯径:(34.8) 残存高:9.7	1/6	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR8/6 浅黄 橙	
27	円筒埴輪	胴部	5 トレンチ (1 次) 周濠底 埴輪集中	残存高:7.8 残存幅:13.7	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	内外:7.5YR8/6 浅黄 橙	
28	円筒埴輪	胴部	5 トレンチ (1 次) 周濠底 埴輪集中	残存高:11.5 残存幅:10.9	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ユビオサエ	内外:7.5YR8/6 浅黄 橙	
29	円筒埴輪	胴部	5 トレンチ (1 次) 周濠底 埴輪集中	残存高:9.2 残存幅:9.4	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR8/6 浅黄 橙	
30	円筒埴輪	口縁部	6 トレンチ (1 次) 埴輪列 No.1	口径:(36.5) 胴部突帯径:(35.2) 残存高:13.5	1/10	口縁部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコ・ナメハケ	内外:10YR7/6 ~ 6/2 明黄褐~灰黄褐	外面に植物圧痕

表4-2 出土遺物観察表(2)

No	種類	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
31	円筒埴輪	口縁部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.4	残存高:9.0 残存幅:10.1	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR6/4 ~ 10YR6/1 にぶい橙~ 褐灰	
32	円筒埴輪	口縁部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.4	残存高:8.6 残存幅:6.1	—	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	
33	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.1	胴部径:(21.8 ~ 23.6)	1/6	タテハケ	ナデ	内外:7.5YR67/6 橙	
34	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)	胴部突帯径:(31.4) 残存高:9.3	1/10	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:2.5Y6/2 灰黄	
35	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.5	胴部突帯径:(29.0) 残存高:9.1	3/20	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナナメハケ→ヨコハケ	内外:10YR7/6 ~ 10YR6/2 明黄褐~灰黄褐	突帯下端に指をかけた跡
36	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.5	胴部突帯径:(30.1) 残存高:9.8	1/10	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR6/1 褐灰	
37	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.4	胴部突帯径:(27.6)	1/10	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ユビオサエ	内外:7.5YR6/2 灰褐	
38	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.2	残存高:10.7 残存幅:9.6	—	胴部:ヨコハケ→タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR8/4 ~ 7/2 浅黄橙~にぶい黄橙	
39	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.2	残存高:7.1 残存幅:8.4	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ、ユビオサエ	ヨコハケ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	
40	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪列 No.2	残存高:8.6 残存幅:10.1	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR7/4 にぶい黄橙	
41	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)埴輪 No.4	残存高:8.4 残存幅:6.6	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR6/2 灰黄褐	
42	円筒埴輪	胴部	6トレンチ(1次)表土	残存高:5.4 残存幅:7.0	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 ~ 6/2 橙~灰褐	
43	円筒埴輪	口縁部	7トレンチ(1次)表土	残存高:5.5 残存幅:5.8	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	
44	円筒埴輪	胴部	7トレンチ(1次)表土中	残存高:3.7 残存幅:6.0	—	突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR6/8 橙	
45	円筒埴輪	底部	7トレンチ(1次)表土	残存高:8.2 残存幅:6.2	—	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデ	底部:ナデ 底部下端:ケズリ	内外:2.5Y7/3 浅黄断面:2.5Y5/2 暗灰黄、7.5YR7/4 にぶい橙	
46	円筒埴輪	口縁部~底部	8トレンチ(1次)土坑	口径:(37.3) 底径:26.6 器高:51.3	4/5	口縁端部:ヨコナデ 口縁部~底部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ 底部下端:ケズリ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部~底部:ヨコハケ 底部下端:未調整	内外:7.5YR7/6 橙	ヘラ記号あり 赤彩あり 外面にヒモ(縄)の痕跡
47	円筒埴輪	口縁部	8トレンチ(1次)流土	残存高:5.9 残存幅:7.8	—	口唇端部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	
48	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)土坑	残存高:6.1 残存幅:7.5	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ユビオサエ	内外:10YR8/4 浅黄橙 断面:5YR7/6 橙	
49	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)土坑	残存高:7.9 残存幅:7.0	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	内外:5YR6/6 ~ 6/8 橙	
50	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)流土	残存高:8.8 残存幅:8.0	—	胴部:ヨコハケ一部タテハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ、ユビオサエ	内外:5YR5/6 明赤褐	
51	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)流土	残存高:5.8 残存幅:6.4	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR5/6 明赤褐	
52	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)土坑	残存高:9.6 残存幅:11.4	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ユビオサエ	内外:7.5YR7/6 橙	
53	円筒埴輪	胴部	8トレンチ(1次)土坑	残存高:7.8 残存幅:11.0	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ユビオサエ	内外:7.5YR7/6 橙	
54	円筒埴輪	底部	8トレンチ(1次)土坑	底径:(23.4) 残存高:12.6	1/4	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデ	底部:ヨコハケ、ナデ 底部下端:未調整	内外:7.5YR7/8 橙	外面に縄目圧痕 底面に切り離し痕
55	円筒埴輪	口縁部	9トレンチ(1次)埴輪列 No.1	残存高:3.8 残存幅:4.6	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR7/8 橙	
56	円筒埴輪	胴部	9トレンチ(1次)埴輪列 No.1	残存高:3.5 残存幅:3.5	—	胴部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	
57	円筒埴輪	底部	9トレンチ(1次)埴輪列 No.2	底径:(24.7) 残存高:8.5	1/2	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:未調整	底部:ヨコナデ 底部下端:ケズリ	内外:5YR7/8 橙	底面に切り離し痕
58	円筒埴輪	底部	9トレンチ(1次)埴輪列 No.3	底径:(25.0) 残存高:6.0	1/3	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデか	底部:ナデ、ユビオサエ 底部下端:未調整	内外:5YR7/8 橙	底面に切り離し痕
59	円筒埴輪	底部	10トレンチ(2次)表土	底径:(23.0) 残存高:7.2	1/6	底部:ヨコハケ 底部下端:不明	底部:ナデ 底部下端:不明	内外:7.5YR7/6 橙	
60	円筒埴輪	底部	10トレンチ(2次)表土	底径:(21.5) 残存高:5.6	1/6	底部:タテハケ 底部下端:ナデか	底部:ナデ 底部下端:ケズリ	内外:7.5YR6/6 橙 断面:5YR6/8 橙	底面に切り離し痕
61	円筒埴輪	底部	11トレンチ(2次)表土	残存高:6.2 残存幅:6.0	—	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデか	底部:ナデ 底部下端:ケズリ	外面:7.5YR5/3 にぶい褐 内面:7.5YR7/6 橙 断面:10YR6/1 褐灰	62 と同一個体か

No	種類	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	色調	備考
62	円筒埴輪	底部	11 トレンチ (2次) 表土	底径:(21.6) 残存高:8.7	1/8	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデか	底部:ナデ 底部下端:ケズリ	外面:5YR6/1 褐灰 内面:7.5YR7/6 橙 断面:10YR7/1 灰白	61 と同一個体か
63	円筒埴輪	口縁部	12 トレンチ (2次) 黄灰色土	残存高:6.3 残存幅:6.8	—	口縁部:ヨコナデ 口縁部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR6/6 橙 断面:7.5YR6/6 橙	
64	円筒埴輪	胴部	12 トレンチ (2次) 表土	残存高:5.9 残存幅:7.5	—	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	不明	内外:7.5YR6/4 にぶ い橙	
65	円筒埴輪	胴部	12 トレンチ (2次)	残存高:6.8 残存幅:9.8	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR4/1 褐灰 断面:7.5YR6/4 にぶ い橙	
66	円筒埴輪	胴部	12 トレンチ (2次)	残存高:9.5 残存幅:8.9	—	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:5YR6/6 橙 断面:7.5YR5/3 にぶ い褐	
67	円筒埴輪	底部	12 トレンチ (2次) 黄灰色土	残存高:5.0 残存幅:7.5	—	底部:ヨコハケ 底部下端:未調整	不明	内外:5YR7/6 橙 断面:7.5YR4/2 灰褐	
68	円筒埴輪	底部	12 トレンチ (2次)	底径:(18.2) 残存高:4.4	1/6	底部:ヨコハケ 底部下端:ナデ	底部:ヨコハケ 底部下端:未調整	内外:5YR6/6 橙 断面:7.5YR4/2 灰褐	
69	円筒埴輪	胴部	13 トレンチ (2次) 周濠	胴部突帯径:(25.8)	1/10	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	外面:N4/~5/ 灰 内面:7.5Y7/1 灰白	
70	円筒埴輪	胴部	13 トレンチ (2次)	残存高:7.7 残存幅:5.2	—	タテハケ→ヨコハケ	ナデ、ユピオサエ	内外:7.5YR7/8 黄橙	
71	円筒埴輪 (底部)	胴部 (底部)	13 トレンチ (2次)	残存高:5.5 残存幅:6.2	—	ヨコハケ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/8 黄橙	外面に縄目圧痕
72	円筒埴輪	底部	13 トレンチ (2次)	底径:(19.2) 残存高:3.4	1/6	底部:タテハケ 底部下端:不明	底部:ヨコハケ 底部下端:未調整	外面:10YR8/6 黄橙 内面:7.5YR6/6 橙	
73	円筒埴輪	底部	13 トレンチ (2次) 埴輪列 B	底径:(21.2) 残存高:5.4	1/4	底部:タテハケ→ヨコハケ 底部下端:ナデ	底部:ヨコハケ 底部下端:ケズリ	内外:5YR7/8 橙	
74	円筒埴輪	底部	13 トレンチ (2次) 埴輪列 D	底径:(19.9) 残存高:8.9	4/5	不明	底部:不明 底部下端:ケズリ	内外:2.5Y8/3 ~7/3 淡黄~浅黄	
75	円筒埴輪	底部	13 トレンチ (2次)	底径:(21.2) 残存高:6.7	1/8	底部:ヨコハケ 底部下端:不明	底部:ヨコハケ 底部下端:ケズリ	内外:7.5YR7/8 黄橙	
76	円筒埴輪	胴部	14 トレンチ (3次) 埴輪集中土坑	胴部突帯径:(32.2) 残存高:8.8	1/6	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:7.5YR7/6 橙	77 と同一個体か
77	円筒埴輪	胴部	14 トレンチ (3次) 埴輪集中土坑	胴部突帯径:(31.6) 残存高:4.3	1/6	胴部:タテハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ	内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	76 と同一個体か
78	円筒埴輪	胴部	14 トレンチ (3次) 埴輪集中土坑	胴部突帯径:(24.0)	1/6	胴部:ヨコハケ→タタキ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	朝顔形埴輪の可 能性あり。80 と 同一個体化
79	円筒埴輪	胴部	14 トレンチ (3次) 埴輪集中土坑	残存高:6.1 残存幅:6.4	—	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:10YR7/6 明黄 褐色	
80	円筒埴輪	胴部	14 トレンチ (3次) 埴輪集中土坑	残存幅:3.2 残存高:4.8	—	タタキ→ヘラ記号→赤	ナデか	内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	ヘラ記号。赤彩。 80 と同一個体か
81	朝顔形埴輪	口縁部	3 トレンチ (1次) 埴輪列 No.5	残存高:8.5 残存幅:15.0	—	口縁部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコ・ナナメハケ	内外:7.5YR7/8 黄橙	83 と同一個体か
82	朝顔形埴輪	肩部	3 トレンチ (1次) 埴輪列付近	残存高:5.2 残存幅:10.2	—	肩部:ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコ・ナナメハケ	外面:5YR7/8 橙 内面:7.5YR7/6 橙	
83	朝顔形埴輪	肩部~底 部	3 トレンチ (1次) 埴輪列 No.5	底径:22.5 残存高:52.2	1/1	肩部~底部:タテハケ→ヨコ ハケ 胴部:ハケ→タタキ 突帯:ヨコナデ	肩部~底部:ヨコハケ、 ナデ	内外:5YR6/8 ~ 7.5YR7/8 橙~黄橙	ヘラ記号 倒立成形 外面に縄目圧痕 81 と同一個体か
84	朝顔形 / 蓋 形埴輪	円筒部	2 トレンチ (1次) 埴輪列 No.5	胴部突帯径:(24.1) 残存高:10.4	1/7	胴部:タテハケ→ヨコハケ 突帯:ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ	内外:7.5YR7/8 ~ 6/4 黄橙~にぶ い橙	86 と同一個体か
85	朝顔形 / 蓋 形埴輪	底部	13 トレンチ (2次) 埴輪列 E	底径:(18.8) 残存高:6.7	1/2	底部:タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ	内外:5YR6/8 橙	倒立成形
86	朝顔形 / 蓋 形埴輪	底部	2 トレンチ (1次) 埴輪列 No.5	底径:18.7 残存高:18.5	1/1	胴部~底部:タテハケ→ヨコ ハケ 突帯:ヨコナデ	ナデ	内外:7.5YR7/8 黄橙	底面に植物茎圧 痕 84 と同一個体か
87	蓋形埴輪	笠部	8 トレンチ (1次) 南サブトレンチ	筒頸部径:(12.8) 残存高:9.8	3/10	ヨコハケ	ヨコナデ、ナナメハケ	内外:5YR6/8 橙	
88	蓋形埴輪	笠部	2 トレンチ (1次) 表土	残存高:2.5 残存幅:6.5	—	突帯:ヨコナデ	不明	内外:5YR6/6 橙	
89	蓋形埴輪	軸部	5 トレンチ (1次) 表土	筒部径:6.9 ~ 7.2 残存高:6.1	7/10	ヨコハケ	ナデ、ユピオサエ	内外:7.5YR7/6 橙	
90	蓋形埴輪	立ち飾り 部	8 トレンチ (1次) 表土	残存高:3.6 残存幅:6.7	—	ハケ、ナデ		外面:7.5YR6/4 にぶ い橙 断面:2.5Y7/1 灰白	

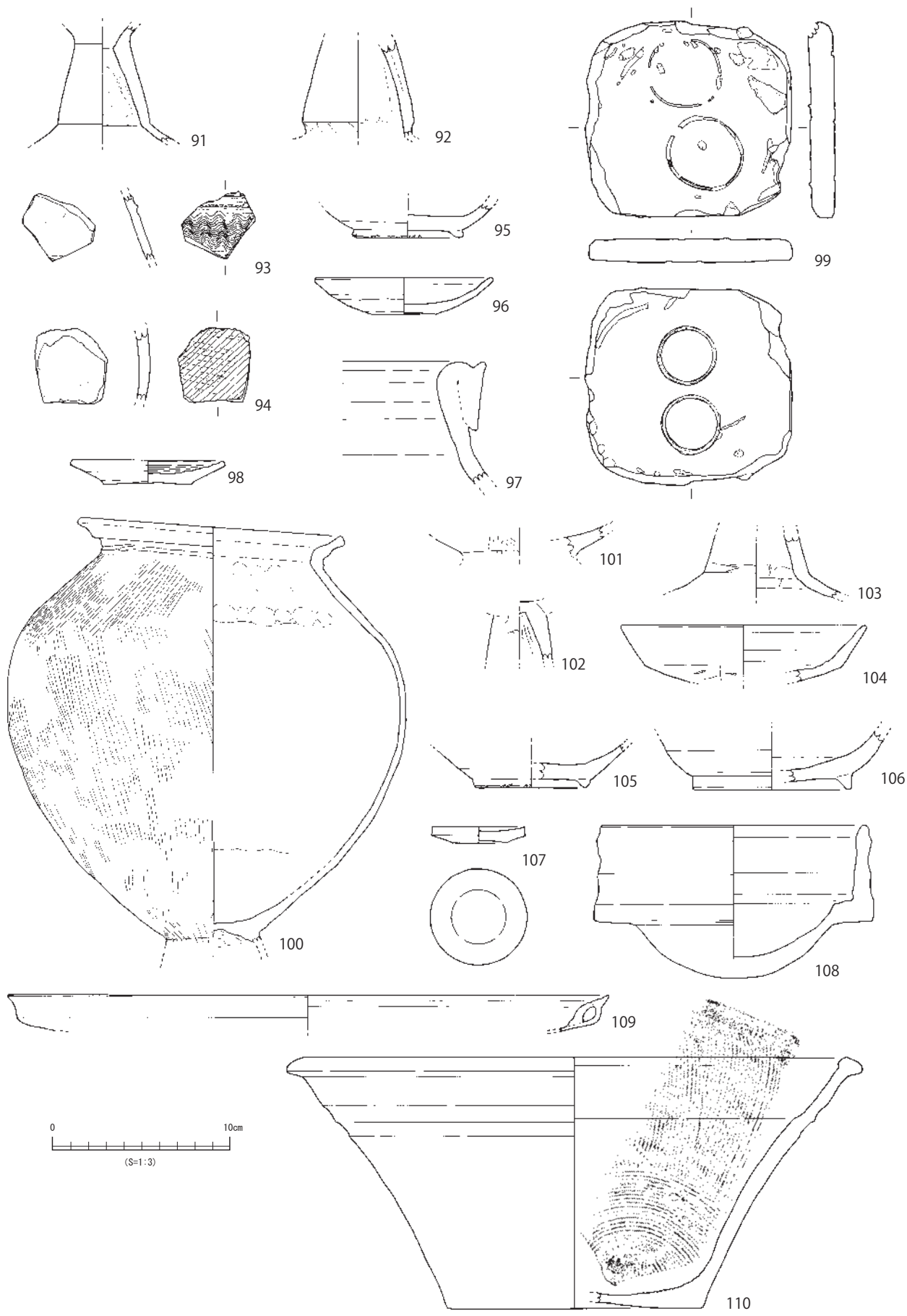


图4-38 出土遺物 (9)

表4-4 出土遺物観察表(4)

No	種類	器形	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	色調	備考
91	土師器	高坏	脚部	4トレンチ(1次) 流土	脚頸部径:(3.1) 残存高:6.5	2/5	内外:10YR8/2 ~ 2.5YR7/6 灰白~橙	
92	土師器	高坏	脚部	4トレンチ(1次) 流土	脚柱部最大径:(6.2) 残存高:5.4	1/5	内外:7.5YR6/4 ~ 10YR6/3 にぶい橙~ にぶい黄橙	断面に粘土接合痕
93	須恵器	器台か	脚部	2トレンチ(1次) 流土	残存高:3.7 残存幅:4.1	—	外面:5Y4/1 灰 内面:2.5Y7/2 灰黄	波状文、刻み目
94	須恵器	甃		5トレンチ(1次) 流土	残存高:4.2 残存幅:4.1	—	外面:5Y6/1 灰 内面:10YR7/2 にぶい黄橙	
95	山茶碗	碗	底部	1トレンチ(1次) 周濠 表土	底径:6.2 残存高:1.9	4/5	内外:10YR7/2 灰白	
96	陶器	小皿	口縁部 ~底部	5トレンチ(1次) 墳丘斜面 表土	口径:(9.7) 器高:2.0 底径:(3.6)	1/2	内外:2.5Y8/3 淡黄	
97	陶器	甃	口縁部	3トレンチ(1次) 表土	残存高:6.9	—	内外:10YR8/4 ~ 7/4 浅黄橙~にぶい 黄橙	常滑
98	窯道具	トチン		1トレンチ(1次) 埴輪列(テラス)周辺	口径:8.3 器高:4.9 底径:1.4	1/1	内外:2.5Y8/1 灰白	
99	窯道具	エフタ		1トレンチ(1次) 埴輪列(テラス)周辺	縦:11.0 横:11.5 厚さ:1.3	—	外面:10YR4/3 ~ 5Y5/6 にぶい黄褐~ オリーブ色	
100	土師器	甃	口縁部 ~底部	12トレンチ(2次) 堤下層	口径:14.3 残存高:23.9 胴部最大径:22.3	2/3	内外:10YR8/4 浅黄橙 断面:10YR2/1 黒	S字状口縁台付甃(D類) 外面被熱
101	土師器	甃	脚部	12トレンチ(2次) 堤下層	残存高:1.5	1/6	内外:2.5Y8/1 灰白	S字状口縁台付甃
102	土師器	高坏	脚部	13トレンチ(2次) サブトレンチ内	残存高:3.3	1/1	内外:5YR6/4 にぶい黄橙	
103	土師器	高坏	脚部	13トレンチ(2次) No.13	残存高:3.5	1/4	内外:10YR8/2 灰白 断面:7.5YR8/2 灰白	
104	須恵器	須恵器	口縁部	13トレンチ(2次) 表土	口径:(13.7) 残存高:3.2	1/8	内外:10YR5/2 灰黄褐	
105	山茶碗	碗	底部	13トレンチ(2次) 表土 No.15	底径:(6.0) 残存高:2.4	1/3	内外:2.5Y7/3 浅黄	
106	山茶碗	碗	底部	13トレンチ(2次) 堀肩周辺	底径:(8.8) 残存高:3.4	1/4	内外:5Y7/2 灰白	
107	土師器	焙烙	口縁部	12トレンチ(2次) 表土	口径:(33.8) 残存高:2.0	1/12	外面:10YR3/1 黒褐 内・断面:10YR6/4 にぶい黄褐	外面煤付着
108	陶器	播鉢		10トレンチ(2次) 表土	口径:(30.6) 器高:14.0 底径:(7.4)	1/4	釉薬:7.5YR4/6 褐	
109	窯道具	トチン (ハマ)		13トレンチ(2次) 黄灰色土	直径5.1 器高0.9	5/6	内外:5Y7/1 灰白	
110	窯道具	丸底匣鉢 (エンゴロ)		10トレンチ(2次) 周濠 表土	口径:(14.6) 器高:8.5	1/4	外面:7.5YR5/4 にぶい褐 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	

註

1 ヒモズレ痕には、「蔓あるいは紐のような細い原体によるもの」と「あきらかな撚り目をもつ荒縄状の原体によるもの」があることは、藤井康隆氏が指摘している(藤井2003)。

2 管見の限り尾張周辺で縄目圧痕をもつ埴輪は、勝手塚古墳以外では愛知県名古屋市の断夫山古墳(前方後円墳・150m)・白鳥古墳(前方後円墳・70m)、岐阜県大野町不動塚古墳(前方後円墳・62m)から出土している。いずれも6世紀前半代の築造で、墳丘規模に応じて円筒埴輪も大型のものが多い。(ただし、断夫山古墳の円筒埴輪の縄目は一周しており、別の用途も考える必要がある。)一方で、ヒモズレ痕跡を残す埴輪は尾張では多数認められるが、小型の埴輪に多く認められる。

参考文献

赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第10集
 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
 赤塚次郎 1994「松川戸様式の設定」『松川戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
 浅田博造 2004「円筒埴輪の製作技法」『味美二子山古墳』春日井市教育委員会
 犬塚康博 1994「味美技法批判」『名古屋博物館研究紀要』第17巻 名古屋博物館
 深谷淳編 2017『志段味古墳群Ⅲ 志段味大塚古墳の副葬品』名古屋市文化財調査報告94 名古屋市教育委員会
 深谷淳・瀬川貴文編 『志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告79 名古屋市教育委員会
 藤井康隆 2003「『尾張型埴輪』の諸問題」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』第52回埋蔵文化財研究集会

9 レーダー探査の成果

今回の探査では、明治期に埋められたとされる南側の周濠の存在を探ること、また、周濠が2重である可能性を探ることを目的としてレーダー探査を実施した。巻頭図版8-1は古墳実測図に今回の成果を重ねた図である。この図を用い成果をまとめておきたい。

(1) 古墳の周堤を巡る範囲について

古墳の周堤についてはE区、F区、G区においてとらえることができた。E区については1967年の測量時よりさらに外側まで周堤が巡っていた可能性が高いといえる。

墳丘の南側の周堤についてもA区、B区、C区において推定ラインを求めた。これらは過去の測量ラインと重なる部分が多く、C区では遺物が残存している可能性がある。巻頭図版8-1で今回の探査をもとに周濠と周堤の推定ラインを求めた。不規則な形状となっているが、今後、史跡整備や発掘調査で比較検討されることが望まれる。

周堤は、現存する周堤とあまり比高差が認められないことやC区で見られた反射などから遺物が残存している可能性も考えられるだろう。また、A区では過去の測量ラインと異なった位置において周堤と思われる反射が認められたことから、周堤の形状についても今後注意を払う必要があると思われる。

(2) 墳丘裾部に見られる強い反射について

A区、B区、C区の墳丘の裾部に近い地域での探査では、地中に強い反射を認めることができた。現在墳丘の南側は造成されており、その工事の際の影響を受けている可能性も否定できない。また、墳丘が崩れ、その土砂塊が強い反射を示している可能性もある。しかし、過去にも墳丘から周濠に落ち込んだ埴輪が強い反射を示した例もあることから、今後発掘調査を実施する機会がある際は、埴輪等遺物や葺石などの存在に留意して調査を行う必要があるだろう。

なお、拝殿からまっすぐに降りた地点に強い反射がある。B区とC区にまたがっており10mほどの広がりになるこの反射についても、個別の見解を探る際は、埴輪等の遺物や葺石の崩れを考えていたが、全体図に当てはまると大きく、また場所も拝殿からの正面にあたるため、このあたりの整備を行った際にまとめて埋めた攪乱に近い性格の土坑なりがあると考えたい。

(3) 二重周濠の存在について

今回のレーダー探査では、はっきりと周濠の形状を見出すまでには至らなかった。しかし、周堤の外側へのラインやB区、C区、D区等、TS平面図では周堤の外側に周濠があるようにもみられる。断面図のイメージでは、複雑な堆積状況を示していないことから、存在するとしても、浅く広い形状の周濠という形になるのではないだろうか。

今回のレーダー探査では、古墳の形状、周濠や二重周濠の存在について新たな知見を得ることができた。

10 小結

勝手塚古墳は、2段築成の帆立貝式古墳である。第1次調査の主体は、墳丘一段目テラス面の円筒埴輪列の検出と二段目の墳丘面葺石の検出、濠の規模であった。第2次調査の主体は、周堤部の構造、規模、周堤外の周濠の有無であった。第3次調査は前方部上面の確認であった。

勝手塚古墳は、墳長54.2mを測る。後円部直径39m、前方部長15mを測る。基底石から円筒埴輪列

まで 2.0 m ある。東側の周濠は、墳丘側の地山標高 38.7 m から濠底標高 37.92 m であるので地山を 78 cm 掘り込んでいる。前方部側では標高 38.6 m 付近が墳丘裾と推定され、濠底は標高 38.3 m であるので深さ 30cm しかない。墳丘盛土下の地山のレベルは、前方部側 38.6 m（5 トレンチ東端では 38.76 m）、後円部東端で 38.7 m とほぼ同じ、北側の 4 トレンチでは地山かどうかははっきりしない土（4-1 層褐色粘質土）の上位で 39.14 m、下位で 38.2 m であるので、東西に平坦な段丘面（北にやや傾斜）に構築したが、濠底は東側を深くしている。北側の 4 トレンチの濠底は 38.1 m で西側よりわずかに低い。現状でも普段は空壕であるが降雨があると、特に東側から北側に滞水する（図 4-4、5、6）。

周堤は、12 トレンチで構築の状況を明らかにした。濠寄りに土手を築いて輪郭を設定した後、外側に盛る工法である。最上面には崩落を防ぐため小石を含んだ土で固めていた。13 トレンチでは埴輪列を確認したことにより周堤上にも埴輪を樹立していたことが明らかになった。12 トレンチでは地山面上に遺物包含層が残存しており、古墳時代前期の土師器が出土した。前期の集落跡が付近にあったと推定できる。

テラス面、周堤で円筒埴輪列が検出された。検出状況は下記のとおりである。

トレンチ名	検出埴輪数	検出埴輪の番号	調査場所
1 トレンチ	3 個	N-〇〇〇-S	テラス
2 トレンチ	9 個	W-⑨⑧⑦⑥⑤④③②①-E	テラス
3 トレンチ	6 個	N-⑥①②③④⑤-S	テラス
4 トレンチ	0 個		テラス
5 トレンチ	0 個		前方部斜面
6 トレンチ	6 個	N-①②③④⑤⑥-S ⑤は朝顔形埴輪	テラス
7 トレンチ	0 個		テラス
8 トレンチ	1 個	N-①-S	テラス
9 トレンチ	3 個	S-①②③-N	テラス
10 トレンチ	0 個		周堤
11 トレンチ	0 個		周堤斜面
12 トレンチ	0 個		周堤
13 トレンチ	3 個	N-B DE-S	周堤
14 トレンチ	0 個		前方部

※ゴシック文字は採取した埴輪で、遺物実測図に掲載

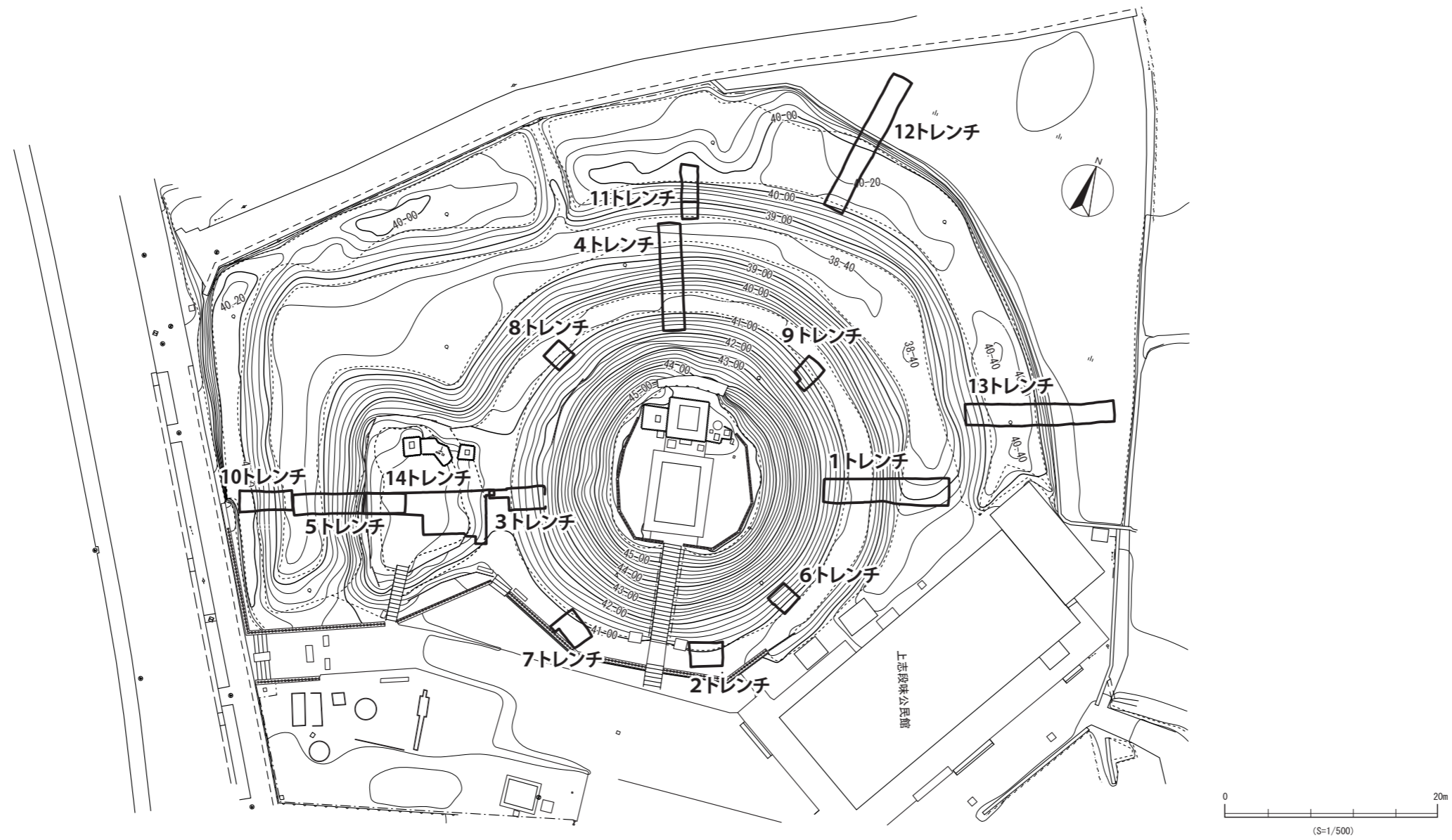
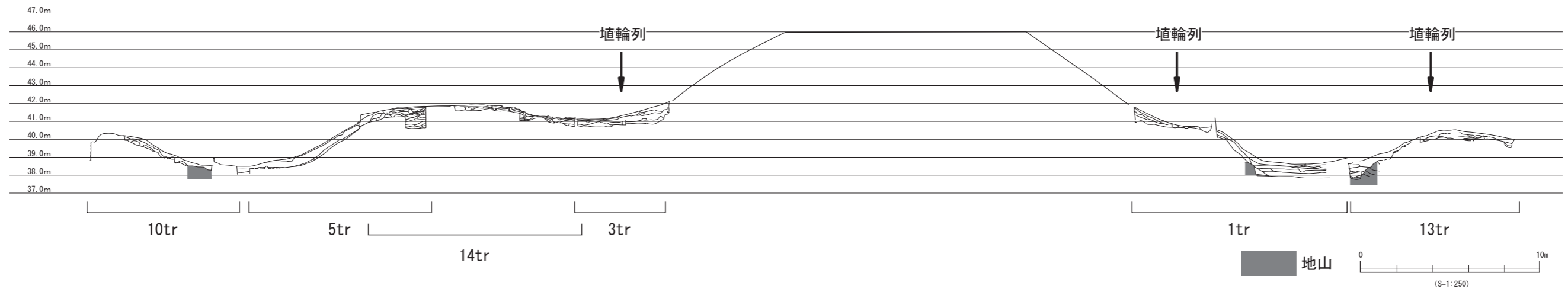


図4-39 勝手塚古墳墳丘縦断面図

第5章 大塚3号墳（第2次）の調査

1 既往の調査・研究

大久手3号墳は、大塚・大久手古墳群地区の中位段丘の縁に位置する。

名古屋市教育委員会が1987（昭和62）年に作成した地形測量図によると、直径13～11m、高さ2.5mほどの不整形な円形の高まりが確認できる。平成18年度には、古墳の範囲確認を目的として、はじめて発掘調査を実施した。当初は、墳丘の裾部分に、4本のトレンチを設定する予定だったが、藪が深く墳丘の北東、南東の2本のトレンチを設定した。調査の結果、1トレンチでは、現況の墳丘裾よりも3.5mほど外側で周溝を確認したことから、現在の墳丘は削平を受けており、本来の墳丘は一回り大きい径18m～19mほどであったと推定した。周濠の幅は、4～5mである。出土した遺物は、器種不明の土師質の土器と表面採集の埴輪片のみであった。

2 各トレンチの調査成果

平成18年度の調査では、墳丘の東側を調査したが、墳丘の規模や形状をより正確に復元するためには、西側の遺構の情報が不可欠である。そこで、平成28年度には、墳丘西側の状況を把握するために、2本のトレンチを設定し調査を実施した。なお、平成18年度の範囲確認調査を第1次発掘調査、平成28年度の調査を第2次発掘調査とし、第2次調査のトレンチ名称は、第1次調査のトレンチ番号と連番とし、南西側を3トレンチ、北西側を4トレンチとした。

(1) 3トレンチ

3トレンチは、北東—南西方向の長さ20m×幅1.5mの調査区である。1トレンチと方向を合わせて、1トレンチの端から現存する墳丘上、南西側の周溝にかけて設定した。トレンチ南西側では、表土および耕作土（図5-1：第1～3層）を除去すると、幅5.0mの溝状の遺構を検出した。深さは検出面から最深部で48cmである。遺構の位置、形状から第1次調査でも確認している古墳の周溝と推定される。周溝埋土は、8～13層である。このうち、12層は他の土色とは異なる灰色のシルトであり、この層の広がりから周濠の下端のラインは明確に検出することができた。第8層からは、江戸時代の土器（図5-4）の破片が出土しており、再掘削した状況も認められない。

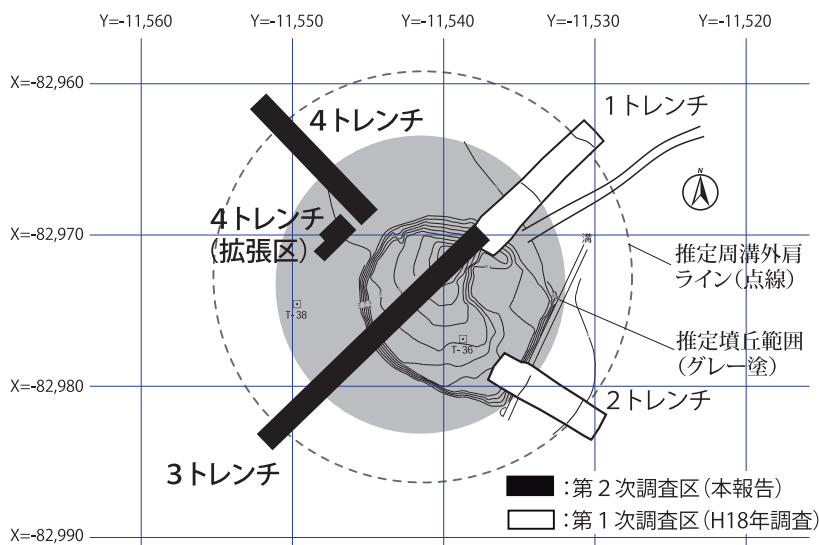


図5-1 トレンチ配置図

とから、近世には、古墳の周濠部分は窪地であったと推定される。

周溝の北東側肩から現墳丘裾までは、約 3.3 m の平坦面がある。表土直下は地山であり、地山面にて精査したところ、近世以前の遺構は確認できなかった。

現墳丘面の表土を剥ぎ、残存する盛土の上面にて精査を行った。3 層～5 層まで、異なる土層を認めたが、盛土の違いによるものと判断された。現状で最も標高が高い 51.4m の等高線から南東側の標高 50.7m ～50.9m あたりにおいて、他の盛土とは異なるやや赤みの強い土を確認した。埋葬施設等の遺構の可能性が考えられるが、検出範囲は狭く赤土の掘削も行っていないため、可能性を指摘するに留める。

現在の南西・北東側墳丘斜面では、一部盛土を掘削し、墳丘の状況を確認した。やや薄灰色をした 28 層は、南西側、北東側ともに確認でき、古墳築造前の旧表土層と考えられる。旧表土上面のレベルは、南西側で約 49.5m、北東側で約 49.7m を測り、北東側がやや高くなっている。この旧表土上に、厚さ 10cm ～40cm ほどの単位で盛土を積んで墳丘を構築したものと推定される。

(2) 4 トレンチ

4 トレンチは、墳丘の北西側、3 トレンチに直行する方向に設定した、幅 1.5 m、長さ 10.4 m の調査区である(図 5-3)。竹を抜根しながら表土と近代以降の土を除去すると、トレンチ南東端から北西へ約 3.3 m ～約 7.2 m まで間に、幅約 3.9m の大型の遺構を確認できた。埋土(図 5-3: 2 層～5 層)を除去していくと、北西側では約 35cm 下で地山を確認した。埋土に遺物は含まなかったが、形状や深さから畑などに伴う溝の可能性が考えられる。

この溝の下層からは、別の溝状遺構(SD 3)が検出された。トレンチ南東端から北西へ約 1.05m ～4.5 m の間の幅約 3.5 m であるが、北西側の肩は削られているため、溝幅は本来 10 ～20cm ほど広がったと考えられる。埋土下層の 14・15 層は 3 トレンチ周溝と同様で灰色系のシルトである。この層からは、土師器の小片が十数点出土しているが、器種や時期は不明である。

(3) 4 トレンチ拡張区

3、4 トレンチの調査を行い、1～4 トレンチすべてにおいて周溝の位置を確認できたため、墳丘および周溝の規模は把握することができた。これまで検出した各トレンチの周溝の平面ラインは、いずれも円弧を描いているように観察されたため、円墳に復元することが妥当だと思われたが、いずれも幅 1.5 ～2.0 m のトレンチ調査であるため、方墳である可能性も排除できなかった。

そこで、4 トレンチにて検出した周溝のラインがどのように延長されるのかを把握するために、4 トレンチ南西側に 3 m × 1.5 m の拡張区を設定して調査を行った。平面を精査したところ、周溝の内側のラインが弧状に巡ることが確認された。よって、周溝の形より、円墳であると判断された。なお、拡張区においては周溝の埋土は掘削していない。

3 出土遺物

第 1 次調査につづき、本調査でも出土した遺物はわずかである。なかでも大塚 3 号墳にともなう可能性があるのは表面採集された 2 の須恵器片のみである。

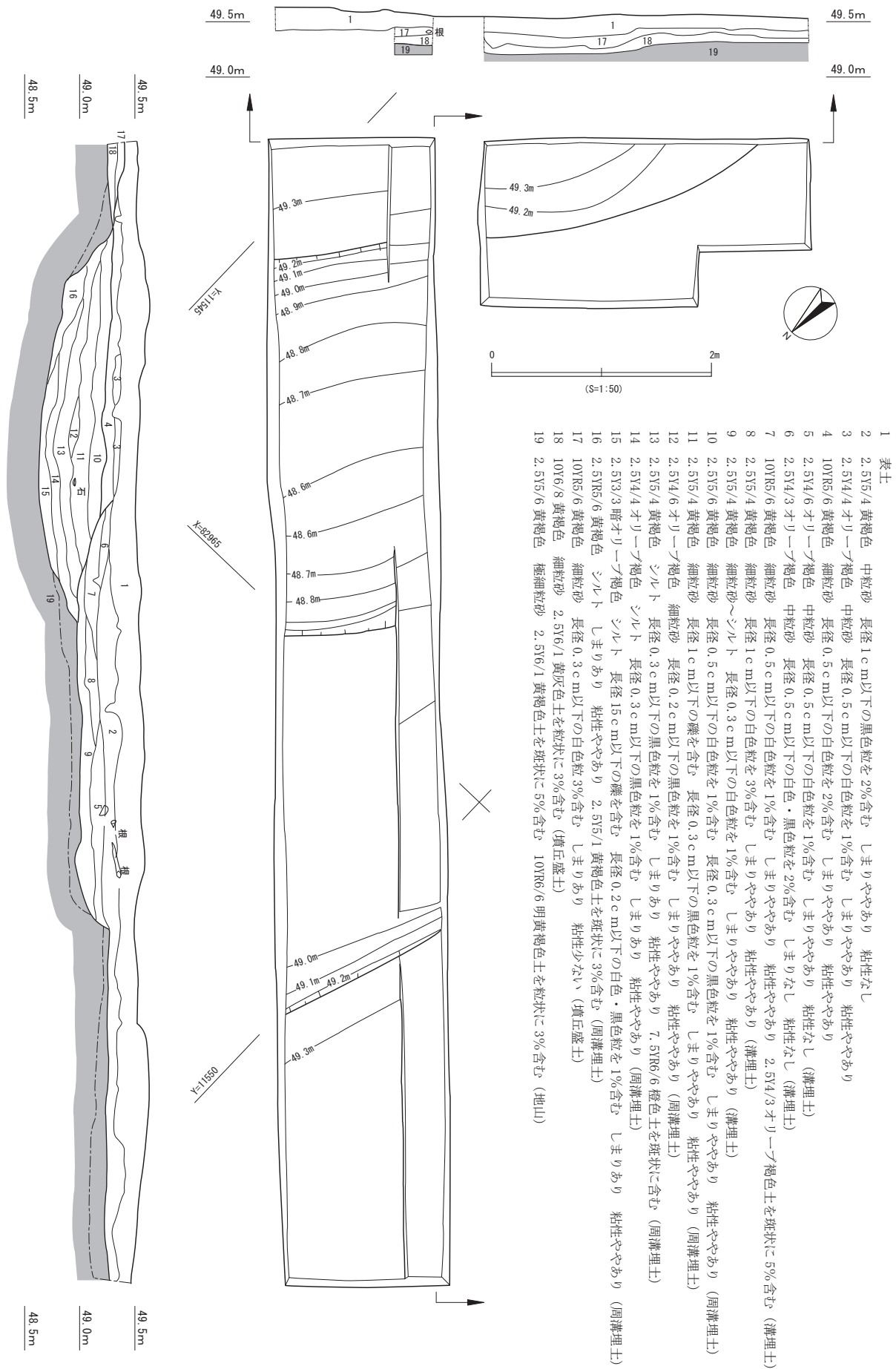


図5-3 4 トレンチ平面図・断面図

- 1 表土
- 2 2.5Y5/4 黄褐色 中粒砂 長径2cm以下のチャート、1cm以下の黒色礫を1%含む しまりややあり 粘性なし
- 7 2.5Y5/6 黄褐色 中粒砂 長径2cm以下のチャート、0.5cm以下の白色・黒色粒を1%含む しまりややあり 粘性なし(周溝埋土)
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒砂 長径0.5cm以下の黒色礫を3%含む、0.5cm以下の白色・黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり(近世溝埋土)
- 6 2.5Y4/4 オリーブ褐色 細粒砂 長径0.3cm以下の黒色礫を2%含む、0.5cm以下の白色・黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性なし
- 3 2.5Y6/4 にぶい黄色 細粒砂 長径0.5cm以下の白色・黒色粒を3%含む しまりなし 粘性なし
- 4 2.5Y4/6 オリーブ褐色 極細粒砂 長径0.1cm以下の白色粒を1%含む しまりややあり 粘性なし
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 長径0.2cm以下の白色粒を1%含む(近世土器含む) しまりややあり 粘性あり 10YR6/6 明黄褐色土を粒状に2%含む(周溝埋土)
- 9 2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト 長径0.2cm以下の白色粒を1%含む しまりややあり 粘性あり(周溝埋土)
- 10 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト 長径0.2cm以下の白色粒を2%含む(土師器片含む) しまりややあり 粘性あり(周溝埋土)
- 11 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 長径0.2cm以下の白色粒を2%含む しまりややあり 粘性あり(周溝埋土)
- 12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト 長径20cm以下の礫、0.5cm以下の白色・黒色粒を3%含む(土師器片含む) しまりややあり 粘性あり(周溝埋土)
- 13 10YR4/4 褐色 中粒砂 長径0.5cm以下の白色粒を3%含む 10YR6/6 明黄褐色土を粒状に5%含む しまりややあり 粘性ややあり(周溝埋土)
- 14 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径0.2cm以下の白色礫を3%含む しまりあり 粘性なし(墳丘盛土)
- 15 10YR7/6 明黄褐色 極細粒砂～シルト 長径0.2cm以下の白色礫を3%含む しまりあり 粘性なし 2.5Y4/2 灰黄色土を斑状に含む(墳丘盛土)
- 16 2.5Y4/4 オリーブ褐色 極細粒砂～シルト 長径1cm以下のチャートを1%含む 長径0.5cm以下の白色・黒色粒を3%含む 7.5Y6/6 橙色土を斑状に含む(墳丘盛土)
- 17 7.5Y5/8 明褐色 極細粒砂 長径1cm以下のチャートを2%含む しまり弱 粘性なし(墳丘盛土)
- 18 2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト 長径0.5cm以下の白色・黒色粒を3%含む しまりややあり 粘性あり 黄灰色土を斑状に含む(墳丘盛土)
- 19 2.5Y4/4 オリーブ褐色 極細粒砂～シルト 長径0.3cm以下の黒色粒を2%含む しまりあり 粘性弱(墳丘盛土)
- 20 2.5Y5/4 黄褐色 極細粒砂 長径1cm以下のチャートを2%含む 長径0.3cm以下の黒色粒を2%含む しまりあり 粘性弱 黄灰シルトを斑状に2%含む(墳丘盛土)
- 21 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 細粒砂 長径0.3cm以下の黒色礫を2%含む しまりややあり 粘性なし(墳丘盛土)
- 22 2.5Y6/6 にぶい黄褐色 細粒砂 長径0.1cm程度の黒色礫を1%含む しまりややあり 粘性なし 16 10YR6/6 明黄褐色 細粒砂(墳丘盛土)
- 23 2.5Y6/6 にぶい黄褐色 長径0.3cm程度の白色礫を3%・黒色礫を1%含む しまりややあり 粘性なし(墳丘盛土)
- 24 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 長径0.3cm程度の黒色礫を1%含む しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y6/3 にぶい黄色土を斑状に2%含む(墳丘盛土)
- 25 2.5Y4/6 オリーブ褐色 極細粒砂 長径0.5cm以下の黒色粒を1%含む しまりややあり 粘性ややあり(墳丘盛土)
- 26 2.5Y4/6 オリーブ褐色 極細粒砂 長径0.5cm以下の黒色粒を1%含む しまりややあり 粘性ややあり 10YR6/6 明黄褐色土を粒状に2%含む(墳丘盛土)
- 27 10YR7/6 明黄褐色 極細粒砂～シルト 長径0.2cm以下の白色粒を2%含む しまりあり 粘性あり(墳丘盛土) 7.5Y6/6 橙色土を斑状に2%含む 2.5Y6/2 灰黄を斑状に5%含む(墳丘盛土)
- 28 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の白色粒を1%含む しまりあり 粘性ややあり 2.5Y6/2 灰黄色土を斑状に2%含む(墳丘盛土)
- 29 10YR5/8 黄褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の白色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり(墳丘盛土)
- 30 10YR6/6 明黄褐色 極細粒砂 長径0.5cm以下の白色・黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり(墳丘盛土)
- 31 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の白色・黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y5/8 明褐色土を斑状に5%含む(墳丘盛土)
- 32 10YR4/6 褐色 極細粒砂～シルト 長径0.2cm程度の白色・黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり(墳丘盛土)
- 33 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂 10YR4/6 にぶい黄褐色土を斑状に30%含む(墳丘盛土)
- 34 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂 長径0.3cm以下の黒色粒を2%含む しまりややあり 粘性ややあり 26層が5%混ざる(墳丘盛土)
- 35 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂 長径0.2cm以下の黒色礫を1%含む しまりなし 粘性ややあり(旧表土)
- 36 2.5YR4/6 褐色 極細粒砂～シルト 長径0.5cm以下のチャートを2%含む しまりなし 粘性ややあり
- 37 10YR5/8 明褐色 極細粒砂～シルト 長径0.2cm以下の黒色礫を1%含む しまりややあり 粘性ややあり
- 38 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂 長径0.5cm以下のチャートを2%含む しまりやや弱 粘性なし
- 39 7.5YR5/8 明褐色 極細粒砂 10YR5/6 黄褐色が斑状に10%混ざる しまりあり 粘性弱(地山)

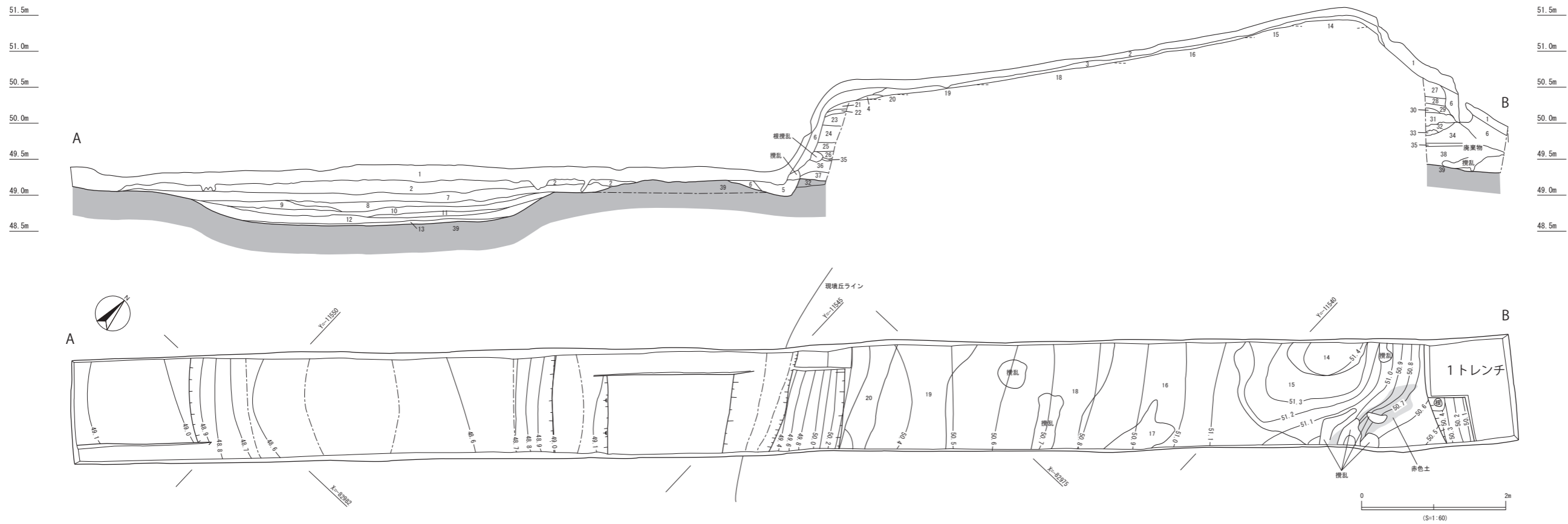


図5-2 3トレンチ平面図・断面図

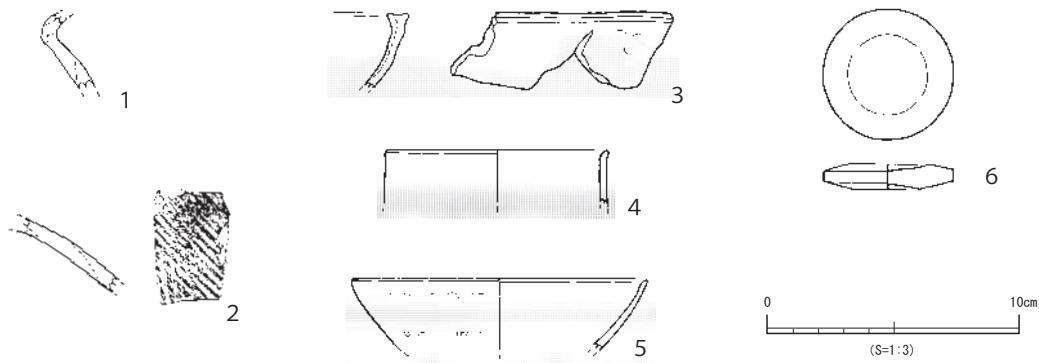


図5-4 出土遺物

表5-1 遺物観察表

No	種類	器形	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	色調	備考
1	土師器	壺	頸部	3トレンチ 北東側 盛土内	残存高：3.1	—	外面：7.5Y 7/4 にぶい橙 内面：10YR 7/4 にぶい黄橙 断面：10YR 8/4 浅黄橙	
2	須恵器	甕		表採	残存高：4.5	—	外面：N 3/ 暗灰 内面：5Y 5/1 灰 断面：7/5Y 4/1 灰	
3	土師器	焙烙	口縁部	3トレンチ 周濠 埋土	残存幅：8.7 残存高：3.0	—	10YR 7/2 にぶい黄橙	外面煤付着
4	磁器	碗	口縁部	3トレンチ 墳頂部 表土	口縁部径：(9.4) 残存高：2.1	1/6	釉：7.5Y 7/1 灰白 胎土：2.5YR 6/2 灰黄	透明釉、呉須、菊文
5	磁器	碗	口縁部	3トレンチ 墳頂部 表土	口縁部径：(11.6) 残存高：2.7	1/6	内外：5GY 7/1 明オリープ灰 胎土：N 8/ 灰白	透明釉、呉須、鉄絵、麦藁手
6	窯道具	トチン (ハマ)		3トレンチ 墳頂部 表土	直径：5.1 器高：1.0	1/1	内外：5Y 8/1 灰白	

1は、墳丘盛土より出土した弥生時代後期から古墳時代の弥生土器又は土師器である。壺の肩部と推定される。2は、須恵器の壺・甕類の体部と推定され、外面には平行タタキの痕跡がみられる。4・5は、近世末以降の磁器である。4は、筒形湯呑で菊花文を施す。幕末から明治初頭の製作と推定される。5は、平碗で口縁部にのみ黒と青の麦藁文を施す。明治前半期のものと推定する。6は窯道具のトチン（ハマ）である。

そのほか3トレンチ、4トレンチの周溝埋土からは、土師質土器の小片が出土しているが図化することができなかった。

4 まとめ

墳丘 本発掘調査では、3トレンチ、4トレンチにおいて周溝を検出したが、その位置は現況の墳丘裾よりも数m外側に位置している。こうした状況は第1次調査でも確認されている。現墳丘裾と周溝の内側の肩までの距離は、1トレンチで3.2m、2トレンチで1.5m、3トレンチで3.2m、4トレンチで2.8mと一定しない。また1トレンチにて墳丘裾と周溝間の平坦面を精査したが、表土下は包含層を挟まず地山であり遺構も認められなかった。こうした状況から、墳丘は削平を受けているという1次調査と同様の見解を支持したい。

本来の墳丘規模は、周溝内の墳丘側の傾斜変換ラインを墳裾とした場合、直径17m～18.5mのやや不整形の円墳と推定される（図5-5）。墳丘は南西から北東側にやや高く傾斜する旧地表面の上に盛土を行い成形したと推定される。周溝内からは直径20cm程度の円礫・亜円礫が出土しているが数量は少

なく、転落した葺石とは考えにくい。大塚3号墳では墳丘斜面には葺石を施していなかったと推定する。

なお、埋葬施設については、赤色の土層を確認したものの明確ではない。赤色土を検出した範囲は、推定した墳丘の中心部からはやや北東に位置している。

大塚3号墳周辺の段丘上では、西大久手古墳や東大久手古墳の墳丘も大きく削り取られている。墳丘の破壊は、大久手池堤防の構築に墳丘の盛土が利用されたためであると推測されている（服部2011）。大塚3号墳では、大久手池とは逆側の西・北・東側の墳丘が削平されているため、大久手池の築堤に関わるかどうかは不明である。

周溝 3・4トレンチおよび、前回調査の1・2トレンチのすべての調査区より周溝を確認した。墳丘が削平されているため、周溝の内側（墳丘側）の肩は不明だが、外側の周溝肩と同じ高さで仮定すると周溝の幅は、3.5m～5.1mと地点によって異なる。北東—南西方向の1トレンチと3トレンチではやや幅広で、北西—南東方向の4トレンチ、2トレンチではやや狭くなる。墳丘周溝の深さも0.7m～0.45mと一定しないが、周溝の最深部の標高は、48.7m～48.6mと近似している。古墳構築時の基盤となる地面は、北東側が高く南西側が低いため、周溝底のレベルを合わせるために、周溝の深さに差が生じたものと推定される。周溝まで含めた古墳の大きさは、23.5m～27.5mである。

表5-2 各トレンチの周溝の計測値

トレンチ名	周溝幅 (m)	周溝深さ (m)	周溝最深部の標高 (m)
1トレンチ	4.6～4.8	0.70	48.7
2トレンチ	3.7～3.8	0.54	(48.7)
3トレンチ	4.9～5.1	0.45	48.6
4トレンチ	3.5	0.65	48.65

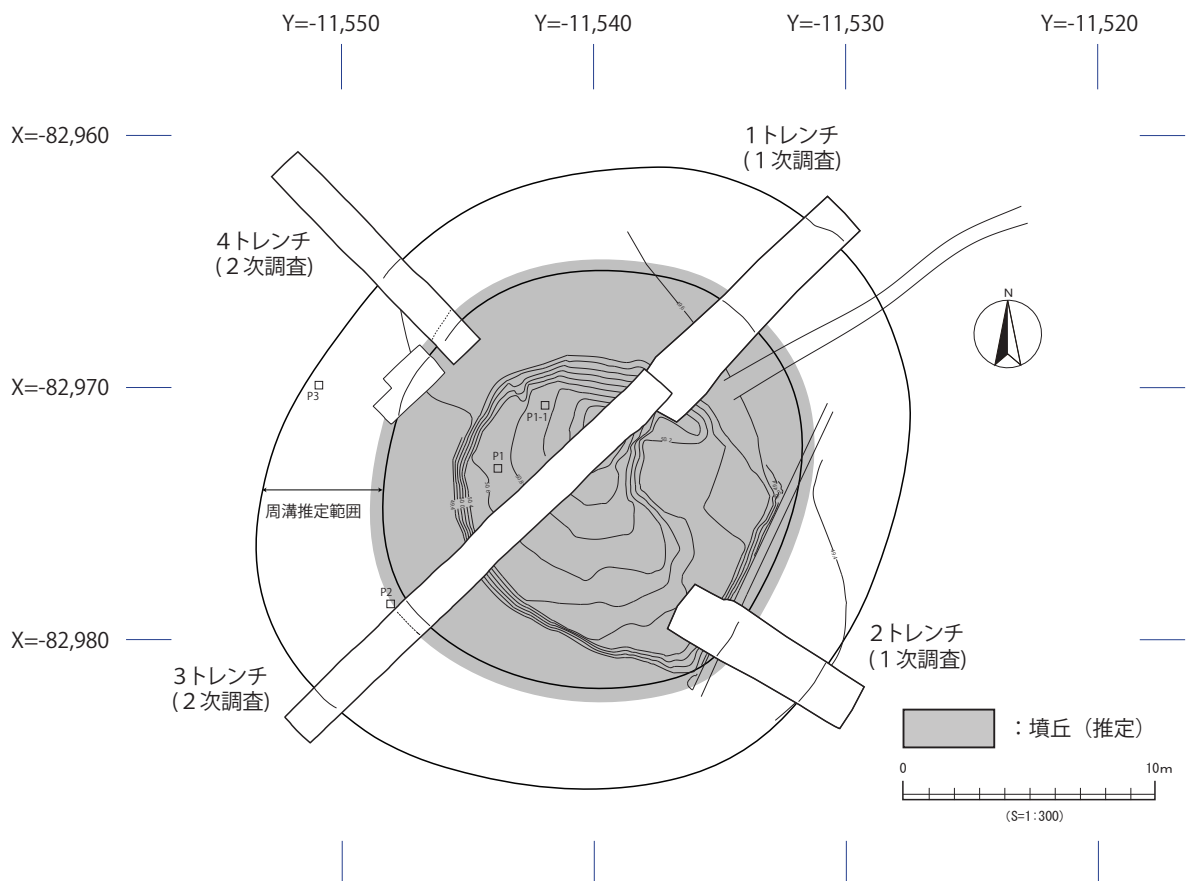


図5-5 墳丘復元図

築造時期 一次調査と同様、大塚3号墳に確実に関連する遺物の出土はなかった。したがって、築造時期については明言することは難しい。

大塚3号墳の周辺には、墳丘規模が50mを超える古墳として帆立貝式古墳の志段味大塚古墳(51m・5世紀後葉)、勝手塚古墳(53m・6世紀初頭)が、40mをやや下回る古墳として、西大久手古墳(37m・5世紀中頃)、大久手5号墳(38m・5世紀後葉)、東大久手古墳(5世紀末)がある。さらにそれら帆立貝式古墳に近接して、大久手3号墳(14m・5世紀中頃)や墳形不明の大塚2号墳(規模不明・5世紀末～6世紀初頭)、羽根古墳(20m・6世紀前半)のような小型の古墳が点在する。規模の異なる帆立貝式古墳は、それぞれ別の首長系譜にあると推定されるが、これらの古墳は周濠を巡らし、外表施設には、葺石、埴輪を備えている。一方で、大久手3号墳は、周溝はあるものの、埴輪、葺石をもたず須恵器のみが出土している。大塚2号墳は、墳丘が破壊されているため、規模・墳形とも不明であるが、周溝は巡らしていない。葺石の有無は不明であり、表土・攪乱土から埴輪・須恵器は出土している。低位段丘上に位置する羽根古墳は、明治時代末頃にはすでに墳丘の大部分は滅失していたと伝えられるが、本来は墳丘径20m、高さ3mほどの円墳であったとされる(久永・田中編1963)。周溝を巡らし、埴輪や須恵器が出土している。

大塚3号墳は、直径18mほどの小型の円墳であり、周溝を巡らし、埴輪・葺石はもたない。調査区内から須恵器の出土はなかったが、表採はされており、古墳に配置されていた可能性はある。墳形・墳丘規模や埴輪・葺石の外表施設の欠如という点から、大塚3号墳は、帆立貝式古墳よりも下位にあたる周辺の円墳や方墳と同様の位置づけが可能である。築造時期は、中位段丘上の周辺の古墳と同様に、5世紀中頃～6世紀初頭とすることが妥当であろう。

ところで、尾張地域では、5世紀後葉～末に典型的な尾張型埴輪(赤塚1991)、猿投型円筒埴輪(藤井2006)が成立し、6世紀前半にかけて埴輪生産量が増大するとともに小型の古墳にも埴輪を樹立する傾向が顕著になる。志段味古墳群でも大塚2号墳、羽根古墳、東谷山3号墳といった小型の円墳にも埴輪が供給される。大塚3号墳が埴輪を持たない点を積極的に評価すると、古墳の築造時期は、大塚2号墳より遡る可能性がある。埴輪・葺石をもたないという古墳外表の特徴は、墳形は異なるものの大久手3号墳と共通することからも、大塚3号墳の築造時期は、5世紀中葉～後葉を想定しておきたい。

参考文献

赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集

久永春男・田中稔編 1963『守山の古墳』守山市教育委員会

服部哲也 2011「西大久手古墳の調査」『志段味古墳群』埋蔵文化財調査報告書62 名古屋市教育委員会

藤井康隆 2006「尾張における円筒埴輪の変遷と『猿投型円筒埴輪』－『猿投型円筒埴輪』の再構築－」『埴輪研究会誌』第10号 埴輪研究会

第6章 白鳥5号墳・白鳥6号墳の調査

1 白鳥古墳群の調査・研究

東谷山の西麓の低位段丘上には、志段味古墳群の群集墳の支群の一つ、白鳥古墳群が分布している。白鳥古墳群は、8基の古墳から構成され、発掘調査が行われた1号墳、4号墳、7号墳は、横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳であることが判明している。白鳥古墳群の中でも白鳥1号墳は、名古屋市内で唯一ほぼ完全な形で横穴式石室が残されている古墳として、1995（平成7）年度に名古屋市の史跡に指定され、2014（平成26）年度には東谷山白鳥古墳と名称を変え、史跡志段味古墳群を構成する古墳として国の史跡に指定された。

東谷山白鳥古墳は、大正年間に地元の長谷川佳隆氏により羨道部から石室内の土の搬出がなされており、その際に土器・勾玉・鉄鏃が見つかったとされる。その後、1961（昭和36）年には、守山市教育委員会より委嘱された久永春男氏らにより石室内部の清掃調査が行われた。石室の実測図が作成されるとともに、新たに馬具（轡・鞍）・大刀・刀子・鉄鏃・土師器・須恵器が出土した。その成果が報告された『守山の古墳』（久永・田中編 1963）には、他の白鳥古墳群についても記載がみられる。報告書では、白鳥古墳群（白鳥支群）は、5基の古墳からなり、第1号・第4号・第5号墳は墳丘が残存し、第2号・第3号墳は、墳丘が破壊され整地されている旨、記されている。伝聞によると、2号墳は、ほぼ西向きに開口する横穴式石室をもつ墳丘12m～13mの円墳で、3号墳は2号墳と同様の墳丘規模であったとされる。

2005（平成17）年には、土地区画整理事業にかかり、白鳥4号墳と新たに発見された白鳥7号墳の発掘調査が行われた。調査の結果、4号墳は西南西に開口する横穴式石室をもつ、直径約17mの円墳であることが明らかとなった。7号墳は直径約10mの円墳で、南に開口すると推定される横穴式石室の一部を検出した（深谷ほか 2006）。なお、調査後4号墳と7号墳の墳丘は滅失している。

2006（平成18）年から2007（平成19）年にかけて、区画整理事業にともない国道155号線の拡幅が計画されたため、市指定史跡白鳥1号墳（東谷山白鳥古墳）の遺跡範囲を確認するために発掘調査が実施された。調査の結果、直径16.5～17.5mの墳丘の周囲には、開口部で途切れる平面「C」字形の周溝が巡ることが判明した。また、墳形や規模は不明ながら、1号墳の西側で新規の古墳（白鳥8号墳）が発見された。なお、白鳥1号墳、白鳥8号墳は、協議の結果現地にて保存されることになった。

2 調査の経緯と経過

今回の調査対象である白鳥5号墳、白鳥6号墳には、過去に発掘調査が行われておらず、古墳か否かについても明確な情報が得られていなかった。

『守山の古墳』では、白鳥5号墳について、「墳丘が崩れて石材が露出しているが、墳丘の直径は15mを測る」という記述がある一方で、白鳥6号墳についての記載はなく、古墳として認識されていなかったものと思われる（久永・田中編 1963）。1997（平成9）年に刊行された『新修名古屋市史 第一巻』内の「東谷山西麓の古墳分布図」（犬塚 1997 pp.438）には、6号墳として記載がみられたが、名古屋市の遺跡分布図には遺跡として登載されていなかった。

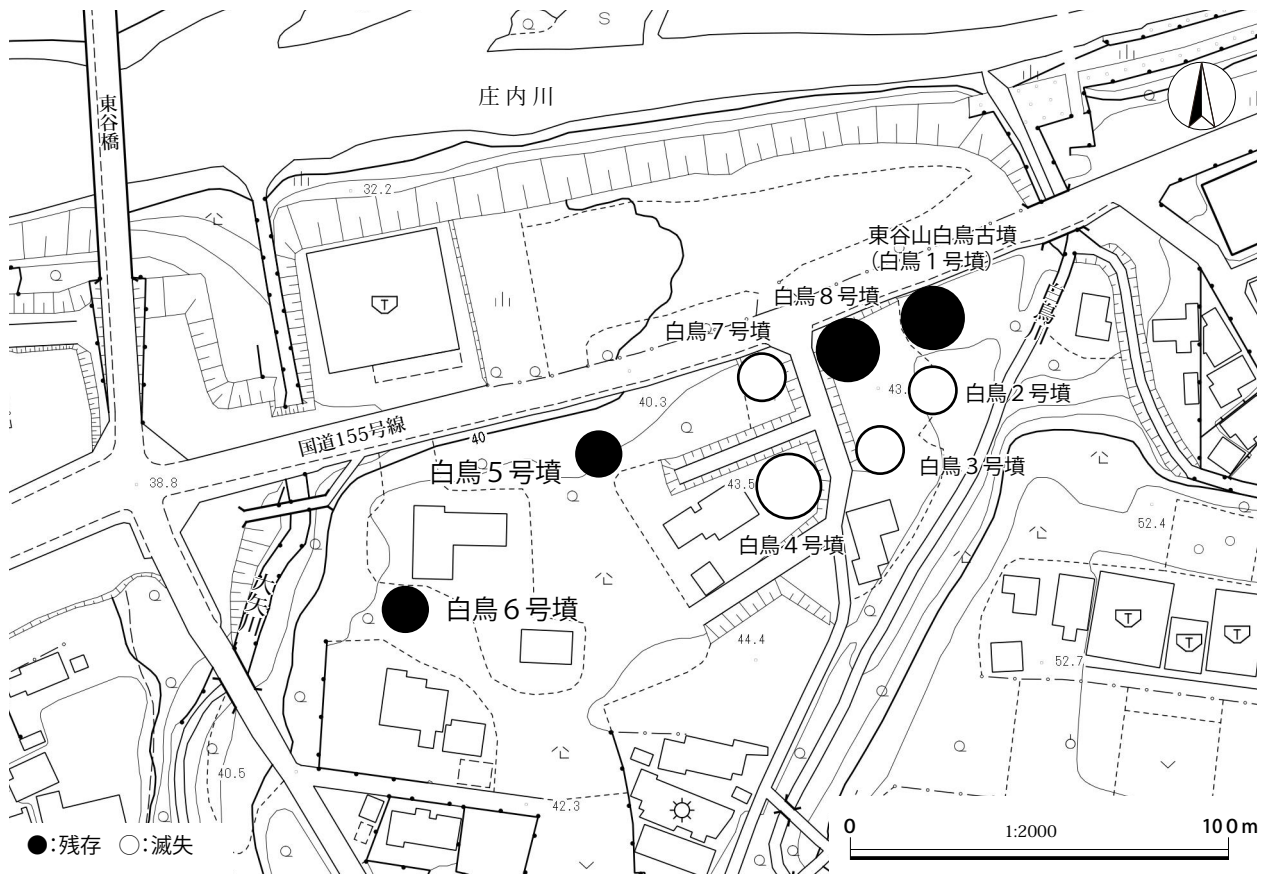


図6-1 白鳥古墳群の分布

2016（平成28）年2月25日に、白鳥6号墳の試掘調査を実施した。調査は墳丘中央付近に1m×2mのトレンチを設定して開始し、掘削中に石組みを確認したことから、その主軸方向を把握するために1m×1mのトレンチを追加した。結果として、南西—北東を主軸とする横穴式石室を内包する古墳時代後期の古墳であることが判明した。それを受けて、平成28年3月10日付けで、埋蔵文化財包蔵地の新規登録について協議を行う旨の文書を愛知県教育委員会教育長あてに送付し、平成28年4月8日付けで埋蔵文化財包蔵地として台帳登録がなされた旨の通知文書があった。

志段味古墳群の整備にかかり、2016（平成28）年の夏から秋にかけて、白鳥5号墳と白鳥6号墳の発掘調査を実施する運びとなった。

白鳥5号墳、白鳥6号墳とも墳丘の測量図が存在しなかったため、平成28年7月18日から同年8月24日までの期間で、古墳の地形測量を委託した（図6-2・9）。

古墳の測量と併行して、8月1日から12月2日までの期間で、大塚3号墳と白鳥5号墳、白鳥6号墳の発掘調査を実施した。最初は大塚3号墳の調査から着手し、白鳥5号墳は9月21日より、白鳥6号墳は9月26日より着手した。

3 現況

白鳥古墳群は、西は大矢川、東・南は白鳥川に限られた低位河岸段丘の縁辺に立地する。この河岸段丘の標高は40m～43mほどであり、北に面する国道155号線はそこから1～2mほど低く、現在も段丘の比高を確認することができる。白鳥5号墳、白鳥6号墳は、白鳥古墳群の中でも西側に位置しており、

東谷山白鳥古墳からは、それぞれ直線距離で 95 m、160m の距離にある。

白鳥 5 号墳の墳丘および周辺は竹が繁茂している。墳丘測量図からは、直径 12 m～14m、高さ 1.8 m ほどの円墳と推定される。

白鳥 6 号墳は、民家の庭に築山としてある。測量図では、直径 9～12 m、高さ 1 m の円墳とみられる。

4 白鳥 5 号墳の調査

(1) 各トレンチの調査

① トレンチの位置

白鳥 5 号墳は、墳丘らしき高まりと露出した石材等より「古墳」として認識されていたものの過去に発掘調査が実施された記録はなく、遺跡に対する情報が不足していた。そこで古墳であるか否かを確認し、

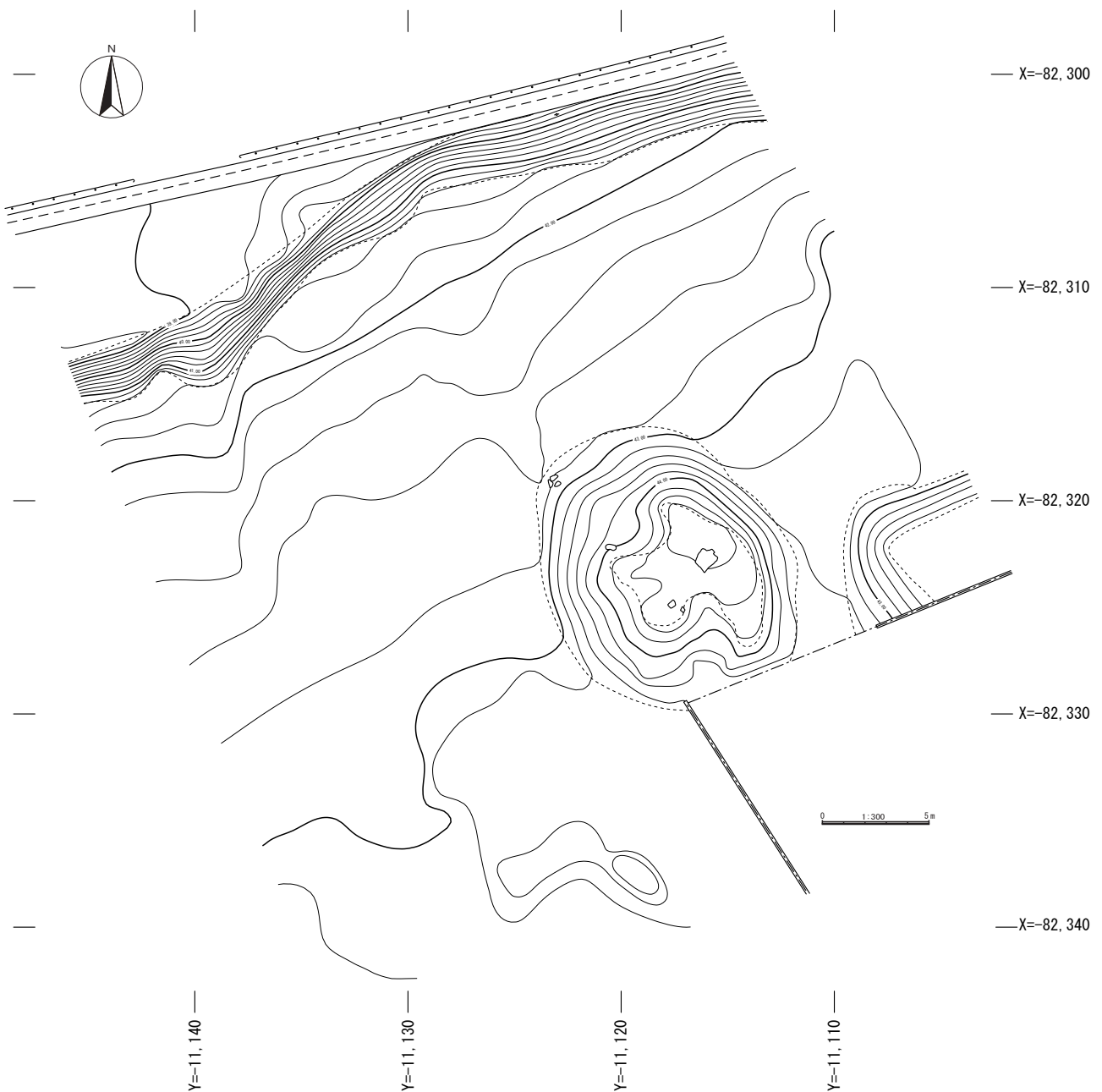


図 6-2 白鳥 5 号墳墳丘測量図

古墳であった場合は、墳形、規模、埋葬施設、築造時期等の基本的な情報を確認するため、トレンチを設定して調査を行った。

石室がある場合その開口方向が不明であったため、最初に墳丘頂部に軸を東西南北に合わせた2m×2mの試掘トレンチを設定した。掘削を進めた結果、北西—南東方向を軸とする石室の側壁と考えられる石組みを検出した。石室の開口部を北西と推定し、石室の主軸と方向に1トレンチを、墳裾部分に1トレンチと直交する2トレンチ、3トレンチを設定した。

② 1トレンチ

墳丘の形状や墳頂部の試掘トレンチ調査の結果により、横穴式石室の天井石はすでに存在しないことが予想された。そこで、石室の平面形状および残存状況を把握するために、幅3.5m×長さ12mのトレンチを設定した。掘削を進めると墳丘頂部付近は現在の地表面から比較的浅い位置で大型の石材が検出されたが、開口部の北西側では側壁上部の石材は残存していなかった。とくに北側の側壁では、奥壁から3.4mの地点(D—D'断面のD'地点)から開口部方向にかけて大きく石材が抜き取られていることを確認した(写真図版33—1・2)。抜き取りの痕跡を把握するため平面の精査を行ったが、確認できなかったため、北西側の墳丘が大きく削り取られている可能性も考慮して、残存する残存する下部の石のレベルまで掘り下げた。図6—5のD—D'断面を精査したところ、1・6層は表土・墳丘流出土あるいは、石を抜き取った際に二次的に堆積した土と判断されたが、20層より下は、しまりの強い土が認められ、盛土と判断した。したがって、石の抜き取りにともない墳丘が破壊された範囲は、側壁付近までであり、D—D'断面の下部までは及んでいないと推測される。なお、石室内部に落ち込んだ石材の一部には、石材を採取する際に楔を打ち込んだ、矢穴の痕跡が認められた(図6—4)。

地点により石の残存状況が異なるため、平面図上に記録した石の高さ(側壁の段数)にもばらつきがあ

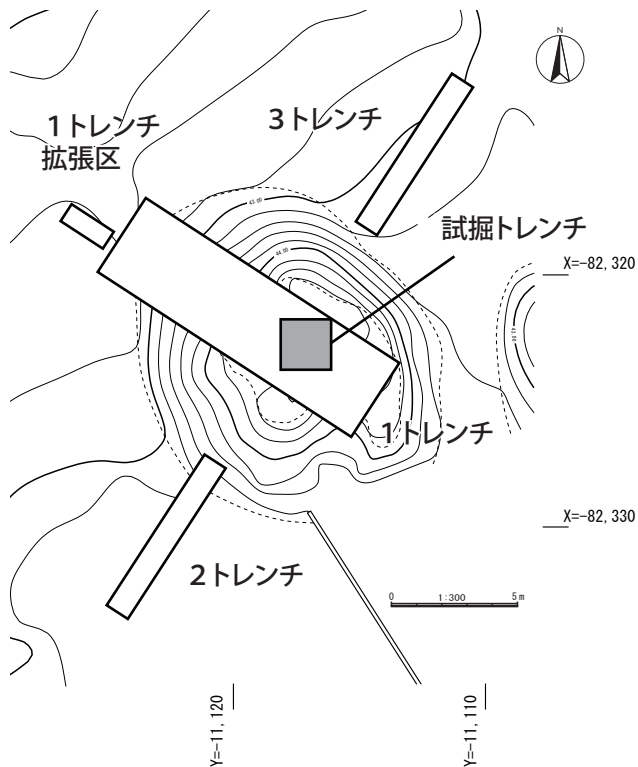


図6—3 白鳥5号墳トレンチ配置

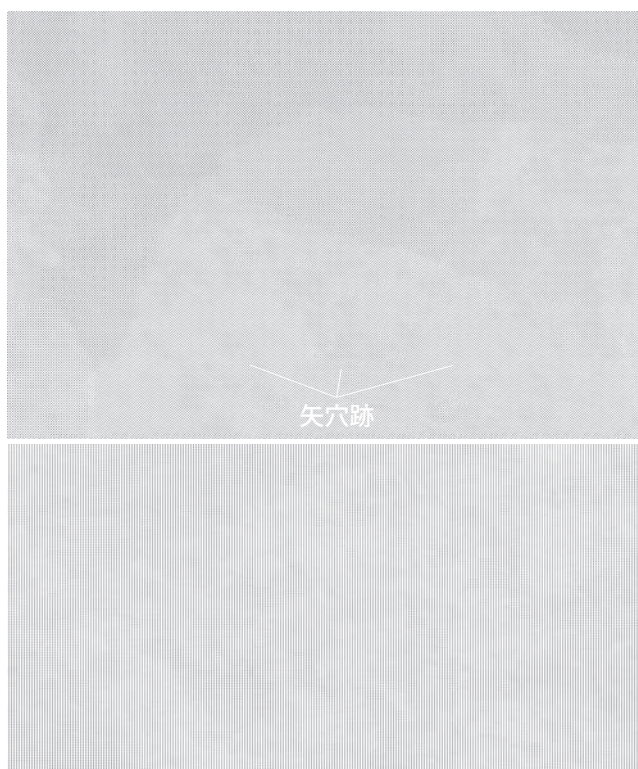


図6—4 石に残された矢穴(上:石材全体、下:拡大)

したがって、石の抜き取りにともない墳丘が破壊された範囲は、側壁付近までであり、D—D'断面の下部までは及んでいないと推測される。なお、石室内部に落ち込んだ石材の一部には、石材を採取する際に楔を打ち込んだ、矢穴の痕跡が認められた(図6—4)。

地点により石の残存状況が異なるため、平面図上に記録した石の高さ(側壁の段数)にもばらつきがあ

- 1 表土
- 2 10YR4/6 褐色 中粒砂 長径 0.2 cm 以下の黒色粒を 2% 含む しまり弱 粘性なし
- 3 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂 長径 0.1 cm 以下の黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし
- 4 10YR4/4 褐色 中粒砂 長径 0.1 cm 以下の黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし
- 5 10YR4/6 褐色 中粒砂 長径 0.1 cm 以下の黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 3% 含む
長径 30 cm 以下の円礫 (石室の石) を含む しまり弱 粘性なし
- 7 10YR4/6 褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし 長径 5 cm 以下の石を 1% 含む
- 8 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色粒を 1% 含む、10YR2/3 黒褐色土斑状に 70% 含む
- 9 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色粒を 1% 含む、10YR2/3 黒褐色土を 3% 含む
- 10 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし
- 11 10YR4/6 褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色粒を 1% 含む
- 12 10YR5/6 黄褐色 中粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む 2.5YR4/2 暗灰黄色土を層状に含む
- 13 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし
- 14 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色粒を 1% 含む
- 15 2.5YR4/2 暗褐色 細粒砂 10YR5/6 黄褐色土を斑状に含む

- 16 10YR4/4 褐色 細粒砂 10YR3/1 黒褐色・5YR5/6 明赤褐色土を斑状に含む 固形の炭が入る
- 17 10YR4/6 褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の黒色粒を 1% 含む 長径 20 cm 以下の円礫を含む
- 18 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色粒を 2% 含む しまり弱 粘性なし (石室埋土)
- 19 10YR4/6 褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし (石室埋土)

- 20 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 21 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 22 10YR6/6 明褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 23 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白・黒色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 24 10YR4/4 褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 25 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 10YR4/4 褐色土を斑状に 5% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 26 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1%・黒色礫 2% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 27 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色礫を 1% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 28 10YR4/4 褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む (墳丘盛土)
10YR3/4 暗褐色土を斑状に 5% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)
- 29 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 1% 含む
10YR3/4 暗褐色土を斑状に 10% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)

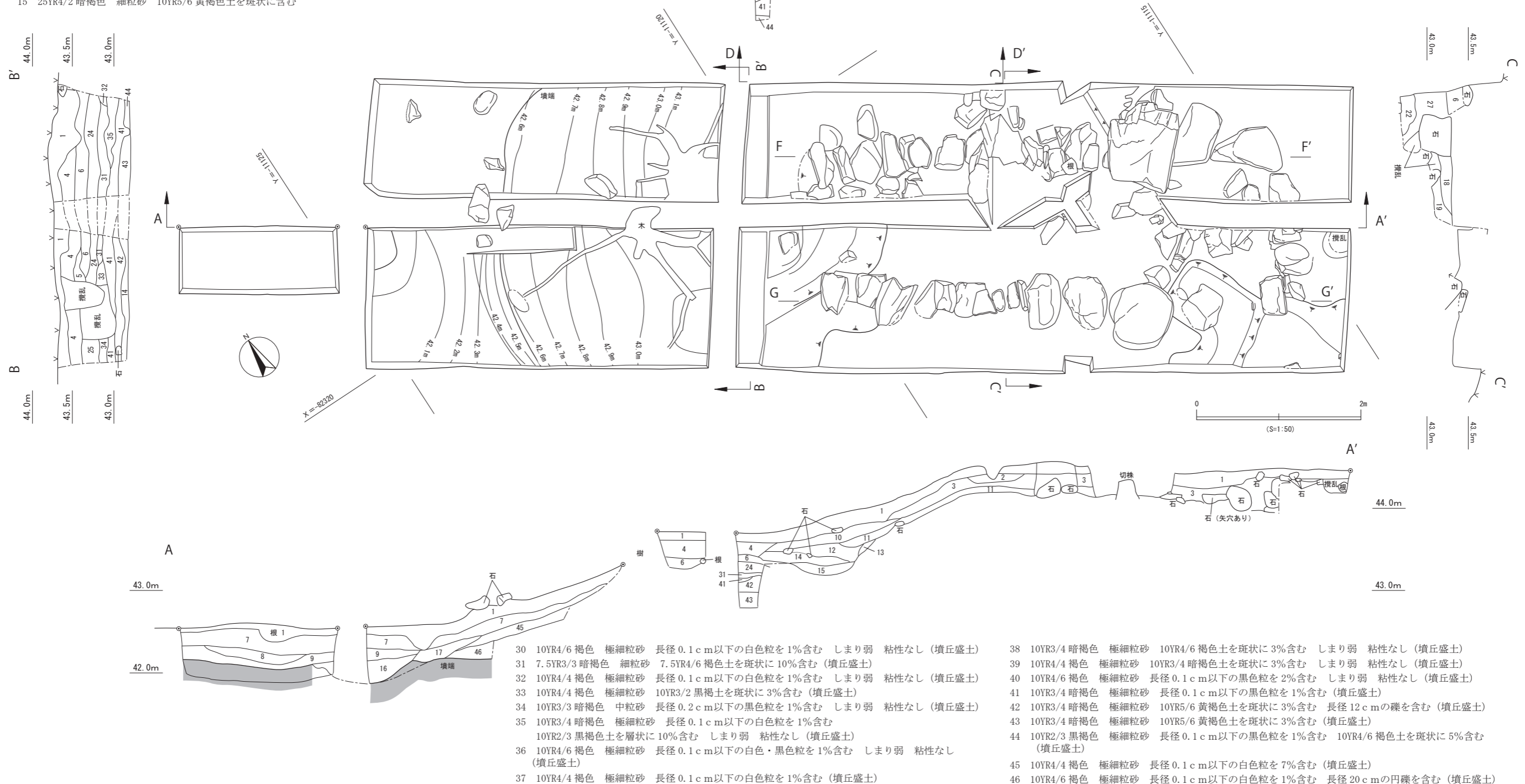


図6-5 白鳥5号墳1トレンチ 平面図・断面図

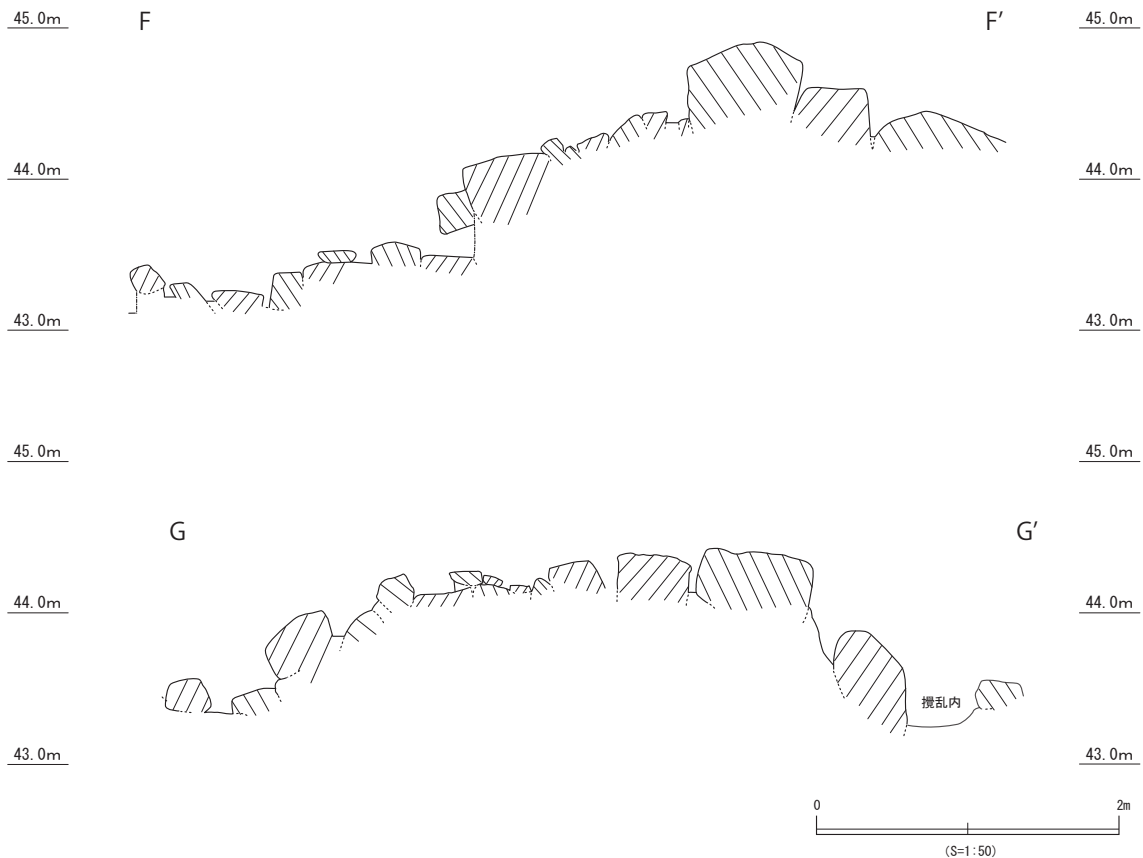
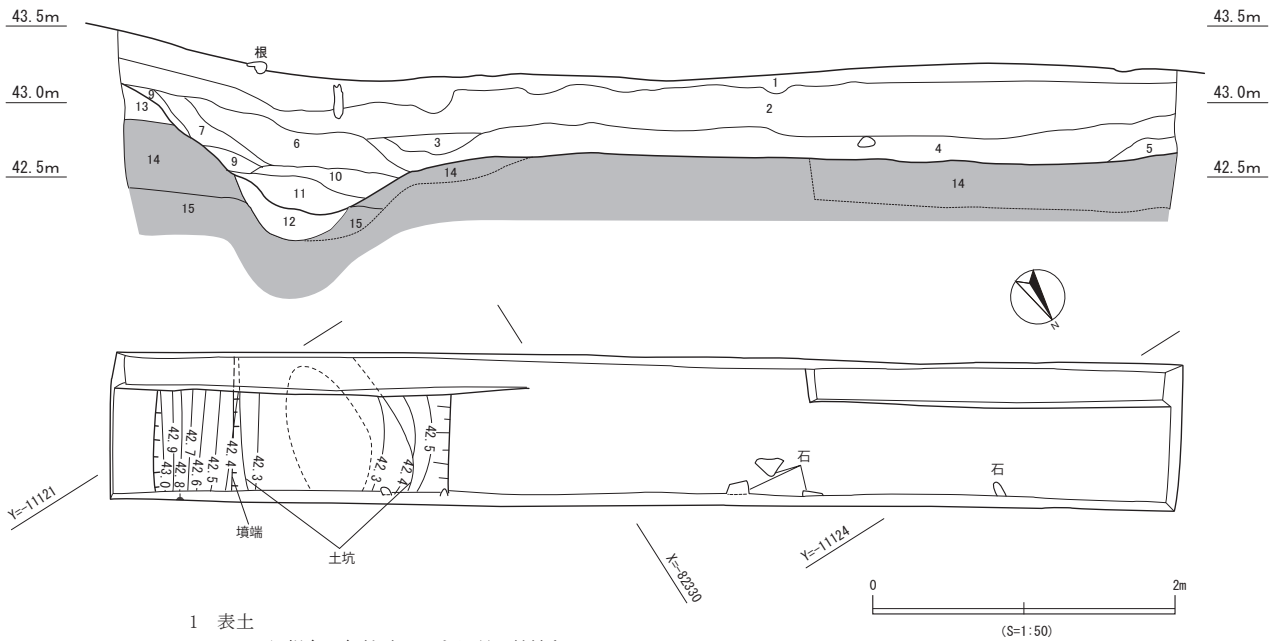


図6-6 白鳥5号墳石室エレベーション図

る。それでも石室のおおよその平面形状は把握できる。埋葬施設は北西方向を開口部とする無袖式の横穴式石室と推察される。床面まで掘削していないため床平面の形状は不明だが、奥壁幅よりも玄室中央部の幅の方がやや広いため、玄室は胴張り状に膨らむ可能性がある。敷石についての情報もないため、玄室と羨道の境界は不明である。トレンチ南東辺から北西側に約1mの位置に奥壁がある。奥壁は長軸0.2m～0.5mのやや小振りな石材を積み上げている。奥壁から1.2m～2mの位置にある両側壁の石が、石室の中でもっとも上部まで残存していた。長軸0.8mほどを測る大型の石材である。この上部の大型石材の下部の側壁や奥壁の石は0.2m～0.5mほどの大きさで、基本的には小口・長手積みされている。残存する側壁の石の比高差（最上部の石の上端と最下部の石の上端）は、北側壁で1.7m、南側壁で1.0mを測る。側壁の下部に小型の石を用い、天井石直下または付近に大型の石を用いる積み方は、白鳥4号墳でも認められる。白鳥4号墳では、上部の大型の石上端から床面までの高さは1.8m～1.9mであるため、白鳥5号墳の最下部に残存する石は基底石かその1段上の石と推測される。

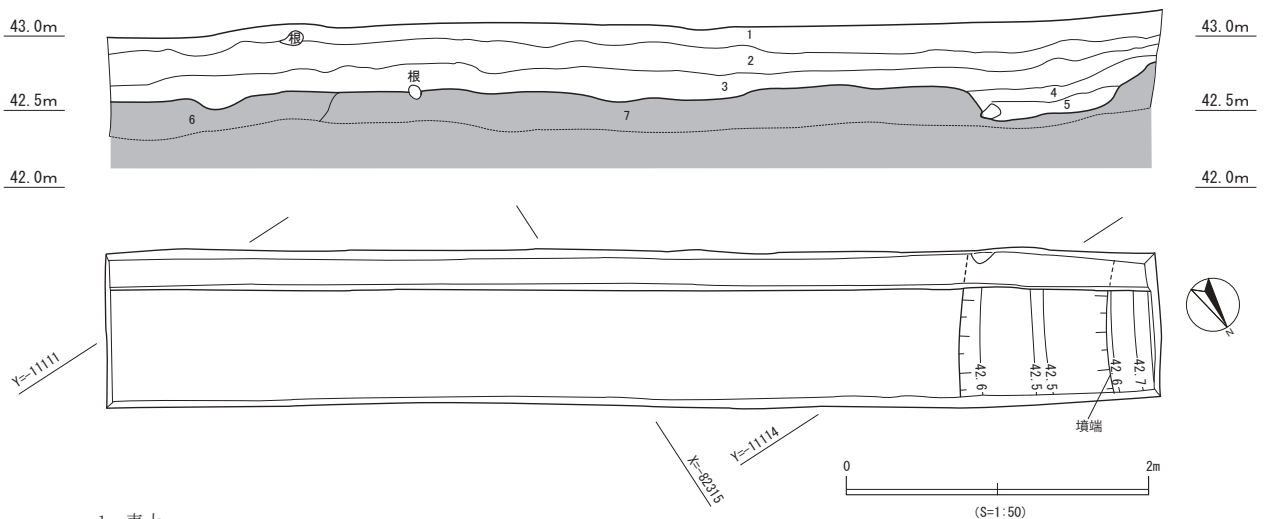
側壁の石組みは、奥壁より開口部側に約5.5mまで認められたが、それより先には続いていない。大きな攪乱等が確認できなかったことから、後世に石材が採取されたのではなく、当初より存在していなかったと考えられる。白鳥4号墳では、前庭部は断面U字形に掘りこまれ、側壁の石も疎らになっていることが確認されていたため、白鳥5号墳においても同様の構造が想定された。石組みが途切れた地点から開口部にかけて、墳丘盛土と埋土を識別するために平面の精査を行なったが、確認できなかった。そのため、石室主軸に直交する方向にサブトレンチを設定し(B-B')、断面にて前庭部の検出を試みた。しかし、B-B'断面においても掘り込み状の遺構は認められず、墳丘盛土が開口部を塞いでいるように観察された。以上

2 トレンチ



- 1 表土
- 2 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし
- 3 7.5YR4/6 暗褐色 細粒砂 長径0.2cm以下の白色粒を1%含む しまり弱 粘性なし 雲母を含む
- 4 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 長径20cm程度の円礫をやや多く含む しまり弱 粘性なし
- 5 10YR4/6 褐色 細粒砂 長径0.1cm以下の白色粒を1%含む しまり弱 粘性なし
- 6 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし
- 7 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 10YR4/4 褐色土を粒状に2%含む しまり弱 粘性なし
- 8 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし
- 9 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の黒色粒を1%含む しまり弱 粘性なし
- 10 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の黒色粒を1%含む しまり弱 粘性なし
- 11 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂～シルト 長径0.1cm程度の白色・黒色粒を1%含む しまり弱 粘性ややあり
- 12 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 長径0.1cm程度の黒色粒を1%含む しまり弱 粘性なし (土坑埋土)
- 13 10YR4/4 褐色 極細粒砂 長径0.2cm以下の黒色粒を1%含む しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)
- 14 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂～シルト (地山)
- 15 10YR5/5 明褐色 粗砂 しまり弱 粘性なし (地山)

3 トレンチ



- 1 表土
- 2 10YR4/6 褐色 細粒砂 長径0.1cm程度の黒色粒を1%含む しまり弱 粘性なし
- 3 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 長径30cm以下の円礫を含む しまり弱 粘性なし
- 4 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 長径0.2cm以下の白色・黒色粒1%を含む しまり弱 粘性なし
- 5 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 長径0.2cm以下の白色・黒色粒1%を含む 長径15cmの円礫を含む しまり弱 粘性ややあり
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂 (地山)
- 7 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 (地山)

図6-7 白鳥5号墳2トレンチ・3トレンチ 平面図・断面図

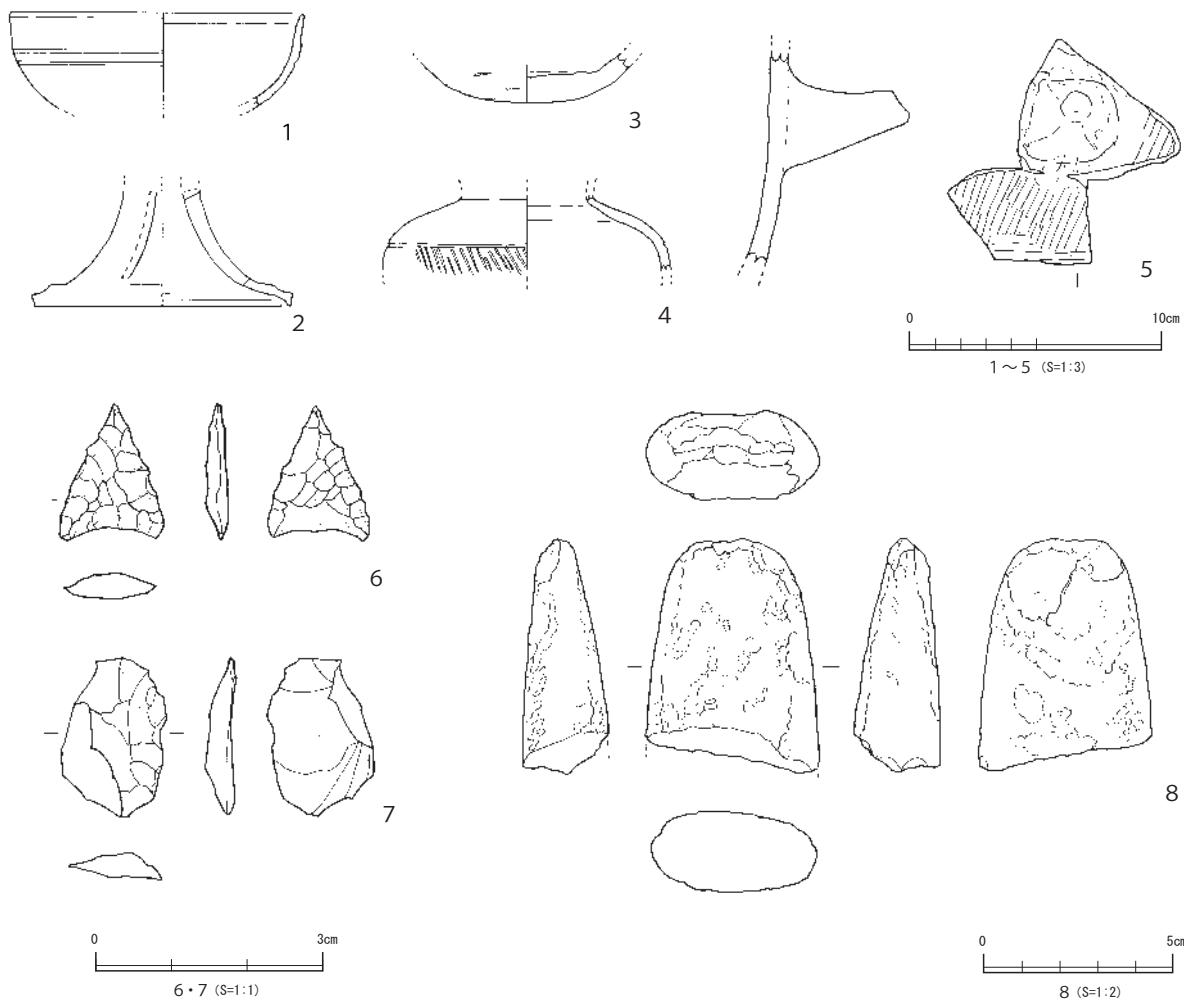


図6-8 白鳥5号墳 出土遺物

表6-1 白鳥5号墳 出土遺物観察表

No	種類	器形	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	色調	備考
1	須恵器	高坏	口縁部	1トレンチ 開口部付近 流土	口径(11.4) 残存高3.8	1/6	外面：N3/暗灰 内面：N5/灰 断面：2.5Y7/1 灰白	
2	須恵器	高坏	脚部	1トレンチ 開口部北側 流土	底径(10.0) 残存高4.6	1/4	外面：2.5Y6/2 灰黄 内面：5Y6/1 灰 断面：N4/灰	穿孔3方向
3	須恵器	瓶類	底部	1トレンチ 北西部 表土	残存高1.5		外面：2.5Y5/1 黄灰 内断面：5YR5/3 にぶい赤褐	
4	須恵器	甕	肩部	1トレンチ 北西部 墳丘外流土	残存高2.9		外面：10YR6/1 褐灰 内断面：10YR6/4 にぶい黄橙	
5	須恵器	鉢/甌	把手	1トレンチ 開口部付近 流土	残存幅9.1 残存高6.5		内外：2.5Y8/3 淡黄	
6	石器	石鏃		1トレンチ 奥壁付近 攪乱	縦：1.8 横：1.4 厚：0.3			チャート
7	石材	碎片		1トレンチ (北西部) 黄褐色土	縦：2.1 横：1.4 厚：0.4			チャート
8	石器	磨製石斧		3トレンチ 不明	縦：6.2 横：4.5 厚：2.3			緑色片岩

より、白鳥5号墳では、墳丘の構築途中にて埋葬が行われ、閉塞と同時に開口部分の墳丘構築が行われた可能性が考えられる。

墳丘盛土の開始位置は、1トレンチ北西辺より南東方向に1.6mの地点である。この地点を古墳の墳端とすれば、奥壁までの距離は9.4mを測る。後述するように、2トレンチ、3トレンチにて周溝が確認されたため、1トレンチの北西側に、幅0.8m×長さ2mの拡張区を設定したが、周溝や他の遺構は確認できなかった。地山面は、墳端よりも標高が低く、段丘崖に向かって徐々に低くなっている様子が認められた。

② 2トレンチ

古墳の墳端および周溝の有無を確認するために、幅2m×長さ7mのトレンチを設定した。表土と後世の整地土を除去すると地山を検出した。トレンチ北東辺より南西側へ0.82m～2.25mの位置に、幅1.43m、深さ0.4m、最深部の標高42.25mを測る溝状遺構を検出した。古墳の周溝と推定される。この周溝の下部には、深さ0.2mの土坑状遺構が確認された。埋土から遺物の出土はなかったが、古墳築造以前の遺構であり、周辺の状況等から縄文時代の遺構の可能性はある。

③ 3トレンチ

2トレンチ同様、北東側の墳端と周溝を確認するために、幅2m×長さ7mのトレンチを設定し掘削した。その結果、トレンチ南西辺より北東側へ0.35m～1.35mの位置に、幅1m、深さ0.25m、最深部の標高42.43mの溝状遺構を検出した。古墳の周溝と考えられる。

(2) 出土遺物

遺物は主に1トレンチの北西部、開口部付近より出土している。1～5は須恵器、6～8は石器（石材）である。

1は、無蓋高坏の口縁部である。椀状の坏部外面には、2条の沈線が巡る。2は高坏の脚部である。脚端部は、下方につまみ出される。透孔は、3方向に穿孔されると推定され、1段しか残存していないが、2段の長脚になる可能性がある。1と同一個体かは不明。3は、瓶類の底部と思われる。底部外面はヘラケズリが施される。4は、甕の体部と推定される。外面には沈線と斜位の列線文が認められる。外面には自然釉が付着する。5は、甕または大型鉢の杷部である。外面はタタキで成形されるが、内面の当て具痕は見られない。6は石鏃、7は碎片であり、いずれもチャート製である。8は緑色片岩製の磨製石器である。石器類はいずれも縄文時代のものと推定される。

(3) 小結

墳丘・周溝 1トレンチにて確認した盛土の端および2・3トレンチの墳丘裾の傾斜変換点を墳端とすると、白鳥5号墳は直径12.0～12.5mの不整形な円墳に復元することができる。墳端の高さは、1トレンチ42.19m、2トレンチ42.5m、3トレンチ42.65mで、1トレンチの開口部側が30cm～45cmほど低い。

2トレンチ、3トレンチでは、幅約1m～1.5mの周溝を確認したが1トレンチでは確認できなかった。

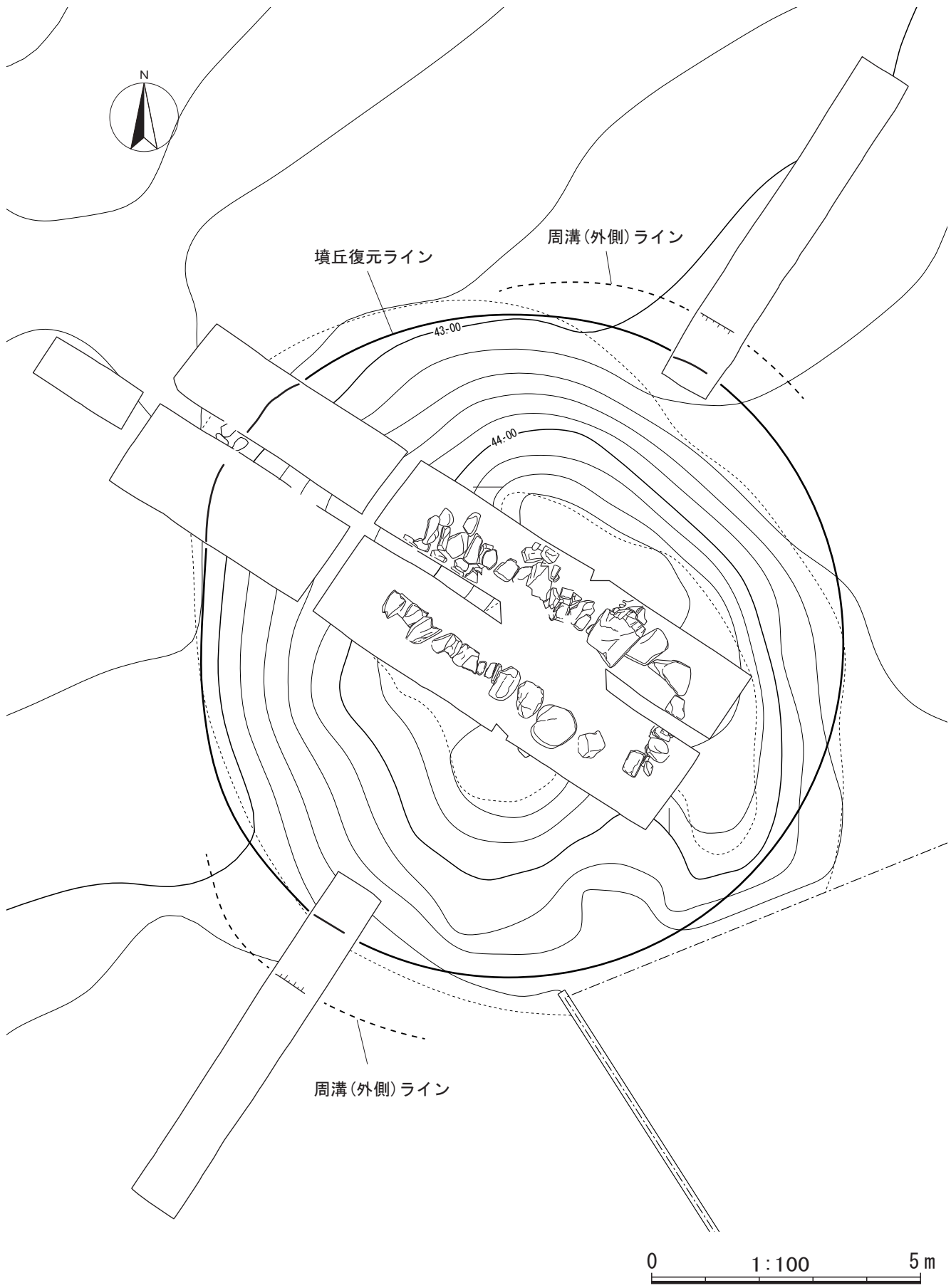


図6-9 白鳥5号墳墳丘復元図

周溝の底の高さは、2トレンチで42.25m、3トレンチで42.43mを測り、1トレンチの墳端の高さよりも高いことから、2・3トレンチの周溝は、開口部に向かって浅くなり、途中で当時の地表面（地山）とつながるものと推測される。周溝が、墳丘の南東側まで巡り東谷山白鳥古墳のように「C」字形を呈するか、白鳥7号墳のように途切れて土坑状になるかは不明である。

埋葬施設 北西方向に開口する無袖式の横穴式石室である。石室の長さ（奥壁から北側壁の石組みの終点）は、約5.5m、開口部墳端までの長さは9.4mを測る。現状で玄室と羨道との境界は明確ではないが、玄室相当部分はやや胴張りになる可能性があり、玄室幅は1.5mほどと推定される。前庭部の位置には、側壁の石組みはなく、前庭部に相当する遺構も検出できなかったことから、墳丘の構築と併行して、前庭部も埋められている可能性が考えられる。

築造時期 出土した須恵器は、主に開口部付近の表土・流出土から出土している。出土した須恵器は全形を知りえるものはなく、坏身・坏蓋のように年代の指標になる器種も存在しない。外面に2条の沈線を施す椀形の高坏は、周辺では、東谷山白鳥古墳、白鳥4号墳、東谷山1号墳、東谷山5号墳、東谷山12号墳、山の田古墳などで出土しており、蝮ヶ池窯式期～H-44号窯式期（陶邑編年TK43～TK217型式（古））に位置付けられる。また、近傍の白鳥4号墳（H-44号窯式期古段階）とは、側壁下段に小型の石を積み、最上段に大型の石を積む石室の構築法に共通点が認められる。これら間接的な情報ではあるが、白鳥5号墳の築造時期は、6世紀末～7世紀前葉（H-44号窯式期）を想定しておきたい。

5 白鳥6号墳の調査

(1) 各トレンチの調査

① トレンチの位置

白鳥6号墳は、庭の築山として植栽が行われていたため、樹木を避けてトレンチを設定した。第1次調査では、石室の形状や残存状況を確認するために、墳頂部から石室の開口部にかけて、1トレンチを設定した。また、墳丘の規模と周溝の有無を確認するため、北西側の墳丘裾に2トレンチを設定した。第2次調査では、南側の墳丘裾を確認し、墳丘の規模を把握するため、南東側に3トレンチ、北東側に4トレンチを設けた。

② 1トレンチ

試掘調査で掘削した部分を再掘した後（写真図版36-1）、検出した石列の方向に合わせて試掘部分を含む2m×2mの調査区を設定した。検出した1列の石列と現在の墳丘との位置関係より、対となる側壁は北側にあると推定した。そのため、試掘調査時に埋土として掘削した部分を掘り進めたが、石組みは確認できなかったため、すでに側壁が残存していないものと考えていた。しかし、調査区を南側に拡張したところ、南側に側壁の一部が残存することを確認し、石室埋土として掘削した部分が、墳丘の盛土部分であることが判明した。

そこで、あらためて石室の主軸にあわせて西側にトレンチを設定しなおし、掘削を進めた。北側に比べ、南側の側壁の遺存状況は悪く、とくに東区南側（図6-13のC-C'断面南側）では、側壁上部の石が大きく抜き取られていた（写真図版36-3）。また、奥壁と推定される部分の石も、抜き取りのためか

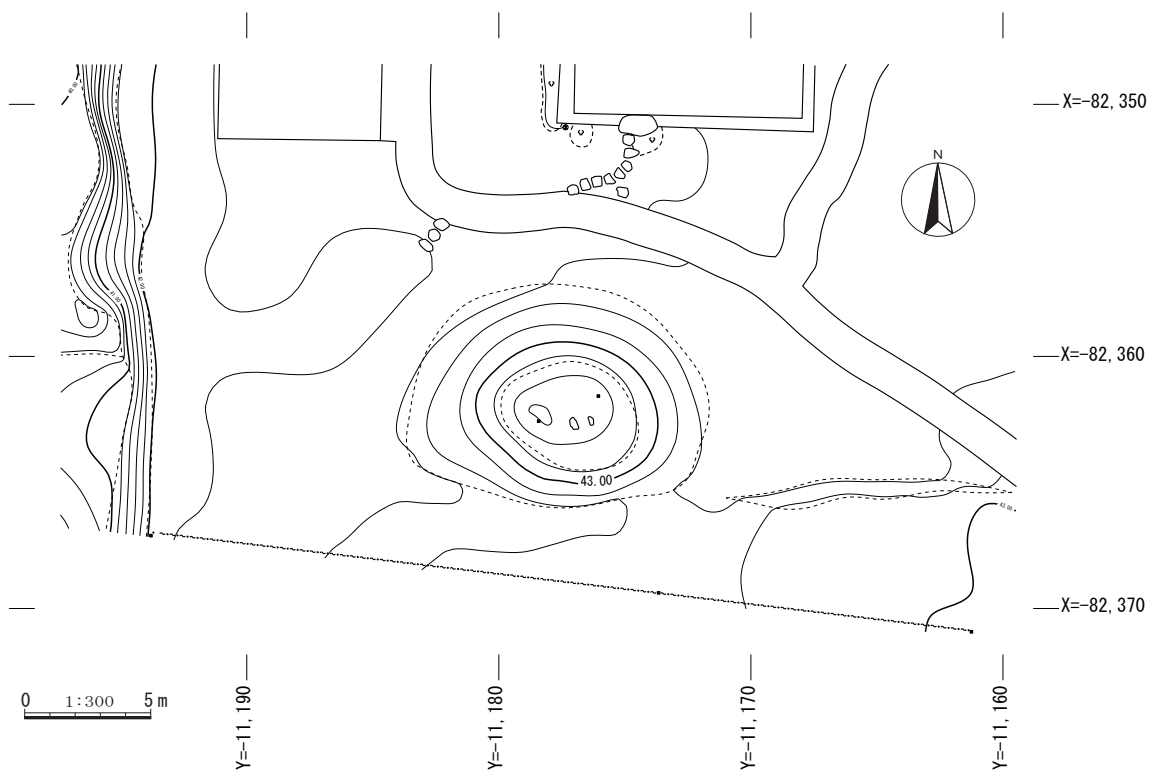


図6-11 白鳥6号墳丘測量図

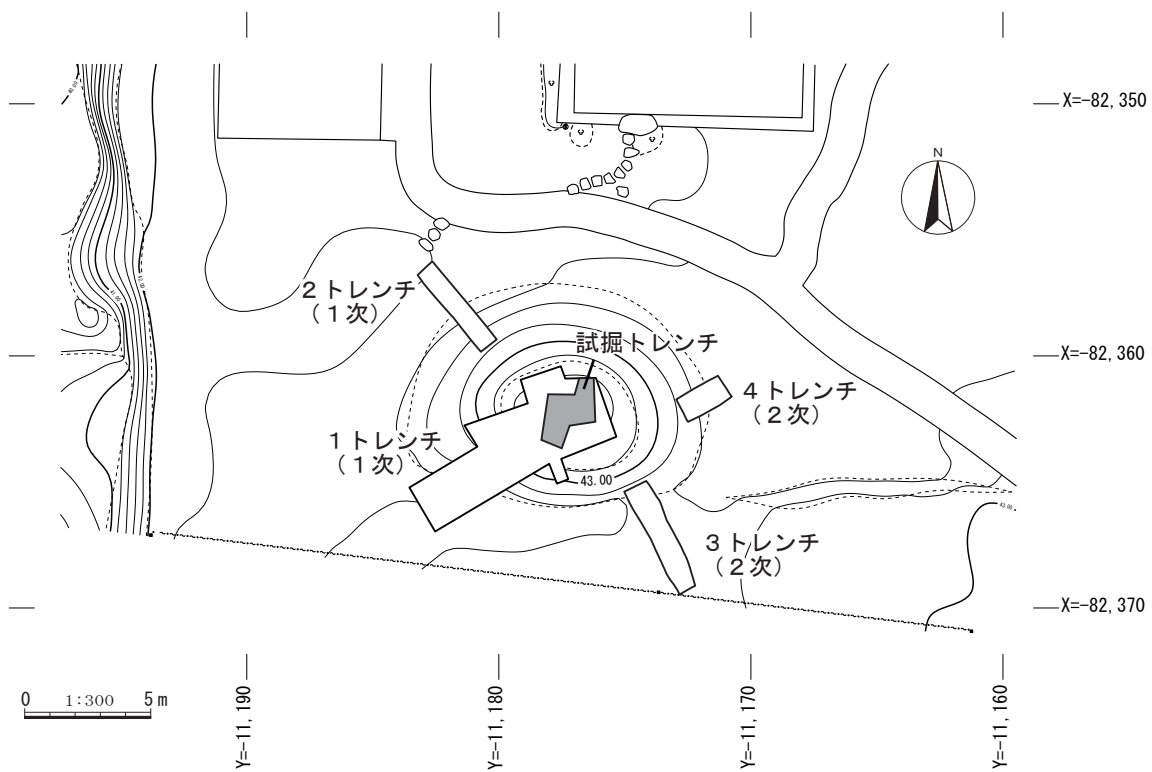


図6-12 白鳥6号墳トレンチ配置

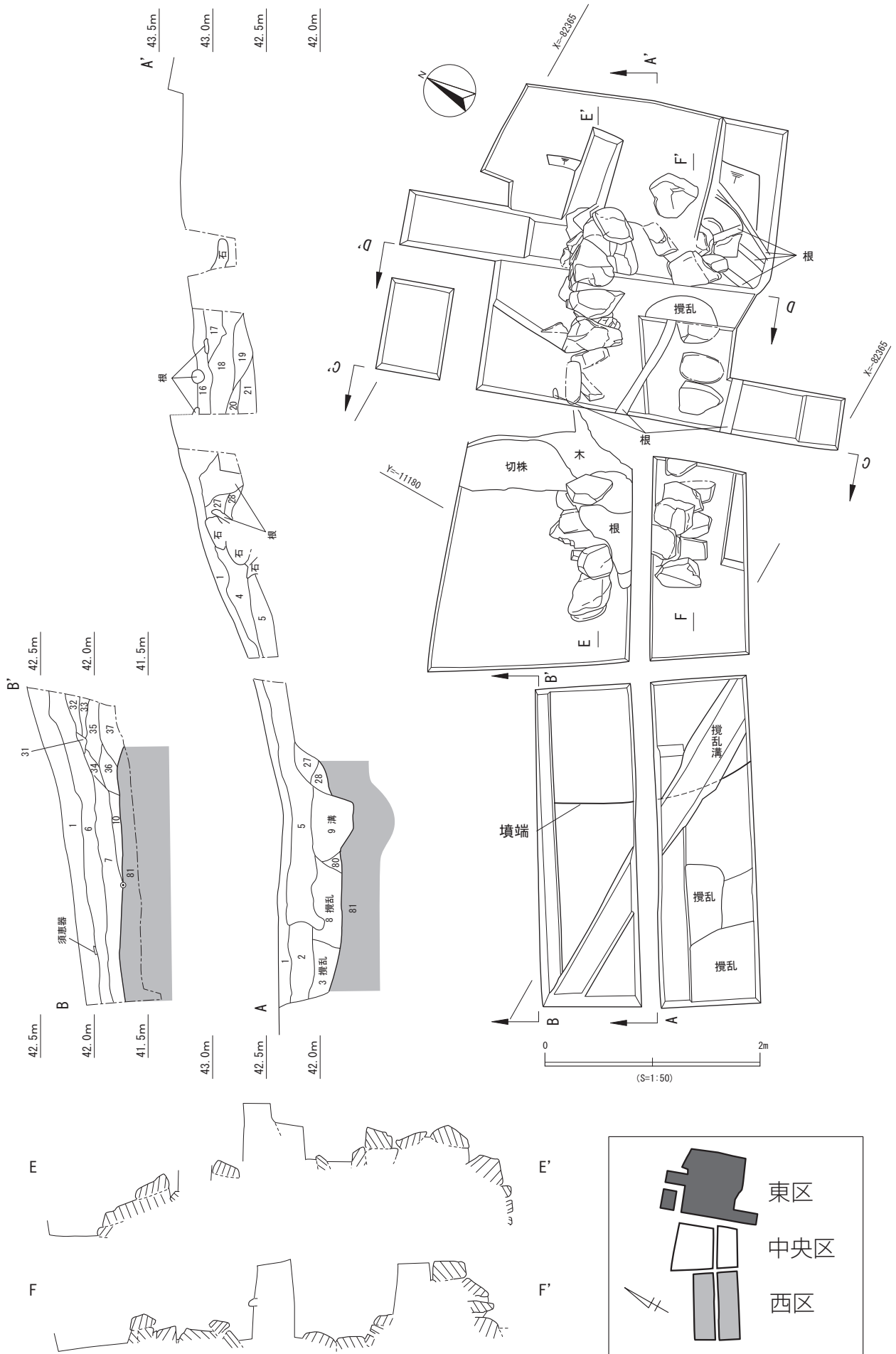
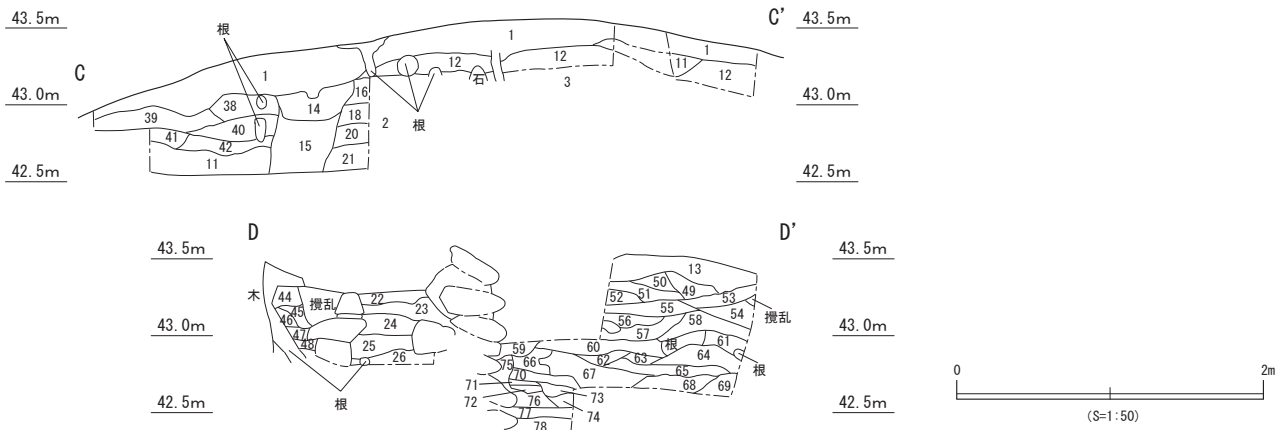


図6-13 白鳥6号墳1トレンチ平面図・断面図・エレベーション図(1)



- | | |
|--|---|
| <p>1 表土 7.5YR3/2 暗褐色</p> <p>2 10YR3/ 暗褐色 細粒砂</p> <p>3 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 ビニール含む (攪乱)</p> <p>4 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 長径 0.5 cm 以下の炭を 3% 含む</p> <p>5 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘性なし</p> <p>6 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり強 粘性弱</p> <p>7 10YR3/3 暗褐色 細粒砂 長径 0.8 cm 以下の炭を 3% 含む しまり弱 粘性弱</p> <p>8 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 ビニール含む (攪乱)</p> <p>9 10YR3/3 暗褐色 細粒砂 10YR4/6 褐色土を斑状に 5% 含む しまり弱 粘性なし (攪乱溝)</p> <p>10 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまり弱 粘性弱</p> <p>11 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂</p> <p>12 7.5YR4/3 褐色 細粒砂 遺物含む 7.5YR3/3 暗褐色土を含む</p> <p>13 10YR4/4 褐色 細粒砂 長径 0.2 cm 以下の白色礫を 3% 含む しまり弱 粘性なし</p> <p>14 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂 (石材抜き取り)</p> <p>15 7.5YR4/4 褐色 細粒砂</p> <p>7.5YR3/3 暗褐色土を斑状に 3% 含む (石材抜き取り)</p> <p>16 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>17 10YR4/4 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>18 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>19 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>20 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>21 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 (石室内埋土)</p> <p>22 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>23 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色・黒色粒を 1% 含む しまり弱 粘性なし (石室内埋土)</p> <p>24 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 7.5YR4/6 褐色土を塊状に 3% 含む (石室内埋土)</p> <p>25 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 (石室内埋土)</p> <p>26 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂〜シルト (石室内埋土)</p> <p>27 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまり非常に弱 粘性なし (石室内埋土?)</p> <p>28 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり非常に弱 粘性なし (石室内埋土?)</p> <p>29 10YR4/6 褐色土 細粒砂と 10YR3/3 暗褐色 細粒砂が半々で混ざる しまり弱 粘性なし (石室内埋土?)</p> <p>30 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (石室内埋土?)</p> <p>31 10YR2/3 黒褐色 細粒砂 しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>32 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 10YR4/4 褐色土を斑状に 2% 含む しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>33 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>34 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>35 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>36 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>37 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 10YR4/4 褐色土を斑状に 2% 含む しまり弱 粘性弱 (墳丘盛土)</p> <p>38 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>39 10YR3/3 暗褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>40 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし</p> <p>41 7.5YR3/2 暗褐色 極細粒砂</p> <p>42 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし</p> <p>43 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし</p> <p>7.5YR4/3 褐色土を斑状に 3% 含む</p> | <p>44 10YR4/4 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし</p> <p>10YR3/3 暗褐色土を 5% 含む (墳丘盛土)</p> <p>45 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>46 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>47 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>48 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂〜シルト しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>49 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>50 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>51 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>52 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>53 7.5YR4/3 褐色 細粒砂 長径 0.1 cm 以下の白色礫を 2% 含む しまり弱 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>54 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>55 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>56 7.5YR4/3 褐色 細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>57 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 7.5YR4/6 褐色土を粒状に 2% 含む (墳丘盛土)</p> <p>58 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 7.5YR4/6 褐色土を粒状に 1% 含む (墳丘盛土)</p> <p>59 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 10YR2/3 黒色土を粒状に 3% 含む (墳丘盛土)</p> <p>60 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 10YR5/6 黄褐色土を斑状に 5% 含む (墳丘盛土)</p> <p>61 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>62 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>63 10YR4/4 褐色 極細粒砂 10YR5/6 黄褐色土を斑状に 10% 含む しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>64 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>65 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 長径 0.2 以下の礫を 1% 含む しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>66 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 10YR5/6 黄褐色土を斑状に 3% 含む しまりややあり 粘性なし (墳丘盛土)</p> <p>67 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂</p> <p>長径 0.1 cm 以下の白色粒を 2% 含む (墳丘盛土)</p> <p>68 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂</p> <p>長径 0.1 cm 以下の白色粒を 1% 含む (墳丘盛土)</p> <p>69 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>70 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂</p> <p>長径 0.1 cm 以下の白色粒 1% 含む (墳丘盛土)</p> <p>71 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>72 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂</p> <p>7.5YR3/4 暗褐色土を粒状に 3% 含む (墳丘盛土)</p> <p>73 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂</p> <p>10YR5/4 にぶい黄褐色土を粒状に 2% 含む (墳丘盛土)</p> <p>74 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>75 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>76 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂</p> <p>10YR3/2 黒褐色土を斑状に 3% 含む (墳丘盛土)</p> <p>77 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (墳丘盛土)</p> <p>78 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂</p> <p>10YR3/2 黒褐色土を斑状に 10% 含む (墳丘盛土)</p> <p>79 10YR4/4 褐色 極細粒砂〜シルト</p> <p>7.5YR3/4 暗褐色土を斑状に含む (地山?)</p> <p>80 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘性なし (地山又は地山のブロック)</p> <p>81 10YR4/6 褐色 極細粒砂〜シルト しまりややあり 粘性なし (地山)</p> |
|--|---|

図6-14 白鳥6号墳1トレンチ平面図・断面図・エレベーション図(2)

確認できなかった。

埋葬施設は、平面形状より、は南西方向に開口する無袖式の石室と推定される。側壁の石が残存する北東端付近を奥壁と想定すると、石室の長さは約3.7m、墳端までは5.4mを測る。石室の幅は、内寸で、0.5m～0.7mである。石は長軸30cm～50cmのやや小振りの石を、小口・長手積みして側壁とする。断ち割りを行なった東区D-D'断面では少なくとも7段（高さ1.2m）は積み上げているが、石と石との間隙は大きい（図6-14、写真図版36-4）。

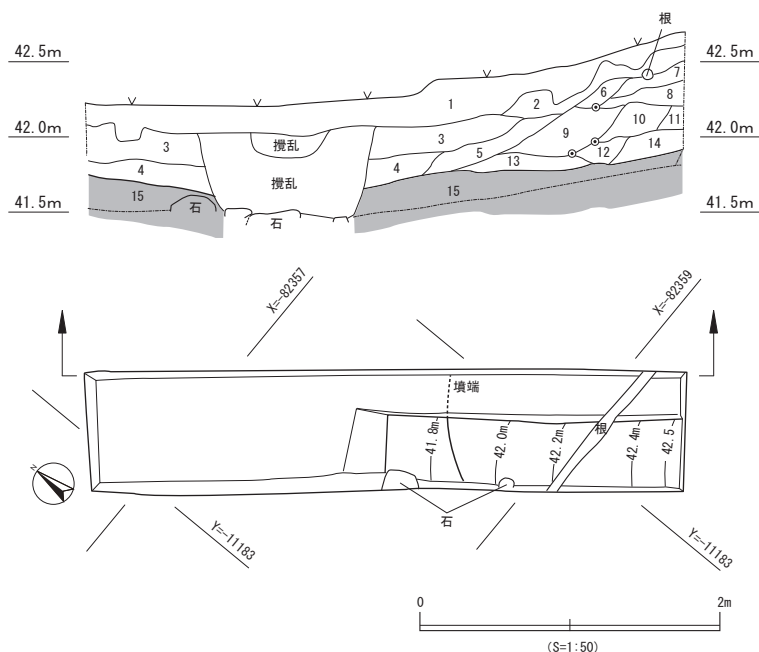
中央区では、表土・流土を除去すると側壁の石を検出したが、両側壁の間隔が内寸で約40cmと狭く、また側壁外側からも須恵器片が出土したため、上部の石は元位置を保っていない

可能性を考え、さらに下部まで掘り下げた。結果として3段ほどの石積みを確認した。最上段の石は土圧等により内傾しているものと考えられるが、下段の石はおおよそ元位置を保っていると判断される。その内寸幅は約50cmである。この側壁の外側の土層は、大きく攪乱を受けていた。

側壁の石積みは中央区で途絶し、西区では認められなかった。西区南西端より約1.9mの位置で土層の変化が認められ、B-B'断面にて人為的に積まれた土（31層～37層）と判断されたことから、墳端と考えた。墳端の標高は41.8mである。ただし、側壁が途切れた地点から墳丘裾にいたる場所において平面の精査を行なったものの遺構は確認できず、その構造（羨道・前庭部）については不明である。

③2 トレンチ

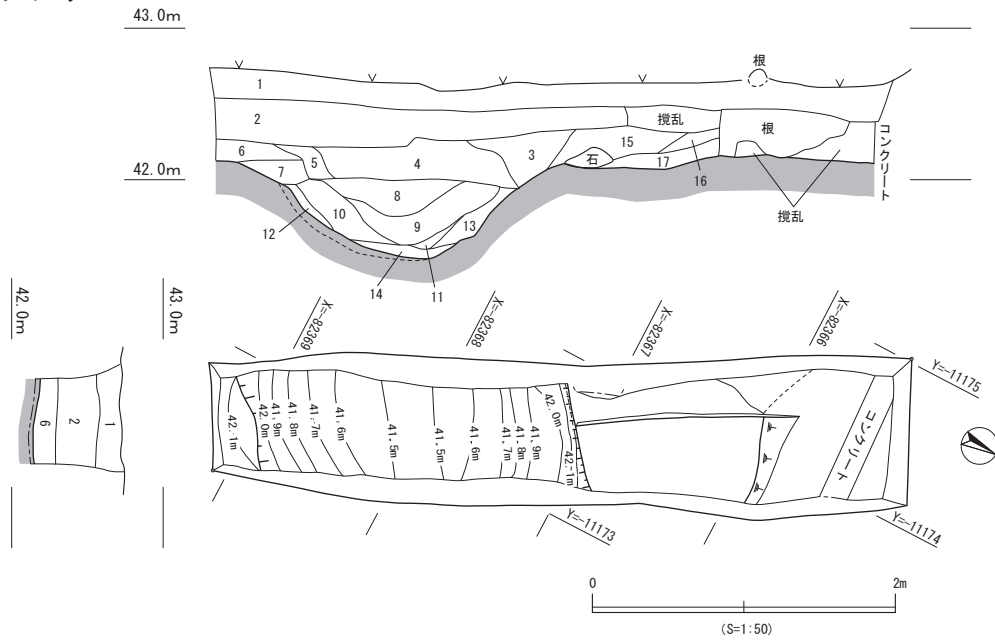
墳丘の北西に設置した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。トレンチ南東端より約1.4mの地点で、盛土を確認できたことから、墳丘裾と考えた。墳裾の高さは41.8mを測る。墳丘外側の掘削も行なったが、周溝は確認できなかった。



1	表土				
2	7.5YR3/4 暗褐色	細粒砂	長径0.1cm以下の白色粒を1%含む	しまり弱	粘性なし
3	7.5YR4/4 暗褐色	極細粒砂	長径0.1cm以下の白色粒を1%含む	しまり弱	粘性なし
4	7.5YR4/6 暗褐色	細粒砂		しまり弱	粘性なし
5	7.5YR3/4 暗褐色	極細粒砂	10YR5/6 明褐色をブロック状に2%含む	しまり弱	粘性なし
6	7.5YR3/4 暗褐色	極細粒砂		しまり弱	粘性なし
7	7.5YR3/3 暗褐色	細粒砂	長径0.1cm以下の黒色礫を1%含む	しまり弱	粘性なし
8	7.5YR2/2 極暗褐色	極細粒砂～シルト		しまり弱	粘性ややあり
9	7.5YR3/4 暗褐色	極細粒砂～シルト		しまりややあり	粘性ややあり
10	10YR3/4 暗褐色	極細粒砂～シルト		しまりややあり	粘性ややあり
11	7.5YR4/4 褐色	極細粒砂～シルト	長径0.1cm以下の黒色礫を1%含む		
12	7.5YR3/4 暗褐色	極細粒砂～シルト	7.5YR4/4 褐色土を3%含む	しまり弱	粘性なし
13	7.5YR4/4 褐色	極細粒砂～シルト	長径0.1cm白色・黒色粒を1%含む	しまり弱	粘性なし
14	10YR3/4 暗褐色	極細粒砂～シルト	長径0.1cm白色・黒色粒を1%含む		
15	7.5YR5/8 明褐色	中～細粒砂		しまりややあり	粘性なし

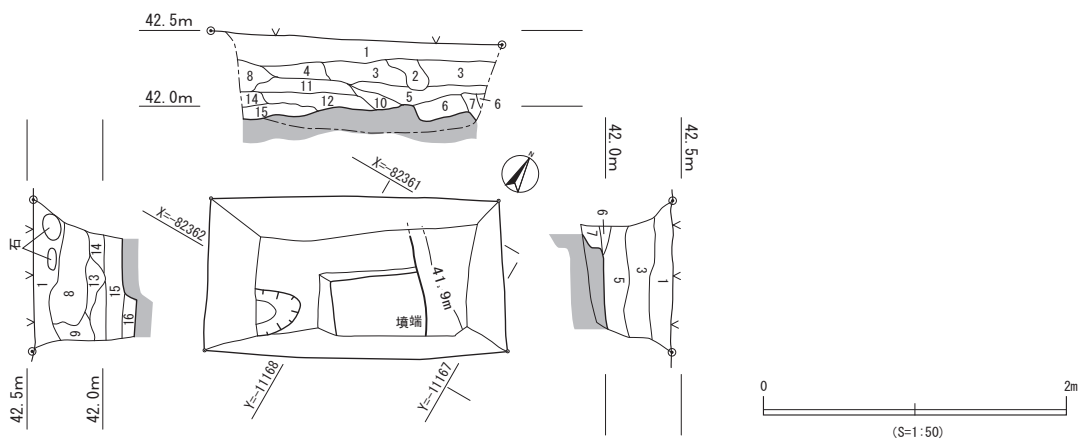
図6-15 白鳥6号墳2トレンチ平面図・断面図

3 トレンチ



- | | |
|-----------------------------------|--|
| 1 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 (表土) | 10 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂粒 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂 しまり弱い | 11 10YR4/4 褐色 極細砂粒 |
| 3 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂 炭化粒含む (ピット埋土) | 12 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～シルト |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂～シルト 粘性あり | 13 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂 地山ブロック混ざる |
| 5 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂 | 14 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～シルト |
| 6 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂～シルト 粘性あり しまり強い | 15 7.5YR4/3 灰褐色 極細粒砂 しまり強い (墳丘盛土) |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂 やや粘性あり | 16 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂 しまり強い (墳丘盛土) |
| 8 10YR3/2 黒褐色 極細粒砂 黄褐色砂が混じる | 17 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～シルト 粘質あり (墳丘盛土) |
| 9 10YR3/4 暗褐色 極細砂粒 | 18 2.5Y7/6 明黄褐色 極細粒砂 粘性あり (地山) |

4 トレンチ



- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 (表土) | 9 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 (墳丘盛土) |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 (根攪乱) | 10 2.5Y6/4 にぶい黄色 極細粒砂 (墳丘盛土) |
| 3 2.5Y6/4 にぶい黄色 細粒砂 ややしまりあり | 11 2.5Y5/4 黄褐色 極細粒砂 しまり弱い (墳丘盛土) |
| 4 10YR4/4 褐色土 細粒砂 しまり弱い | 12 2.5Y4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂 粘性あり (墳丘盛土) |
| 5 2.5Y4/4 オリーブ褐色 中粒砂～細粒砂 しまり弱い | 13 5YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂 |
| 6 2.5Y7/8 黄色 中粒砂～細粒砂 粘性弱い (攪乱か) | 14 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細粒砂 やや粘性あり (墳丘盛土) |
| 7 7.5YR5/4 にぶい褐色 細粒砂 地山の再堆積 (攪乱) | 15 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細粒砂 (墳丘盛土) |
| 8 10YR6/4 にぶい黄橙 細粒砂～極細粒砂 やや粘性あり (墳丘盛土) | 16 2.5y5/4 黄褐色 細粒砂 (ピット埋土) |

図6-16 白鳥6号墳3トレンチ・4トレンチ平面図・断面図

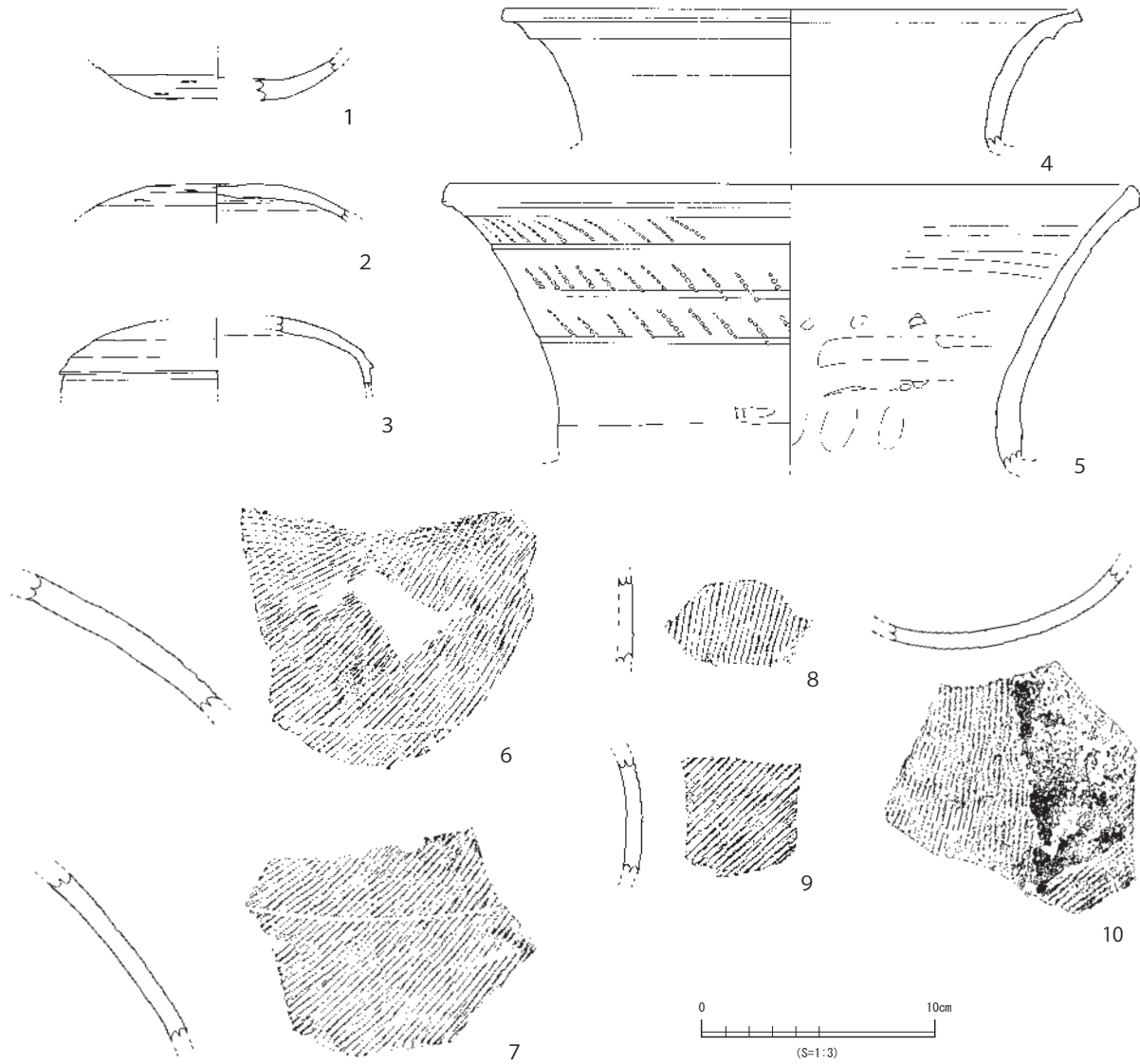


図6-17 白鳥6号墳 出土遺物

表6-2 白鳥6号墳 出土遺物一覧表

No	種類	器形	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	色調	備考
1	須恵器	坏身	底部	1トレンチ 中央区 南側側壁外側攪乱	残存高:1.8		外面:N4/ 灰 内断面:5Y5/1 灰	
2	須恵器	坏蓋		1トレンチ 中央区 南側側壁外側攪乱	残存高:1.6		内外:7.5Y6/1 灰	
3	須恵器	坏蓋		1トレンチ 中央区 南側側壁外側攪乱	残存高:3.0		内外:5Y5/1 灰	
4	須恵器	甕	口縁部	1トレンチ 表土	口径:(24.4) 残存高:5.4	1/12	外面:5Y4/1 灰 内面:2.5Y5/1 黄灰 断面:5YR4/1 褐灰	
5	須恵器	甕	口縁部	3トレンチ 周溝(土坑)	口径:(29.0) 残存高:12.0	1/6	内外:10YR7/1 灰白	内外面に自然釉
6	須恵器	甕	胴部	1トレンチ 東区 南側攪乱	残存高:6.9		内外:2.5Y6/1 黄灰	凹線
7	須恵器	甕	胴部	1トレンチ 表土	残存高:6.8		内外:2.5Y5/1 黄灰	凹線
8	須恵器	甕類	胴部	1トレンチ 表土	残存高:4.1		内外:5Y6/1 灰 断面:5YR5/2 灰褐	
9	須恵器	甕類	胴部	1トレンチ 西区 攪乱内	残存高:5.0		内外:5Y6/1 灰 断面:5YR5/2 灰褐	
10	須恵器	甕類	底部	1トレンチ 試掘トレンチ埋戻土	残存高:2.3		外断面:2.5Y5/1 黄灰 内面:2.5Y5/2 暗灰黄	

④ 3トレンチ

墳丘の南東に設置した幅 1.0m × 長さ 9.0m のトレンチ。トレンチ北側は、コンクリートが埋設されており、墳丘は大きく破壊されていたが、トレンチ北から 2.1m ~ 2.3m の地点では、墳丘側に堆積する盛土が確認でき、墳裾と考えられた。墳裾の標高は、約 42.1m である。ここより南側では、幅約 2.2m、深さ 0.6m の溝状の落ち込みが確認された。この遺構からは、須恵器の壺の破片が出土している。古墳の周溝または土坑と推定される。

⑤ 4トレンチ

墳丘の北東に設定した幅 1.0m × 長さ 2.0m のトレンチである。盛土と墳丘流出土の判別が難しかったため、断ち割りを入れて確認を行った。トレンチ南西上端より、1.3m ~ 1.5m の地点より墳丘盛土が始まっており、墳裾と判断した。墳裾の標高は約 42.0m である。

(2) 出土遺物

出土遺物には須恵器があり、5 は、3 トレンチの溝状遺構から、それ以外は 1 トレンチより出土している。

1 は坏身の底部で、2・3 は坏蓋である。坏身底部や坏蓋の天井部にはヘラケズリが行われる。3 の坏蓋は、天井部と口縁部との間に明確な稜が認められる。端部は残存しないが、口径は 13.2cm ほどに復元される。口縁部の稜や口径の大きさから蝮ヶ池窯式期（6 世紀後葉）と推定する。

4・5 は甕の口縁部である。4 は口縁端部に縁帯を有する。5 の口縁端部は、やや丸みをもちシャープさにかける。口頸部には沈線と斜位の刺突列点文が認められる。内外面には自然釉が付着する。類似の甕は濃尾地方では、岐阜県美濃加茂市佐口遺跡から出土している（図 6-18）。甕が出土した竪穴住居（2216 号遺構）の時期は、伴出した蓋坏や摘み蓋から 7 世紀後半頃と想定されている（小淵 2001）。

6・7 は甕の体部であり、外面には平行タタキが見られるが、内面の当て具の痕跡はみられない。肩部に凹線がめぐる。8~10 も外面に平行タタキの痕があり、甕、壺、甗等の体部である。10 は甕や横瓶の底部と推定される。

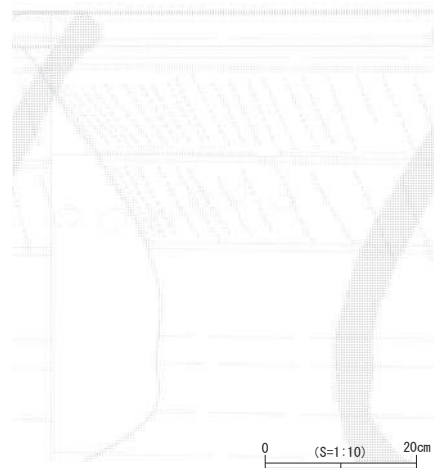


図 6-18 甕の類例（佐口遺跡）

(3) 小結

墳丘・周溝 1~4 トレンチの墳丘の裾部より直径 10.8m ~ 11.8m の円墳に復元することが可能である。現在の墳丘の高さは、墳裾より 1m ほどであり、墳丘上部は削平を受けている。墳丘裾の高さは、1 トレンチ、2 トレンチで 41.8m、3 トレンチで 42.1m、4 トレンチで 42.0m であり、東側に比べ西側がやや低い。また、3 トレンチでは、墳丘裾の外側に溝または土坑状の遺構を検出した。古墳に伴う遺構と考えられるが、他のトレンチで周溝が確認されないことから、墳丘を周回ものではなく、部分的に墳丘

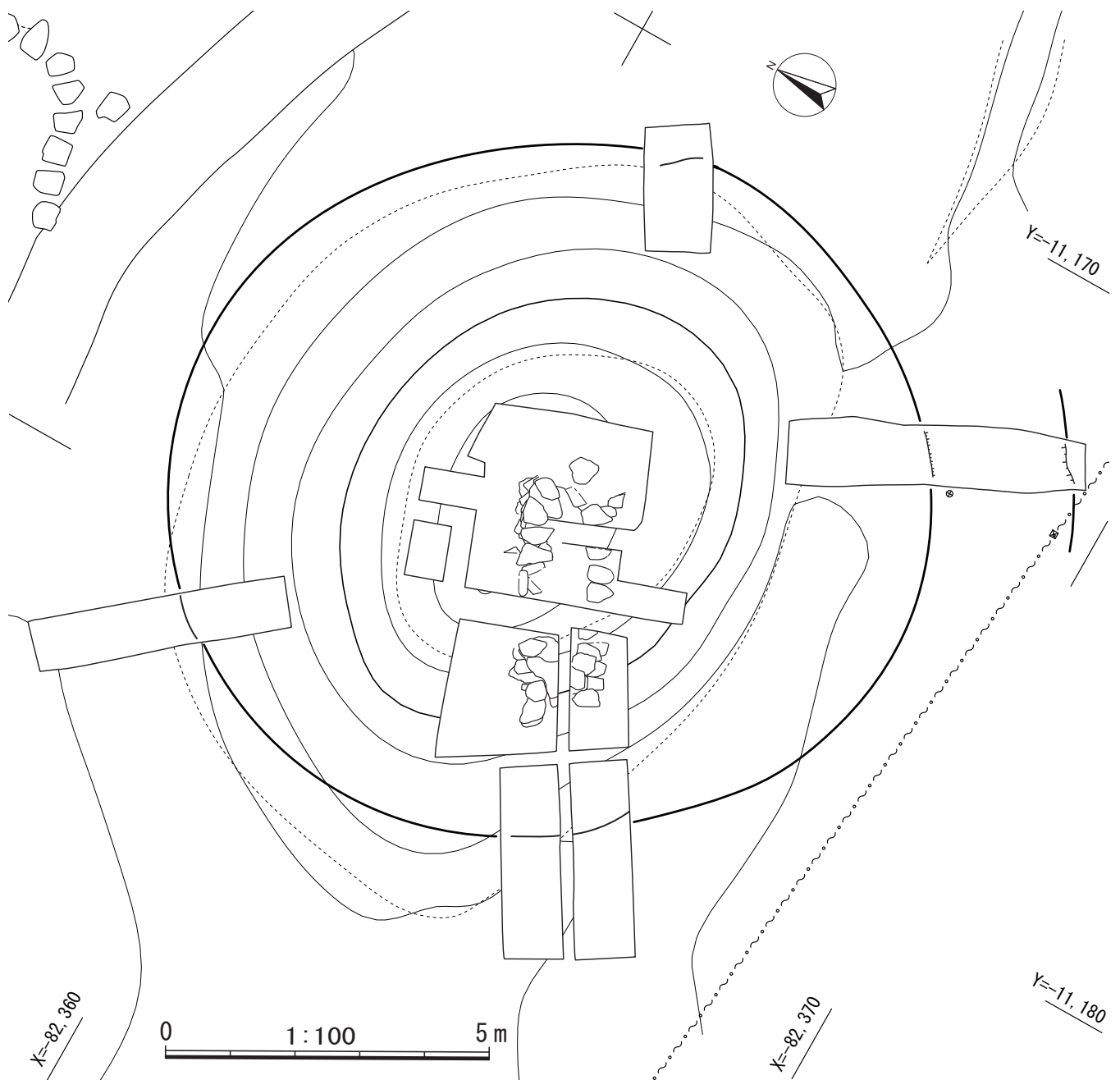


図6-19 白鳥6号墳墳丘復元

裾部に掘削された土坑状の遺構と推測される。白鳥7号墳では墳丘の周囲を土坑状の落ち込みが断続的に巡ることが確認されている。6号墳3トレンチの落ち込みも同様の遺構である可能性がある。

埋葬施設 南西方向に開口する無袖式の横穴式石室と推定される。奥壁の推定位置から石室のながさは3.7m、開口部の墳端までは5.4mを測る。石室の内幅は、0.5m～0.7mと非常に狭い。天井石および側壁の一部も残存していない。

築造時期 出土した須恵器は、連続しない2つの時期の遺物が認められる。1トレンチの攪乱土から出土した坏蓋は、小片ではあるものの蝮ヶ池窯式（6世紀後葉）に位置付けられると考える。同じく1トレンチから出土し他の坏身や坏蓋、甕の口縁部なども同様の時期の可能性もある。一方3トレンチの土坑（周溝）から出土した口頸部に列点文を施す大型甕は、口縁部の形状や文様、類例よりI-17号窯式～I

— 41号窯式（7世紀後半）に下る可能性が高い。

前者の時期の土器が古墳に伴うものであるとは断定できず、また後者の土器も古墳築造時のものであるかは不明である。そのため、古墳の築造時期は、6世紀後葉から7世紀後半までの間と考える。ただし、庄内川中流域の群集墳は、7世紀代には石室が小型化していく（深谷 2007）ことを考えると、白鳥6号墳の石室が非常に小型である点は新しく位置付けられる可能性があることを付記しておく。

6 まとめ

今回の調査により、白鳥5号墳、白鳥6号墳が横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが判明した。これにより、白鳥古墳群では6世紀後葉～7世紀にかけて8基の古墳が連綿と築かれたと考えられる。

白鳥5号墳は、側壁上段に大型の石を使用するという石室の構築法が白鳥4号墳と類似することから、同時期の6世紀末～7世紀前葉（H-44号窯式期）に築造されたと推定される。また、東谷山白鳥古墳も出土遺物より6世紀末～7世紀前葉の築造であり、白鳥古墳群では、当該期に最も多くの古墳が築かれたと考えられる。東谷山白鳥古墳と白鳥4号墳は、周溝の有無という相違点が認められるものの墳丘規模や石室規模が類似し、白鳥4号墳と白鳥5号墳は石室の構築法に共通点が認められる一方、墳丘規模や石室規模、周溝の有無などに相違点がある。このように、白鳥古墳群では同時期に築造された古墳の中で共通性を有しながらも、差異も認められ注目される。

白鳥6号墳は、出土遺物に時期差が認められ、築造時期を確定することができなかった。6世紀後葉の築造とすれば、白鳥8号墳と並んで白鳥古墳群の中で最も古く築造されたと考えられ、白鳥古墳群築造の端緒となる古墳として重要である。7世紀後半の築造と考えれば、東谷山西麓に展開する東谷山古墳群全体の中でも、東谷山34号墳（7世紀末～8世紀初頭の築造）に次いで時期が下る古墳の一つと位置付けることができる。白鳥古墳群、あるいは東谷山古墳群の終末期の古墳として、白鳥6号墳の意義を認めることができる。

参考文献

犬塚康博 1997「古墳時代」『新修 名古屋市史』第一巻 名古屋市

小淵忠司 2001『佐口遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第69集

久永春男・田中稔編 1963『守山の古墳』守山市教育委員会

深谷淳・伊藤厚史・瀧瀬茂 2006「白鳥4号墳・白鳥7号墳」『埋蔵文化財調査報告書53』名古屋市文化財調査報告68
名古屋市教育委員会

深谷淳 2007「志段味・吉根における群集墳の動向とその背景—尾張における古墳終末の一様相—」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第9号 名古屋市見晴台考古資料館

深谷淳 2008「白鳥1号墳・白鳥8号墳」『埋蔵文化財調査報告58』名古屋市文化財調査報告74 名古屋市教育委員会

城ヶ谷和広 2015「編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県

表6-3 白鳥古墳群一覧

古墳名	墳丘		埋葬施設			築造時期	備考
	規模(直径)	周溝	形式	石室全長	開口方向		
東谷山白鳥古墳 (白鳥1号墳)	17.5m ~ 16.5m	あり C字形	無袖式 (胴張り)	9.8m	西北西	H-44号窯式(古) (6世紀末~7世紀初)	国史跡 残存
白鳥2号墳	12m ~ 13m (伝聞)	不明	不明		西?	不明	滅失
白鳥3号墳	12m ~ 13m (伝聞)	不明	不明		不明	不明	滅失
白鳥4号墳	17.0m ~ 16.4m	なし	無袖式 (胴張り)	9.67m	西南西	H-44号窯式(古) (6世紀末~7世紀初)	滅失
白鳥5号墳	12.5m ~ 12.0m	あり (C字形?)	無袖式		北東	H-44号窯式(古) (6世紀末~7世紀初)	残存
白鳥6号墳	11.8m ~ 10.8m	あり (断続?)	無袖式		南西	蝮ヶ池窯式~I-41号窯式 (6世紀後葉~7世紀後半)	残存
白鳥7号墳	9.5m	あり (断続)	不明		南	H-44号窯式(新)~ H-15号窯式期 (7世紀前葉)	滅失
白鳥8号墳	不明	あり	不明		不明	蝮ヶ池窯式 (6世紀後葉)	墳丘滅失 周溝残存

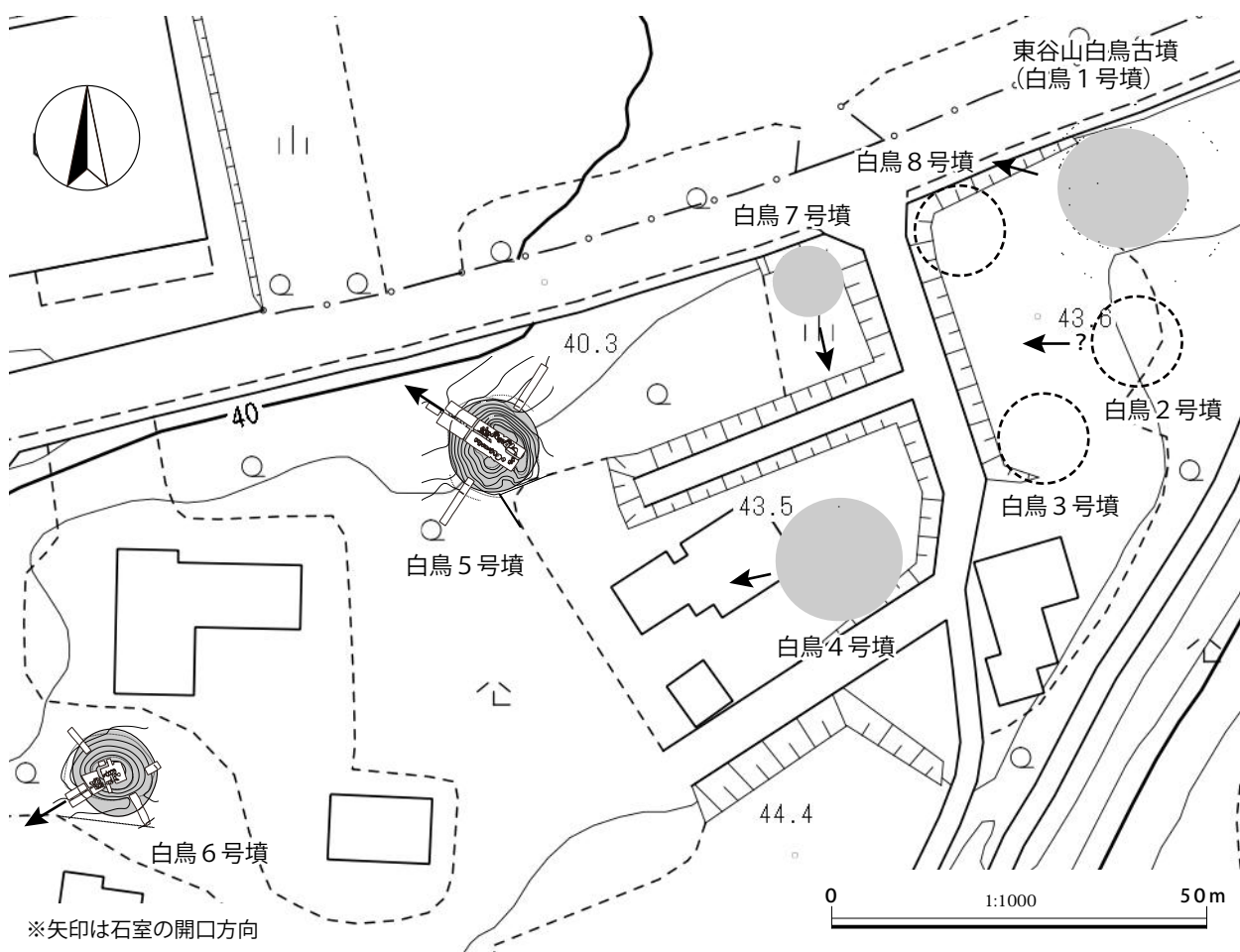
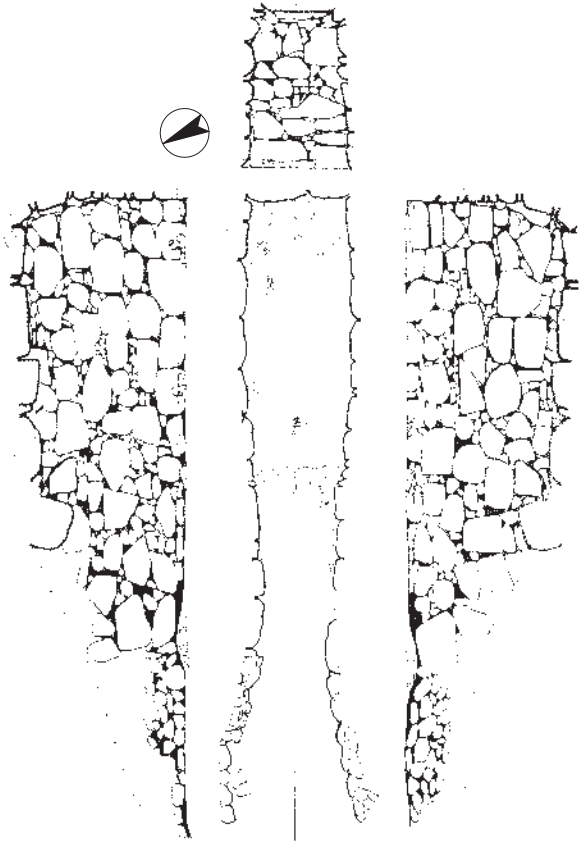


図6-20 白鳥古墳群の配置



東谷山白鳥古墳（白鳥1号墳）



白鳥4号墳



白鳥5号墳

白鳥6号墳

白鳥7号墳

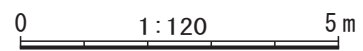


図6-21 白鳥古墳群の横穴式石室

第7章 東谷山 12号墳の調査

1 既往の調査研究

東谷山西麓の多くの古墳は、近世初頭の名古屋城築城の際、石垣用材として巨石が搬出されたことを除けば、近世以降太平洋戦争が終わるまでは、ながらく形を保ってきた。しかし、戦後東谷山麓一帯の県有林が農地として開放されると、小型の円墳は開墾されて滅失した。1963（昭和38）年2月に守山市は、名古屋市と合併し守山区となったが、4月には東谷山麓の宅地開発が進行し、東谷山3号墳の破壊が進んでいる一報を受け、久永春男氏らにより緊急調査が行なわれた。同様に1964（昭和39）年3月には、東谷山4号墳、5号墳の調査が行われた。こうして宅地造成地域内にあった古墳は、次々と失われていったが、残されていた東谷山12号墳、第14号墳もぶどう畑に開墾されることになり、1965（昭和40）年7月発掘調査が行われた。昭和41年8月、土地所有者の依頼により、東谷山15号墳の調査を実施した。本墳は戦後の開拓により石室の大半が失われていたが、石室基底部分明らかにされた。13号墳は、石室は失われて雑草に覆われて所在不明になっていたが、発見され敷石が残されていて規模を明らかにすることができた。新たに始まった農業構造改善事業により、一部が残っていた古墳6基が未調査のまま失われた。1967（昭和42）年6月には、東谷山16号墳の除去が決まり、発掘調査を実施した。墳丘の直径約30m、横穴式石室の全長18mの規模の大きな石室であった。

2 現況

東谷山12号墳は、東谷山西麓の標高60～70mの丘陵上、舌状にのびた6つの丘の一つ第三支丘上に立地する。守山区大字上志段味字東谷2110である。古墳は、横穴式石室墳で、調査時は天井石も残さ

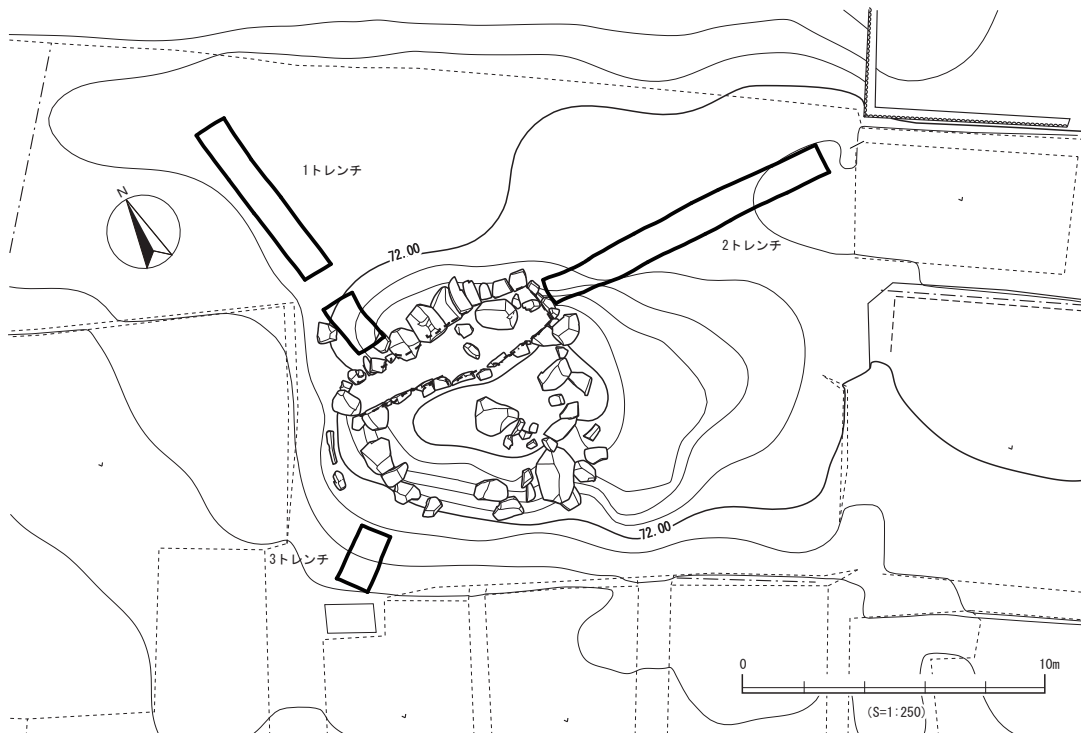


図7-1 トレンチの位置

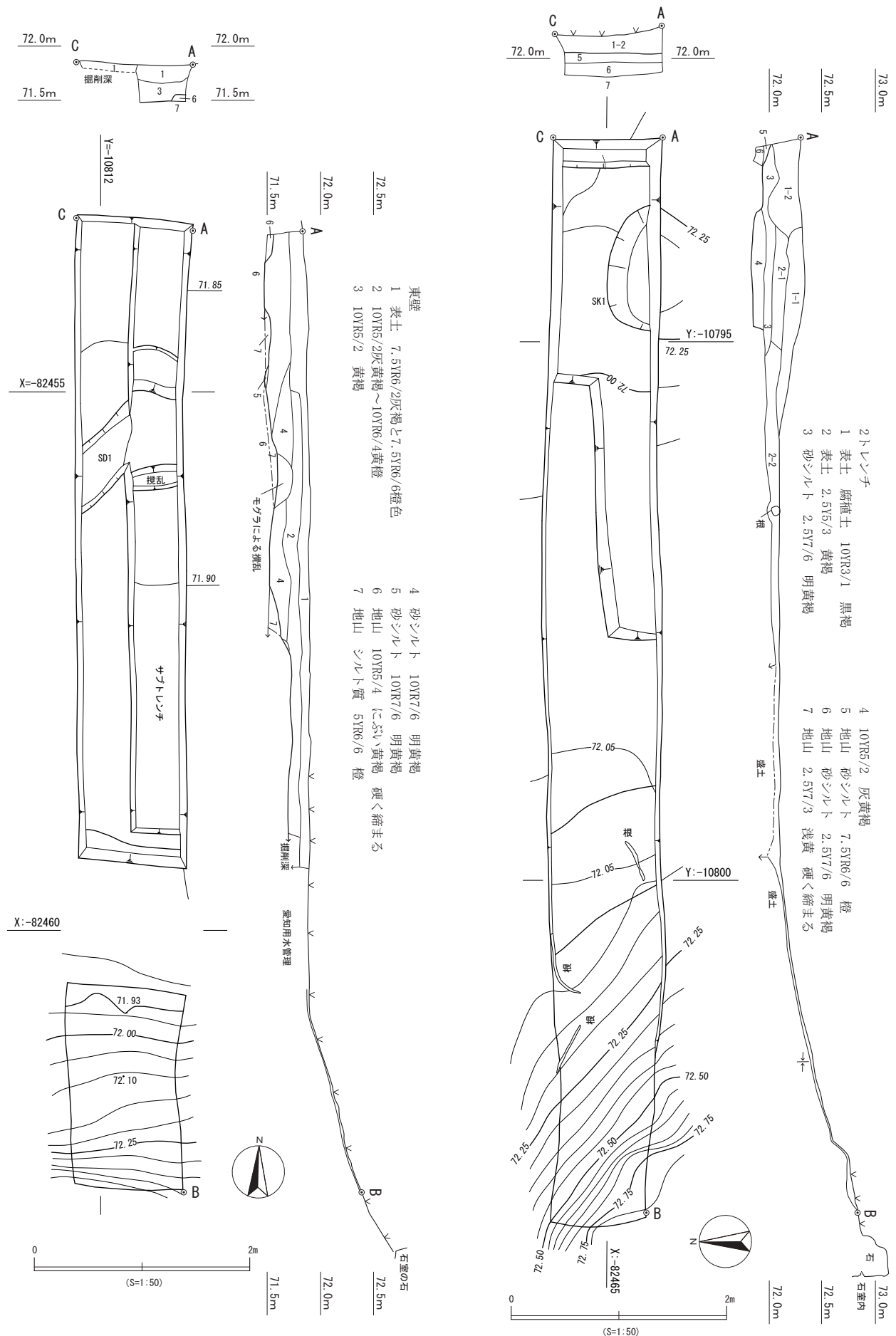


図7-2 1 トレンチ 平面図・断面図、2 トレンチ 平面図・断面図

れていた。天井石を覆う盛土は失われ、南西側側壁以下の盛土が残されていた。北東側の側壁の周囲は、盛土も削平されている。石室の全長は7.5 m、墳丘の直径は推定16 mとされる。除去される予定の石室であったが、奥壁、側壁は当時のまま残されている。

3 各トレンチの調査成果

(1) トレンチの位置

古墳の規模を明らかにすることが目的である。周溝の有無を確認するために、三方にトレンチを設定した。1トレンチは石室の北側、2トレンチは石室背後、3トレンチは石室南側である。

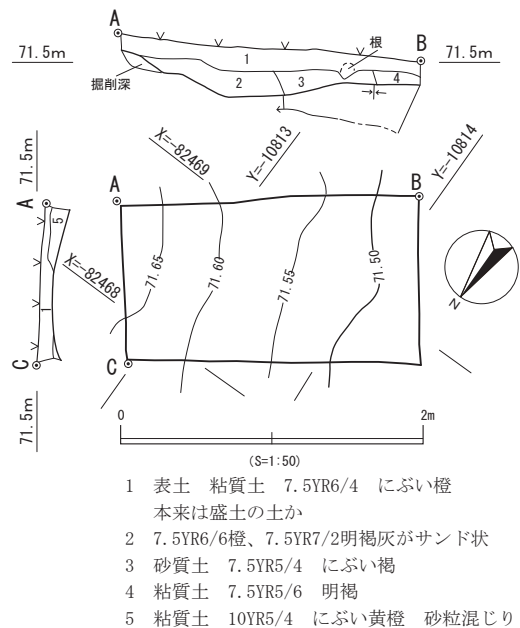


図7-3 3トレンチ平面図・断面図

(2) 1トレンチ

石室開口部の北側は墳丘盛土がほとんど消失しており、平坦地である。長さ9.0 m、幅1.0 mのトレンチを設定した。墳丘側から2.0 mのところへ愛知用水の水路が埋設されていたが、掘り方の検出にとどめた。用水の幅1.5 m。遺構は検出されなかった。

(3) 2トレンチ

石室の背後もほとんど墳丘盛土が無く、平坦地である。長さ10.1 m、幅1.0 mのトレンチを設定した。墳丘の盛土残存部分は、表土はほとんど堆積しておらず、盛土が露出している状況であった。墳丘側から2.5 m～4.0 mには愛知用水の水路が斜めに横切っている。東端近くで土坑を検出した。直径1.1 m、深さ0.1 m。出土遺物はなく時期は不明である。

(4) 3トレンチ

本トレンチ付近は畑地として利用されているため、小規模なトレンチを設定するに留まった。長さ2.0 m、幅1.1 mのトレンチを設定した。空撮時はほとんど掘削していなかったが、その後東壁際にサブトレンチを設定し掘削した。地山と思われた土は盛土の一部と思われ、その下位層が橙色、明黄褐色の地山であった。

4 出土遺物

遺物は出土しなかった。

5 まとめ

本調査の目的である古墳の範囲は、墳丘がほとんど失われた状況にあったことから、周溝の検出を行なった。しかし、トレンチの範囲においては、検出することができなかった。

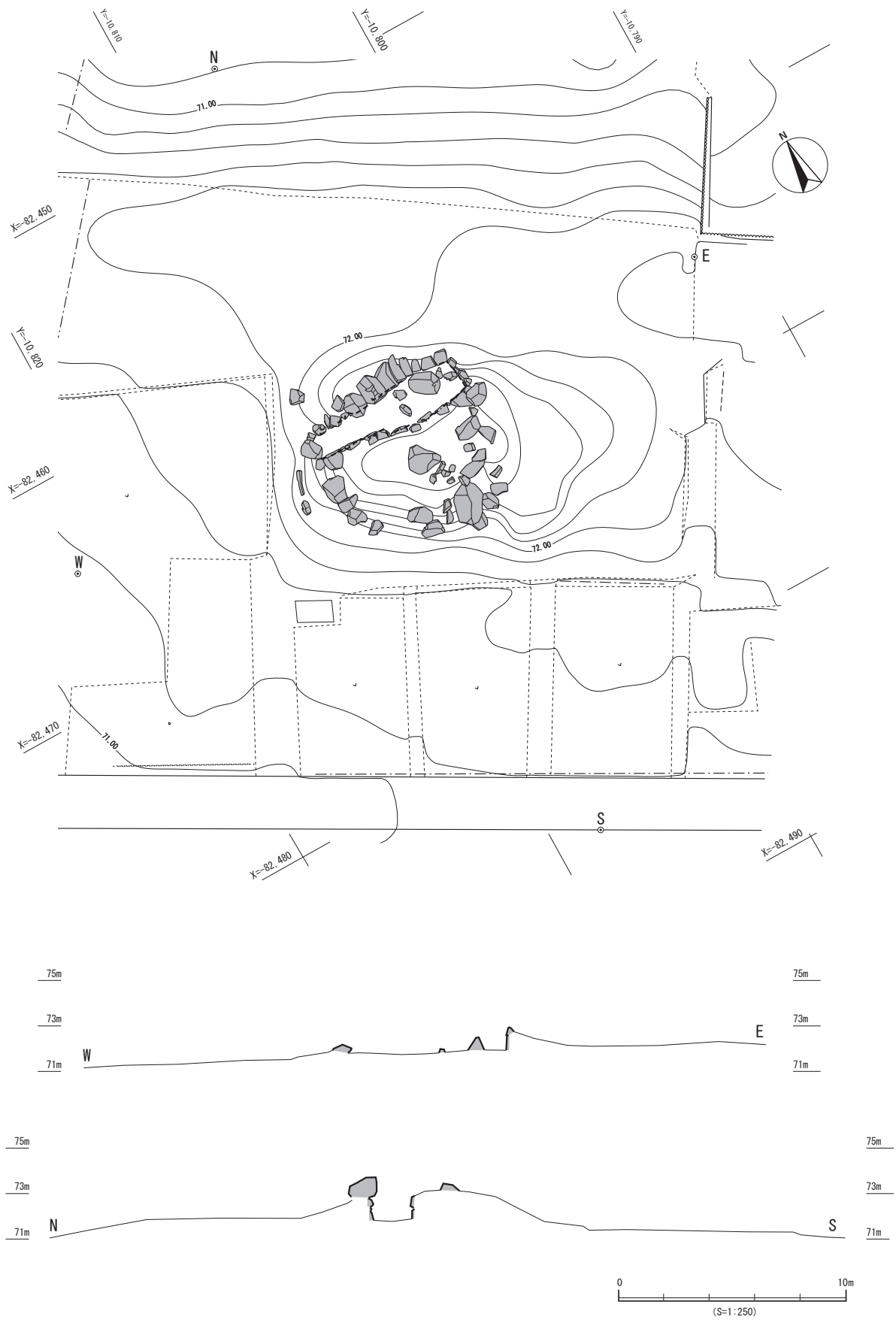


图 7-4 填丘测量图

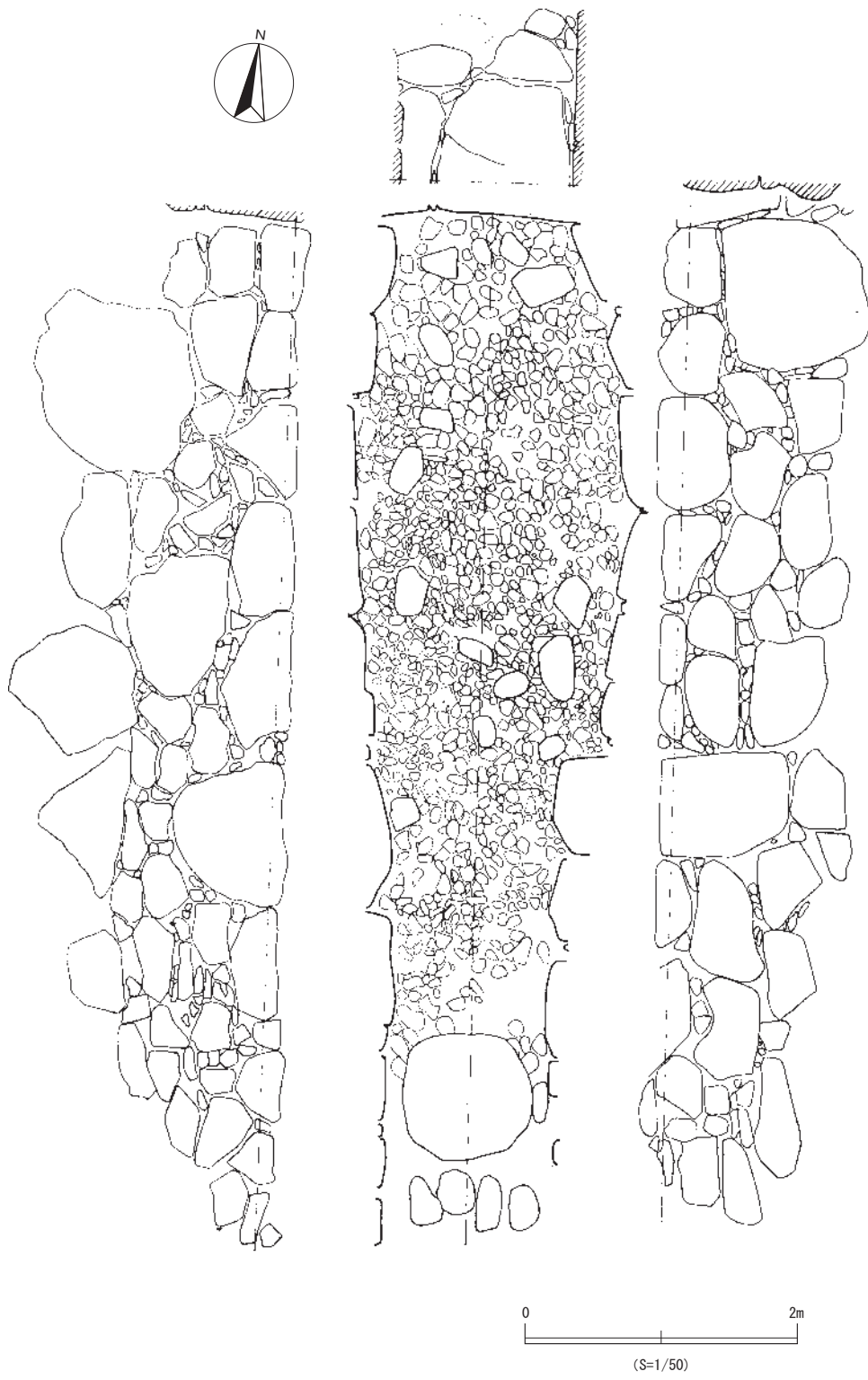


图7-5 石室实测图

第8章 東谷山 16 号墳の調査

1 位置と既往の調査

東谷山 16 号墳は、東谷山西麓の段丘上に立地する。同段丘上には東谷山 12 号墳～16 号墳が築造されている。16 号墳の西側は段丘端が迫り急斜面をなしている。農地改良により大きく開墾される計画のため、1967(昭和 42)年に発掘調査が実施された。調査当時すでに墳丘は一辺 18 m 四方の方形台状となっており、北側農道が横切っていた。墳丘の縁辺に残る礫により直径 30 m の円墳と推定されている。

石室は、奥壁がすでに失われていたが、玄室長推定 6 m、最大幅 2.8 m、玄門幅 1.8 m、羨道は長さ約 12 m、最少幅 1.6 m、羨門幅 2.8 m を測る。玄室は、比較的大きな石を用いて 3 段までが残存している。羨道部はやや扁平な石材を平積にして構築している。床面は直径 10 cm 前後の礫を二重くらいに敷き詰めている。

出土遺物は、玄室内では金環 5 個、羨道部では須恵器長頸壺、短頸壺、高坏、装飾付須恵器の犬などがある。

2 測量調査の成果

本古墳を含む敷地は現在果樹園として利用され、墳丘及び石室が調査当時の頃とあまり変わらず残っている。現況地形測量調査を実施した結果、墳丘は 15 m 四方、石室長 14 m、墳丘の標高は、71.0 m～69.2 m を測り、高さ 1.8 m であった。

3 レーダー探査

墳丘規模や周溝の有無について探ることを目的とした。巻頭図版 8-2 は、3 地点の TS 平面図を測量図にはめ込んだ図である。レーダー探査の結果からみると、石室付近の強い反射による墳丘の範囲は認められるが、墳丘の規模を推測するまでは至らなかった。周溝についてもレーダー探査でははっきりと主体部を巡る溝の存在を明らかにすることはできなかった。なお、羨道付近については敷石が存在する可能性があることは判明した。

巻頭図版 8-2 の内側の円は直径 30 m と推測される古墳のラインである。強い反射が収まる位置に中心点を求めており、実際の奥壁はさらに北東にあるため、そちらに中心点を置くと、実際の古墳は 40 m 近くなってしまうため、強い反射についても慎重に扱う必要がある。

また、A 区で確認された溝と思われる反射は巻頭図版 8-2 を見ても明らかに石室に向かっている。レーダー探査の弱点として、地中下に存在する異物の性格を探ることができない他に、その異物に対する時期についても得ることができないという点がある。今回想定されるこの溝は、北の延長線上に石室の一部が現存しており、客観的事実を見ると古墳に先行する溝であると判断できる。実際の発掘調査による検証により、溝の性格、古墳との関係が明らかとなることを期待したい。

今回のレーダー探査により、墳丘規模や羨道について新たな知見を得ることができた。

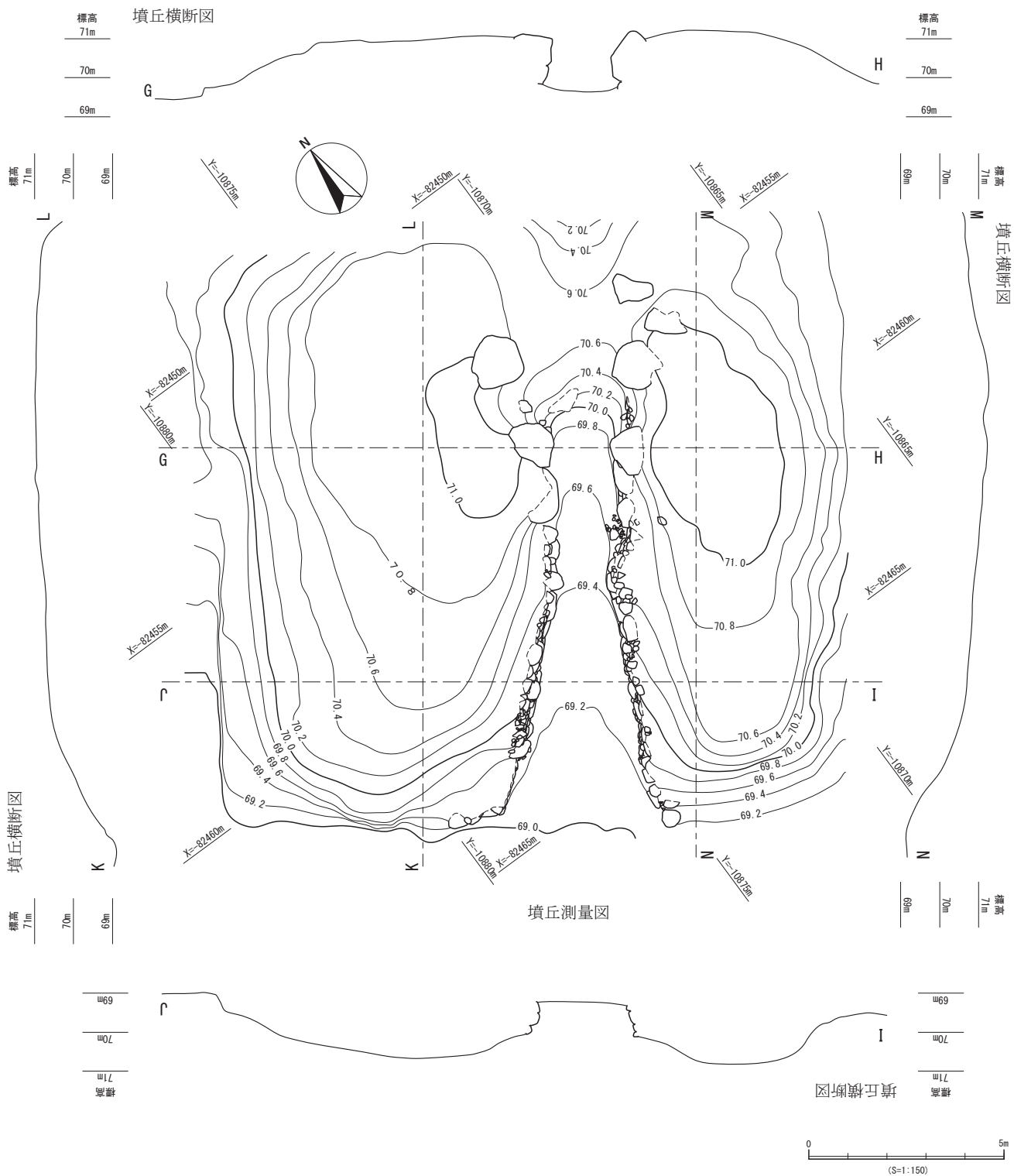


图8-1 填丘測量図・横断面

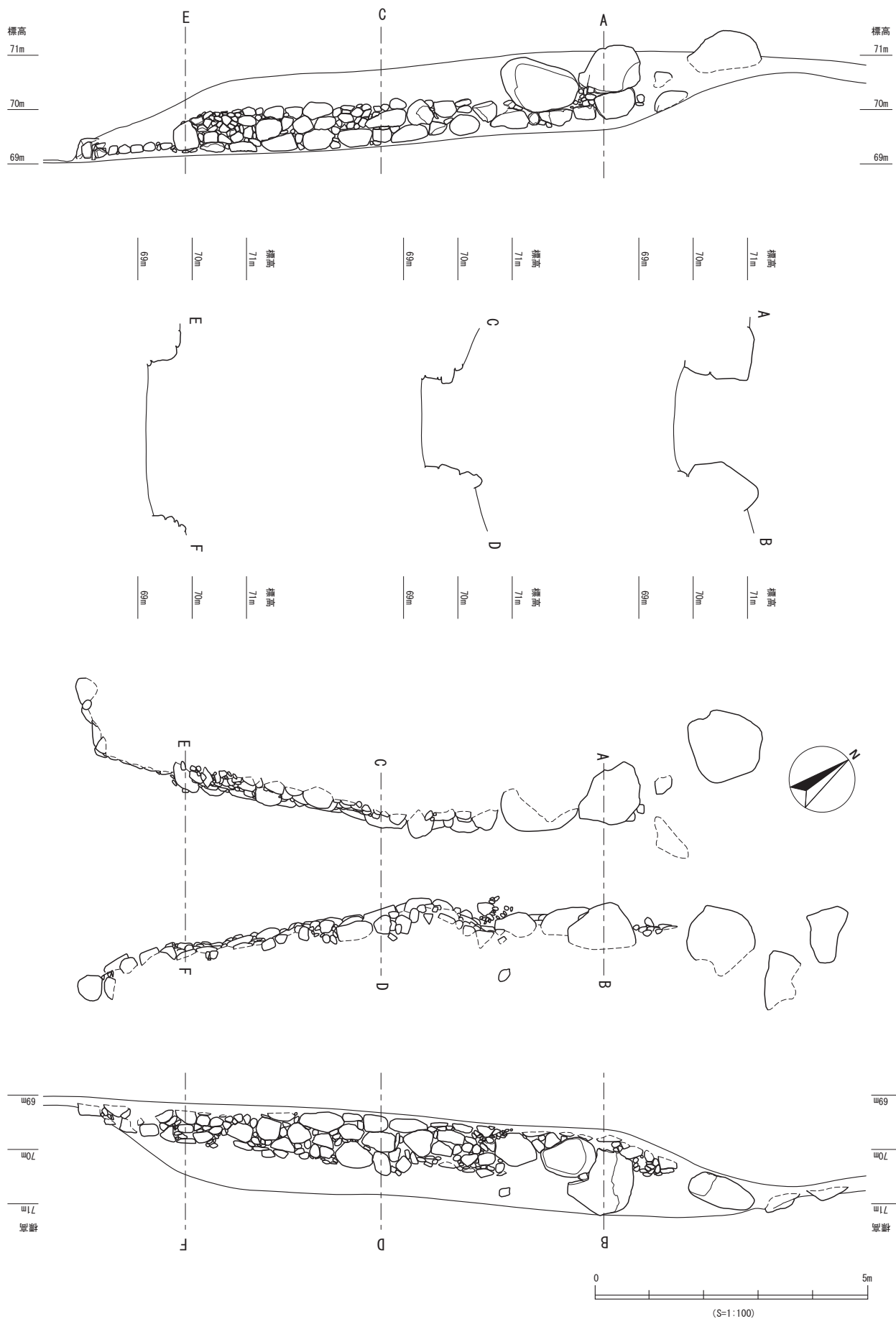


图8-2 石室平面图·立面图·断面图

第9章 ガイダンス施設建設予定地の試掘調査

1 位置と現況

「歴史の里」ガイダンス施設は、中位段丘の崖下低位段丘面に建設が予定されていた（平成31年4月1日開館）。当地は、旧水田耕作地で埋蔵文化財包蔵地ではないが、施設の性格上事前に試掘を行い、埋蔵文化財の有無を確認しておくことにした。あわせて旧水田耕作地の下位の地層を確認し、低位段丘の構造を記録し、中位段丘の現況のエレベーション図を作成した。

2 調査の概要

調査区は、東西3.0m、南北5.0mの区画を設定した。段丘上といえ水田耕作地であり、深く掘った際崩落する恐れがあったため、重機により中央部を深掘りし、長軸方向は傾斜をつけた。掘削は現在の地表から深さ約2.6mで湧水があったため、そこまでとした。調査区の基本的層序は、1～9層に分層できた。1層は、現地表から約1.5mまで、区画整理事業による埋め立て造成土である。2層は、その下約0.1mで葦のような植物が繁る湿地上の表土であった。休耕田の時の旧表土である。3層は、約0.2mで水田耕作土である。4層は0.2～0.25mで水田床土である。鉄分の沈着がある。5層は0.16～0.26mで暗黒灰色砂質土である。6層は灰青色砂礫土である。0.1～0.4m堆積している。5層は6層の窪地に堆積した状況である。7層は暗黒灰シルトで0.18～0.06m堆積している。8層は灰青色シルトで0.2～0.34m堆積している。9層は砂礫土で、荒い砂に5～10cm大の円礫が混じっている。地下水はこの層から浸みだしてきた。0.4m掘ったがまだこの層が続いていた。6層（灰青色砂礫土）の検出は、水田として開

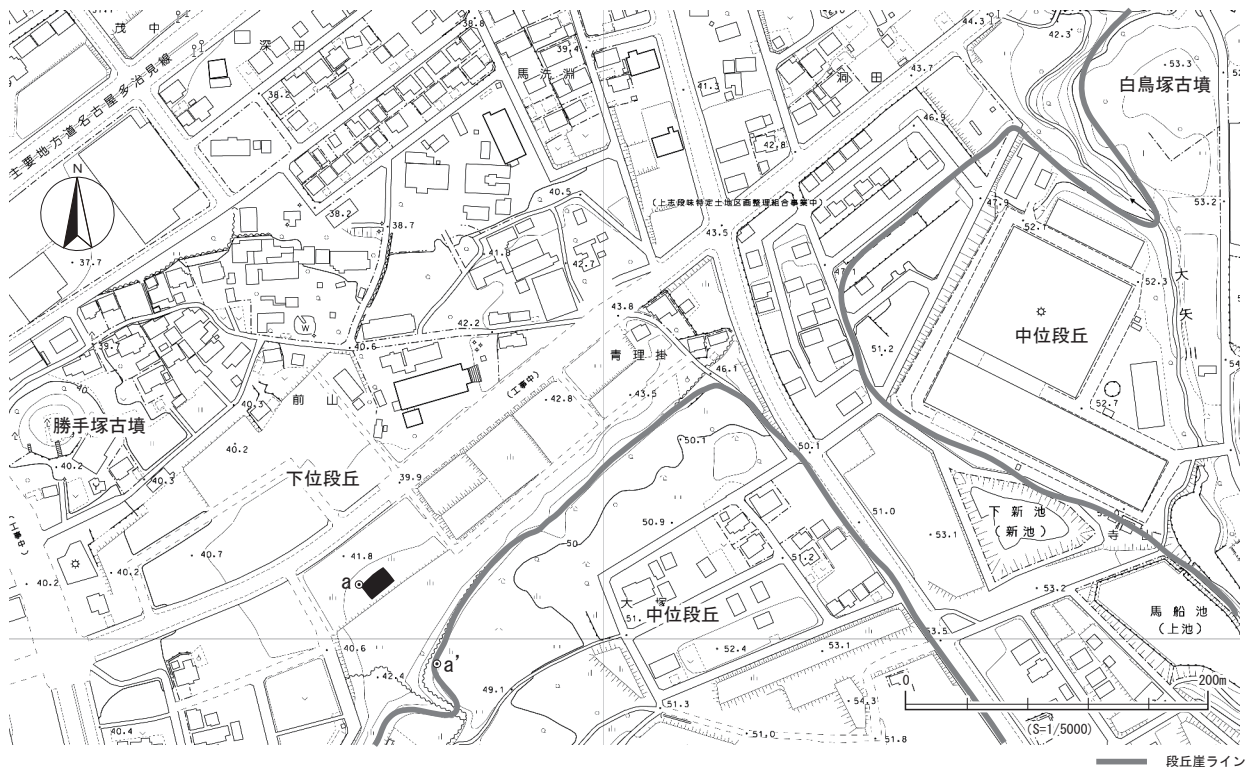


図9-1 試掘調査位置図

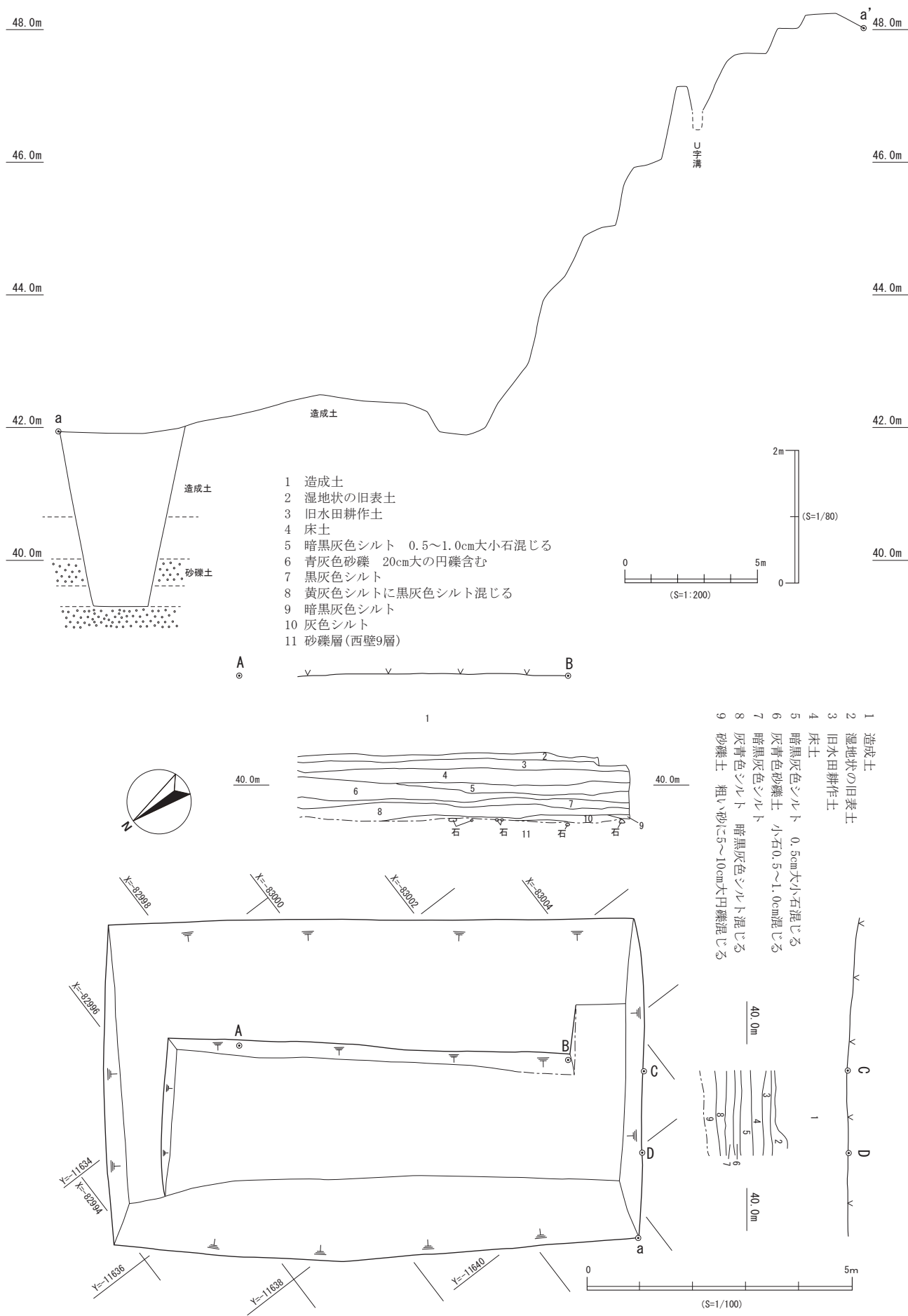


図9-2 試掘調査区平面図・断面図、河岸段丘エレベーション図

墾される前に河川堆積と澱んだ湿地上の時期があったようである。

中位段丘は、段丘面の端が標高約 48.212 m で、斜面上位に U 字溝が走っている。下位段丘との接点は 41.996 m で比高差 6.214 m である。

3 まとめ

当地における埋蔵文化財は、確認されなかった。当地は庄内川左岸に形成された 4 つの段丘面、3 つの段丘崖のうち、古い方から 2 番目の段丘面に位置する。6 層及び 9 層の砂礫土の時期は、不明である。かつて白鳥塚古墳の周濠堆積土の分析により、氾濫堆積物である可能性が高く、これをもたらした水流は、かなりの流れを有したものであると報告された。その特徴は、粗い砂粒と細かいシルト層の互層からなり、複数回の繰り返しが確認され、炭質物から下位の試料は 52500 ± 2600 (B P) 年 (これは古い炭質物が運ばれて堆積した可能性がおおきい)、上位の炭質物は 642 ± 45 (B P) 年であった。したがって、これより古い時期のものである可能性が高いと考えられた。この堆積物は、庄内川から供給され、2 番目の段丘面に流れ込んだと推定された (註 1)。本調査位置は、同じ段丘面に位置し、この時の氾濫では下流域に該当する。6 層及び 9 層の堆積物は、粗砂とシルトではなく、砂と円礫であったことから、こうした氾濫時の堆積物であったかもしれない (註 2)。

註

- 1 吉田英一「太古の環境を地層にみる」—古墳周濠堆積物を事例にした古環境解析—『平成 19 年度文化財公開事業「歴史の里」シンポジウム 国史跡白鳥古墳・志段味大塚古墳をめぐる歴史風景 —シンポジウム記録—』p.58-79 2009 年 3 月
- 2 当地の調査区南壁から土壌サンプルを採取したものの、未分析のままである。機会があれば実施したいと考えている。

第10章 各論

1 帆立貝式古墳築造の意義

今回、志段味大塚古墳、勝手塚古墳の調査内容を報告した。両古墳及び西大久手古墳、東大久手古墳、大久手5号墳の5基は、帆立貝式古墳である。なかでも志段味大塚古墳は、大正年間の調査を含み9度にわたる調査を実施して、多くの成果を得ることができ、また「歴史の里」整備に際し復元工事を実施し、最も注目される古墳となった。列島に広く分布する帆立貝式古墳について、前方後円墳との違いの意味を明らかにしようとする研究とともに（註1）、志段味古墳群においても、これらの帆立貝式古墳が前期古墳から約半世紀の空白期間をおいて再び東谷山麓に近い段丘上に築造される意義についても語られてきた。研究史を振り返り、帆立貝式古墳築造となった背景について若干の補足を述べてみたい。

（1）志段味古墳群における帆立貝式古墳の研究

① 高橋克壽の見解 「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」2009年 より

前方後円墳に比べて前方部の短い帆立貝式古墳の形状が、従来王権による前方後円墳築造の規制を受けたものと理解されることが一般的であったが、この墳形を採用する被葬者の共通項目を検討されたものである。

各地の帆立貝式古墳の立地を検討すると、例えば兵庫県伊丹市御願塚古墳、同芦屋市金津山古墳は、「畿内から西へ向かう西国街道を意識して造られ」ている。奈良県桜井市小立古墳は、「安倍山田道に面した場所に営まれていて、（中略）以後、宮都形成にあたって重要性が増していく」が、「渡来人の進出と馬を用いた交通の発達契機となったと推測できる。」このことを踏まえてみると、「志段味大塚・大久手古墳群の地理的位置や、段丘上の配置もまた重要な意味をもちえよう。（中略）段丘地形を意識した選地となっている。すなわち、庄内川に臨む中位段丘の縁辺に沿って、段丘下方に古墳の側面を見せるように造られたこれらの帆立貝式古墳は、明らかに庄内川かそれに平行する交通路を意識したものといえまいか。」「古墳時代の中期には（中略）庄内川に沿って東に向かい、木曾川流域から神坂峠を越えて伊那谷の天竜川流域に達するというルートである。」伊那谷の古墳は、「馬匹生産を得意とする新興勢力が渡来文化や渡来人とともに勢力を拡大した証と見られている。」「こうして勢力を伸ばしてきた信州の勢力との連携を図る上で重要な役割を果たしたのが、志段味大塚・大久手古墳群の首長たちだったのではなかろうか。」「5世紀後半の帆立貝式古墳が馬に代表される渡来文化や新しい交通ルートなどを背景に力を伸ばした新興勢力によって好んで採用された墳形であったと結論づけることができる」と述べられている（註2）。

② 藤井康隆の見解 「志段味大塚古墳に眠る武人」2012年 より

「志段味大塚古墳の位置づけを考えると、志段味大塚古墳とほぼ同じないし近い時期の帆立貝式古墳が、畿内の大王墓周辺のほかに、尾張・美濃から北関東・東北まで東日本に広く帯状に分布している。志段味大塚古墳はこれら東日本の分布のもっとも西部、つまり畿内と東国の接する最前線に位置する。ことに北関東の帆立貝式古墳には、志段味大塚古墳と墳丘規模が近く、副葬品に鈴付き馬具があるなど類似した特徴をもつ事例が目立ち、両者の古墳の間に交流関係ないし共通する性格を想定することができる。その一

方で志段味大塚古墳の特徴は、東国的な志向を示す古墳でありながら、畿内系の埴輪や祭祀用の土製品、最新鋭の騎兵武装、金銅製帯金具といった畿内や東アジア的な色彩の濃さに特徴があり、その被葬者は「大王ないし大和王権と非常に近い関係にある新興勢力で、大和王権の東国および東アジア進出の先鋒としての軍事的な性格をもつ首長であると考え」ている（註3）。

③ 瀬川貴文の見解 「志段味古墳群からみた尾張の古墳時代」2012年 より

前期から後期に至るまで構築された志段味古墳群を通史的に概観するなかで、中期古墳である「大塚・大久手古墳群は帆立貝式古墳を五基以上含むことが大きな特徴である。志段味大塚古墳では、豊富な鉄製武器・武具が出土し、帯金具・馬具など当時最新の文物を副葬していた。（中略）西大久手古墳で出土した人物埴輪や馬形埴輪は同時代の畿内の影響を強く受けたものであり、直接的な関係を有した可能性が高い。」「帆立貝式古墳群の被葬者は、数世代に渡り地域首長として武を主として畿内の王権に奉仕し、最新の文化を取り入れた首長層と考え」られ「尾張のなかでも独自の王権と関係を結び、最新の武装・文化を取り入れた先進的な首長層を想定でき」る。「ただし、その後半（五世紀末）については、熱田台地に造られた断夫山古墳を頂点とする序列化のなかに取り込まれた。」と述べられている（註4）。

④ 鈴木一有の見解 「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王権」2017年 より

第1埋葬施設（副次的な位置）から出土した副葬品の特徴から志段味大塚古墳の被葬者の階層的な位置や職掌を述べられている。第1埋葬施設の被葬者は、「日本列島内の階層秩序に即した帆立貝式古墳の被葬者の一人であることに加え、実用志向の高い充実した武装を備えることによって、古墳の中心的な被葬者を軍事的に補佐する役割を担った人物を想定」されている。大塚・大久手古墳群は、「前期の首長系譜で構成される東群（註5）と比べると中規模の帆立貝式古墳で構成される点で独自性が強く、5世紀後半に新たな性格が付与された勢力が築いた古墳群と評価」されている。造営期間が450年代頃から490年代頃までとされ、「この段階は倭の五王の済・興・武の時代と重なり、古墳群の造営は倭王権をめぐる国際関係や日本列島内の地域秩序の再編とも深くかかわ」っており、「5世紀後半の倭王権から一定の軍事的地位が認められ、地域の殖産興業にも寄与した勢力と評価」している（註6）。

⑤ 深谷 淳の見解 「志段味大塚古墳の性格」2017年 より

「継続的に築かれた5基の帆立貝式古墳は、各古墳とも前後の古墳との時期差が短く、一つの首長墓系譜と捉えるよりは、墳丘の規模・形態・主軸で分けられる志段味大塚古墳→勝手塚古墳と、西大久手古墳→大久手5号墳→東大久手古墳の二つの首長墓系譜に分けて理解するのが妥当で、前者の首長系譜のほうが実力的に優位であったと考え」られる。前者は、「段丘崖がのびる方向に墳丘主軸を平行させる志段味大塚古墳と、造営場所が一段低い低位段丘に移るとともに、庄内川方面（低地側）へ近づいていった勝手塚古墳の首長墓系譜は、庄内川や低地側からの古墳の視認性を意識して築かれた」。志段味大塚古墳は、「伊勢湾沿岸と内陸部を結ぶ水上交通路として庄内川が利用されたと推定されることと、志段味古墳群の近辺に古墳時代の大型集落は確認されていないことを踏まえると、（中略）その外観をみせる主たる対象としていたのは、庄内川の河川交通および川沿いの交通路を利用した人々であったと考え」る。「中期後半に王権は、畿内地域と東日本内陸部を結ぶ馬を用いた遠距離交通システムの整備に着手し、古東山道ルート建設するが、庄内川を利用する交通路は、」東海道沿いのルートをつなぐ連絡路として重要視されるようになった。掌握には「在地において大きな力をもっていた勢力（味美古墳群造営集団）を避け、そ

の次位の勢力の首長を直接的に把握し、庄内川を利用する連絡路を現地で管理する任務を与えたと推定し、「連絡路を管理していたことを視覚的に訴えるために」築いたとする（註7）。

（2）中部高地・伊那谷の馬匹生産

志段味古墳群の帆立貝式古墳は、近接して築造され続ける点に特徴があり、築造された地区は、庄内川を眼下に望む地にある。この付近を通る交通路が想定され、中部高地・伊那谷へのルート上に位置付けられることが指摘されている（註8）。

中部高地・伊那谷へは、上志段味地区からさらに庄内川を遡上するか、近世下街道の通る春日井市の内津峠を経て、東濃（多治見・土岐）へ至り、さらに恵那山・神坂峠を越えて伊那谷（現長野県飯田市）に至るルートが想定される。伊那谷における古墳時代の動向は、小林正春氏、澁谷恵美子氏の研究により詳細に知ることができる（註9）。前期では、松尾地区に代田山狐塚古墳（前方後方墳）が築造されているが、その後約1世紀の空白をもって、5世紀中頃に突如として低位段丘上に数多くの古墳が築造され始めるという。特に5世紀代の前方後円墳は、北信の善光寺平と南信の飯田地域に限定され、善光寺平が弥生時代から続く肥沃な平野における水田農耕地帯で、安定した水田経営のもと、力を蓄えた勢力による連続して古墳の築造がみられるのに対し、飯田地域は河岸段丘の発達した地であって、水田農耕地は限定的であり、生産力の欠ける地域に5世紀中頃になって再び古墳築造が開始されるといわれている。

飯田市座光寺・上郷地区では、5基の前方後円墳、1基の帆立貝式古墳、松尾地区では、5基の前方後円墳、竜丘地区では5基の前方後円墳、3基の帆立貝式古墳が築造されている。帆立貝式古墳のありかたをみると、座光寺・上郷地区にある新井原12号古墳は、全長36m、後円部径33m、前方部前端部幅推定21mの帆立貝式古墳で、南大島川に面した段丘端部に立地し、竪穴式石室と武器副葬用の小規模な土坑をもち、7期（5世紀中頃以降もしくは後期初頭の時期）と考えられている（註10）。竜丘地区の塚原3号古墳（墳長約45m）、鏡塚古墳（墳長約45m）、鎧塚古墳（墳長約45m）の3基（7・8期）は、等間隔で南北方向に直列して築造されている。大塚古墳（全長73mまたは63m）は前方後円墳であるが、志段味大塚古墳に似ているほか、五鈴鏡が出土するなど、志段味古墳群の帆立貝式古墳と共通性がある（註11）。

飯田地域における5世紀中葉以降に始まる前方後円墳、帆立貝式古墳の築造の背景として、馬具の副葬や発掘された馬骨、馬歯などから、畿内王権による馬匹の生産地として選定され、それが安定供給に成功した恩賞として、前方後円墳、帆立貝式古墳の築造が認められたものと考えられている。さらに飯田地域では6世紀に至っても前方後円墳の築造が続いており、さらに南信地域から中信、東信地域へ前方後円墳築造地域が拡大していく様相がみられるのもその要因として、馬匹生産区域の拡大が推測されている（註12）。

小林氏によれば、生産された馬匹は、この3地区から一端、竜丘地区の西方山地を越えた伊豆木・三穂地区の小盆地に集積され供給されたと推測している（註13）。この指摘は重要で、従来畿内倭王権の東方への勢力拡大という視点で論じられ、倭王権の要請により中部高地はじめ東国において馬匹の生産が行われたと主張されてきたが、生産した馬をどうしたのかが問われてこなかったように思われる。小林氏が述べるように中部高地の馬匹は、発注者である畿内へ運ばれたのである（註14）。

畿内王権からの要請により生産された馬匹は、伊豆木・三穂地区から神坂峠を越え東濃の山中を通り、内津峠を越え尾張へと運ばれてきたと推定される。運ばれてきたといっても、今日のように馬運車（馬専用トラック）で運搬してくるわけではなく、自力で歩いてくるので途中で小休止したり、日没から日の出まで泊ったりしたほか、一定期間休んで体力の回復を図ることがあったと思われる。

（3）馬の運搬ルート

そこで、本節では、生産された馬匹の運搬経路について、考えてみたい。後世の馬を利用した制度として、古代には、駅伝制の駅の主要施設として駅家が整備されている。駅家は、交通の要路に沿い、原則として30里（後の約4里、約16キロメートル）ごとに設置されて、駅戸を出す村落が周囲にあった（註15）。

『延喜式』によれば、信濃国からは諸牧60疋、望月牧20疋合わせて80疋、上野国50疋が毎年8月にみやこへ貢馬された（註16）。「貢馬の一行は、牧監または主当のほか、御馬の長、馬医、書生、占部、足工、騎士らが随行」（註17）し、「甲斐と武蔵の貢馬の一行は東海道を、信濃と上野の一行は東山道を経てみやこへと向かった。旅に必要な秣や馬を牽く人手は經由する国々から提供され、一日一駅（16km）を行く定めであった。牽き手は御馬1疋に2人が必要で、30疋であれば60人が必要だった。それが8月中に数度も通過するのだから、国々の負担は重かったと思われる」（註18）。

戦国期の伝馬制では、特定の集落に負担を課するもので、伝馬を負担する夫役を伝馬役といった（註19）。こうした事例を参考に、美濃山中から内津峠を越えた地点から遺跡の状況を検討する。

内津峠を越え下街道沿いに南下し（註20）、現春日井市坂下町以南で古墳時代遺物散布地をみると、内津川右岸に東神明遺跡（東神明町 古墳～鎌倉）、左岸に庄名新池遺跡（庄名町 古墳～奈良）、庄名土地地区画整理事業地内に庄名川端遺跡（縄文時代・古墳時代・古代・中世）、庄名向田遺跡（奈良時代・中世）、庄名東ノ坪遺跡（古墳時代・奈良時代・中世）、庄名東畑遺跡（古墳時代、奈良時代、中世、近世）、庄内川右岸に気噴遺跡（気噴町 弥生～室町）、大留遺跡（大留町 弥生～中世）、神領遺跡（神領町 弥生～室町）が存在する（註21）。

東神明遺跡は、丘陵末端（山麓）に立地し、庄名土地地区画整理事業地内の4遺跡（庄名遺跡とする）は、内津川の支流大谷川左岸、新第三紀丘陵の北西縁辺部に広がる段丘田楽面上、標高約45～50mに立地し、250m×500mほどの段丘が西側に広がっている。東神明遺跡の範囲は、比較的狭いが、庄名地区の遺跡は東西約180m、南北約300mと推定されている（註22）。気噴遺跡はじめ3遺跡は、庄内川の自然堤防及び後背湿地に立地している。東神明遺跡、庄名遺跡と気噴遺跡、大留遺跡までは約2km、神領遺跡までは約3km離れている。気噴遺跡は東西約600m、南北約400m、大留遺跡は東西約800m、南北約400m、神領遺跡は、東西約1100m、南北約400mあり、この3遺跡は、弥生時代から中世まで続く大規模な集落跡と推定されている（註23）。

遺跡の立地、位置関係、遺跡の消長から推測すると、気噴遺跡や大留遺跡付近は、段丘（春日井面）、自然堤防の微高地、後背湿地、東神明遺跡周辺は山麓と内津川沿岸の低地であるのに対し、庄名遺跡は段丘（田楽面）に立地している（註24）、人馬休息所（厩舎及び放牧場含む）の適地であったと思われる。内津峠から下街道（またはその付近）を南下し、坂下町手前で下街道から別れて内津川沿いに南下すると、庄名遺跡に至る。この段丘の南側は、内津川の氾濫源が広がり、湿地帯であった。そのため湿地を



凡例
 陸路 ————
 船運 - - - - -

0 2km
 (S=1/25000)

図 10 - 1 馬運搬想定ルート

迂回して東側の丘陵縁を通り、気噴遺跡（南気噴宮西遺跡）へ向かった（註 25）。古墳時代に拓かれた庄名遺跡へは、気噴遺跡、大留遺跡の集落から、こうした馬の世話の夫役を出していたのではないかとと思われる。こうして休養した人馬は、庄内川右岸・支流繁田川の気噴遺跡（南気噴宮西遺跡や南気噴向田遺跡）あたりにあった湊から船に乗せられ、伊勢方面へ航海の途についたと想定したい（註 26）。

庄内川から伊勢への船旅後、大和盆地までのルートについても述べておきたい。伊勢での上陸地は、^{いお}廬城河（雲出川の古称）河口部近くにあった藤瀨の安濃津（註 27）、もしくは初瀬街道に近接した地点と思われる。陸揚げした後、初瀬街道を西進し、大和盆地そして河内平野に至ったと想定される。初瀬街道の通る伊賀・名張盆地には美旗古墳群がある。美旗古墳群は、首長墓系譜が認められ、殿塚古墳（墳長約 88 m 4 期）→女良塚古墳（帆立貝式古墳 墳長約 100 m 5 期）→毘沙門塚古墳（墳長 65 m 6・7 期）→馬塚古墳（墳長 141 m 8 期）→貴人塚古墳（墳長 55 m 9 期）と変遷する。また、付近にあるわき塚古墳、近代古墳（帆立貝式古墳 墳長 30 m 7 期）には鉄製甲冑、鉄鏃、鉄刀など武具・武器が副葬されている。また造営母体となる周辺の集落遺跡では、韓式系土器や初期須恵器が出土している。こうした点から美旗古墳群は、「最新武器で武装し、膝下の集落群では渡来系集団も組み込んだ手工業生産に従事した」勢力であり、「ヤマトの東の玄関を護る武人として、王権と密接な関係を維持していた」と考えられている（註 28）。手工業生産として、須恵器、鉄製品などが想定されているが、馬匹の管理（中継地）も担っていたと考えたい。

名張盆地の北方に位置する伊賀盆地、^{あべ}阿拜地域には 7・8 期の前方後円墳として鷺棚 1 号墳、外山 1 方墳、3 号墳がある（註 29）。また、伊賀市西高倉（旧阿拜郡）には高倉神社がある。垂仁天皇の代に創建され、^{たかくらじのみこと やまとえたまひのみこと}高倉下命・倭得玉彦命を祭神とし、社家が尾張氏といわれ、倭得玉彦命がこの地に居住して、先祖を祀ったと伝えられている（註 30）。初瀬街道を通過する要因として、北方の在地の勢力範囲を避けたとも考えられる。

（4）まとめ

倭王権にとって、畿内に向かう運搬途中の馬匹の安全・健康管理もまた、生産から供給を受けるまでの過程の一部として、重要視されていたと思われる。このように考えれば、庄名遺跡に推定した人馬休息所へ夫役を出す気噴遺跡、大留遺跡の集落の長に対して、その功績を称え帆立貝式古墳の築造を認め、武器や馬具が授与されたのではないかと推測する。志段味古墳群の帆立貝式古墳は、気噴遺跡の南方正面約 1.2 km 離れた段丘上に立地し、気噴遺跡、大留遺跡から眺望できたものと思われる。志段味古墳群における帆立貝式古墳が、志段味大塚古墳―勝手塚古墳、西大久手古墳―東大久手古墳の 2 系統存在することは、この 2 つの遺跡の歴代の長に対応していると推察する（註 31）。

内津峠を通る陸上ルート及び庄内川を利用した河川交通の開発・維持には、軍馬運搬という軍事的役割が付与されていたのである。

註

- 1 遊佐和敏『帆立貝式古墳』1988年 同成社、榎本誠一「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌 第69巻 第3号』1984年 日本考古学会、宮本繁雄「畿内の帆立貝式の出現」『上代文化 第43輯』2013年 國學院大学考古学会、藤井康隆「志段味大塚古墳をめぐる歴史風景」『季刊考古学・別冊16 東海古墳風景』p.50～58 2008年 雄山閣
- 2 高橋克壽「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』2009年 花園大学考古学研究室30周年記念論集刊行会 2007年11月17日に開催された「平成19年度文化財公開事業「歴史の里」シンポジウム 国史跡白鳥塚古墳・志段味大塚古墳をめぐる歴史風景」での講演「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王権」をもとに執筆されている。
- 3 藤井康隆「志段味大塚古墳に眠る武人」『志段味古墳群を巡る～ナゴヤのルーツを訪ねて～』2012年 名古屋市教育委員会
- 4 瀬川貴文「志段味古墳群からみた尾張の古墳時代」『東海の古代③ 尾張・三河の古墳と古代社会』2012年 同成社
- 5 志段味古墳群を東群として白鳥塚古墳、尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳、西群として大塚・大久手古墳群として記述されている。
- 6 地域の殖産興業として、「窯業生産で主導的役割を担ったこと」、「独自性の高い葺石の特徴から、新しい土木技術を当地にもたらした可能性」を指摘されている（鈴木一有「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王権」『埋蔵文化財調査報告書77』2017年 名古屋市教育委員会）。
- 7 深谷 淳「総括」『埋蔵文化財調査報告書70』2014年 名古屋市教育委員会、「志段味大塚古墳の性格」『埋蔵文化財調査報告書77』2017年 名古屋市教育委員会
- 8 高橋克壽「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」2009年、「志段味大塚古墳造営の意義—墳形・葺石・造り出しを中心に—」『埋蔵文化財調査報告書77』2017年 名古屋市教育委員会、深谷 淳「総括」『埋蔵文化財調査報告書70』2014年 名古屋市教育委員会
- 9 澁谷恵美子編『飯田における古墳の出現と展開』2007年 長野県飯田市教育委員会
小林正春「中部」『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』2011年 青木書店
- 10 『長野県史 考古資料編全一卷（3）主要遺跡（南信）』p.1108～1113 1983年 長野県史刊行会、高橋克壽「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」2009年 『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』2009年 花園大学考古学研究室30周年記念論集刊行会
- 11 高橋克壽「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」2009年 『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』2009年 花園大学考古学研究室30周年記念論集刊行会
- 12 小林正春「中部」『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』p.391 2011年 青木書店
- 13 小林正春「中部」『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』p.419 2011年 青木書店
- 14 千賀 久氏も「伊那谷の馬を河内に供給する際には、のちの東山道を利用し」と述べている。千賀 久「馬と馬具」『講座日本の考古学8 古墳時代（下）』p.158 2012年 青木書店
- 15 「駅家」『日本史大事典第1巻』p.782 1992年 平凡社
- 16 「延喜式巻48」『新訂増補國史体系 第26巻』新装版p.973 2000年 吉川弘文館
- 17 『横浜の野を駆ける—古代東国の馬と牧—』p.43 2019年 横浜市歴史博物館
- 18 『横浜の野を駆ける—古代東国の馬と牧—』p.44 2019年 横浜市歴史博物館
『伊勢参宮名所図会 卷之二』所収、「逢坂駒迎」の絵図は、一頭の馬に二人の牽き手が付いている様子が描かれている。『日本名所風俗図会12 近畿の巻Ⅱ』p.21 1985年 角川書店
天正10年（1582）、本能寺の変後の豊臣秀吉の中国大返しでは、岡山県備中高松城から兵庫県姫路城まで約70kmを2日で戻っている。近代軍隊においても、名古屋第三師団の部隊が渥美郡高師村の高師原演習廠舎まで約75km徒歩移動した際、途中岡崎あたりで1泊した。このように後世の事例では1日の移動は30kmほどであった。『続日本紀』には、和銅6年（713）7月7日、「美濃・信濃の二国の境界は、道が険阻で狭く、人々の往来に難渋していた。そこで吉蘇路を開き通じさせた。」とあり、当時の恵那山を越える道は、悪路で、一日の移動は16kmよりはるかに少なく、人馬の疲労は大きかったと推定される。宇治谷 孟『続日本紀（上）』p.143 1992年 講談社
- 19 「宿駅」『日本史大事典第3巻』p.1121～1122 1993年 平凡社
「伝馬役」『日本史大事典第4巻』p.1262～1263 1993年 平凡社
- 20 下街道は、近世名古屋城下・下伝馬町を起点に大曾根、勝川、坂下と進み、内津峠から美濃池田（現多治見市）、高山（現土岐市）、釜戸（現瑞浪市）を経て榎ヶ根で中山道と合流する延長13里20町の脇往還である。近世以前の街道筋は不詳であるが、内津峠近くの内々（うつつ）神社は、式内社で景行天皇41年尾張連祖建稲種命を奉祀したことや、出川（てがわ）大塚（おおつか）古墳が4世紀末の築造であることから、古墳時代前期にはこのルートが開発されていたと考えられている。『愛知県の地名』p.279 1981年 平凡社

20 下街道は、近世名古屋城下・下伝馬町を起点に大曾根、勝川、坂下と進み、内津峠から美濃池田（現多治見市）、高山（現土岐市）、釜戸（現瑞浪市）を経て榎ヶ根で中山道と合流する延長 13 里 20 町の脇往還である。近世以前の街道筋は不詳であるが、内津峠近くの内々（うつつ）神社は、式内社で景行天皇 41 年尾張連祖建稲種命を奉祀したことや、出川（てがわ）大塚（おおつか）古墳が 4 世紀末の築造であることから、古墳時代前期にはこのルートが開発されていたと考えられている。『愛知県の地名』 p. 279 1981 年 平凡社

21 『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』1994 年 愛知県教育委員会 気噴遺跡、大留遺跡は細分されている。

22 「春日井庄名土地区画整理事業地内における工事立会」『平成 27 年度 市内遺跡調査概要報告書』 p. 8～10

23 大留の名前は、『尾張国地名考』に「野部茂富曰、大留はもと大の目の転声なるべし」とあり、『尾張徇行記』にも村名の表記は上大留・下大留」とある。内々神社の宝物湯立神楽の釜には上大富村・下大富村と記されている。古文書に乎止江村とあり、尾張氏の祖乎止与命にちなむ名と考えられている。明治 11 年（1878）、上大留村と下大留村は合併して大留村となる。『愛知県の地名』 p. 290～291 1981 年 平凡社

気噴の名前は、気噴村から付けられている。足振（あしぶり）村と久木（ひさき）村が合併して明治 11 年成立した。現在は大留井高上遺跡（集落遺跡・弥生～中世）、大留東島遺跡（集落遺跡・弥生～中世）、南気噴向田遺跡（集落遺跡・弥生～中世）、南気噴宮西遺跡（集落遺跡・弥生～中世）などに細分化されている。『天王山古墳』 p. 8～9 2015 春日井市教育委員会

24 中世までは河川の流路や氾濫原により段丘面も浸食を受けていたが、近世に至り河床は西へ移動したと推定されている。旧神明宮の所在地では、平成 25 年第 7 次調査で古墳時代～古代の須恵器、9 次調査で古代の住居跡を検出している。『平成 25 年度市内遺跡調査概要報告書』 p. 16～25 2014 年 春日井市教育委員会、平成 28 年 8 月の庄名東畑遺跡確認調査では、古墳時代前期～中期の土師器壺が出土している。『平成 28 年度市内遺跡調査概要報告書』 p. 15 2017 年 春日井市教育委員会

長野県飯田市八幡原遺跡では、馬を放牧するための区画施設と推定される円形に巡る溝が出土している。澁谷恵美子編『飯田における古墳の出現と展開』 p. 109～110 2007 年 長野県飯田市教育委員会

群馬県渋川市半田・中原遺跡は、勅使牧の一つ有馬島牧と考えられ、6 万㎡を取り囲む溝跡が出土し、幅 6 m、高さ 2 m 以上の土塁が築かれていたと推定されている。東京都西多摩郡日の出町三吉野遺跡群は、馬飼集団の集落と推定され、牧の区画溝と思われる断面 V 字形の大溝 SD10（幅 1.2～1.8 m、深さ 0.5～0.7 m）が出土している。『横浜の野を駆ける—古代東国の馬と牧—』 p. 29、37～38 2019 年 横浜市歴史博物館

このような遺構の検出を期待したい。

25 内津川を使用すると、上条町付近で庄内川に合流することができるが、「増・渇水の激しい小河川」であったことから利用されなかったものと思われる（『味美二子山古墳の時代（第 1 分冊）』 p. 22 平成 9 年 春日井市教育委員会）。

また、西側丘陵地沿いを通行したり、内津川を利用したりすると、庄内川の合流地点の対岸丘陵には松ヶ洞古墳群があり、味美古墳群にも近接することから別の在地勢力を避けたともいえる。

26 繁田川が庄内川に合流する左岸には、寺前 1 号墳（前方後円墳 後期）、寺前 2 号墳（円墳）、寺前 3 号墳（円墳）が築造されており、右岸には天文 15 年（1546）築城の大留城跡がある。この地点が重要視されていたことが理解される（『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』1994 年 愛知県教育委員会）。

馬を船に乗せることがあったことは、熊本県山鹿市の弁慶ヶ穴古墳の壁画に船に乗った馬が描かれていることから知ることができる。藤井功・石山 勲『日本の原始美術 10 装飾古墳』 p. 18～19 1979 年 講談社、松枝正根『古代日本の軍事航海史 中巻』 p. 233～237 1994 年 かや書房

27 穂積裕昌「伊勢・志摩・熊野と海人の考古学」『海人たちの世界』 p. 52～54 2008 年 中日出版社

28 穂積裕昌「伊賀の首長系譜の特質とその背景」『季刊考古学・別冊 16 東海古墳風景』 p. 59～64 2008 年 雄山閣

このような古墳のありかたは、瀬戸内東部と東海・北陸を結ぶ琵琶湖地域でもみられるという。「中小首長層を直接的にヤマト政権の政治組織に位置付けるという方法が進められ（中略）ヤマト政権の東方に対するバッファゾーンの位置づけとも理解でき、名張美旗古墳群の在り方とも類似する」（細川修平「畿内とその周辺地域」『季刊考古学・別冊 22 中期古墳とその時代—5 世紀の倭王権を考える—』 p. 42～51 2015 年 雄山閣）。

29 『前方後円墳集成 中部編』1992 年 山川出版社

30 宝賀寿男『古代氏族の研究⑩ 尾張氏』 p. 147 2018 年 青垣出版

31 愛知県清須市の朝日遺跡（弥生時代環濠集落）が北集落と南集落から構成されていたり、近世から近代にかけても村の合併があったりするように、大留遺跡、気噴遺跡の両遺跡についても遺跡が細分されていることから、どちらかの遺跡内の二つのムラが夫役を出していたとも考えることができる

2 志段味古墳群の埴輪の生産地

(1) はじめに

志段味古墳群では、中社古墳、南社古墳、西大久手古墳、志段味大塚古墳、大久手5号墳、東大久手古墳、大塚2号墳、勝手塚古墳、羽根古墳、東谷山3号墳の10基より埴輪が出土している。このうち、中社古墳、南社古墳を除く8基の古墳の埴輪は窖窯で焼成されている。

志段味古墳群の埴輪の生産地については、名古屋市博物館の平成24年度企画展「尾張氏★志段味古墳群をときあかす」の展示図録の中で、西大久手古墳の埴輪が尾張旭市の城山2号窯で生産された可能性があることに言及されている。西大久手古墳、城山2号窯、牛牧離レ松遺跡9号遺構から出土した円筒埴輪は、口縁部に2本1組のヘラ記号があり、西大久手古墳と城山2号窯の埴輪は土質や色調が類似することが指摘された(藤井2012)。

小稿では、志段味古墳群に供給された埴輪の生産地を探る試みとして、候補地とされる城山2・3号窯の埴輪を検討し、志段味古墳群出土の埴輪と比較したい。古墳(消費地)から出土した埴輪の生産地(窯)を追究するにあたり、近年埴輪に施されたハケメのパターンから同工品を抽出する手法が行われている(小橋2004、田中2005、城倉2009)。また、尾張の埴輪についてもハケメ等の分析を通して埴輪の供給関係を明らかにしようとする試みがある(波多野2015)。こうした先例に倣い、形状や技法に加えハケメ工具のパターンを用いて同工品を探ることで、志段味古墳群の埴輪の生産地について検討する。

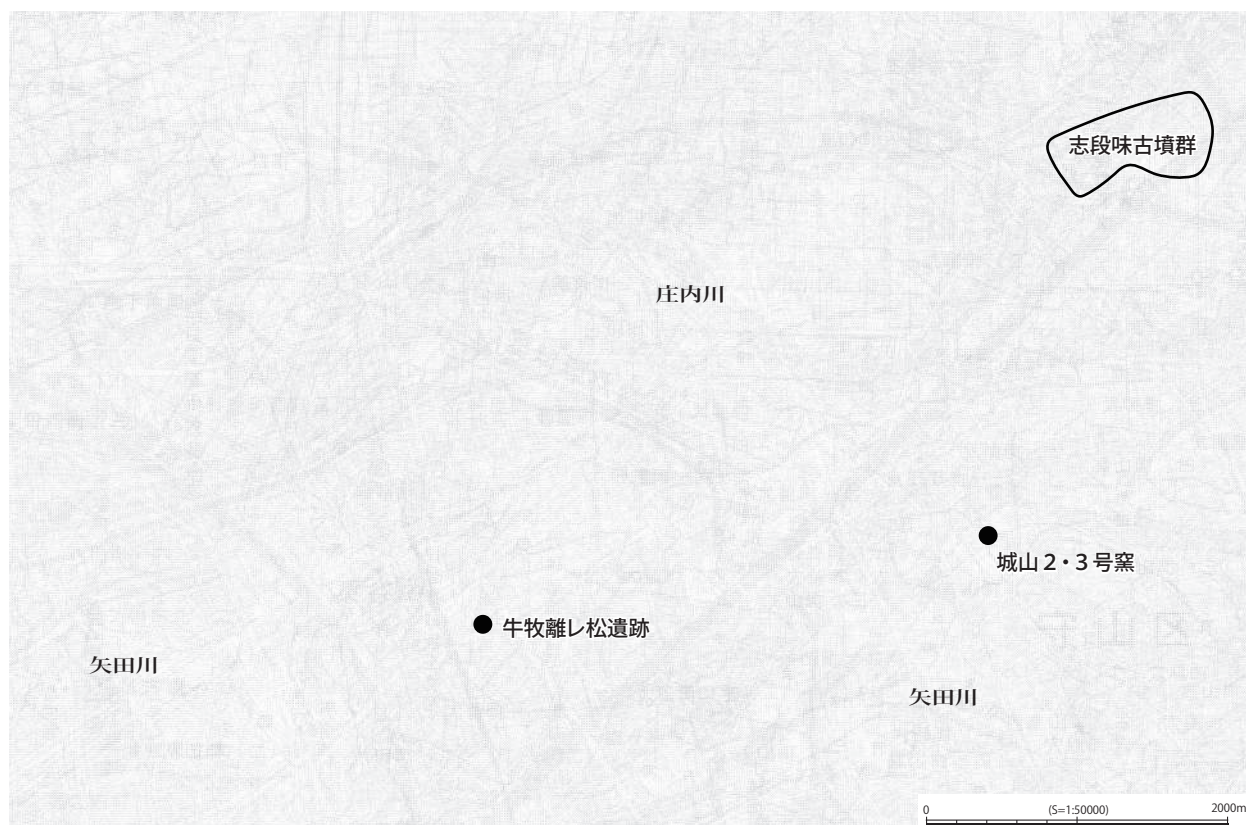


図10-2 城山2・3号窯と関連遺跡
(下図は国土地理院電子地形図25000を使用)

(2) 城山2・3号窯の埴輪

① 城山2・3号窯の概要

城山2・3号窯は、愛知県尾張旭市城山町に位置する古墳時代の窯跡である。都市公園の造成工事中に新規発見された窯跡であり、1986年と1987年に発掘調査が実施され、古墳時代の須恵器と埴輪の併焼窯であることが明らかとなった。城山2号窯は、最大幅が1.3m、全長は推定で7.5mの半地下式の窖窯である。一部の床面は補修されており、少なくとも2回は焼成されたと推察されている。2号窯の北隣には、燃烧室の一部のみが残存する城山3号窯が存在した。2号窯と3号窯から排出された灰原も確認されている（七原ほか1978）。

出土遺物には、須恵器と埴輪がある。須恵器は、発見当時は東海地方でも最も古い窯跡の一つであり、現在も5世紀後葉の基準資料に位置付けられる（斎藤1983）。埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が確認されている。

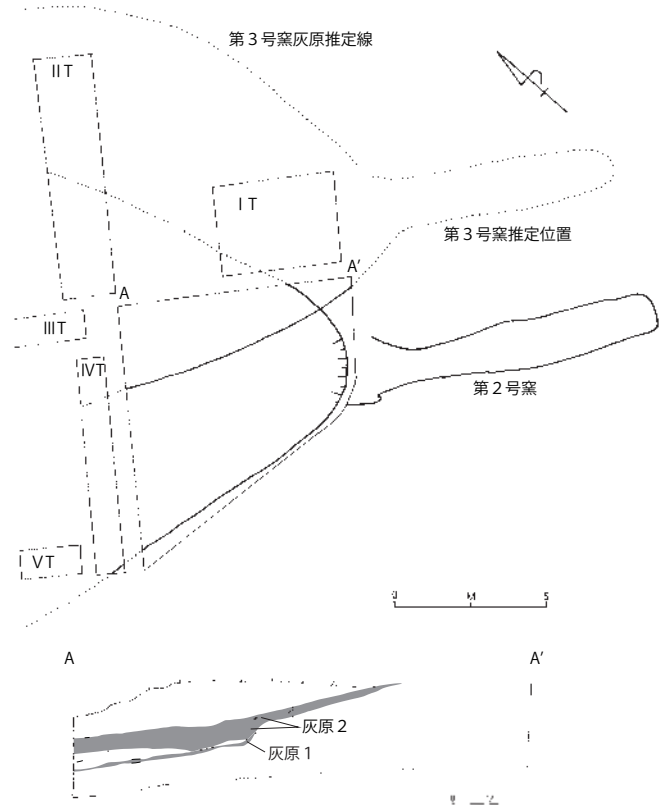


図10-3 城山2・3号窯と土層断面（七原ほか1978を改変）

② 埴輪の分類

城山2・3号窯の埴輪は、その形態および製作技法、胎土等より下記の4種（A類～D類）に大別される（註1）。

A類

外面の1次調整にタテハケ、2次調整にロクロの回転力を利用した回転ヨコハケを行う。全体がわかる資料はないが、2条突帯3段で構成されると推定される。口縁部は直線的でやや外傾する（図10-4：1～3、以下では遺物番号のみ示す）。端部は、ナデによって上面に面をもつもの（1）と、丸みをおびるもの（2・3）がある。下から2段目に円形の透孔をあける。ヘラ記号は二種類確認できる。一つは、透孔の上の最上段に、3本の線が放射状に描かれるもの（3～5）であり、もう一つは透孔の右側に円弧状の線刻を描くものである（6）。基底部の外面には、ヒモズレ（犬塚1994）が認められるものがある（16～21）が、底部下端のケズリや底面の切り離し痕跡は認められない。

B類

口縁部は大きく外反し、端部はナデにより面をもつ。口縁部には、2本の斜線からなるヘラ記号が認められる（22）。外面はタテハケ（ナナメハケ）で調整し、2次調整は行わない。他の種類に比べて内外面調整に用いられるハケメが粗い点や胎土に大粒の礫を多く含んでいることから、破片資料でも他と一見して区別できる。

C類

A類

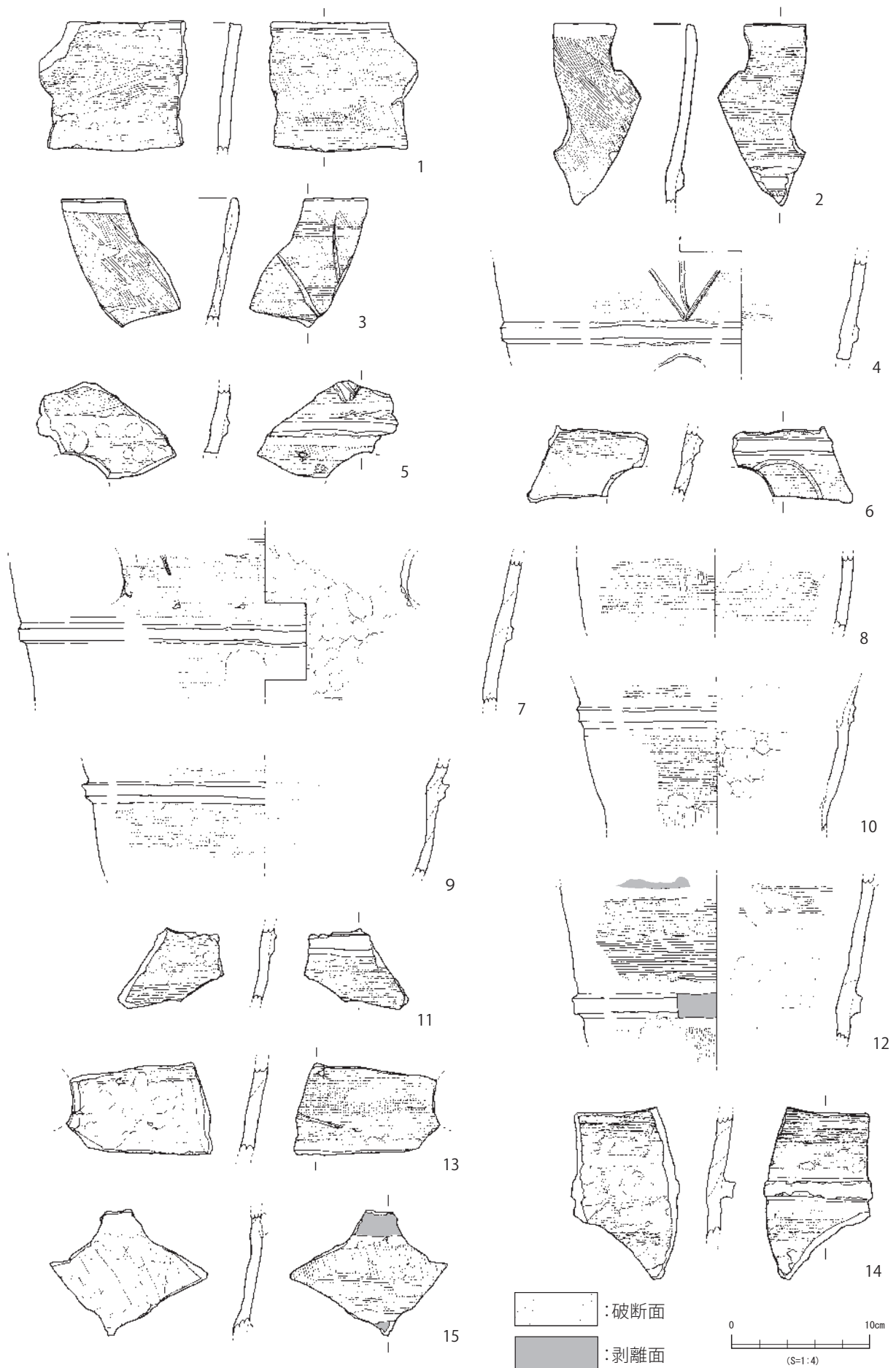
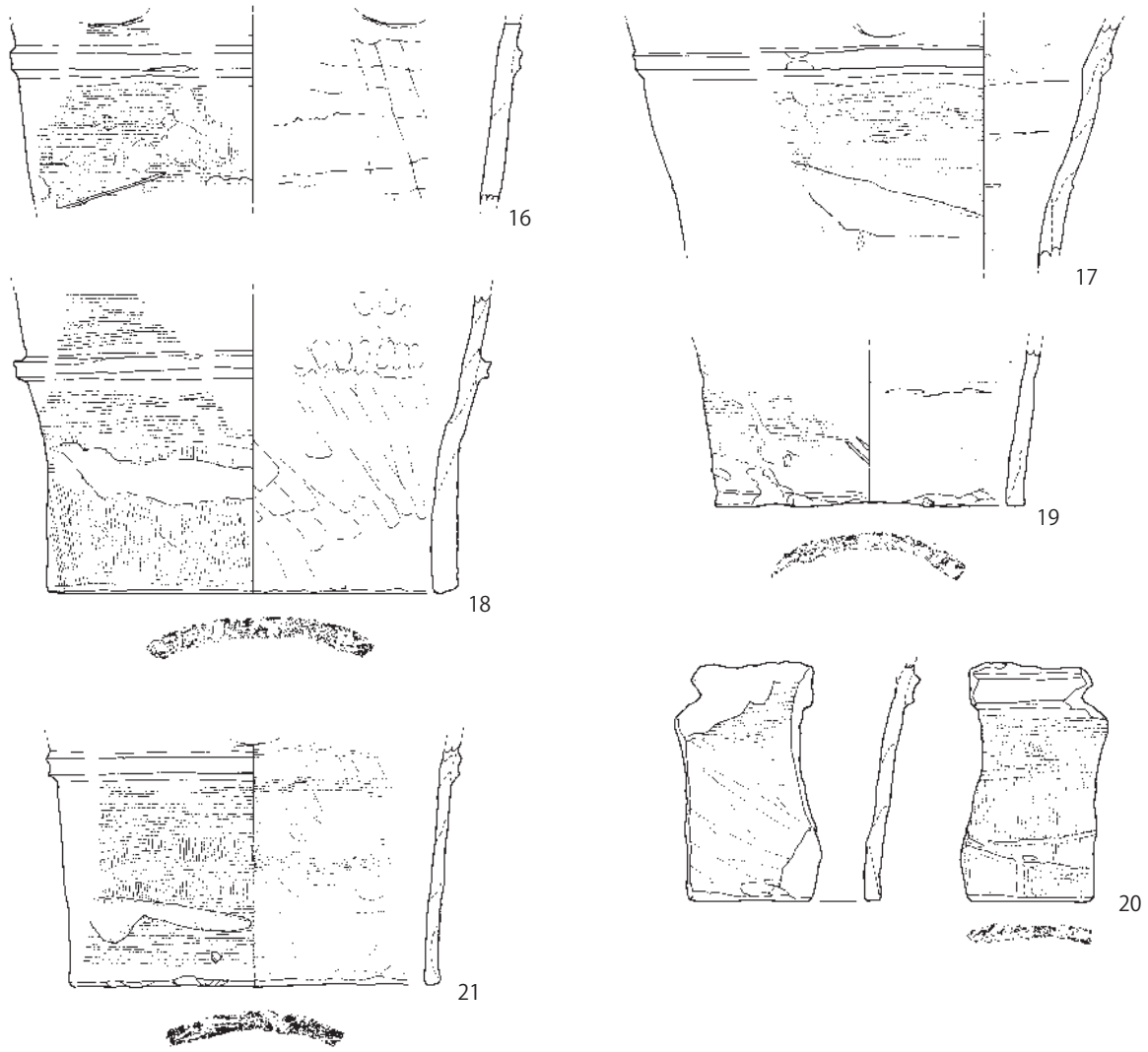


图 10-4 城山 2・3 号窯出土円筒埴輪 (1)

A類



B類

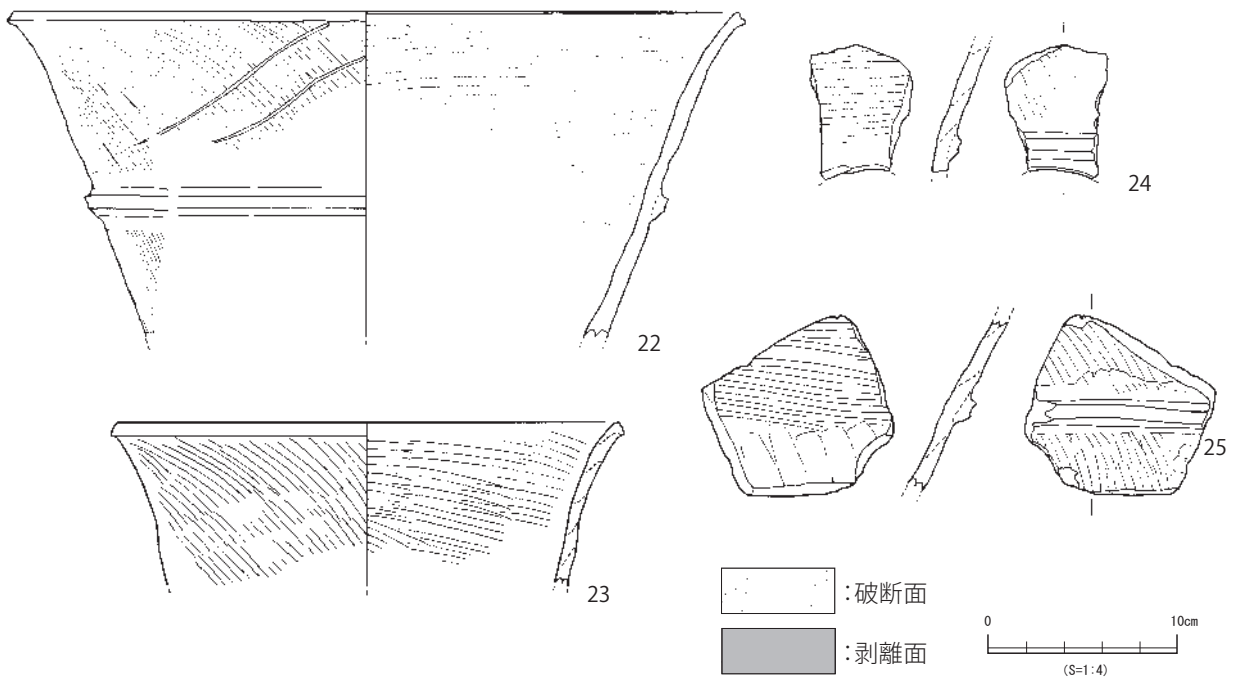
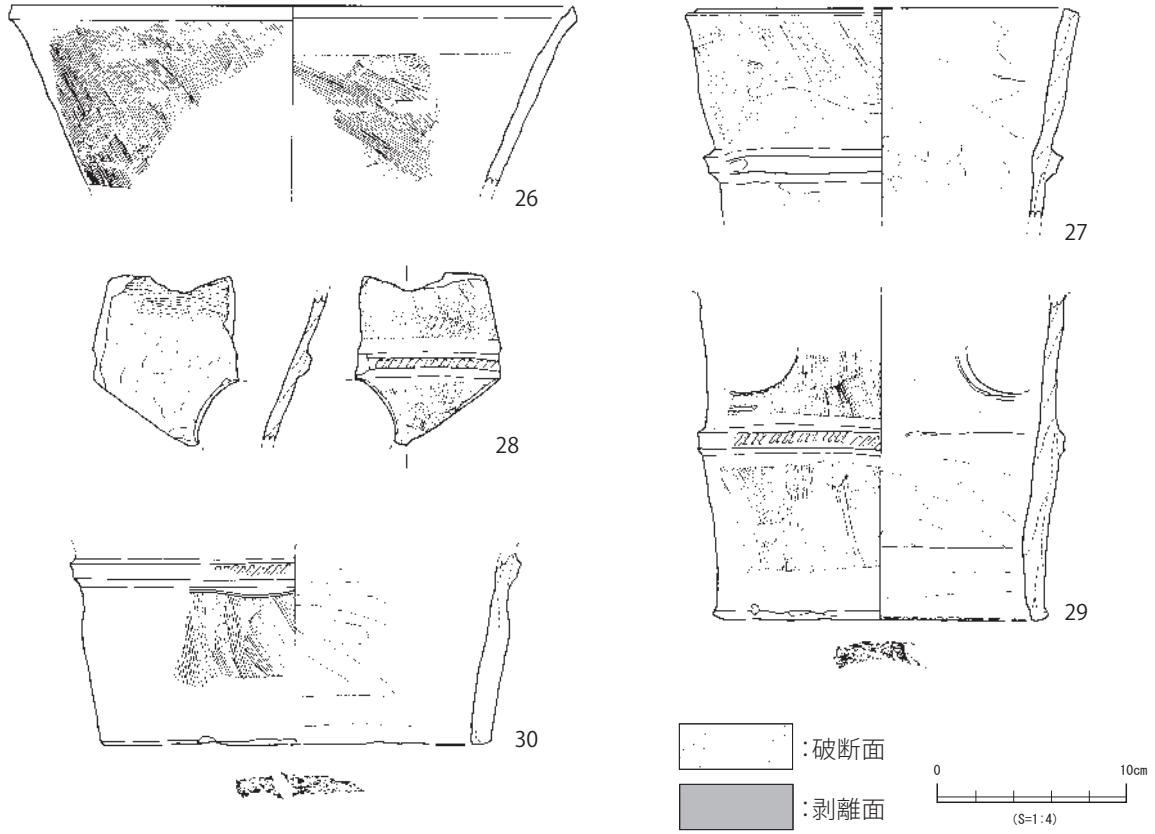


图 10-5 城山 2・3 号窯出土土円筒埴輪 (2)

C類



D類

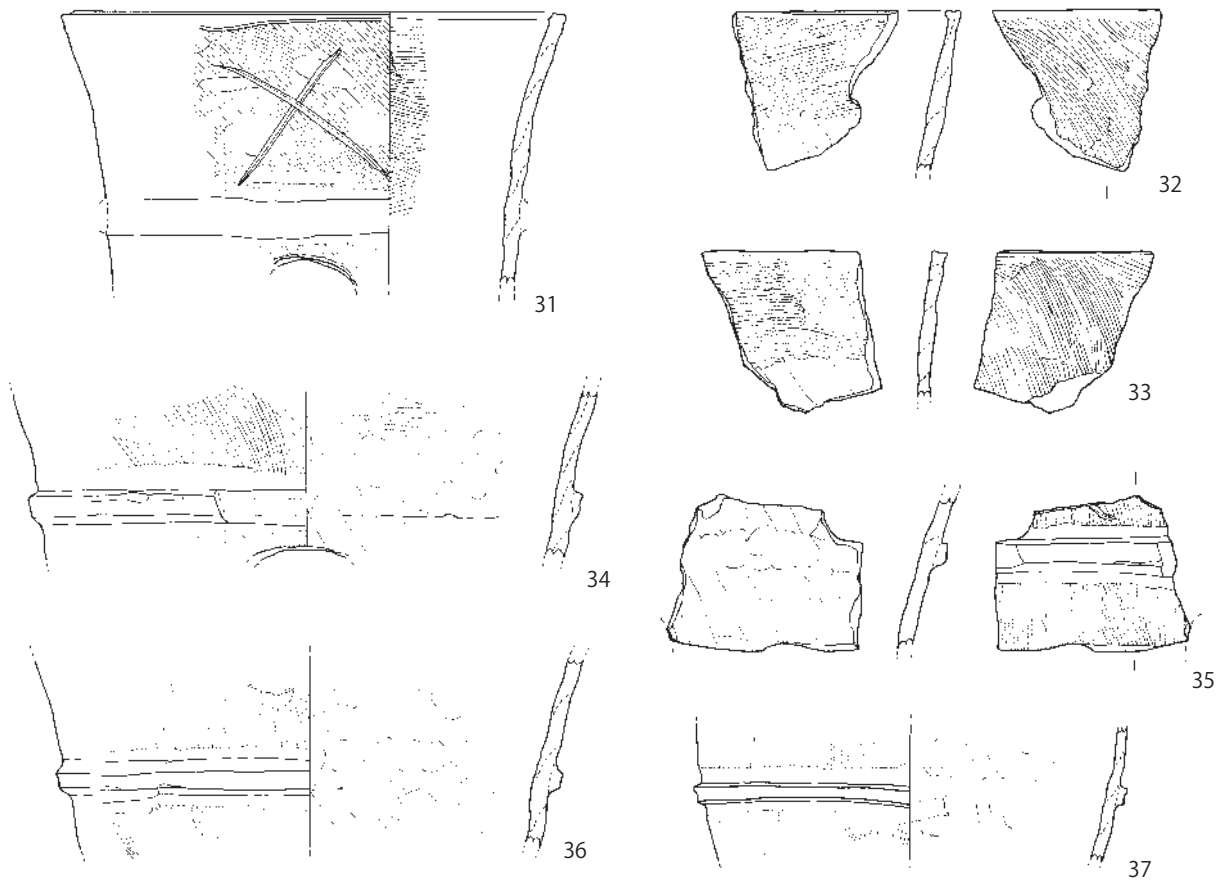


图 10-6 城山 2・3 号窯出土土円筒埴輪 (3)

表 10-1 城山2・3号窯出土円筒埴輪観察表

No	種類	分類	部位	出土位置	法量 (cm)	残存率	外面調整	内面調整	焼成	色調	備考 (※報告書)
1	円筒埴輪	A類	口縁部	窯内床面	残存幅:10.7 残存高:9.2		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
2	円筒埴輪	A類	口縁部	灰層2	残存幅:6.3 残存高:13.0		タテハケ →ヨコハケ	タテハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
3	円筒埴輪	A類	口縁部	Iトレンチ	残存幅:8.6 残存高:9.3		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (5Y 5/1)	ヘラ記号
4	円筒埴輪	A類	胴部	窯内床面	胴部突帯径:(26.0) 残存高:7.8	1/8	タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	ヘラ記号
5	円筒埴輪	A類	胴部	灰層	残存幅:10.1 残存高:7.3		タテハケ →ヨコハケ	ナデ・ ヨコハケ	硬・灰	灰 (5Y 6/1 ~ 5/1)	ヘラ記号
6	円筒埴輪	A類	胴部	Iトレンチ	残存幅:8.7 残存高:5.5		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (5Y 5/1)	ヘラ記号
7	円筒埴輪	A類	胴部	Iトレンチ	胴部突帯径:(35.8) 残存高:12.6	1/8	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・灰	外面:灰 (5Y 5/1) 内面:灰 (N5/0)	ヘラ記号
8	円筒埴輪	A類	胴部	灰層2 II 黒褐色泥砂	胴部径:(20.0) 残存高:5.5		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・黄	浅黄橙~にぶい黄橙 (10YR 8/3 ~ 7/3)	
9	円筒埴輪	A類	胴部	灰層第2亜 層	胴部突帯径:(26.6) 残存高:8.1	1/3	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	軟	外面:にぶい黄橙 (10YR/7/4) 内面:にぶい黄橙 (10YR/7/3)	
10	円筒埴輪	A類	胴部	窯内床面	胴部突帯径:(20.2) 残存高:10.8	1/8	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・灰	外面:黄灰~オリブ褐 (2.5Y 4/1 ~ 4/4) 内面:灰 (N 6/)	ヒモズレ
11	円筒埴輪	A類	胴部	窯内床面	残存幅:7.6 残存高:5.9		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・橙	褐灰~明褐 (7.5YR 5/1 ~ 5/6)	
12	円筒埴輪	A類	胴部	Iトレンチ	胴部突帯径:(21.0) 残存高:11.7	1/6	タテハケ →ヨコハケ	ナデ・ ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
13	円筒埴輪	A類	胴部	灰層2	残存幅:10.5 残存高:6.5		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	外面:灰 (10Y 6/1) 内面:灰 (N 6/)	ヘラ記号
14	円筒埴輪	A類	胴部	表採	残存幅:7.9 残存高:12.5		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・灰	外面:灰 (10YR 5/1) 内面:灰 (10YR 7/1)	
15	円筒埴輪	A類	胴部	窯内床面	残存幅:11.4 残存高:9.1		タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・灰	灰 (N6/)	
16	円筒埴輪	A類	胴部	窯内床面	胴部突帯径:(27.5) 残存高:10.0	1/8	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・灰	灰 (7.5Y 5/1)	ヒモズレ
17	円筒埴輪	A類	胴部~ 基底部	Iトレンチ	胴部突帯径:(25.8) 残存高:13.2	1/6	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・灰	灰 (5Y 5/1)	ヒモズレ
18	円筒埴輪	A類	基底部	窯内床面	底部径:(22.0) 残存高:16.0	1/5	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・黄	外面:橙~灰黄褐 (7.5YR7/6 ~ 10YR6/2) 内面:褐灰 (7.5YR6/1)	ヒモズレ (第16図-10)
19	円筒埴輪	A類	基底部	灰層第2亜 層	底部径:(17.1) 残存高:8.4	1/4	タテハケ →ヨコハケ	ナデ	硬・橙	褐灰~明黄褐 (10YR6/1 ~ 6/6)	
20	円筒埴輪	A類	基底部	灰層2 II	残存幅:7.9 残存高:12.7		タテハケ →ヨコハケ	ヨコハケ	硬・黄	浅黄橙~褐灰 (10YR 8/4 ~ 5/1)	ヒモズレ
21	円筒埴輪	A類	基底部	窯内	底部径:(19.4) 残存高:13.0	1/8	タテハケ →ヨコハケ	ナデ・ ヨコハケ	硬・灰	外面:灰 (N 7/) 内面:暗灰 (N 3/)	ヒモズレ (第16図-11)
22	円筒埴輪	B類	口縁部	窯内	口縁部径:(38.2) 残存高:17.2	1/5	タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	外面:灰 (N 4/) 内面:黒褐 (5YR 2/1)	ヘラ記号 (第16図-5)
23	円筒埴輪	B類	口縁部	窯内	口縁部径:(26.4) 残存高:8.6	1/6	タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
24	円筒埴輪	B類	胴部	窯内床面	残存幅:5.5 残存高:7.1		タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	外面:暗灰 (N 3/) 内面:灰褐 (7.5YR 4/2)	
25	円筒埴輪	B類	胴部	灰原	残存幅:10.0 残存高:9.5		タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	外面:灰 (N 4/) 内面:橙 (7.5YR 7/6)	
26	円筒埴輪	C類	口縁部	窯内床面	口縁部径:(30.0) 残存高:9.4	1/8	タテハケ	タテハケ	硬・灰	灰白~灰 (N7/ ~ 6/)	(第16図-4)
27	円筒埴輪	C類	口縁部	窯内床面	口縁部径:(20.7) 残存高:11.1	1/4	タテハケ	ナデ	硬・灰	外面:暗青灰 (5B 4/1) 内面:青灰 (5B 5/1)	(第16図-2)
28	円筒埴輪	C類	胴部	窯内床面	残存幅:7.7 残存高:8.9		タテハケ →タタキ	ナデ・ ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
29	円筒埴輪	C類	基底部	窯内床面	底部径:(17.8) 残存高:17.2	1/4	タテハケ →タタキ	ナデ	硬・灰	外面:灰 (5Y 5/1) 内面:黒褐 (5YR 2/1)	
30	円筒埴輪	C類	基底部	窯内床面	底部径:(20.6) 残存高:10.0	1/10	タテハケ →タタキ	ナデ	硬・黄	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	
31	円筒埴輪	D類	口縁部	窯内床面	口縁部径:(25.5) 残存高:8.2	1/4	タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	(第16図-1)
32	円筒埴輪	D類	口縁部	Iトレンチ	残存幅:8.9 残存高:9.0		タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
33	円筒埴輪	D類	口縁部	灰原	残存幅:9.6 残存高:8.4		タテハケ	ヨコハケ	硬・灰	灰 (N5/)	
34	円筒埴輪	D類	胴部	灰原	胴部突帯径:(29.4) 残存高:9.2		タテハケ	ナデ・ ヨコハケ	硬・灰	外面:暗緑灰 (10G4/1) 内面:橙 (7.5YR 6/6)	
35	円筒埴輪	D類	胴部	灰原	残存幅:10.3 残存高:8.2		タテハケ	ナデ	硬・灰	灰 (N5/)	
36	円筒埴輪	D類	胴部	灰原	胴部突帯径:(26.8) 残存高:10.1	1/8	タテハケ	ナデ	硬・灰	外面:黄灰 (2.5Y 6/1) 内面:黄灰 (2.5Y 5/1)	
37	円筒埴輪	D類	胴部	窯内	胴部突帯径:(22.8) 残存高:11.8	1/8	タテハケ	ナデ	硬・灰	青灰 (5B 5/1)	

外面1次調整は、木目が非常に密なハケメ工具によるタテハケが認められ、口縁部付近ではナナメハケを施す。2次調整は行わない。この密なハケメときめ細かい胎土によって、他種の埴輪と識別される。口縁部は、大きく外反するもの(26)と、直線的に立ち上がるもの(27)があり、口縁部形状により細別は可能であるがここでは一括して扱う。また、C類の特徴として、突帯上および付近に認められるタタキの痕跡も挙げられる(28～30)。ただし、接合した粘土紐の傾きを観察するかぎり、倒立技法は用いていないようである。

表 10-2 出土埴輪の破片数

位置・層位	A類	B類	C類	D類	不明	計(破片数)
床面	125	2	10	17	197	351
窯内	33	5	2	2	16	58
灰原(2又は1)	78	4	2	15	66	165
灰層2	113			1	54	168
灰層1	1					1
Iトレンチ	18		2	4	23	47
IIトレンチ	7				1	8
IIIトレンチ※				1	3	4
Vトレンチ	1					1
表採	24	1		4	8	37
不明	19	1	1	5	39	65
(合計)	419	13	17	49	407	905

※ III T-IV T 中間を含む

D類

口縁部は外反し、端部はナデにより凹みが顕著に認められる。外面調整は、一次調整タテハケ(ナナメハケ)であり、口縁部付近はナナメハケを行う。口縁部には「×」形のヘラ記号を刻むものがある(31)。

これらの分類は、七原恵史氏が報告書の中で(1)～(5)に分類したものとほぼ同一であり、(1)がA類に、(2)がD類に、(3)・(4)がC類に、(5)がD類に対応する。A～D類は、外面調整、口縁部形状、ハケメの疎密、胎土、ヘラ記号、その他痕跡(ズレ、タタキ)など各属性が共通するものが多く、製作者(集団)の違いを反映していると推定される。

③ 出土位置・層位の検討

A～D類の埴輪は生産された時期の差や、城山2号窯・3号窯という窯の違いを反映している可能性がある。そこで、実測図に掲載した以外の破片資料についても出土位置や層位・遺構ごとに破片数をカウントし、集計した(表10-2、註2)。

遺跡全体から出土した総数を比較した場合、A類が最も多く、全体(分類不明を除く)の84%を占める。次いで、D類10%、C類とB類は3%である。A～D類を位置や層位別に比較したが有意な差は認められなかったため、埴輪に時期や窯の違いを見いだすことは難しい。城山2号窯の「床面」からは、A～D類すべての埴輪が出土しているが、床面出土遺物が最終操業時の製品(失敗品)であるとすれば、同じ窯で同時に生産された可能性も考慮する必要がある。

(3) 埴輪同工品の分析

① 城山2・3号窯のハケメのパターン

城山2・3号窯のA～D類の埴輪について、ハケメのパターンを抽出し、全体で9種を確認した。A類は、ハケメ1～3、およびハケメ8の4種、B類はハケメ4・5の2種、C類はハケメ6・7の2種、D類はハケメ8・9の2種である(図10-7)。



図 10-7 城山 2・3 号窯出土埴輪の刷毛目

このうち、A 類の 12・15 については、主に D 類において使用されるハケメ 8 の痕跡を残す工具が使用されている。これは、一つには D 類とした中に、回転ヨコハケを施す個体が存在した場合は考えられる。いま一つは、A 類と D 類の製作者（集団）が、ハケメ工具を共有するという、時間的、空間的に近い関係、あるいは同一であった可能性も考えることができよう。

② 志段味古墳群の埴輪

志段味古墳群の埴輪の中で、城山 2・3 号窯の A～D 類の特徴と最もよく合致するものは、東大久手古墳（帆立貝式、39 m）の埴輪である。

東大久手古墳の円筒埴輪は、2 条 3 段構成で、外面 2 次調整に回転ヨコハケを用い、基底部にヒモズレやユビズレの痕跡を残す点で城山窯の A 類と類似している。また、こうした「尾張型埴輪」（赤塚 1991）

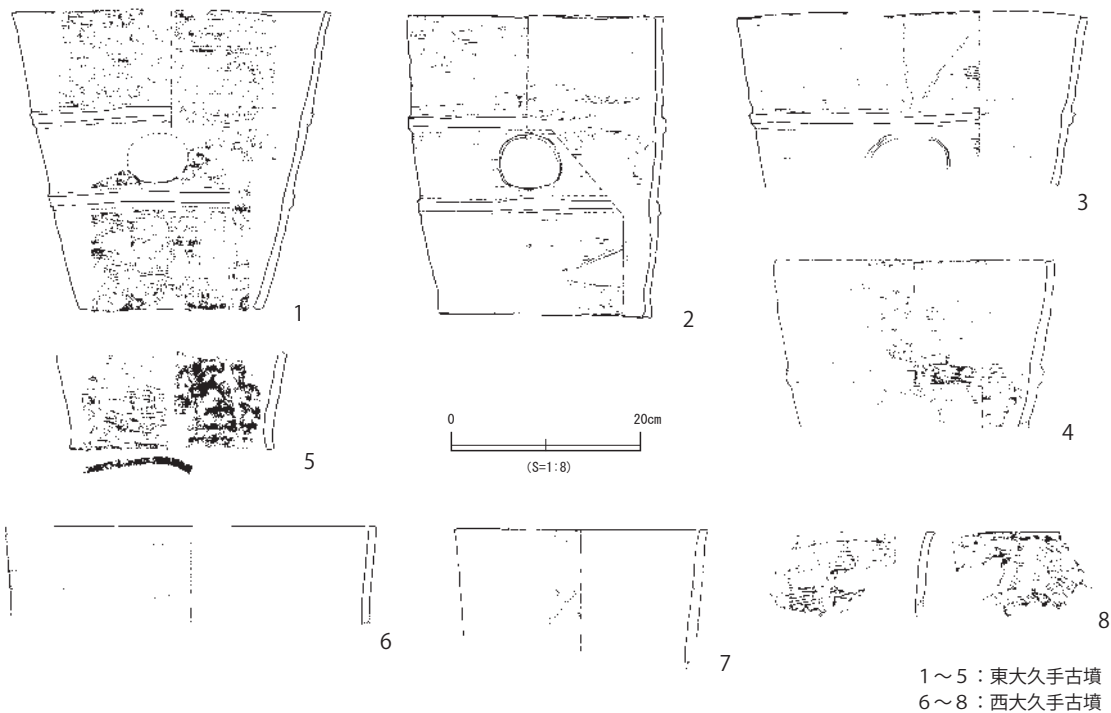


図 10-8 東大久手古墳・西大久手古墳の埴輪

としての特徴を有しつつも、底部下端のケズリや底面の切り離し痕跡が認められない点にも共通点がみられる。A類にみられる二種類のヘラ記号は、東大久手古墳の埴輪にも確認できる（図 10-8：3・4）。

城山窯の9種のハケメパターンのうち、A類のハケメ2とハケメ3は、東大久手古墳のものと一致した。形状や製作技法等に加え、ハケメのパターンの一致により、城山2・3号窯と東大久手古墳の埴輪には同じ製作者（集団）による同工品が存在することが認められる。

西大久手古墳の円筒埴輪は、外面2次調整に回転ヨコハケを行うものと一時調整タテハケのみのものがある。ハケメは粗く、口縁部に二本の斜線からなるヘラ記号を持つ点（図 10-8：7・8）で城山窯のB類との共通点をもつ。しかし、西大久手古墳の埴輪の口縁部は外反しない点や、二次調整に回転ヨコハケを行う点で、B類との相違点も認められる。

西大久手古墳（帆立貝式古墳、37 m）の埴輪は軟質で器面が磨耗し、ハケメの痕跡が不明瞭なものが多くもあってか、ハケメパターンの同定にはいたらなかった。そのため、西大久手古墳の埴輪については城山窯で生産された可能性を指摘するにとどめる。

（4）まとめ

城山2・3号窯で生産された埴輪の少なくとも一部は東大久手古墳に供給されたことが明らかとなった。東大久手古墳は、出土した須恵器や埴輪から5世紀末（東山11号窯式期：I-5小期（城ヶ谷2015））の築造が想定されている（深谷・瀬川編2011）。城山2・3号窯の須恵器は5世紀後葉（城山2号窯式期：I-4小期）の標準資料とされ、東大久手古墳の築造時期より一段階古く位置付けられる。しかし、城山2・3号窯は、猿投窯とは築窯されるエリアが異なり、当該期の東山窯（猿投窯）の資料も明確でないため、時期差と考えるべきか検討が必要となろう。それでも東大久手古墳と城山2・3号窯から共通して出土している有蓋高坏を比較すると、蓋のつまみの形状や器壁の厚さ、脚部の形状などに差異が認められ（図

10-9)、東大久手古墳出土の須恵器が城山窯から供給された積極的な理由は見い出せない。城山2・3号窯の埴輪と須恵器の生産時期の差や、埴輪と須恵器の管理・供給体制の違いを反映している可能性がある。

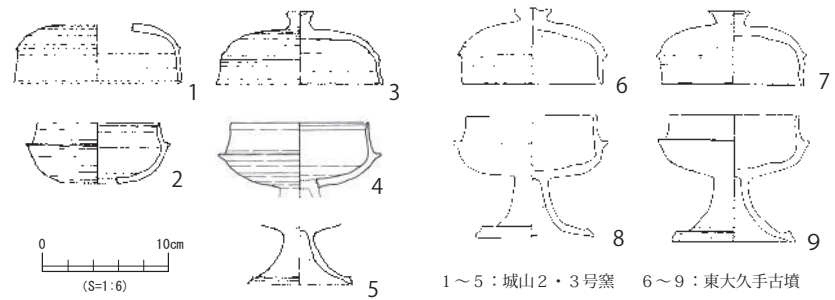


図 10-9 城山2・3号窯と東大久手古墳の須恵器

また、東大久手古墳以外の志段味古墳群の埴輪の生産窯については明らかにできなかったが、5世紀代の埴輪は、古墳近辺に同時期の窯が確認されていない現状においては、城山窯から運ばれた可能性も十分に考慮される。その場合は、城山窯の操業時期を長く見積もる必要があるだろう。

庄内川沿岸の牛牧離れ松遺跡から出土した埴輪は、城山2・3号窯B類の埴輪と類似すること（七原ほか1978、藤井2012）や同工品があること（波多野2015）が指摘されている。城山窯のA類以外の埴輪についても、その消費地について調査することで当地域の埴輪生産と供給関係について具体的に知ることができるようになると思われる。

註

- 1 今回、埴輪とハケメとの対応関係を示すために、未公表資料を含めてあらためて実測図を作成し掲載した。尾張旭市教育委員会より資料の借用、実測図の掲載の許可をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 2 城山2・3号窯から出土した埴輪片のうち、目安として1辺3cm以上のものを抽出し分類を行った。遺物が収納されている袋や遺物に記載された注記から出土位置または層を分類したが、不確かなものや不明なものについては「不明」とした。

参考文献

赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第24集 愛知県埋蔵文化財センター
 犬塚康博 1994「味美技法批判」『名古屋市博物館研究紀要』第17巻 名古屋市博物館
 小橋健司 2004「山倉1号墳出土埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター
 斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI 名古屋大学文学部
 城ヶ谷和広 2015「編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業1 古代猿投系 愛知県
 城倉正祥 2009『埴輪生産と地域社会』学生社
 田中智子 2005「総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」『総持寺遺跡』大阪府教育委員会
 七原恵史ほか 1978「城山古窯址」『尾張旭市の古窯』尾張旭市教育委員会
 波多野晶 2015「尾張地域における円筒埴輪の供給関係」『考古学フォーラム』22
 深谷淳・瀬川貴文編 2011『志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告79 名古屋市教育委員会
 藤井康隆 2012「コラム 西大久手古墳の埴輪と城山二号窯」『尾張氏★志段味古墳群をときあかす』名古屋市博物館企画
 展展示図録

第 11 章 総括

志段味古墳群は、東谷山の頂部から西側の丘陵・段丘上に築造された 66 基の古墳から構成される。古墳は、前期中葉から前期後葉、中期中葉から後期前葉、後期後半から終末期の 3 時期に築かれた。

平成 26 年度～ 30 年度には、中期中葉から後期前葉の時期では、志段味大塚古墳、大塚 3 号墳、勝手塚古墳の調査を、後期後半から終末期では、白鳥 5 号墳、白鳥 6 号墳、東谷山 12 号墳の調査を実施した。ここでは、今回の調査の成果を踏まえて、中期中葉以降の志段味古墳群についてまとめ、総括とする。

中期中葉から後期前葉 志段味古墳群ではこの時期、中位・低位の河岸段丘上に 5 基の帆立貝式古墳が相次いで築造される。それらは、志段味大塚古墳（墳丘長 51m・5 世紀後葉）→勝手塚古墳（墳丘長 54m・6 世紀前葉）、西大久手古墳（墳丘長 37m・5 世紀中葉）→大久手 5 号墳（墳丘長 38m・5 世紀後葉）→東大久手古墳（墳丘長 38m・5 世紀末）の二つの首長墓系列によって構成される（深谷 2014）。

今回調査した志段味大塚古墳と勝手塚古墳は、前方部は 1 段で、後円部は上段が高い 2 段築成である（第 3 章・第 4 章）。テラス部分や墳頂部には円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪からなる埴輪列が巡っていたと推測される。墳丘規模や造り出し・周堤などの附帯施設、蓋形埴輪の存在は、志段味大塚古墳→勝手塚古墳の系列の優位性を示している。二系列の首長墓の周辺には、中位河岸段丘上に大久手 3 号墳（方墳・一辺 14m）、大塚 3 号墳（円墳・直径約 18m：第 5 章）、大塚 2 号墳（不明）が、低位河岸段丘上には羽根古墳（円墳・推定直径 20m）が築かれる。こうした優劣がある帆立貝式古墳の首長墓系列の下位に小型の円墳・方墳が展開する階層構造が明示されている。



図 11-1 志段味古墳群

志段味古墳群では5世紀末以降になると、大塚2号墳、羽根古墳など下位の古墳も埴輪を樹立するようになる。このことは、6世紀初頭に築造された断夫山古墳を頂点とし、墳丘規模とそれに見合った埴輪を供給することで中小古墳も序列化する(浅田2006)という尾張の階層秩序が志段味古墳群にも及んでいることを示している。また一方で、断夫山古墳の築造を契機に名古屋台地や庄内川・矢田川流域の前方後円墳・帆立貝式古墳に周堤が採用されることから、有力首長間の繋がりも見て取れる(深谷2014)。志段味古墳群では、古墳時代前期以降、倭王権との直接的な関わりが認められたが、5世紀末～6世紀に入り、名古屋台地の大型古墳を中心とする新たな関係が生じたことが推測される。

後期後半から終末期 勝手塚古墳、羽根古墳の築造と前後して東谷山西麓を中心に群集墳が形成される。東谷山の西側斜面から段丘上にかけて分布する東谷山古墳群、狸塚古墳群、白鳥古墳群をまとめて東谷山西麓群集墳と呼称しておく。志段味古墳群の群集墳は、東谷山西麓群集墳の46基に加え、西側の低位段丘上に単独で立地する山の田古墳、塚本古墳の計48基より構成される。東谷山西麓部は、現在は開発が進んだことで、地形は変わり古墳の多くも滅失しているが、かつては、侵蝕谷によって隔てられた支丘が存在したことが知られる(久永・田中編1963)。6つの支丘を東谷山第一支群から第六支群とし、さらに中位河岸段丘上の狸塚古墳群と低位河岸段丘上の白鳥古墳群を支群と呼び変えると、全体を8つの支群に分けられる(図11-2)。

東谷山西麓群集墳の横穴式石室は、玄門石により玄室と羨道を区画する「疑似両袖」(玄門石・胴張り)タイプ、大型の袖石により袖部をもつ「左片袖」(片袖・胴張り)タイプ(註1)、袖部をもたず柵石により玄室と羨道を区別する「無袖」(柵石・長方形)タイプの3種に分類される(服部2000、深谷2007)(図11-3)。いずれのタイプも玄室は胴張りする傾向にある。

東谷山西麓群集墳の中でもっとも時期が遡る可能性があるのは、6世紀前葉(H-10号窯式期)の須恵器が副葬された東谷山9号墳であり、竪穴系横口式石室の可能性が指摘されているが(服部2000)、正確な記録はなく不明である。6世紀後半には、東谷山3号墳(円・直径23m・無袖)、東谷山4号墳(円・推定直径13m・左片袖)が東谷山第二支群に築かれる一方、白鳥支群にも白鳥8号墳(不明)などが築かれた可能性がある。6世紀末から7世紀前葉には、第二支群に5号墳(円・25m×22m・疑似両袖)が築かれるとともに第三支群まで分布が拡大し、東谷山1号墳(円・推定直径15m・左片袖)、東谷山12号墳(円・推定直径16m・左片袖)、東谷山16号墳(円・推定直径30m・疑似両袖)が展開する。また、白鳥古墳群でも東谷山白鳥古墳(円・直径約17m・無袖)、白鳥4号墳(円・直径約17m・無袖)、白鳥5号墳(円・直径約12.5m・無袖)と古墳数が最も増大し群集化する。7世紀中葉には、第三支群の東谷山14号墳、東谷山15号墳に加え、第五支群にも東谷山26号墳が築造される。築造時期が判明している古墳は少ないが、6世紀後半から7世紀中葉をとおして、東谷山西麓の群集墳は北から南へと墓域を拡大あるいは移動させる傾向にある。7世紀後半以降は、明確ではないものの白鳥支群の中でもやや離れた位置に6号墳が造られた可能性がある。7世紀末～8世紀前葉には支群から離れた東谷山尾根上に東谷山34号墳が築かれ、これを最後に志段味古墳群の造営は終焉を迎える。

東谷山西麓に展開する群集墳は、同一支群に複数のタイプの石室が併存して構築されており、複数の集団が墓域を共有していたと推定される。白鳥支群は、確認されているものはすべて無袖タイプで共通するが、石室の構築法などに差異もある(第6章)。また、東谷山12号墳、東谷山14号墳、白鳥4号墳で

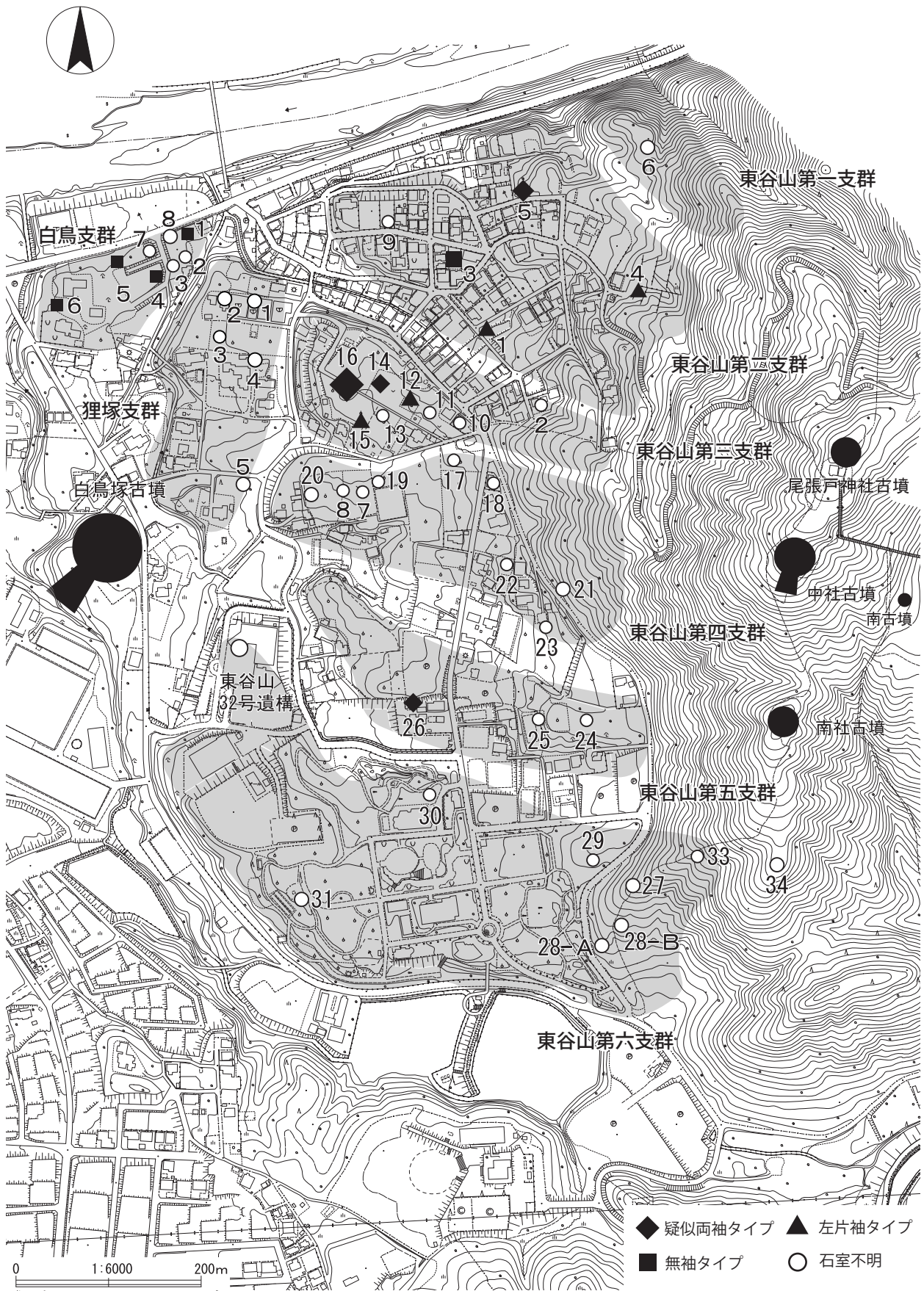


図 11-2 東谷山西麓群集墳

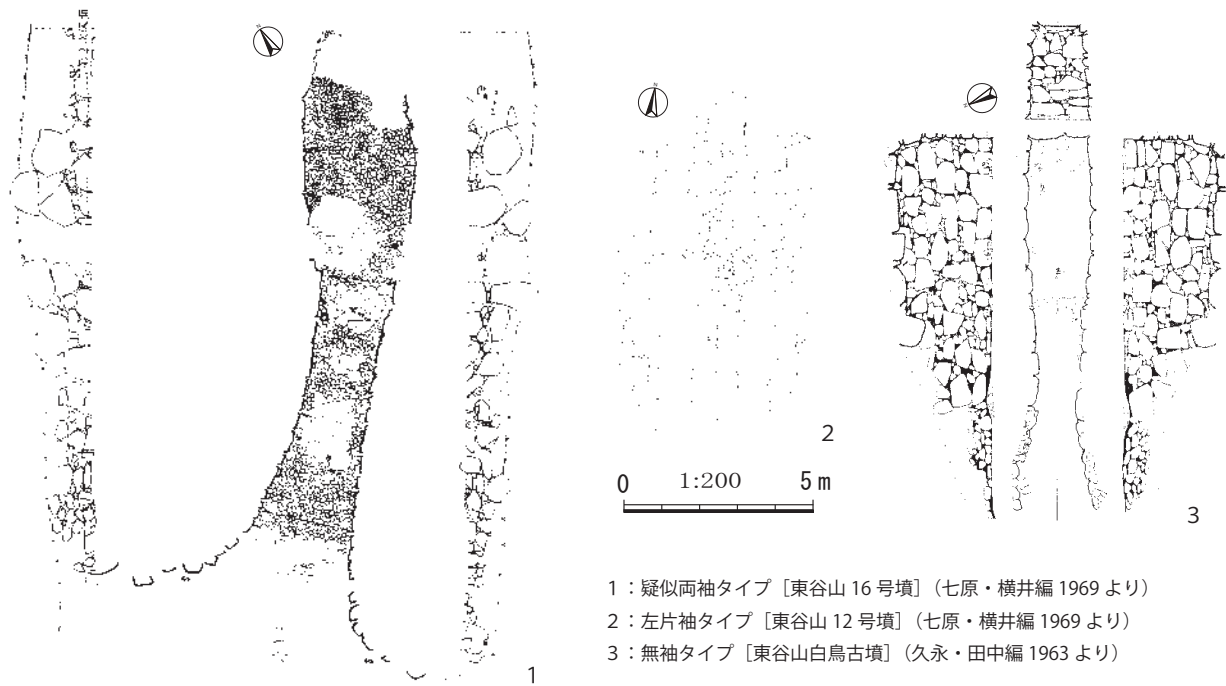


図 11 - 3 横穴式石室の分類

は、石室内の奥壁隅に土師器を据える儀礼行為が認められ、渡来系集団との関係が指摘されている（深谷 2011）。

群集墳の中で際立つのは、直径約 30m の墳丘をもち、全長 16m 以上玄室長 6.5m 以上の疑似両袖タイプの横穴式石室を内包する東谷山 16 号墳である。動物像をともなう装飾付須恵器の副葬が認められる。東谷山西麓に展開する他の古墳が直径 10m～20m 級の円墳で、石室長 10m 以下であることを考慮すれば、東谷山 16 号墳は首長墳と位置づけることが可能であろう。

6 世紀前葉に造営された勝手塚古墳に後続する首長墓は明確ではなく、東谷山 16 号墳との系譜関係は不明である。深谷淳は、尾張のクニのミヤケの一つである「間敷屯倉」を、庄内川中流域の春日井市勝川付近に求める見解（重松 1963、早野 2005）を支持し、ミヤケの設置により庄内川と陸上交通の結節点が、志段味古墳群のある上流域から中流域に移動したと推定した。それに伴い志段味の首長墓系譜は造営が途絶し、後続する首長墓として 6 世紀中葉～後葉に位置付けられる勝川古墳群の南東山古墳（円墳？・直径 40m）などを想定する（深谷 2014）。

東谷山西麓群集墳のように、集落から離れた名山のもとに大規模な群集墳が形成される「山の墓地」は地域を越えて認められ、その形成の契機には、屯倉型の開発が想定されている（菱田 2013）。そうであれば、東谷山 16 号墳の被葬者は、間敷屯倉の開発に携わる多様な集団を統括する人物を想定することもできよう。東谷山を共同墓地に選んだのは、交通上のランドマークでもある名山であること以外にも、前期の大型前方後円墳である白鳥塚古墳（前方後円墳・115m）の存在が重要であったと考えられる。大型古墳の被葬者を同族結合の要とし、擬制的な同祖・同族関係を結ぶことで（白石 2000）、集団の紐帯が保たれた。このように、志段味古墳群の群集墳は、屯倉の開発にかかわる様々な集団が、志段味古墳群形成の契機となった白鳥塚古墳のもとで、一体となり共同墓地を築いた点に意義があり、古墳群としての価値が認められる。

註

- 1 奥壁から開口部方向にみて左側に袖部を有する石室を「左片袖」とする。

参考文献

- 浅田博造 2006 「断夫山古墳と階層構成～墳丘と尾張型埴輪を中心に～」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム
- 犬塚康博 1997 「第四章 古墳時代」『新修 名古屋市史』第一巻 名古屋市
- 重松明久 1963 「古代」『春日井市史』春日井市
- 白石太一郎 2000 「大型古墳と群集墳－群集墳の形成と同族系譜の成立－」『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 瀬川貴文 2008 「尾張における群集墳の展開」『名古屋市博物館研究紀要』第31巻
- 七原恵史・横井在時編 1969 『守山の古墳』調査報告第二 名古屋市教育委員会
- 服部哲也 2000 「庄内川中流域の横穴式石室」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第2号
- 服部哲也 2011 「東谷山古墳群の分布調査」『埋蔵文化財調査報告書62 志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告79 名古屋市教育委員会
- 早野浩二 2005 「ミヤケの地域的展開と渡来人－東海地方における朝鮮半島系土器の考察から－」『考古学フォーラム』17
- 久永春男・田中稔編 1963 『守山の古墳』守山市教育委員会
- 菱田哲郎 2013 「7世紀における地域社会の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集
- 広瀬和雄 2009 「古墳時代像再構築のための考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集
- 深谷淳 2008 「東谷山古墳群と『尾張戸』」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第12号
- 深谷淳 2011 「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」『古代学研究』189号 古代学研究会
- 深谷淳 2014 「総括」『埋蔵文化財調査報告書70 志段味古墳群Ⅱ』名古屋市文化財調査報告87 名古屋市教育委員会
- 和田晴吾 1994 「古墳築造の諸段階と政治的階層構成」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版



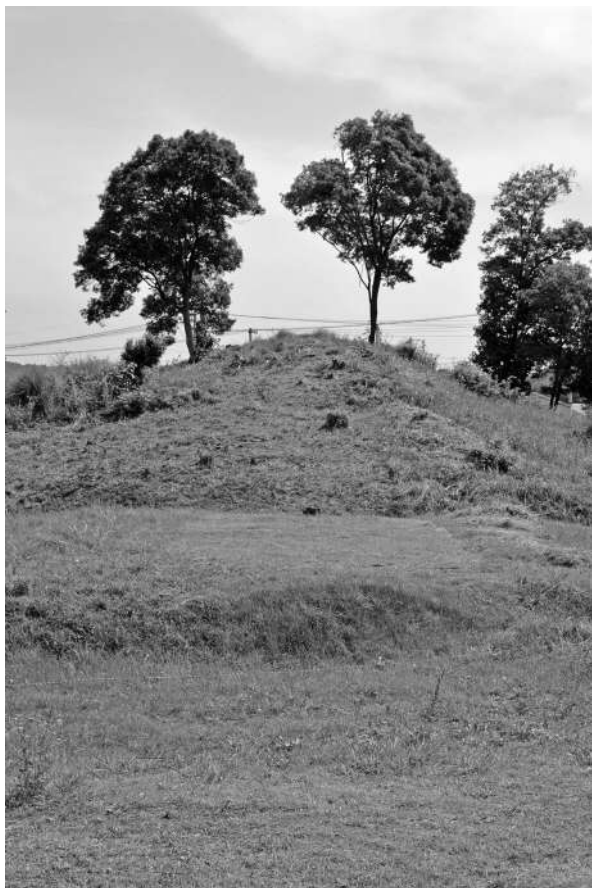
1 山の田集落から志段味大塚古墳を望む（1952年10月29日撮影 南山大学人類学博物館提供）



2 勝手塚古墳近景（昭和42年頃撮影 七原恵史氏提供）



1 調査前（東から）



2 調査前（西から）



1 18トレンチ 全景（東から）杉浦秀昭撮影



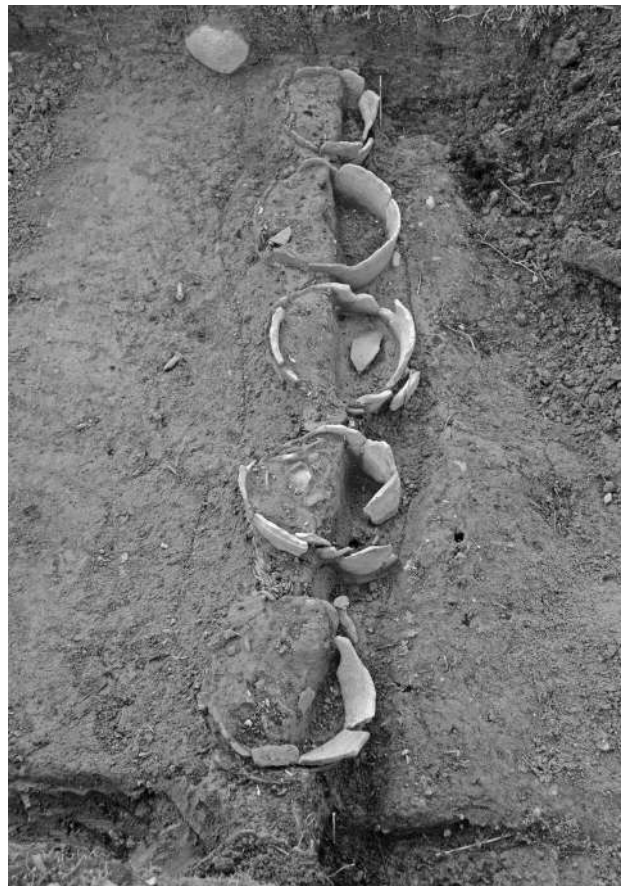
2 18トレンチ 調査風景（南東から）



3 18トレンチ 調査風景（南西から）



4 18トレンチ 埴輪列・葺石（南東から）



5 18トレンチ 埴輪列（南から）



1 19トレンチ 全景 (西から)



2 19トレンチ 前方部葺石 (南西から)



3 19トレンチ 前方部土層断面 (南から)



4 19トレンチ 後円部土層断面 (南から)



1 20 トレンチ 葺石・埴輪列検出（北西から）



2 20 トレンチ埴輪検出（北から）



3 20 トレンチ埴輪列（北から）



1 20トレンチ 調査風景 (北から)



2 20トレンチ 調査風景 (西から)



3 20トレンチ 葺石・埴輪検出 (西から)



4 20トレンチ 葺石・埴輪検出 (東から) 杉浦秀昭撮影



5 20トレンチ 葺石検出 (北から)



6 20トレンチ 葺石検出 (南から)



7 20トレンチ 埴輪検出 (西から)



8 20トレンチ 埴輪検出 (北から)



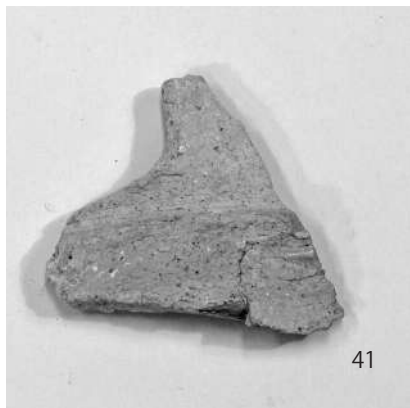
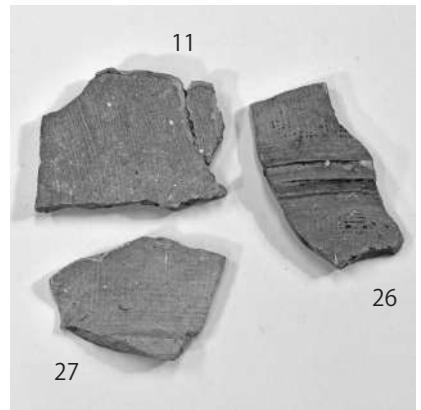
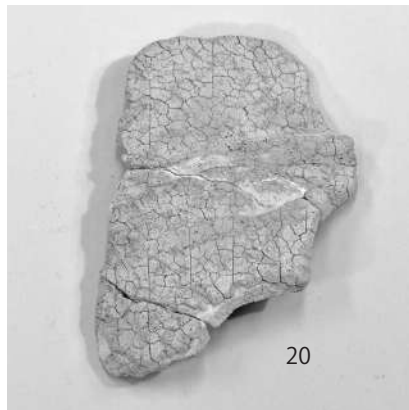
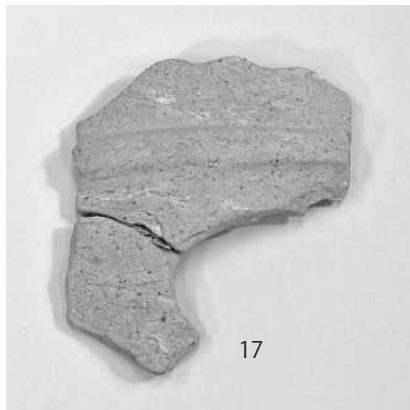
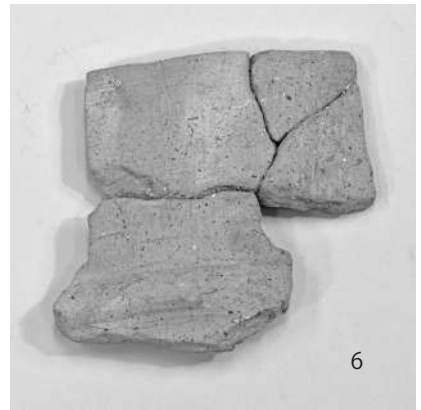
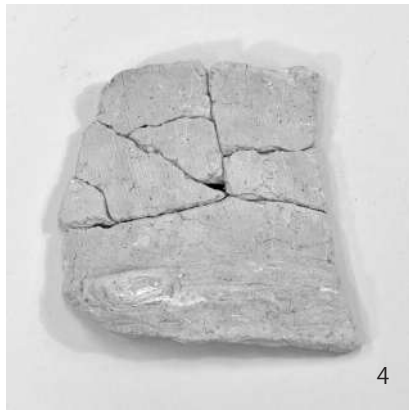
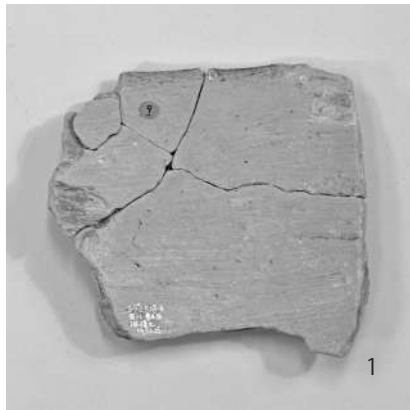
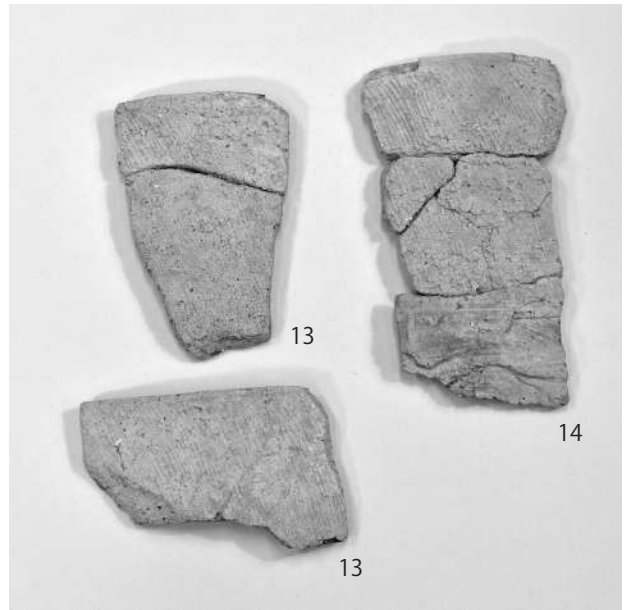
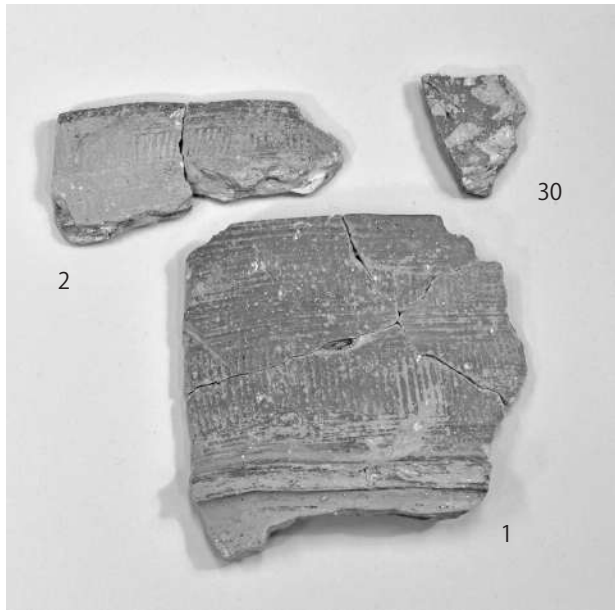
1 21トレンチ 埴輪（西から）

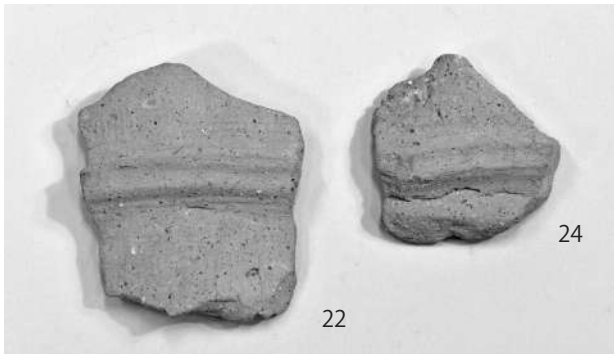
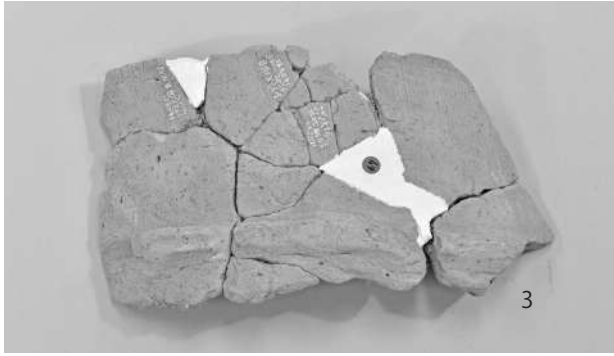


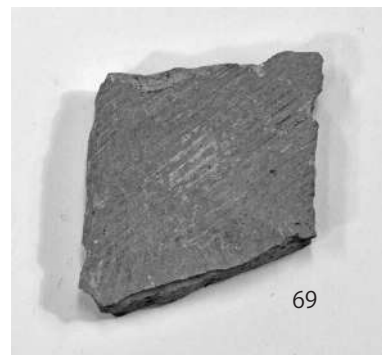
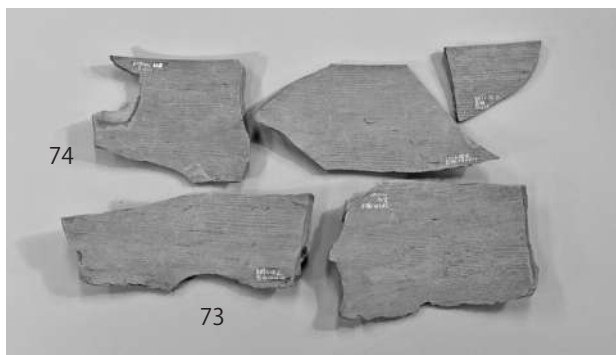
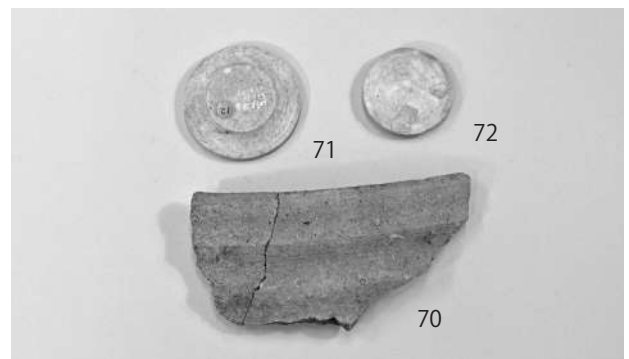
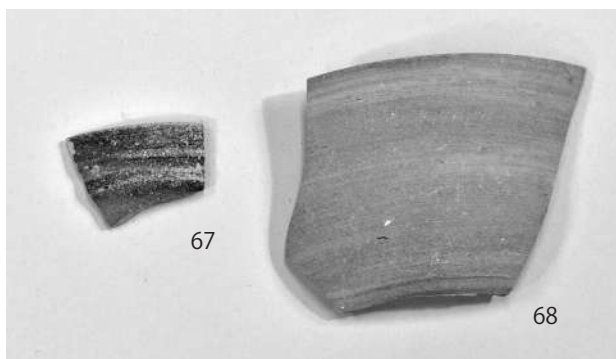
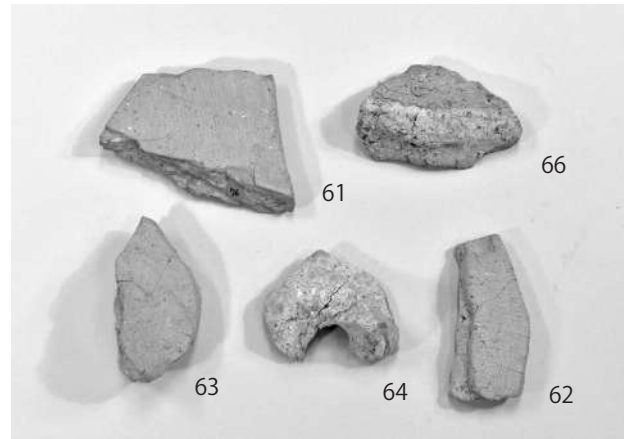
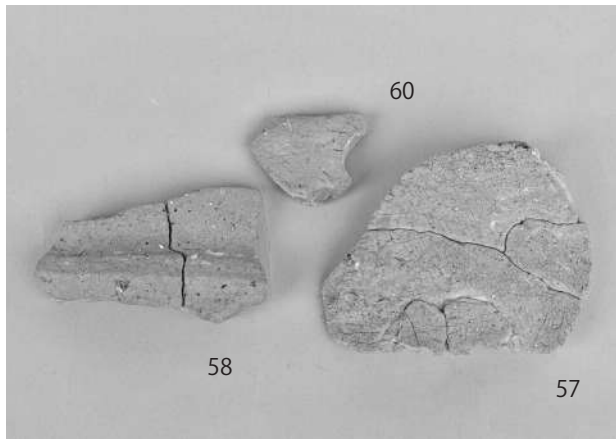
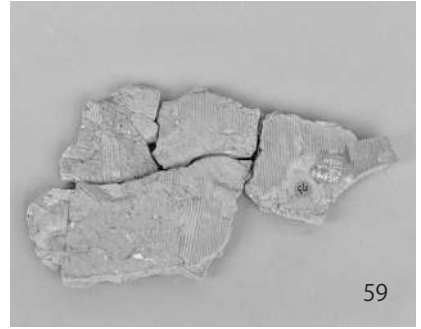
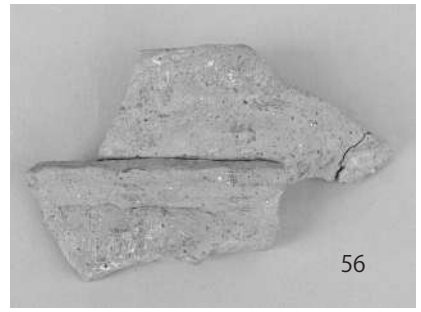
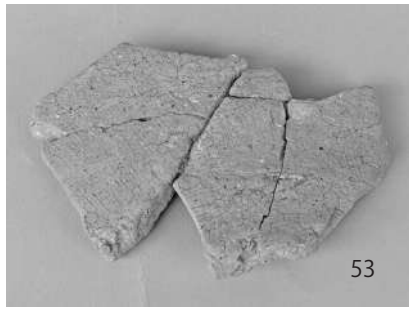
2 21トレンチ 埴輪（南から）



1 21トレンチ 埴輪（北から）

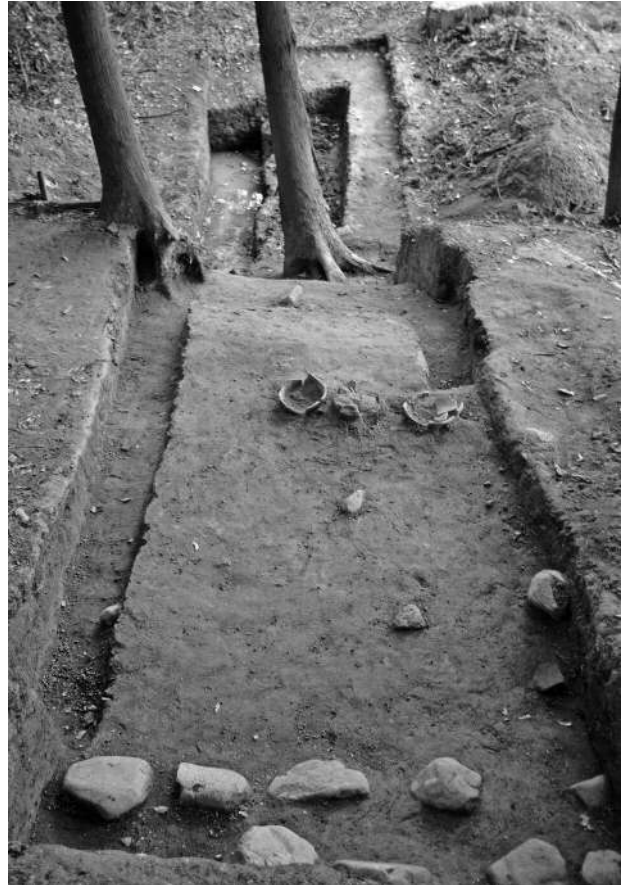








1 1トレンチ 全景(東から)



2 1トレンチ 全景(西から)



3 1トレンチ 葺石・埴輪列検出(東から)



4 1トレンチ 埴輪列・周濠(南から)



5 1トレンチ 周濠土層断面(南から)



1 2トレンチ (東から)



1 2トレンチ (南から)



3 2トレンチ (北から)



3 2トレンチ (北から)



5 2トレンチ (北から)



5 2トレンチ (北から)



7 2トレンチ (北から)



8 2トレンチ (北から)



1 3トレンチ 調査風景 (西から)



2 3トレンチ 墓石・埴輪列検出 (西から)



3 3トレンチ 墓石検出 (西から)



4 3トレンチ 埴輪列 (南から)



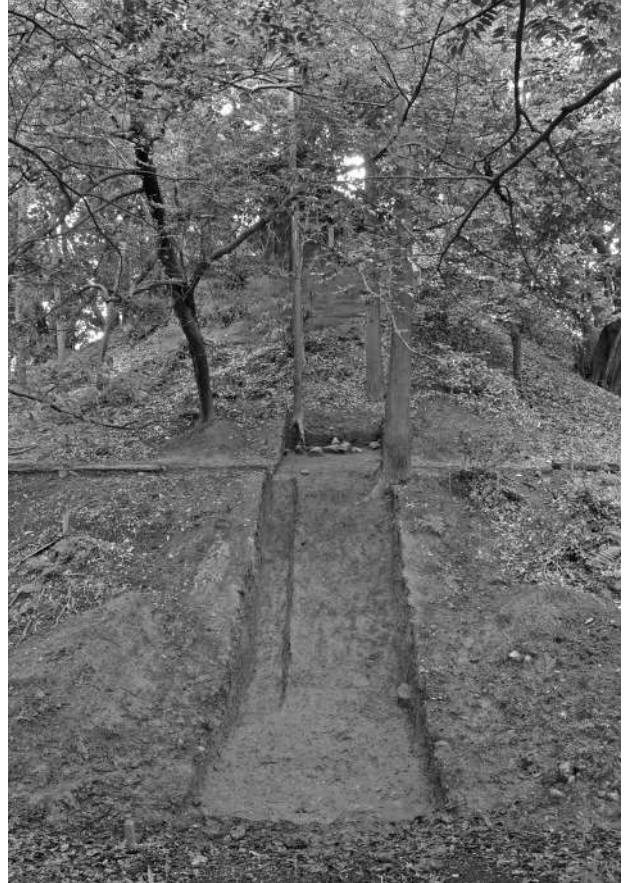
5 3トレンチ 埴輪列 (南西から)



6 3トレンチ 埴輪列・土層断面 (南から)



1 4トレンチ 調査前(北から)



2 4トレンチ 全景(北から)



3 4トレンチ 土層断面(北西から)



4 4トレンチ 墳丘平坦面・葺石(北西から)



5 4トレンチ 葺石検出(北から)



1 5トレンチ 全景 (西から)



2 5トレンチ 全景 (東から)



3 6トレンチ 調査状況 (東から)



4 6トレンチ 全景 (南東から)



5 6トレンチ 全景 (北東から)



6 6トレンチ 土層断面 (南から)



1 7トレンチ 全景 (北から)



3 8トレンチ 全景 (西から)



2 7トレンチ 全景 (東から)



4 8トレンチ 全景 (東から)



5 8トレンチ 埴輪列 (西から)



6 9トレンチ 全景 (北から)



7 9トレンチ 土層断面 (西から)



1 10トレンチ 全景 (東から)



2 10トレンチ 全景 (西から)



3 10トレンチ 周堤 (北から)



4 10トレンチ 土層断面 (北から)



5 10トレンチ 土層断面 (北から)



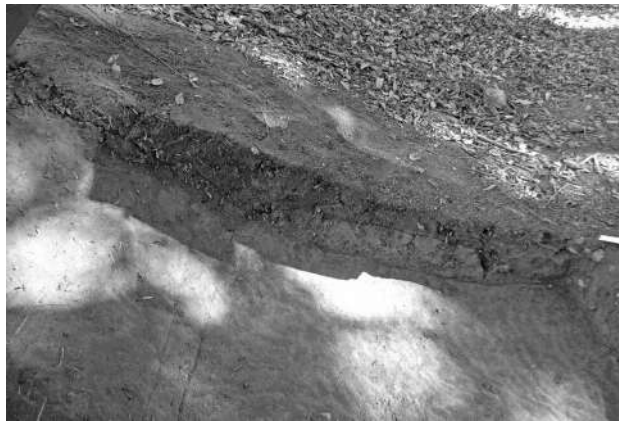
6 10トレンチ 調査風景 (南から)



1 11トレンチ 全景 (北から)



2 11トレンチ 周堤 (西から)



3 11トレンチ 土層断面 (西から)



4 切通し 西壁 (東から)



1 12トレンチ 全景 (北から)



2 12トレンチ 周堤 (南から)



3 12トレンチ 土層断面 (南から)



4 12トレンチ 土層断面 (東から)



5 12トレンチ 周堤下部 (東から)



6 12トレンチ 土器出土状況 (東から)



1 13トレンチ 全景 (西から)



2 13トレンチ 周堤 (東から)



3 13トレンチ 周輪列



4 13トレンチ 周輪列 (東から)



5 13トレンチ 周輪列・土層断面 (北から)



6 13トレンチ 周濠 (東から)



1 14トレンチ 全景 (北東から)



2 14トレンチ 全景 (東から)



1 14トレンチ 調査前 (北東から)



2 14トレンチ 調査風景 (南西から)



3 14トレンチ 埴輪検出 (北から)



4 14トレンチ 埴輪土坑土半裁 (北西から)



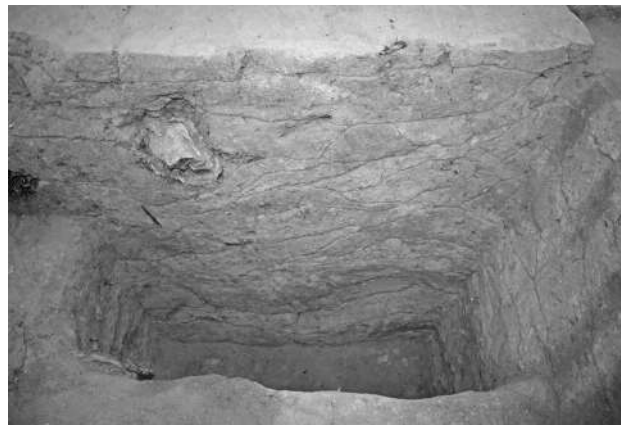
5 14トレンチ 葺石 (東から)



6 14トレンチ 北壁土層断面・東 (東から)

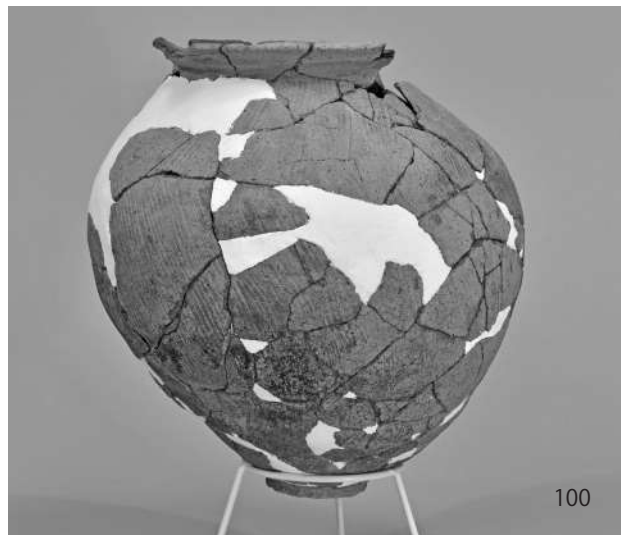


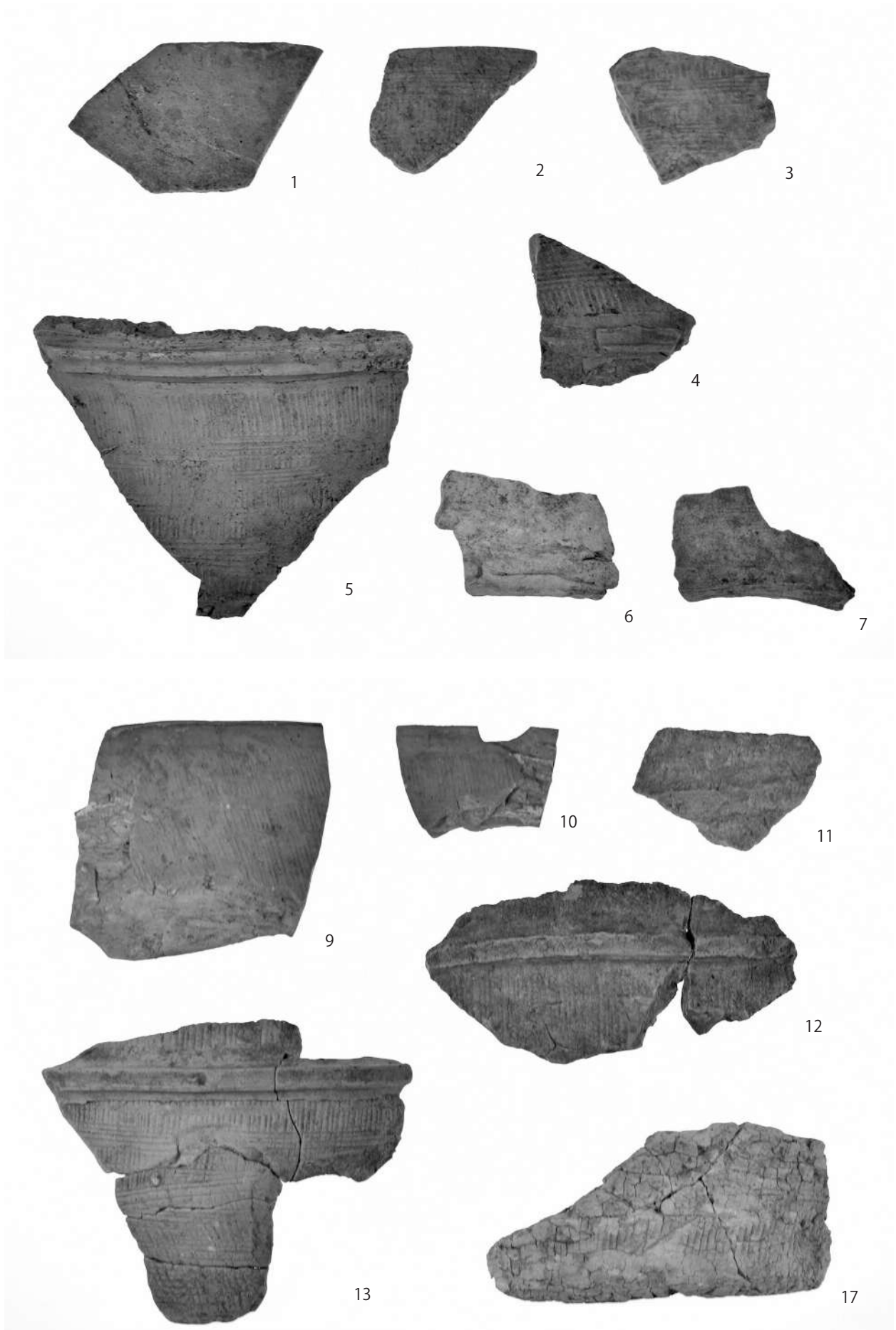
7 14トレンチ 北壁土層断面・西 (南西から)

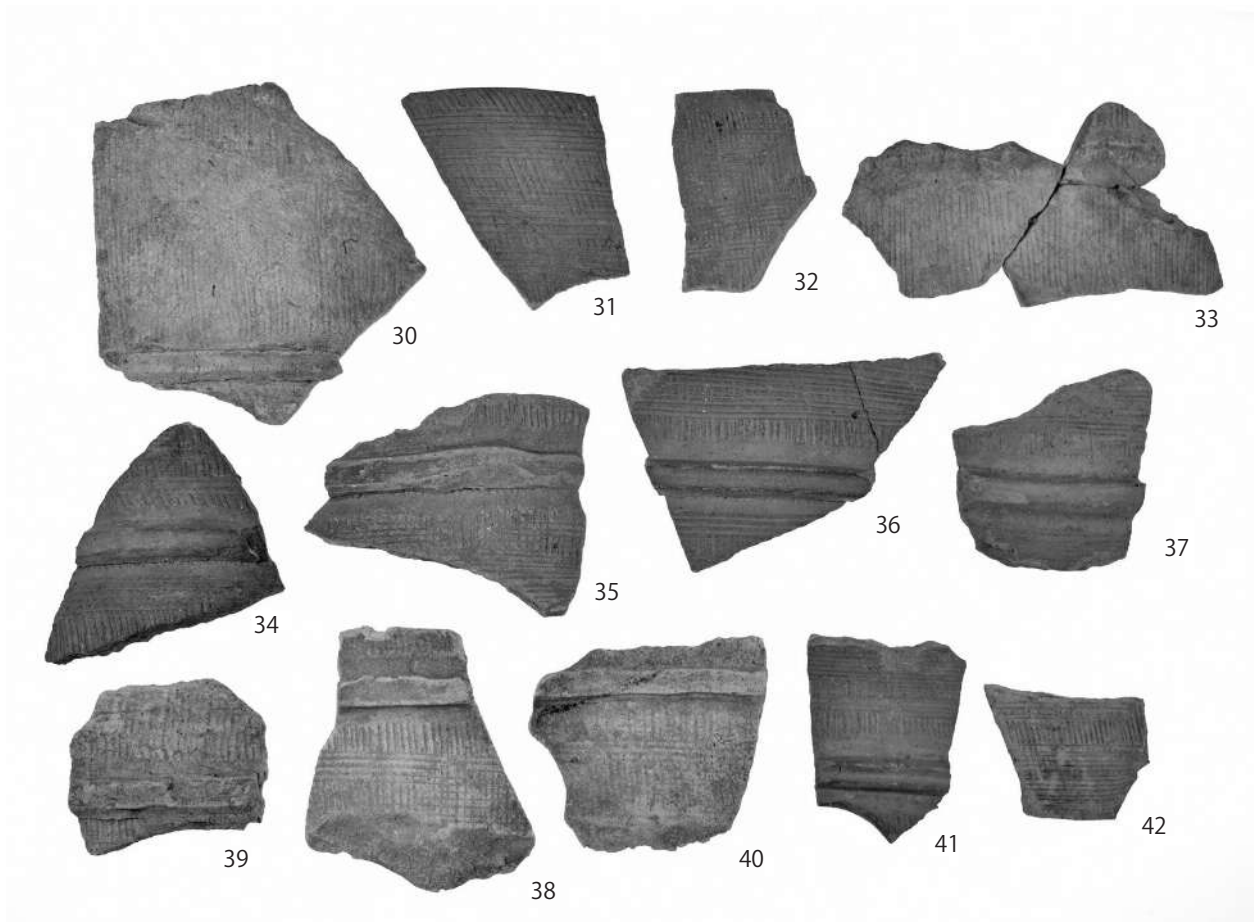
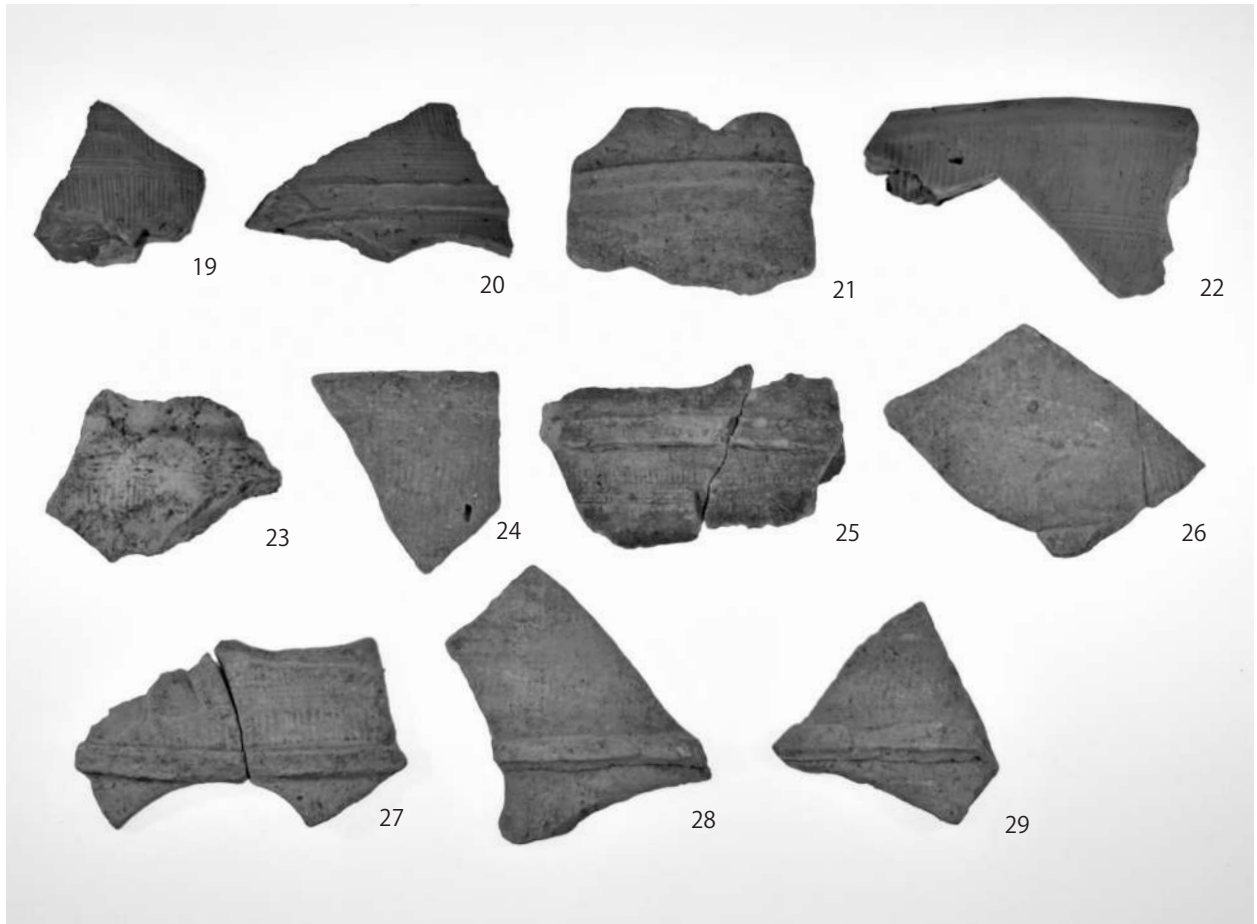


8 14トレンチ (5トレンチ) 北壁断割土層断面 (南西から)











43



44



45



47



48



49



50



51



52



53



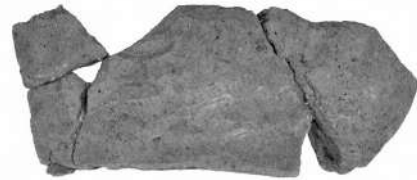
55



56



59



60



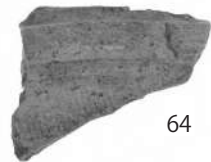
61



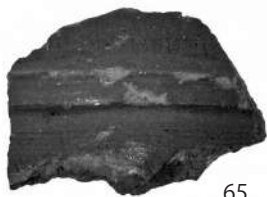
62



63



64



65



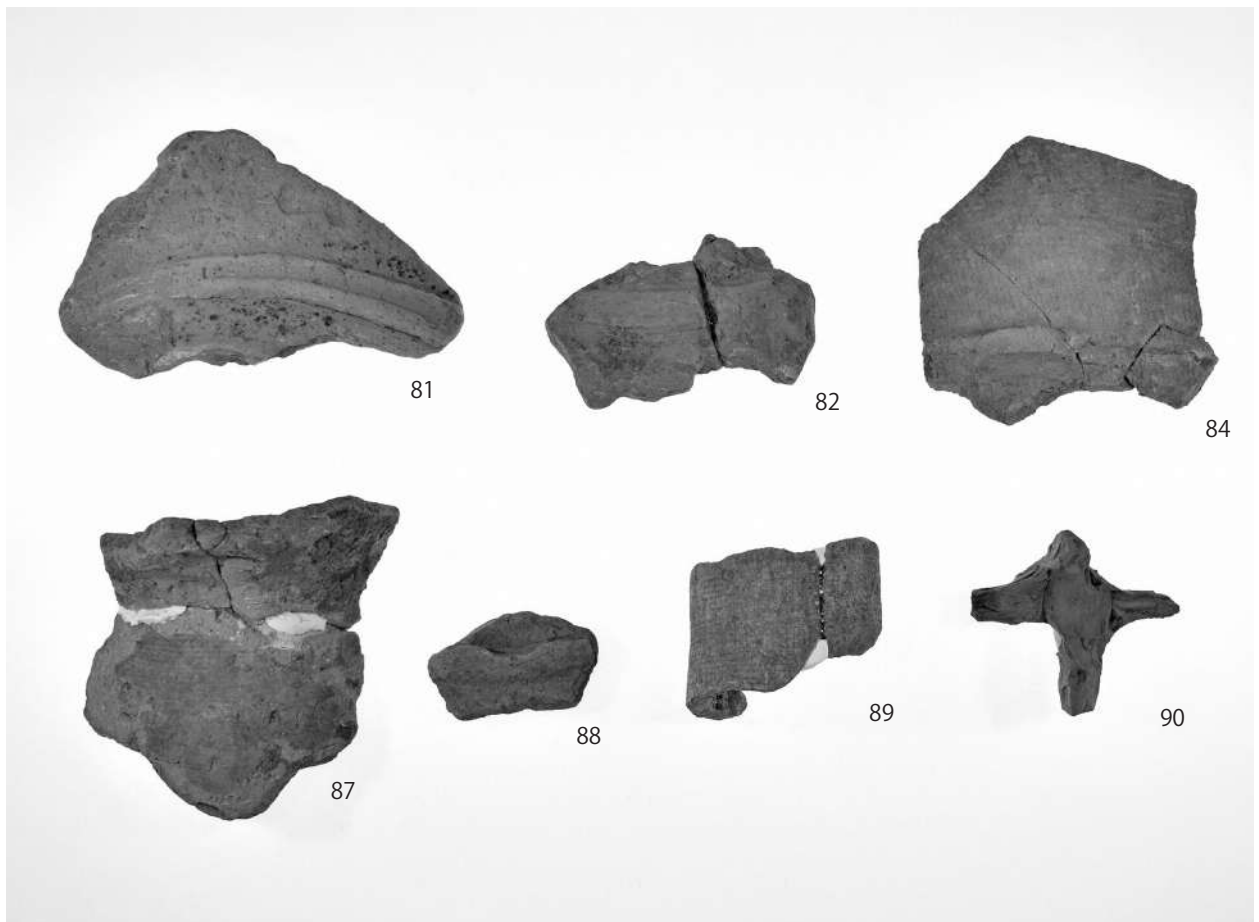
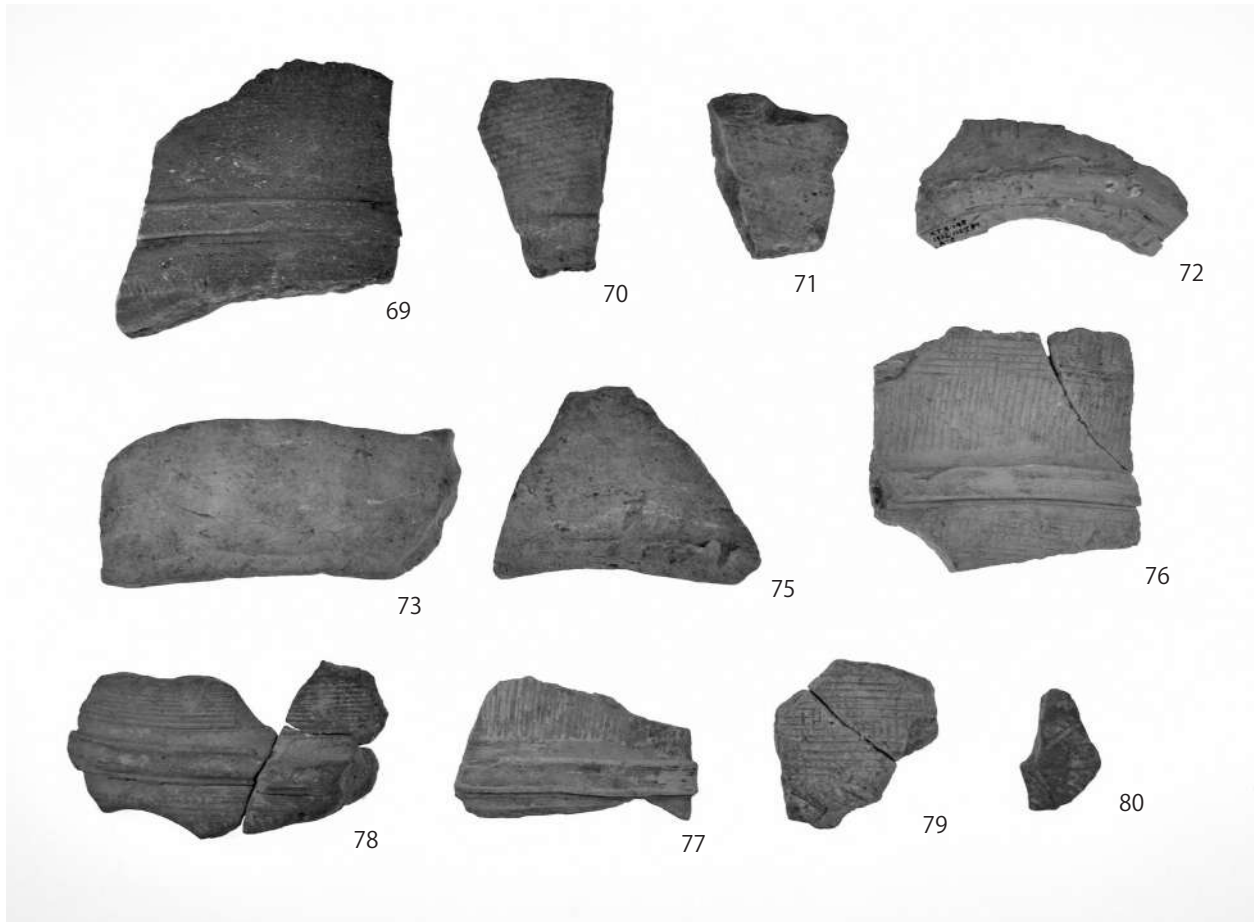
66

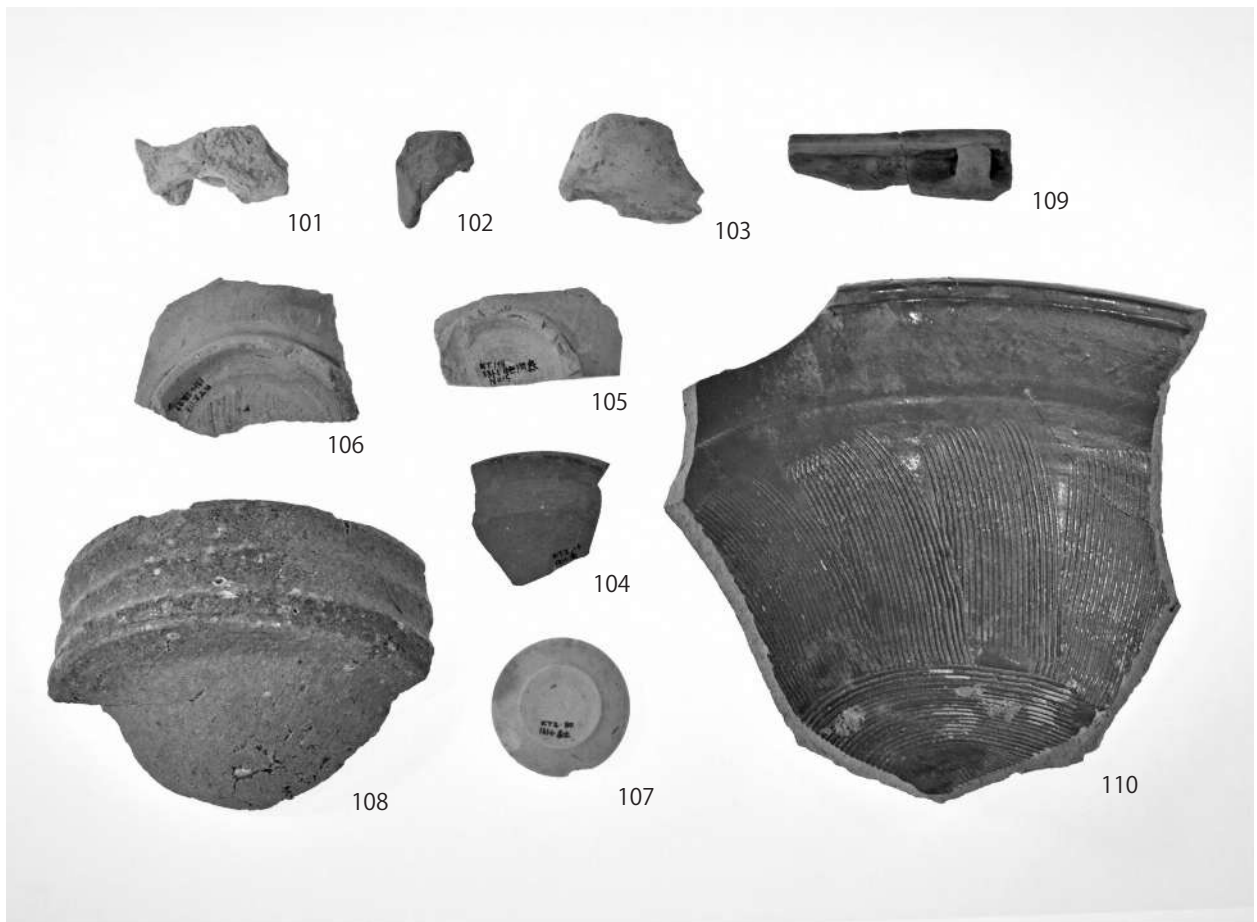
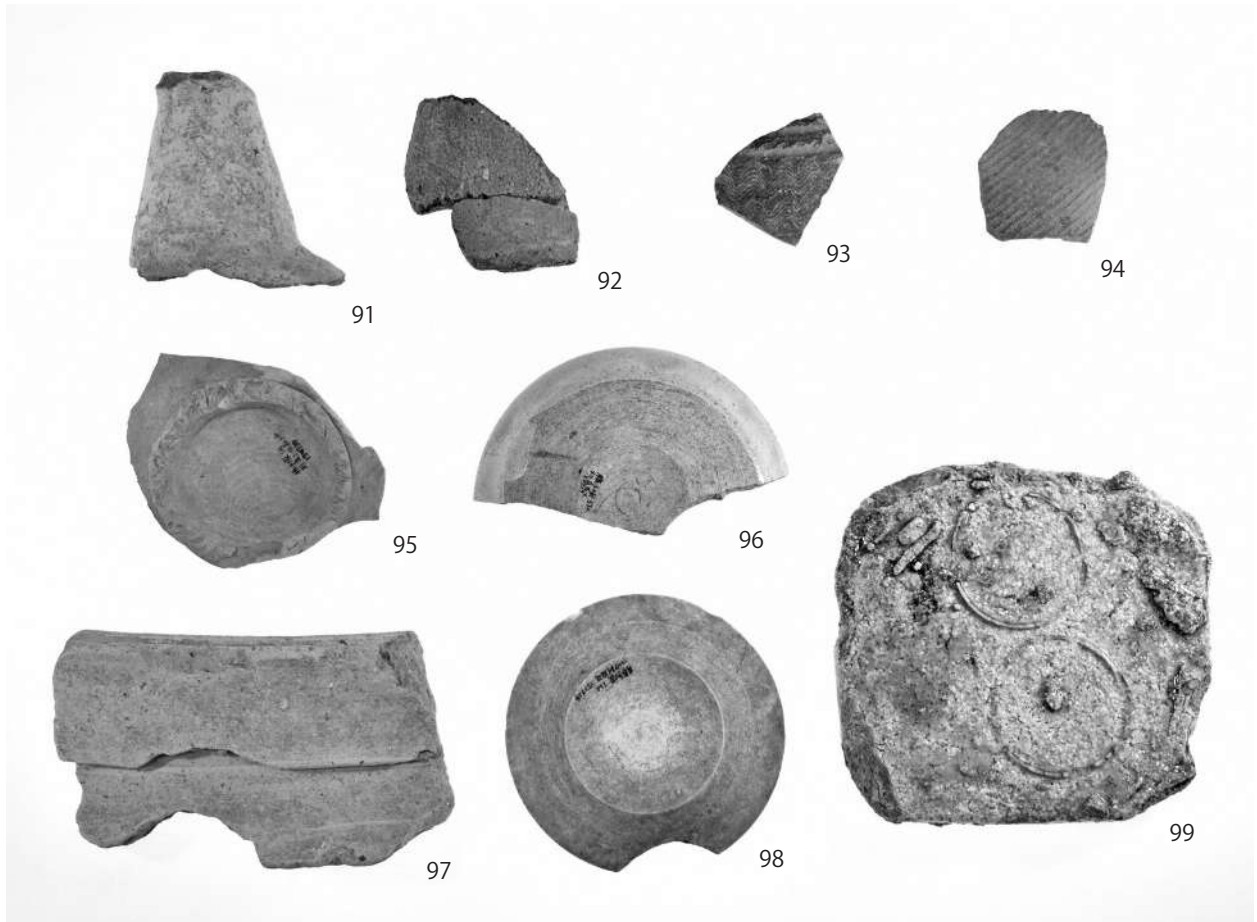


67



68







1 3トレンチ 全景(南西から)



2 3トレンチ 全景(南東から)



1 3トレンチ 周溝(南から)



2 3トレンチ 墳丘(南から)



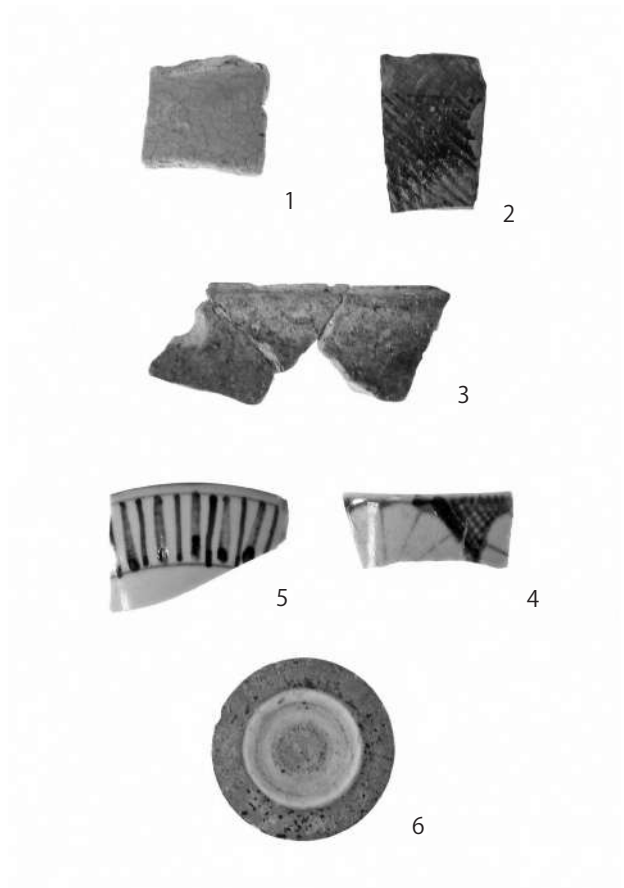
3 3トレンチ(1トレンチ) 全景(北東から)



4 4トレンチ 周溝(東から)



5 4トレンチ 全景(北西から)



6 出土遺物



1 1トレンチ 石室(西から)



2 1トレンチ 全景(北西から)



1 1トレンチ 石室北側検出(北西から)



2 1トレンチ 北壁土層断面(西から)



3 1トレンチ 中央アゼ土層断面(南から)



4 1トレンチ 土層断面(南東から)



6 1トレンチ 奥壁石積み(北西から)



6 1トレンチ 北西拡張部土層断面(南西から)



7 2トレンチ 周溝(南から)



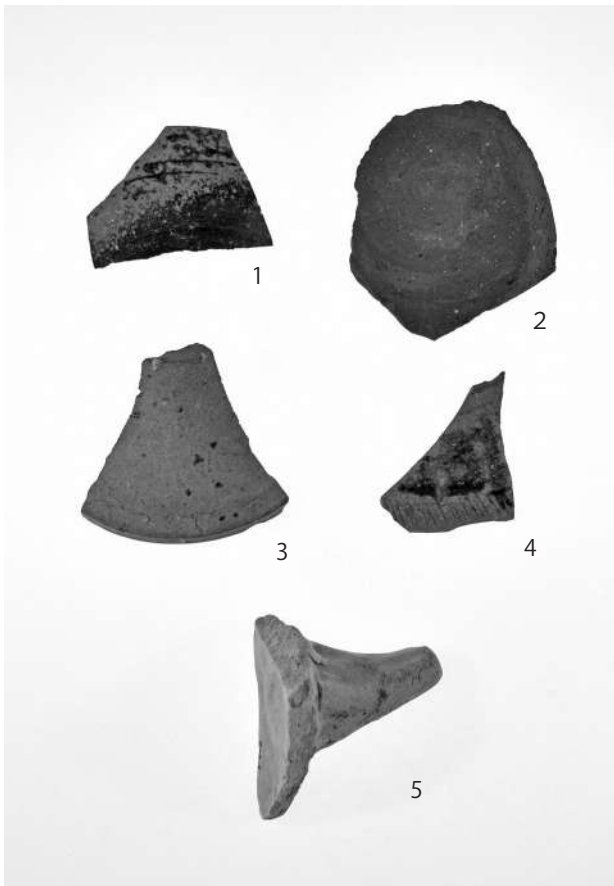
8 3トレンチ 周溝(西から)



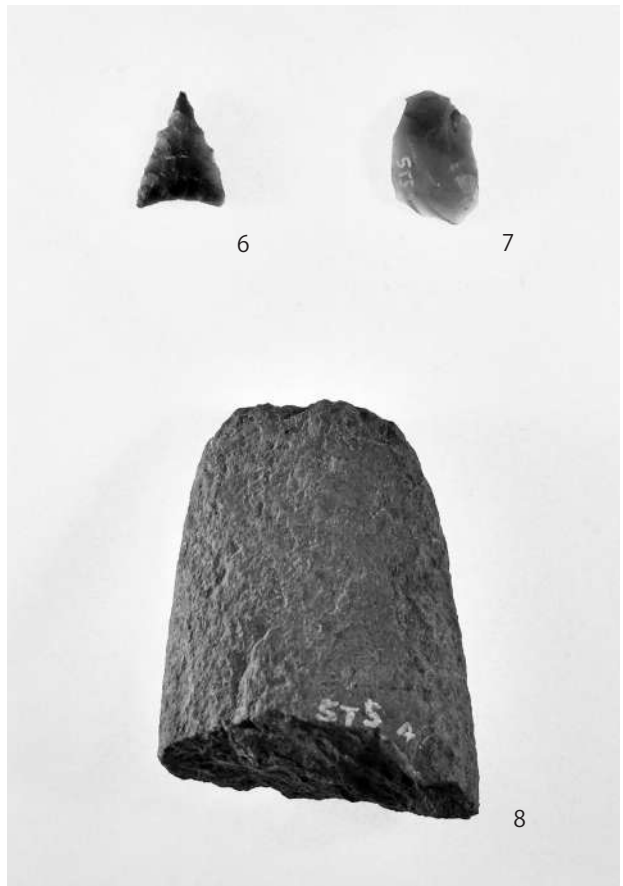
1 2トレンチ 全景(北東から)



2 3トレンチ 全景(南西から)



3 出土遺物(土器)



4 出土遺物(石器)



1 1トレンチ 石室(南から)



2 1トレンチ 全景(南西から)



1 1トレンチ 試掘調査範囲掘削(西から)



2 1トレンチ 盛土土層断面(北東から)



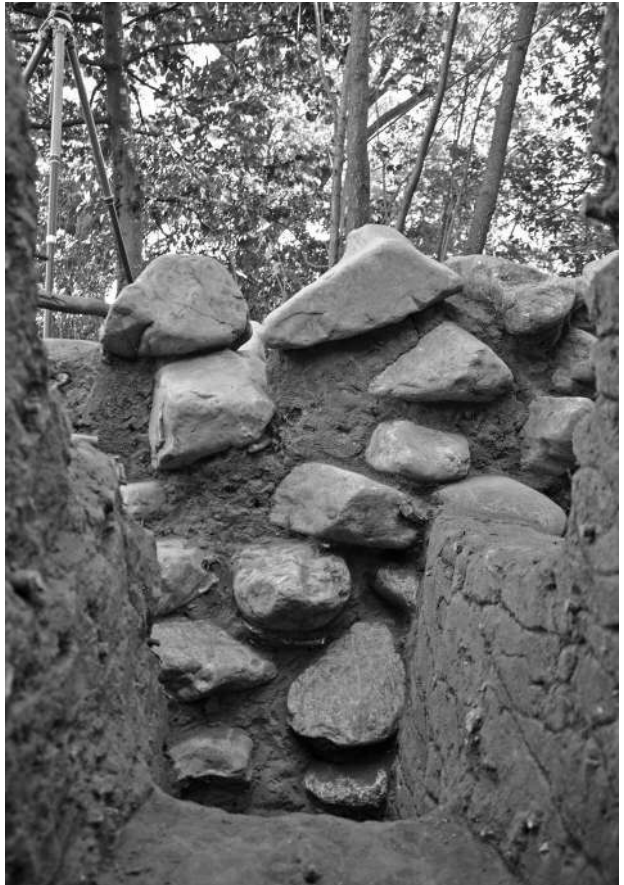
3 1トレンチ 石室南側壁(南西から)



4 1トレンチ 石室北側壁(南西から)



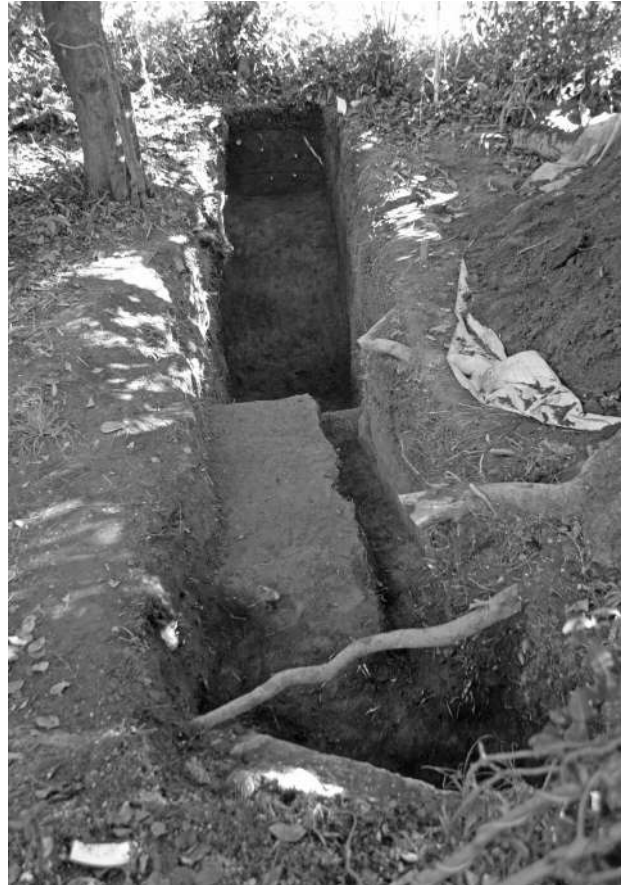
5 1トレンチ 石室(北東から)



6 1トレンチ 石室北側壁立面(北西から)



1 2トレンチ 全景(北西から)



2 3トレンチ 全景(北西から)



3 2トレンチ 墳丘裾断面(西から)



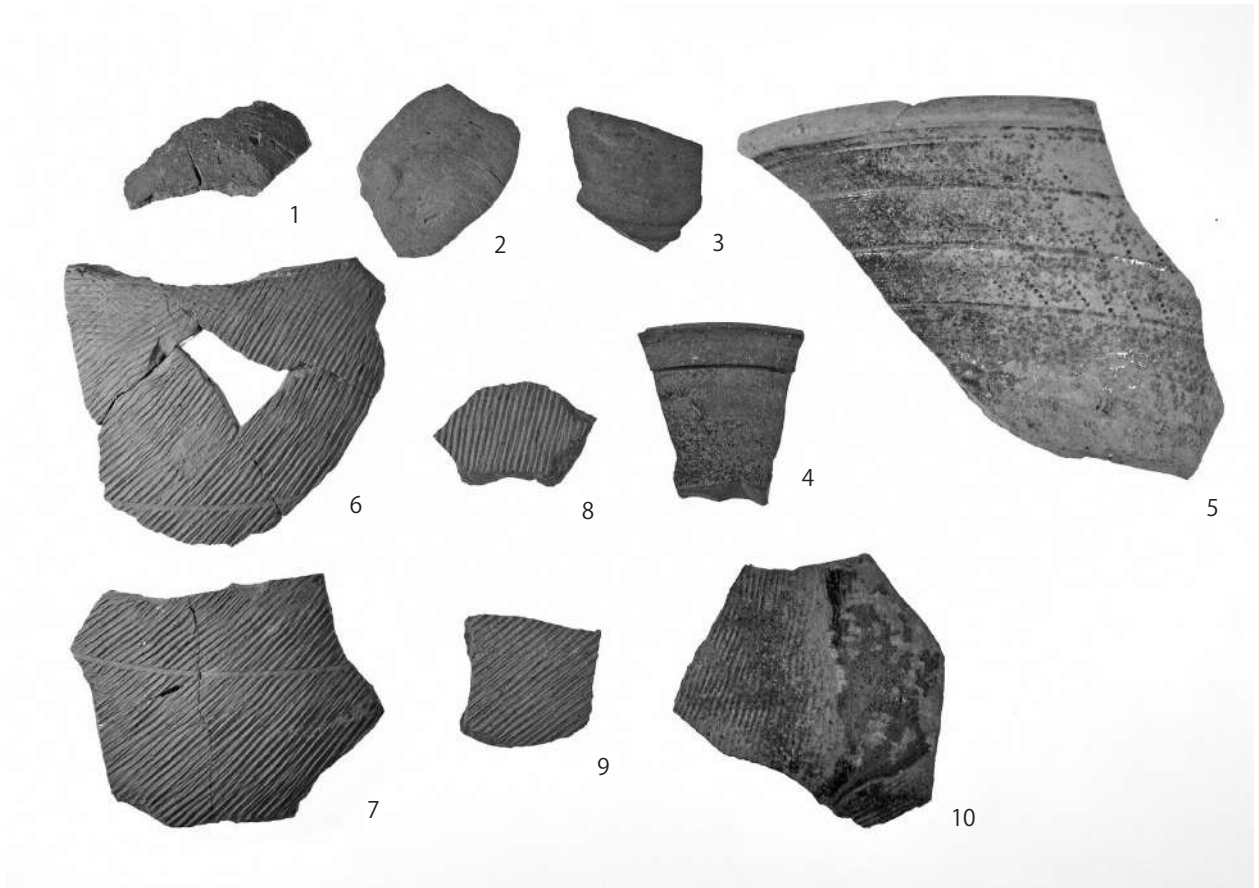
4 3トレンチ 周溝断面(東から)



5 4トレンチ 全景(北東から)



6 4トレンチ 北壁断面(南東から)



1 出土遺物



1 1トレンチ 全景 (西から)



2 2トレンチ 全景 (東から)



3 1トレンチ 調査風景



4 2トレンチ 調査風景



5 2トレンチ 土坑 (北から)



6 3トレンチ 土層断面 (西から)



1 石室 全景 (西から)



2 石室 袖部 (東から)



3 石室 左側壁 (北から)



4 石室 左側壁 (北から)



5 石室 右側壁 (南から)



1 調査地 全景



2 調査地 全景



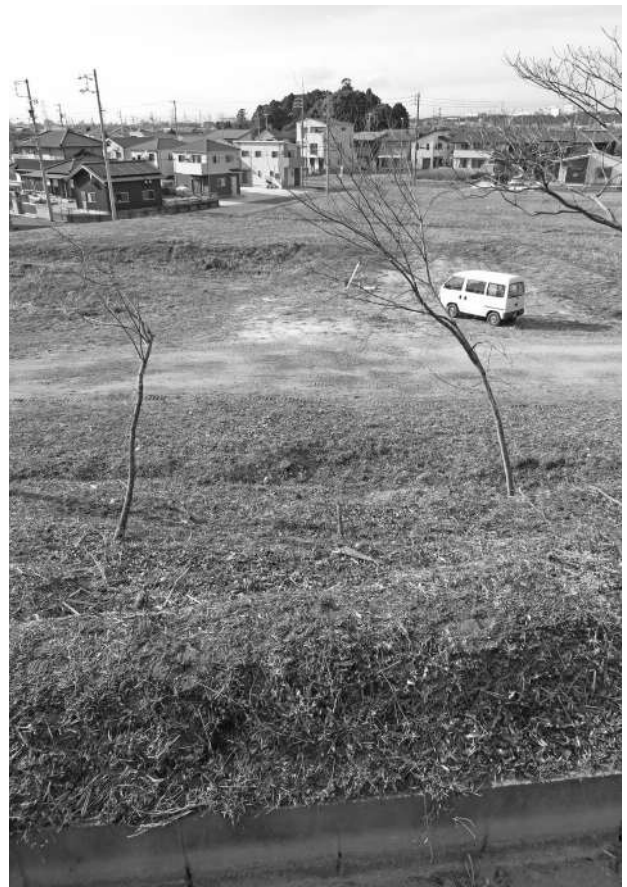
3 調査地 南壁断面



4 調査地 西壁断面



5 段丘遠景 (北から)



6 段丘から勝手塚古墳を望む

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書 83
副書名	志段味古墳群IV
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	100
編著者名	伊藤厚史・酒井将史・西本昌司・株式会社中野技術
編集機関	名古屋市教育委員会生涯学習部文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL:052-972-3268 FAX:052-972-4176
発行機関	名古屋市教育委員会生涯学習部文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL:052-972-3268 FAX:052-972-4176
発行年月日	2019年3月29日

所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
志段味大塚古墳	名古屋市守山区大字 上志段味字大塚	23100	1-53	35° 15′ 10″	137° 02′ 28″	2014.6.2～ 2014.9.5	約140㎡	保存・活用目的 調査
勝手塚古墳	名古屋市守山区大字 上志段味字中屋敷	23100	1-63	35° 15′ 11″	137° 02′ 11″	2015.7.6～ 2015.9.18 (1次)	約94㎡	保存・活用目的 調査
						2017.9.22～ 2018.1.31 (2次)	約72㎡	保存・活用目的 調査
						2018.11.20～ 2018.12.7 (3次)	約36㎡	保存・活用目的 調査
大塚3号墳	名古屋市守山区大字 上志段味字大塚	23100	1-55	35° 15′ 08″	137° 02′ 23″	2016.8.1～ 2016.11.22	約48㎡	保存・活用目的 調査
白鳥5号墳	名古屋市守山区大字 上志段味字白鳥	23100	1-47	35° 15′ 28″	137° 02′ 40″	2016.8.1～ 2016.11.22	約34㎡	保存・活用目的 調査
白鳥6号墳	名古屋市守山区大字 上志段味字白鳥	23100	1-178	35° 15′ 27″	137° 02′ 38″	2016.8.1～ 2016.11.22 (1次)	約28㎡	保存・活用目的 調査
						2017.9.22～ 2018.1.31 (2次)	約9㎡	保存・活用目的 調査
東谷山12号墳	名古屋市守山区大字 上志段味字東谷	23100	1-15	35° 15′ 24″	137° 02′ 52″	2017.9.22～ 2018.1.31	約20㎡	保存・活用目的 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志段味大塚古墳	古墳	古墳時代	葺石・埴輪列	埴輪	墳頂部に埴輪
勝手塚古墳	古墳	古墳時代	周堤・埴輪列	埴輪	周堤に埴輪列
大塚3号墳	古墳	古墳時代	周溝		
白鳥5号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室・周溝	須恵器	横穴式石室残存
白鳥6号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室・周溝	須恵器	新規発見した横穴式石室
東谷山12号墳	古墳	古墳時代			

要 約	<p>守山区上志段味地区に所在する志段味古墳群は、県内有数の規模を誇る古墳群で、古墳時代の全時期を通して、前方後円墳から円墳、方墳まで規模・形の異なる古墳が山頂、山麓、段丘といったさまざまな地形に築造されている。</p> <p>本報告書は、保護活用をすすめるために、志段味大塚古墳はじめ6古墳の調査を実施した成果を記載した。</p> <p>志段味大塚古墳は、復元整備の資料を得るため実施し、墳頂部にも埴輪が樹立していることなど新たな知見を得た。勝手塚古墳は、墳丘テラスにおける埴輪の状況や県内唯一残る周堤の状況について把握することができた。また白鳥古墳群では5号墳・6号墳が古墳であることを確認し、墳丘規模や埋葬施設についての情報を得た。</p>
-----	---

名古屋市文化財調査報告 100
埋蔵文化財調査報告書 83

志段味古墳群Ⅳ

2019年3月29日

編集・発行 名古屋市教育委員会

印刷 西濃印刷株式会社